

2019（令和元）年度 人間発達環境学研究科・発達科学部  
年 次 報 告 書

神戸大学大学院人間発達環境学研究科・発達科学部

## はじめに

本年次報告書は、人間発達環境学研究科・発達科学部における2019(令和元)年度の教育・研究・社会貢献等の活動の記録や取り組み内容が記載されたものであり、研究科の強み・特色を示した集積となっている。

2019年度は5月より令和と改元されたが、平成4(1992)年に設置され同5年から新入生の受入を行って来た発達科学部の最後の新入生(2016年度生)が卒業する年度となった。在籍学生が居る限り今後も発達科学部は存続するのではあるが、本部局にとっても節目の年となった。そうした意味を持つ年度でありながら、年度末に新型コロナウイルスの感染が世界的に拡大することとなり、この学年の卒業式や関連行事を例年通りに挙行できず、大変心残りな結果となってしまった。

新型コロナウイルスの影響により、世の中のありようは大きな変容が求められることとなり、研究や教育のあり方も変化せざるを得なくなっている。このような意味から、2019年度の研究科の教育・研究・社会貢献等の活動の記録や取り組みを集積しておくことは、新型コロナウイルスの影響を受ける直前の記録として特別な意味を持つこととなった。

2019年度の研究科の取り組みでは、平成29(2017)年度に受けた外部評価において指摘を受けた、本研究科が取り組んでいる多様な活動を将来にわたって継続・発展させていくために解決しなければならない組織、研究、教育等に関する課題、すなわち、研究科の規模に応じた学際研究・文理融合研究のアウトプットの必要性、多くの環境系教員が参画できるための枠組みづくりの必要性、ならびに多種多様な社会的活動を展開・維持していくために不可欠な大型の外部資金獲得の必要性、及び優秀な留学生の積極的獲得の必要性などの観点から取り組み・検討を進めた。

またこれまでに検討を進めてきた学域制(教員組織と教育研究組織の分離)や教員人事のポイント制移行への対応、若手教員比率の数値目標達成プラン、教員活動評価の再検討などについて、具体的に進め実行に移す段階となった。

このような状況のもとで、第3期中期目標・中期計画年度の後半にあたる令和元年度～3年度では、令和2(2020)年度に国立大学法人評価、翌年度の令和3(2021)年度に大学機関別認証評価を受けることになっている。さらに、第4期中期目標・中期計画期間に向けて神戸大学全体としての機能強化が進んでいく状況のなかでも、本研究科がこれまで唱えてきた「人間の発達及びそれを支える環境を多面的に捉える」という教育研究のアイデンティティは守っていくべきと考える。そのためには、着実に教育・研究・社会貢献に係る実績を重ね、学内外での研究科のプレゼンスをいっそう高めて行くことが重要と考える。

(人間発達環境学研究科長・発達科学部長 青木茂樹)

**2019(令和元)年度**  
**人間発達環境学研究科・発達科学部 年次報告書 目次**

はじめに

目次

|                               |    |
|-------------------------------|----|
| 1. 令和元年度の取り組みの概要              | 1  |
| 1.1. 神戸大学の施策に関わる取り組み          | 1  |
| 1.1.1. 神戸大学機能強化改革             | 1  |
| 1.2. 部局としての取り組み               | 1  |
| 1.2.1. 戦略「社会課題を解決する分離融合研究の推進」 | 1  |
| 1.2.2. 将来構想に係る懇談会について         | 2  |
| 2. 学部・大学院運営                   | 3  |
| 2.1. 学部・大学院運営組織               | 3  |
| 2.2. 管理運営                     | 4  |
| 2.2.1. 学域人事委員会                | 4  |
| 2.2.2. 研究科運営委員会               | 6  |
| 2.2.3. 教員活動評価委員会              | 8  |
| 2.2.4. 中期計画推進委員会              | 8  |
| 2.2.5. 自己評価委員会                | 9  |
| 2.2.6. 安全衛生委員会                | 10 |
| 2.3. 予算                       | 11 |
| 2.3.1. 予算に関する特記事項             | 11 |
| 2.3.2. 予算関係の審議等の状況            | 12 |
| 2.3.3. 外部資金獲得状況(教員及び学生)       | 12 |
| 2.4. 広報及び情報公開                 | 13 |
| 2.4.1. パンフレット, ウェブサイト等        | 13 |
| 2.4.2. 人間発達環境学研究科 オープン・らぼ     | 13 |
| 2.4.3. ホームカミングデイ              | 14 |
| 2.5. 環境設備                     | 17 |
| 2.5.1. 教育・学習環境の整備             | 17 |
| 2.5.2. 交流ルーム・アゴラ              | 18 |
| 2.6. 教員研修                     | 19 |
| 2.6.1. FD                     | 19 |
| 2.6.2. 初任者研修                  | 19 |
| 3. 入試                         | 19 |
| 3.1. 一般選抜入試                   | 19 |
| 3.1.1. 入学試験委員会                | 19 |
| 3.1.2. 一般選抜入試に係る総括と課題         | 20 |

|                                |    |
|--------------------------------|----|
| 4. 国際交流活動                      | 21 |
| 4.1. 学術交流協定                    | 21 |
| 4.2. 留学生                       | 22 |
| 4.3. ダブルディグリー                  | 24 |
| 4.4. 学生・教員・職員の海外派遣             | 24 |
| 4.5. 海外研究者等の招聘・訪問              | 26 |
| 4.6. 「英語による授業の実践—ESD 研究」       | 27 |
| 5. 教育                          | 27 |
| 5.1. 教育課程                      | 27 |
| 5.1.1. 今年度の特徴                  | 27 |
| 5.1.2. 研究科, 専攻共通科目             | 28 |
| 5.1.3. 教職教育                    | 29 |
| 5.1.4. 博物館学芸員資格                | 30 |
| 5.1.5. ESD サブコース               | 31 |
| 5.1.6. ゲストスピーカー及びティーチング・アシスタント | 32 |
| 5.2. 各学科等の教育                   | 32 |
| 5.2.1. 人間形成学科                  | 32 |
| 5.2.2. 人間行動学科                  | 34 |
| 5.2.3. 人間表現学科                  | 35 |
| 5.2.4. 人間環境学科                  | 37 |
| 5.2.5. 発達支援論コース                | 38 |
| 5.3. 各専攻講座の教育                  | 40 |
| 5.3.1. 人間発達専攻                  | 40 |
| 5.3.2. 人間環境学専攻                 | 49 |
| 6. 進路                          | 50 |
| 6.1. キャリア形成支援                  | 50 |
| 6.1.1. キャリアサポートセンター            | 50 |
| 6.1.2. 学振特別研究員申請支援             | 55 |
| 6.2. 卒業・修了後の進路                 | 56 |
| 7. 研究                          | 56 |
| 7.1. 今年度の特長                    | 56 |
| 7.1.1. 研究動向                    | 56 |
| 7.1.2. 学生の受賞                   | 57 |
| 7.2. 学術 WEEKS                  | 59 |
| 7.2.1 学術WEEKSの各事業・セミナー         | 60 |
| 7.3. 研究科支援プロジェクト研究             | 65 |
| 7.4. 高度教員養成プログラム               | 67 |
| 7.5. 附属中等教育学校を活用した高大接続共同研究     | 71 |

|                              |     |
|------------------------------|-----|
| 7.6. 研究推進                    | 71  |
| 7.6.1. 研究推進委員会               | 71  |
| 7.6.2. 研究倫理審査委員会             | 72  |
| 7.6.3. 研究紀要編集委員会             | 72  |
| 7.7. 各専攻の研究                  | 73  |
| 7.7.1. 人間発達専攻                | 73  |
| 7.7.2. 人間環境学専攻               | 108 |
| 8. 産官学共同・地域連携による教育・研究活動      | 123 |
| 8.1. 産官学共同プロジェクト             | 123 |
| 8.2. 地域連携プロジェクト              | 126 |
| 9. 社会的活動・震災復興支援              | 131 |
| 9.1. メンタルケア関係                | 131 |
| 9.2. 災害地への支援活動               | 131 |
| 10. 附属施設                     | 133 |
| 10.1. 発達支援インスティテュート          | 133 |
| 10.1.1. 発達支援インスティテュート運営委員会   | 133 |
| 10.1.2. 心理教育相談室              | 134 |
| 10.1.3. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター | 136 |
| 10.1.4. のびやかスペースあーち          | 146 |
| 10.1.5. サイエンスショップ            | 158 |
| 10.1.6. 教育連携推進室              | 162 |
| 10.1.7. アクティブエイジング研究センター     | 167 |
| 10.2. 実習観察園の運営利用状況           | 173 |



## 1. 令和元年度の取り組みの概要

### 1.1. 神戸大学の施策に関わる取り組み

#### 1.1.1. 神戸大学機能強化改革

##### (1) 神戸大学ビジョンの実現に向けた戦略

平成 28 年度から第 3 期中期目標・中期計画期間が始まった。神戸大学は、第 3 期中期目標・中期計画期間（H28 年度～H33 年度）における神戸大学の機能強化改革として、平成 27 年 4 月に神戸大学ビジョンとして、先端研究・文理融合研究で輝く卓越研究大学をかかげ、平成 27 年 6 月に文部科学省「国立大学経営力戦略」の 3 つの重点支援の枠組みの重点支援③「海外大学と伍して、全学的に卓越した教育研究，社会実装を推進する取組を中核とする国立大学」を選択した。

第 3 期中期目標・中期計画期間におけるビジョンの実現に向けて、以下の 5 つの戦略が実施されている。

- ・戦略 1：先端研究の推進
- ・戦略 2：社会課題を解決する文理融合研究の推進
- ・戦略 3：先導的研究成果の社会実装への取組み
- ・戦略 4：世界で活躍できる人材の育成
- ・戦略 5：大学運営基盤の改革

なお、国際人間科学部の設置は戦略 4「世界で活躍できる人材の育成」に位置づくものである。

##### (2) 神戸大学ビジョンを支える新たな教員組織・人事システム

平成 28 年 5 月 19 日開催の教育研究評議会において「神戸大学ビジョンを支える新たな教育組織・人事システム（案）」が承認された。この教員組織・人事システムは、教員の流動性の向上，組織間の教員配置の最適化，柔軟な改組の実現，教員数及び若手ポストの増加をねらいとし，教員の教育研究組織からの分離，ポイント制の導入及び学長裁量戦略枠の設定などを柱としたものである。

平成 28 年 10 月から教員組織と教育研究組織の分離が実施され，当研究科教員の全員が人間発達学域の所属となった。また，同時に教員人事委員会が設置され，教授人事の審査，及び採用・昇任人事に伴うポイントの管理が行われることになった。そして，平成 29 年 4 月にポイント制が正式導入され，現在に至っている。

### 1.2. 部局としての取り組み

#### 1.2.1. 戦略「社会課題を解決する文理融合研究の推進」

神戸大学ビジョンの実現に向けた戦略「社会課題を解決する文理融合研究の推進」の取り

組みの一つに、「文理医融合の先端研究による未来世紀都市学の構築」があげられる。

平成30年度から、この取り組みを拡充するために、『well-being研究拠点』が新たに設置された。この拠点は、未来世紀都市を支える多様な人々のwell-being（人々の安全・安心の確保と豊かで質の高い生活）を実現するために、多様化するアジア諸国の保健衛生課題の解決を目指す「アジア健康科学研究ユニット」、及び都市における人々の社会的連携や協調を実現させるプログラムの構築を目指す「社会関係資本研究ユニット」から構成される。

本研究科は「社会関係資本研究ユニット」として役割を果たすことになった。このユニットは、都市における人々の社会的連携（結束力、絆）やネットワーク等の社会関係資本を重視した持続可能なコミュニティ形成及び環境形成プログラムを考究し、社会実装を目指すものである。

今年度の「社会関係資本研究ユニット」の活動実績としては、WoS論文が9編、競争的資金獲得が2件、また、シンポジウム1件及び講習会等の開催が17件あった。

### 1.2.2. 将来構想に係る懇談会について

平成19年4月に人間発達環境学研究科は、心身発達専攻、教育・学習専攻、人間行動専攻、人間表現専攻、及び人間環境学専攻の5専攻から成る研究科として設置された。その後、平成25年4月には、人間発達に関わる社会的諸課題の解決に向けて「人間それ自身の発達」に係る教育・研究のあり方をさらに高度化・総合化させることを目指し、専攻の改組を行った。すなわち、人間それ自体の発達を対象に教育研究を担ってきた心身発達専攻、教育・学習専攻、人間行動専攻、人間表現専攻の4専攻をまとめ人間発達専攻とした。現在、人間発達環境学研究科は、人間発達専攻と人間環境学専攻の2専攻体制で教育・研究を行っている。

平成26年4月に文部科学省が公表した本研究科のミッションの再定義には、「今後、人間の発達及びそれを支える環境を多面的に捉えるため、異なる専門分野間の連携等の取り組みについて重点的に取り組むなど、総合的な研究を組織的に推進するとともに、我が国の社会課題解決・文化の発展に貢献することを目指す。」と記されている。

これまで、本研究科はこのミッションの実現に向け、人間の発達及びそれを支える環境に関わる新たな研究課題の設定、ならびに分野横断型研究の支援等の取り組みを行っている。

平成29年には、平成25年の専攻の改組後の本研究科における教育・研究等に対する外部評価を受けた。その結果、学際系の研究科として、教育・研究・社会的活動の成果を着実に蓄積していること、またそれらの活動は5年間で大きく発展・深化したこと、地域の課題に対して、その住民と連携する形で、研究と教育と社会活動を一体のものとして展開していること、及び高齢化、貧困、環境、共生社会などといったグローバルな課題に関する国際共同研究の推進やそれらの研究に学生を参画させる多様な取り組みが実施されていることなどが高く評価された。その一方で、本研究科が取り組んでいる多様な活動を将来にわたって継続・発展させていくために解決しなければならない組織、研究、教育等に関する課題も指摘された。すなわち、研究科の規模に応じた学際研究・文理融合研究のアウトプットの必要

性、より多くの教員が参画できるための枠組みづくりの必要性、多種多様な社会的活動を展開・維持していくために不可欠な大型の外部資金の獲得の必要性などである。

近年の科学技術（特に情報通信技術）の発展やグローバル化の進展は、経済・社会のルールを急速に変化させ、人々のライフスタイル、社会と人間の関係の在り方、国家間の関係などに影響をもたらし、地球規模の様々な課題を顕在化させている。国内を見れば、少子高齢化が加速し、地域経済社会は疲弊しつつある。このような状況では、人間の発達が阻害される可能性、すなわち一人ひとりの人間が潜在的にもつ多様な能力の発現が妨げられることが危惧される。

本研究科の「人間の発達及びそれを支える環境を多面的に捉えるため、総合的な研究を組織的に推進するとともに、我が国社会の課題解決・文化の発展に貢献することを目指す。」というミッションのさらなる実現に向けて、またグローバルな課題対応型の文理融合研究の推進や俯瞰的視野をもった協働型グローバル人材の育成など、神戸大学ビジョンの実現に具体的に貢献していくことが求められる。

2019年度には、次世代先端研究・文理融合研究のシーズ育成を目指し、先端研究融合環にて開拓プロジェクト研究が募集され開始されることとなったが、全学で9件のうちの1件として本研究科教員が代表および中核メンバーとなっている「メガシティにおける河川の生物多様性が生み出す生態系サービスの評価」が開始となった。

(人間発達環境学研究科長・発達科学部長 青木茂樹)

## 2. 学部・大学院運営

### 2.1. 学部・大学院運営組織

神戸大学大学院人間発達環境学研究科及び発達科学部は、以下の組織で運営している。

#### <教授会等>

人間発達環境学域会議、神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授会、神戸大学発達科学部教授会

以下に委員会等の組織を列記する。その際、大学院に関係する組織については、その前に付される研究科名「神戸大学大学院人間発達環境学研究科」を省略し、学部に関係する組織については、「発達科学部」とした。

#### <管理運営>

学域人事委員会、教員活動評価委員会、研究科運営委員会、予算委員会、学舎検討委員会、中期計画推進委員会、自己評価委員会、交流ルーム運営委員会、安全衛生委員会、ハラスメント防止委員会、専攻運営会議

#### <研究>

研究推進委員会、研究紀要編集委員会、研究倫理審査委員会

<教務・学生>

教務委員会, 学生委員会, 博物館学芸員資格専門委員会

<入試>

入学試験委員会, 発達科学部編入学試験専門委員会, 学生委員会 (編入学入学者の募集及び選考に関わる事務)

<国際交流>

国際交流委員会, 学術 WEEKS ワーキンググループ

<広報>

情報メディア委員会, 研究科案内作成ワーキンググループ

<附属施設等>

図書委員会, 実習観察園運営委員会, キャリアサポートセンター運営委員会, 発達支援インスティテュート運営委員会, 心理教育相談室運営委員会, ヒューマン・コミュニティ創成研究センター運営委員会, のびやかスペースあーち運営委員会, サイエンスショップ運営委員会, 教育連携推進室, アクティブエイジング研究センター運営委員会

(人間発達環境学研究科長・発達科学部長 青木茂樹)

## 2.2. 管理運営

### 2.2.1. 学域人事委員会

学域人事委員会は、教員の採用及び昇任等、ポイントの管理・運用及び教育研究組織への配置に関して、学域会議に発議する原案を審議する委員会である。学域人事委員会の構成は、学域長、副学域長、人間発達環境学研究科専攻長、発達科学部学科長、及び国際人間科学部学科長(グローバル文化学科長を除く)であり、今年度の委員は青木茂樹学域長(委員長)、平山洋介副学域長、近藤徳彦副学域長、稲垣成哲人間発達専攻長・発達科学部人間形成学科長、近江戸伸子人間環境学専攻・発達科学部人間環境学科長、河辺章子発達科学部人間行動学科長、梅宮弘光発達科学部表現学科長、並びに吉田圭吾国際人間科学部発達コミュニティ学科長、木下孝司国際人間科学部子ども教育学科長、浅野慎一国際人間科学部環境共生学科長の10名である。また、中野下勉事務課長、西田望智子(6月まで)、藤村さとみ(7月から)総務係長も出席した。

学域人事委員会の開催日及び検討事項については、以下に記す。

|           | 検討事項  |
|-----------|---|
| 第1回(4月5日) | 1. 2019年度人事方針について<br>2. H34.4.1.までの人間発達環境学域のポイントの推移(見込み)について<br>3. 2019.4.1の人間発達環境学域人事配置案及び国際連携推進機構EU総合学術センターからの教員の配置依頼について<br>4. 教授昇任候補者について<br>5. 助教採用人事の進捗状況について |

|              |  |
|--------------|--|
| 第2回 (4月26日)  | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 専攻における採用人事（若手教員）に係る専門分野について</li> <li>2. 助教採用人事の進捗状況について</li> </ol>   |
| 第3回 (6月7日)   | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教授昇任人事に係る「学域人事方針申請書」について</li> <li>2. 専攻における採用人事（若手教員）に係る専門分野について</li> <li>3. 助教採用人事に係る人事選考委員会の設置について</li> </ol>  |
| 第4回 (7月5日)   | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 助教採用人事について（人事選考委員会報告）</li> <li>2. 専攻における採用人事（若手教員）に係る専門分野について</li> <li>3. 助教採用人事の公募について</li> </ol>   |
| 臨時：7月19日     | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 助教採用人事の公募について</li> <li>2. GSP オフィス教員の任期更新について</li> </ol>   |
| 第5回 (9月13日)  | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 助教採用人事について（人事選考委員会報告）</li> <li>2. 教授昇任人事に関する人事選考委員会設置の申請について</li> <li>3. 助教採用人事の公募について</li> <li>4. GSP オフィス教員のポイントについて</li> </ol>  |
| 第6回 (10月4日)  | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 助教採用人事について（人事選考委員会報告）</li> <li>2. 教授昇任人事に関する人事選考委員会設置の申請について</li> </ol>  |
| 第7回 (11月1日)  | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 助教採用人事に係る人事選考委員会の設置について</li> <li>2. 助教の博士課程後期課程の授業担当及び研究指導に係る審査について</li> </ol>   |
| 第8回 (12月6日)  | 定足数を確保できず流会。日程をあらためて12月13日に開催。   |
| 第8回 (12月13日) | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 助教採用人事について（人事選考委員会報告）</li> <li>2. 専攻における採用人事（若手教員）に係る専門分野について</li> <li>3. 新規採用教員の学科目等の配置について</li> </ol>  |
| 第9回 (1月10日)  | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教授昇任人事について（人事選考委員会報告）</li> <li>2. 専攻における採用人事（若手教員）に係る専門分野について</li> <li>3. GSP 担当教員の採用について</li> <li>4. 令和 2.4.1. 付け講座及び教育研究分野改編に伴う人間発達環境学域の人事配置について</li> </ol>  |
| 第10回 (2月14日) | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 助教採用人事について（人事選考委員会報告）</li> <li>2. 助教採用人事に係る人事選考委員会の設置について</li> <li>3. 助教採用人事の公募について</li> <li>4. 新規採用教員の国際人間科学部における配置講座等について</li> <li>5. キャンパスライフ支援センターからの教員配置依頼及び令和 2.4.1. の人間発達環境学域人事配置案について</li> <li>6. 人間発達環境学域のポイントに関する試算について</li> </ol> |

|                  |  |
|------------------|--|
| 第 11 回 (3 月 6 日) | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 助教採用人事の公募について</li> <li>2. 新規採用教員の国際人間科学部における配置講座等について</li> </ol> |
|------------------|--|

(人事委員会委員長 青木茂樹)

### 2.2.2. 研究科運営委員会

研究科運営委員会は、研究科長、副研究科長、専攻長（2名、ただし2名は学科長を兼ねる）、発達科学部学科長（2名）に、研究科運営委員会規則 第2条（5）その他委員会が必要と認めた者として、国際人間科学部における発達コミュニティ学科長の吉田圭吾教授、子ども教育学科長の木下孝司教授及び環境共生学科長の浅野慎一教授を加えた10名体制で、研究科等の管理を円滑に行うために組織及び運営に関し包括的な事項を扱ってきた。検討事項は、以下のとおりである。

|                  | 検討事項  |
|------------------|---|
| 第 1 回 (4 月 5 日)  | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 予備審査委員会委員候補者について</li> <li>2. 「国人・国文・人間発達・国協に係る打合せ」について</li> <li>3. 新年俸制・教員活動評価に関して</li> <li>4. 社外取締役の依頼に関して</li> <li>5. 奨学寄附金について</li> </ol>  |
| 第 2 回 (4 月 26 日) | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「国人・国文・人間発達・国協に係る打合せ」について</li> <li>2. 新年俸制・教員活動評価に関して</li> <li>3. アドミッションポリシーの改定について</li> <li>4. FDの全学的方針について</li> <li>5. 国際人間科学部と（両）研究科長との打合せについて</li> <li>6. 華東師範大学（国家教育宏観政策研究院）からの表敬訪問</li> <li>7. 社外取締役の依頼に関して</li> <li>8. 奨学寄附金について</li> </ol> |
| 第 3 回 (6 月 7 日)  | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「大学院問題」について</li> <li>2. 「同一労働同一賃金ガイドラインへの対応」について</li> <li>3. 国立大学法人評価（4年目終了時評価）について</li> <li>4. 公表延期中の博士論文が公表されていた件について</li> <li>5. ホームカミングデイの開催形態について</li> <li>6. 奨学寄附金について</li> </ol>   |
| 第 4 回 (7 月 5 日)  | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 令和元年 9 月修了予定者に係る博士学位論文審査委員候補者（案）について</li> <li>2. 平成 31 年度教員サバティカル制度適用教員について</li> <li>3. 奨学寄附金について</li> </ol>  |

|              |  |
|--------------|--|
| 第5回 (9月13日)  | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学位論文の審査（内見委員会の設置）の依頼について</li> <li>2. 講座の大きくくり化の仕切り直しについて</li> <li>3. 部局長会議(9/12)報告</li> <li>4. 奨学寄附金について</li> </ol>  |
| 第6回 (10月4日)  | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 予備審査委員会候補者（案）について</li> <li>2. 10/09 部局年次計画等に関するヒアリングについて</li> <li>3. 講座の大きくくり化の仕切り直しについて</li> <li>4. 令和2年度神戸大学若手教員長期海外派遣制度への推薦</li> <li>5. 奨学寄附金について</li> </ol>  |
| 第7回 (11月1日)  | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 内見委員会委員候補者について</li> <li>2. 令和2年度外国人研究員招へい候補者の推薦について</li> <li>3. 10/09 部局年次計画等に関するヒアリングについて</li> <li>4. 「国立大学改革方針」を踏まえた国立大学との徹底した対話の実施について</li> <li>5. 講座の大きくくり化の仕切り直しについて</li> <li>6. 奨学寄附金について</li> </ol>   |
| 第8回 (12月6日)  | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 令和2年度外国人研究員招へい候補者の推薦について</li> <li>2. 講座の大きくくり化の仕切り直しについて</li> <li>3. 大学院前期課程入試改革素案について</li> <li>4. 「未来世紀都市学」(“Well-Being 研究拠点”) 合同シンポジウムについて</li> <li>5. 奨学寄附金について</li> </ol>  |
| 第9回 (1月10日)  | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 博士学位論文審査委員候補者案について</li> <li>2. 講座の大きくくり化について</li> <li>3. 大学院前期課程入試改革について</li> <li>4. 警備員配置時間の短縮（夜間・週末のみ）について</li> <li>5. 神戸大学機能強化構想資料（研究科の専門教育に係るポンチ絵）の更新について</li> <li>6. 「未来世紀都市学」(“Well-Being 研究拠点”) 合同シンポジウムについて</li> <li>7. 奨学寄附金について</li> </ol> |
| 第10回 (2月14日) | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 名誉客員教授の称号付与について</li> <li>2. 定年後の継続雇用者に係る特例措置について</li> <li>3. 講座の大きくくり化等に伴う教員の異動について</li> <li>4. 国際人間科学部の教員充足について</li> <li>5. 任期つき助教に対する中間審査に関する申し渡しについて</li> </ol>   |

|            |  |
|------------|--|
|            | 6. 大学院前期課程入試改革について<br>7. 令和2年度神戸大学若手教員長期海外派遣の再募集<br>8. 令和2年度外国人研究員招へい候補者の再募集<br>9. 奨学寄附金について   |
| 第11回(3月6日) | 1. 新型コロナウイルス関連<br>2. 外国人研究員の選考について<br>3. ハラスメント防止等に関する規程の一部改正等について<br>4. 新規採用助教に対する「労働条件通知書」について<br>5. 研究推進支援経費について<br>6. 学位認定後に生じた投稿論文の雑誌出版の取消しについて |

(研究科運営委員会委員長 青木茂樹)

### 2.2.3. 教員活動評価委員会

神戸大学教員活動評価が実施されて6年目となる。昨年度と同様、教員活動評価委員会内規第3条に基づき、研究科長、副研究科長、専攻長に、その他研究科長が必要と認めた者として発達科学部学科長及び国際人間科学部学科長(グローバル文化学科長を除く)を加えた10名体制で臨んだ。

また、昨年度合意した評価の方法や基準等を基本的に踏襲しつつ、その都度問題がないか慎重に判断しながら、手続きを進めた。「教員活動評価結果通知書」配布後、「意見の申出」はなかった。

教員活動評価委員会は、6月7日、7月5日、7月26日、10月4日、及び2月14日に開催した。10月4日の委員会にて、「教員活動評価書」の見直し、その評価書に対する総合評価に係る基準、及び新たな年俸制教員制度導入に伴う教員活動評価の見直しなどの検討を行い、2月14日に翌年度よりエフォート率の申告を導入するための教員活動評価実施要項を確認した。

(教員活動評価委員会委員長 青木茂樹)

### 2.2.4. 中期計画推進委員会

今年度は、研究科長(委員長・青木茂樹)、副研究科長(平山洋介、近藤徳彦)、研究推進委員会委員長(青木茂樹)、教務委員会委員長(岸本吉弘)、学生委員会委員長(丑丸敦史)、国際交流委員会委員長(片桐恵子)、入学試験委員会委員長(平山洋介)、キャリアサポートセンター長(澤宗則)、情報メディア委員会委員長(宮田任寿)、自己評価委員会委員長(高見和至)、事務課長(中野下勉)の構成員に加え、総務係長(西田望智子、藤村さとみ)が出席し、月1回の定例会議を開催した(計11回)。

「中期目標の遂行、見直しに関する事項」を所掌する本委員会では、毎回、研究科長から部局年次計画に関わる全体的な状況が説明された。その後、各委員会等からそれぞれの活動

内容が報告され、年次計画の進捗状況を確認し合うとともに、各委員会における計画実施の促進、ならびに委員会相互の情報の共有と連携可能性について検討した。

また、「第二期中期目標・中期計画管理表」における2019年度実績について各委員会に対し回答を求め、それらを踏まえたうえで本研究科の年次計画管理表の再確認を行った。

(中期計画推進委員会委員長 青木茂樹)

### 2.2.5. 自己評価委員会

本年度は、研究科長(青木茂樹)、副研究科長(平山洋介、近藤徳彦)、委員長(高見和至)、副委員長(大串健一)、委員(井口克郎、谷正人、赤木和重、山下晃一)、事務課長(中野下勉)の10名の構成員ならびに総務係長(西田望智子、藤村さとみ)が出席した。9回の委員会の開催、2回メール会議の実施によって、以下の事項について取り組んだ。

#### (1) ファカルティ・ディベロップメント

##### ・授業のピアレビュー

大学院の授業を対象にピアレビューを実施している。各専攻から選定された授業の参観および授業担当者と参観者との意見交換や授業実践報告会が行われ、2科目の授業を対象に延べ7名の教員が参加した。参観形式で実施した科目については、授業の概要、授業において優れた点・工夫がみられた点、次年度の授業改善に向けて強化できる点がピアレビューレポートとして報告された。

##### ・ファカルティ・ディベロップメント講演会

大学教員としての能力開発を目的として、3回のファカルティ・ディベロップメントを実施した(資料集参照)。参加者の延べ人数は、243名(教員225・職員等18)であった。今年度のテーマは、学生のPC必携化に即した工夫や就職活動の現状理解などであった。

#### (2) Voice Box(「学生の声」投稿箱)への対応

本年度1件の投稿があり、委員会での検討後、関係部署への付託によって改善した。

#### (3) 各種アンケートの実施と検討

学部、研究科前期課程について、学修の記録、入学・進学時アンケート、授業振返りアンケート、卒業・修了時アンケートを内容修正のうえ実施するとともに、結果の分析を行った。

#### (4) 学部卒業生・研究科修了生に対するアンケートの実施

国立大学法人評価と機関別認証評価に必要とされる卒業生・修了生(2011~15年度)を対象とした、「各教育課程の学位授与方針に則した学習成果に関するアンケート」を新たに実施した。分析結果からは、在学時の学修に対する肯定的評価が示唆された。

#### (5) 学長と学生との交流会(兼 令和元年度学生・教職員による教育懇談会)

学部4年生が2名、研究科から2名の学生および本委員会委員長が出席した。懇談会の模様は実施報告にまとめられ、教育環境の改善について検討された。

#### (6) 国立大学法人評価・機関別認証評価に関する作業

国立大学法人評価の中間報告に提出する「研究業績説明書」「現況調査表(研究)」「現況調査表(教育)」「別添資料」の作成に従事した。また、令和3年度受審予定の機関別認証評

価の準備作業として「教育の内部質保証に関する自己点検リストの確認」「自己評価委員会規程の改定」「教育の内部質保証の体制・手順に関する内規の策定」を行った。

(7) 令和元年度年次報告書の作成

令和元年度の本学部・研究科における教育・研究活動を集約し、年次報告書を作成した。

(自己評価委員会委員長 高見和至)

## 2.2.6. 安全衛生委員会

### 1) 令和元年度委員

委員長 (村山留美子), 委員 (蘆田弘樹, 太田和宏, 佐藤幸治, 田畑暁生, 谷 篤史), 中野下勉 (事務課長), 西田望智子/藤村さとみ (総務係長), 多田真紀子 (人間科学図書館情報サービス係長)

### 2) 委員会の開催

5回開催した (4月18日, 7月22日, 11月25日, 2月19日, 持ち回り審議1回)。

### 3) 委員会の業務

- ・点検事項報告とその対策の検討
- ・その他改善を要する点の検討
- ・全学安全衛生委員会の報告
- ・その他

### 4) 定期点検

委員による学舎内共用部点検を月に一回実施し、各委員が担当場所の点検報告を行った。

### 5) 本年度の実施事項

- ・巡視 (廊下の物品の撤去) について協力依頼を行うとともに、教職員及び学生に節電対策の理解と協力を呼びかけた (6月)。
- ・廃棄物品の廃棄方法に関するマニュアルを更新して部局内に送付し、不要物品撤去についての徹底を呼びかけた (6月)。
- ・蚊の大量発生への対策として、側溝への防虫剤の散布 (7~9月) を実施した。
- ・キャンパス内の冷蔵庫, パソコン等に関わる落下防止措置の実施に関する依頼と設置状況の調査を行った (8月)。
- ・G棟への産業医巡視を受け、指摘事項に関わる対応を行った。
- ・避難訓練及び消防訓練 (車椅子利用者を想定した訓練及び学生参加による垂直型避難袋の使用訓練) を実施した (1月)。
- ・キャンパス内の冷蔵庫, パソコン等に関わる落下防止について、転倒防止器具等を必要に応じて設置した (2月)。

- ・D棟（1～2階）の衛生管理者巡視結果を、全学安全衛生委員会において報告した（2月）。
- ・キャンパス内の薬品整理を呼びかけ、不要薬品の廃棄を徹底した（3月）。
- ・キャンパス内の各建物について避難経路を示す図を作成するとともに、緊急時対応に関するチラシを作成し、配布した（3月）。

## 6) 課題

- ・共有スペースにおける不要物の撤去依頼を継続する。
- ・什器等についての転倒、落下防止措置についての注意喚起を継続する。
- ・省エネルギーへの協力依頼を継続する。
- ・重大な災害や事故防止の観点から、重大事故や災害に至らない段階でのヒヤリハット（ヒヤリとする体験や、ハッとした経験）事例についての情報の共有化を行う必要がある。

（安全衛生委員会委員長 村山留美子）

## 2.3. 予算

### 2.3.1. 予算に関する特記事項

#### (1) 予算追加配分

本年度は科研費間接経費及び受託研究間接経費を財源として、予算追加配分を下記のとおり行った。

- ①前年度に引き続き、外部資金獲得者に対してインセンティブ配分を行った。
- ②第3期中期目標・中期計画期間に予測される財源不足に備えて800万円を預け、預かり金の合計は1,600万円となった。

#### (2) 2019年度当初予算配分

2019年度当初予算配分案作成にあたり、教育研究基盤経費（既定経費）が発達科学部から国際人間科学部への予算振替及び機能強化促進係数影響分（1.6%減）により減少したことなどから、昨年度よりも厳しい予算配分となった。

- ①管理的経費については、電気料の増、ウェブサイトの新規構築、同一賃金同一労働による非常勤職員の費用経費増などにより、全体として約243万円の増額となった。
- ②教育費については、発達科学部の学生数減少に伴い、学生当経費及び共通図書費を削減できたことなどから、全体として118万の減額となった。
- ③研究経費については、財源不足のため教員研究費を一人当たり3万円減額して27万円配分した。
- ④附属施設経費については、昨年どおり配分した。
- ⑤政策経費については、特命助教の任期満了による雇用経費減などにより134万円の減額となった。

（予算委員会委員長 長ヶ原誠）

### 2.3.2. 予算関係の審議等の状況

#### (1) 平成30年度決算

令和元年5月13日の予算委員会で審議し、令和元年5月17日の教授会において審議・承認された。

#### (2) 2019年度当初予算再配分

平成31年3月19日の教授会において承認された2019年度当初予算について、令和元年5月1日現在での各専攻、学科、コース等の学生実員数に基づいて学生当経費の再配分の修正を行い、5月13日の予算委員会で審議し、5月17日の教授会において審議・承認された。

#### (3) 2019年度予算追加配分

予算追加配分について、令和2年10月15日の予算委員会で審議し、10月18日の教授会において審議・承認された。

#### (4) 2020年度当初予算配分

2020年度当初予算配分について、令和2年3月13日の予算委員会で審議し、3月19日の教授会において審議・了承された。なお、学生当経費は令和2年5月1日の学生当員数に基づいて修正を加え5月開催の教授会で審議することとした。

(予算委員会委員長 長ヶ原誠)

### 2.3.3. 外部資金獲得状況（教員及び学生）

外部資金の獲得状況については、その詳細を資料編（特に「11-3-1~5」参照）に掲載しているため、ここでは特徴的な点を指摘するにとどめる。

2019年度科学研究費助成事業（科研費）の獲得は、69件（新規：17件）、総額159,498千円であった。内訳は、新学術領域研究（研究領域提案型）公募研究：1件（新規：0件）、基盤研究(S)：1件（新規：0件）、基盤研究(A)：2件（新規：0件）、基盤研究(B)：16件（新規：5件）、基盤研究(C)：33件（新規：8件）、挑戦的研究（開拓）：1件（新規：0件）、挑戦的研究（萌芽）：7件（新規：3件）、若手研究：3件（新規1件）、若手研究(A)：継続1件、若手研究(B)：継続2件、国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(A)）：継続1件、国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(B)）：継続1件となっている。平成30年度科学研究費助成事業（科研費）の獲得は73件（新規：21件）、総額164,500千円であることから、若干の減少はあるものの前年度とほぼ同様の実績が得られており、大型の新規採択はないものの基盤研究(B)の採択数の堅調な増加が特徴的である。

今後、研究推進委員会等において、科研費制度改革の留意点を再考しながら、次年度以降の科学研究費助成事業（科研費）の獲得に向けての検討が必要と思われる。

日本学術振興会特別研究員については、本年度DC8名（新規：2名）、PD継続1名が採用されており、昨年度のDC8名（新規：5名）、PD継続1名と同等の実績となっている。10年

以上にわたって毎年開催している学生委員会主催の申請に係る説明会に加えて、学術・産業イノベーション創造本部・学術研究推進部門（URA 室）の支援を得て、計画調書（申請書）の書き方セミナーや推敲のためのワークショップの開催により、申請数の増加につながった。今後の採用数の増加につなげたい。

受託研究については、9 件、総額 3,516 万円（平成 30 年度 12 件、総額 7,149 万円）、共同研究については、10 件、総額 905 万円（平成 30 年度 14 件、総額 1,769 万円）となった。件数は大きく減っていないものの、総額で半減していることは今後の注意を要する。

（人間発達環境学研究科長・発達科学部長 青木茂樹）

## 2.4. 広報及び情報公開

### 2.4.1. パンフレット，ウェブサイト等

#### (1) 研究科案内（パンフレット）

2019 年 4 月入学者向け研究科案内（研究科案内 2020）を作成し、2019 年 6 月に発行した。研究科案内 2020 は 24 ページで構成され、研究科の教育、研究、国際学術交流、社会貢献、各専攻に関する特色について掲載した。2018 年から発達科学部の学生募集は停止されているため、発達科学部入学者向けの学部案内は作成していない。

#### (2) 研究科ウェブサイト

研究科ウェブサイト (<http://www.h.kobe-u.ac.jp>) は 2011 年度に導入された CMS（コンテンツ管理システム）によって運用されており、すべての情報を一元的に管理・公開している。しかし、現在のシステムは、古いバージョンの CMS をベースとしているため、セキュリティ、保守性、効率性を考慮すると、最新バージョンの CMS が導入されることが望まれる。

研究科ウェブサイトは、受験生を含む一般向けの広報媒体として、また、在学生や教職員向けの広報媒体としての役割をもつ。2019 年度においては、昨年度同様、入試情報、国際学術交流、シンポジウム（学術 Weeks 主催のイベントを含む）、セミナーなど、研究科の公式組織が主催するほぼすべてのイベントの情報をウェブ上に掲載した。在学生向け向けの情報として、各種教務学生情報（学生便覧、時間割表など）、キャリアサポートセンターが主催するセミナー情報、留学に関する情報を掲載し、学科や専攻を超えた学術交流を支援するため、各コースが主催する卒業論文・修士論文発表会プログラムも公開した。

（情報メディア委員会委員長 宮田任寿）

### 2.4.2. 人間発達環境学研究科 オープン・らぼ

人間発達環境学研究科主催の「オープン・らぼ」は、平成 28 年度より「オープンらぼウィークス」という研究室訪問期間を設け、参加希望者が予め個別に教員に連絡して面談の予約をとり、「オープンらぼウィークス」の期間中の任意の日時に面談を行うという方式がとられている。

令和元年度は、申込み受付期間を 5 月 20 日から 6 月 7 日、また、研究室訪問期間を 6 月 10 日

から7月5日までとした。その結果、人間発達専攻の研究室訪問者は94名（昨年度は103名）、人間環境学専攻の研究室訪問者は5名（昨年度は7名）、計99名（昨年度110名）であった。

「オープン・らぼ」開催の趣旨は、人間発達環境学研究科の理念や特徴、養成しようとする人材像等を広く発信するとともに、ひいては大学院の受験生を増加させる点にある。人間発達専攻では訪問者が多い。訪問者が増えることは、本専攻の発展を反映・促進するとみられる。一方、人間環境学専攻では、訪問者は、一桁にとどまったままであった。この専攻の存在と特徴をより広く発信していく必要が指摘される。

（人間発達環境学研究科 オープン・らぼ WG 主査 平山洋介）

### 2.4.3. ホームカミングデイ

#### 1) 令和元年度発達科学部ホームカミングデイの開催

10月26日（土）に神戸大学ホームカミングデイ（第14回）が開催された。本学部においても、鶴甲第2キャンパスにおいて、午後の学部企画を開催した。スケジュールは以下の通り。

13:00～14:00：受付（発達科学部A棟正面玄関）

14:00～14:30：学内探検ツアー（キャンパスツアー）

（案内&総合司会：人間環境学科4年生）

- ・発達科学部一期生による《記念樹木》見学  
《在学生有志によるウエルカムパフォーマンス》
- ・発達科学部・国際人間科学部 学生有志 9名による《ミニコンサート》
- ・ギャラリー虹《国際人間科学部3年生7名による作品展示》鑑賞
- ・発達・国人学生有志による《創作ダンス》（人間表現学科4年生ほか7名）

14:45～15:00：「鶴甲へおかえりなさい！」発達科学部長、紫陽会会長挨拶（大会議室）

15:00～15:15：紫陽会賞受賞式（昨年度活躍された卒業生に対する表彰）（大会議室）

第9回受賞者 教育学部音楽科 昭和39年卒業生 坂下功一氏

15:20～16:30：「ありがとう 発達科学部！私たちが育ててくれたキャンパスは今

—在学生と繋がる同窓会を開こう」（パネルディスカッション形式による卒業生と在学生、教員との懇談会）（大会議室）

（懇談会司会：人間環境学科4年生）

16:40～18:00：懐かしの生協食堂で、先輩、同級生、後輩、そして現役学生達と語ろう！

（懇親会）（司会：総合司会者）

#### 2) 第14回 発達科学部ホームカミングデイ企画

テーマ：「ありがとう 発達科学部！私たちが育ててくれたキャンパスは今

—在学生と繋がる同窓会を開こう」

プログラム：

15：20～15：55 パネリストによる話題提供

司会：発達科学部人間環境学科 4年生

1. 「国人生に繋がりたい，わたしの発達生自慢」

発達科学部人間環境学科・社会環境論 4年生

2. 「神戸から世界へ」

発達科学部人間環境科学科平成11年卒，総合人間科学研究科 平成13年修了生

3. 「ひろがる私たちの可能性～国際人間科学部『だからこそ』得られたもの～

国際人間科学部発達コミュニティ学科 3年生

4. 「不易流行の大切さ～教育学部最後の卒業生として」

教育学部体育科 平成8年卒，教育学研究科 平成10年修了生

15：55～16：00 質疑応答

16：00～16：30 討論

16：30 閉会

3) ホームカミングデイの招待年と参加者の学部・卒業年

① 招待年（郵送）：

昭和34年卒，昭和44年卒，昭和54年卒，平成元年卒，平成11年卒，平成21年卒（以上全学指定），平成12年卒，平成13年卒，平成14年卒，平成15年卒（発達指定）

② 参加者の学部・院と卒業・修了年：

教育学部卒業生（昭和28年卒1名，昭和32年卒1名，昭和34年卒5名，昭和35年卒1名，昭和38年卒1名，昭和39年卒1名，昭和40年卒1名，昭和43年卒1名，昭和44卒2名，昭和51年卒1名，昭和52年卒1名，昭和54年卒5名，昭和55年卒3名，昭和56年卒2名，昭和62年卒2名（うち1名は平成元年修了），平成元年卒1名，平成7年卒2名，平成8年卒1名（平成10年修了），小計32名（うち現職教員1名）

発達科学部卒業生・大学院総合人間科学研究科修了生・人間発達環境学研究科修了生（平成9年卒6名（うち1名は同11年修了），平成11年卒1名（同13年修了），平成12年卒1名，平成12年修了1名，平成13年卒2名（うち1名はご家族），平成19年卒5名，平成20年卒2名，平成21年卒6名，平成22年卒2名，平成23年卒1名，平成25年卒1名，平成28年卒1名（同30年修），平成30年卒1名，令和元年卒1名，小計31名（ほかに児童3名，乳児2名）

卒業生・修了生62名，ご家族6名（児童・乳児含む） 合計68名

在学生（発達科学部4年生12名，大学院人間発達環境学研究科前期課程2年生3名，同課程1年生5名，国際人間科学部3年生12名，2年生4名，1年生4名，小計40名）

在学生合計40名

現職教員 9名（卒業生を除く），現職職員 6名

退職教員 2名

参加者合計 125名（懇親会76名）

以上のほかに、午前中の全学の記念式典やランチパーティーにのみ参加した教育学部卒業生が9名（ほかにご家族1名を同伴）、発達科学部卒業生が1名（合計11名）いた。

#### 4) 本年度企画の特色と今後の課題

本年度、発達科学部最後の学年(2016年度生)が4年生となった。新学部の国際人間科学部の学生は1, 2, 3年生となり、両学部生が共に在籍する最後の年度を迎えた。そこで、本年度は、発達科学部を振り返り、かつ、昨年度同様、教育学部・発達科学部の卒業生と発達科学部・国際人間科学部（鶴甲第2キャンパス）の在籍生を繋ぐ企画とした。

今年度の特筆すべきことの一つとして、恒例のキャンパスツアーにおいて、発達科学部と国際人間科学部の表現系の学生有志が自発的に企画・準備した「ウエルカムパフォーマンス」が披露されたことがある。まず、C棟1F（C111）にてミニコンサートで、続くF棟1Fのダンス系アクティブラーニングルーム（F164）では創作ダンスで卒業生らを歓迎した。また、F棟1Fと2Fのギャラリー虹では、国際人間科学部学生の絵画や造形の作品が展示された。いずれも表現系の学生の自発的で熱心な発案と企画、準備ならびに表現系教員の協力ののもとに実現した。これらのパフォーマンスは卒業生をはじめとする参加者に大変好評であった。ミニコンサートは、夕刻からの生協食堂での懇親会でも披露された。

2) に示した「卒業生と在籍生による懇談会」は、上述のテーマの下、シンポジウム形式で意見交換をおこなった。教育学部と発達科学部の各卒業生、発達科学部と国際人間科学部（第2キャンパス）の各在籍生がそれぞれパネリストとして話題提供した。昨年度は奇しくも3学部の一期生が揃ったことから、今年度は、教育学部最後の年の卒業生をパネリストとして招き、当時の状況や学部最後の学生としての心境も語って頂いた。3つの学部の変遷を「不易流行」として捉え、時代を超えて共有する視点を再確認したり、国際人間科学部の新たな挑戦について語り合うことができ、卒業生と在籍生を繋ぐ有意義な懇談会となった。司会やパネリストの方々には準備段階から協力頂いた。今回も、社会で活躍する教育学部、発達科学部の卒業生に懇談会のパネリストを務めて頂いたが、在籍生にとっては、人生の先輩としての相談相手や自身のキャリア形成のモデルとなり得ることを今年も再確認した。今年度もさらに卒業生と進路を考える在籍生との交流の場になるような企画が望まれる。

今年は、卒業生、在籍生共に参加者を従来よりも多く増やすことができたことも特筆すべきことの一つであった。特に、発達科学部の卒業生と、発達科学部ならびに国際人間科学部在籍生の参加が増えた。昨年度の約2倍の参加人数となった。理由の一つとして、現職教職員や退職教員による卒業生へのメールでの呼びかけが功を奏したことが挙げられる。二つめに、昨年に続き、家族同伴可能としたことから子ども連れの子育て世代の参加が増えた。今後も、卒業生の家族が参加し易い案内を継続してほしい。

今後の課題として、予算の問題がある。特に、自発的にウエルカムパフォーマンスを企画し開催してくれた在籍生に対する謝意を表す方法として、懇親会への招待がある。その際の食費をどう捻出するか、早急に知恵を絞る必要がある。これまでの年次報告書の本項にも述べられているように、在籍生の参加がホームカミングデイ活性化の鍵であり、卒業生も在学

生との交流を望んでいる。

(第 14 回発達科学部ホームカミングデイ実行委員会委員長 白杉直子)

## 2.5. 環境設備

### 2.5.1. 教育・学習環境の整備

#### (1) 各種施設・設備

学生の教育環境を充実させるため、A 棟教室 (A325) の老朽化したプロジェクターを更新するとともに、F 棟 GSP 情報閲覧室 (F254) に追加でホワイトボード 1 台を設置した。また、授業で使用する貸し出し用パソコンを 2 台購入した。これら整備は、紫陽会からの支援によるものである。

(事務課長 中野下勉)

#### (2) キャンパス内ネットワーク環境整備

本研究科で利用できる無線 LAN は、神戸大学情報基盤センターが管理する全学用無線 LAN と、本研究科が独自に管理するものが存在する。2019 年度は、アクセスポイントを A 棟に 1 台、B 棟に 6 台、F 棟に 1 台増設し、とくに、授業で使用する教室からの無線 LAN へのアクセス状況が改善された。

情報教育設備室の準備室にはスタッフが常駐し、60 台の教育用端末のサポートの他、学生や教職員向けに、コンピュータやネットワーク利用に対する技術支援も行っている。

本研究科では、学生向けメーリングリストの運用を行っている。メーリングリストは学生が所属する公式組織 (コースなど) 単位で構成され、教務、学生生活、キャリアサポートに関する情報などが配信された。また、在学生向けの情報を流す電子掲示板も部局内に 3 箇所設置しており、この運用も行っている。

(情報メディア委員会委員長 宮田任寿)

#### (3) 図書館運営・整備

本学研究科・学部に附設された人間科学図書館は、下記の活動を実施した。

新入生ガイダンスで図書館利用の意義・方法を案内した (「図書館利用のすすめ」)。利用方法を説明する「春の図書館ツアー」を 4 月 8~10 日に実施し、4 月中は要望に応じて適時実施した。また図書検索実習を行った。

学生用資料の整備充実に努め、令和元 (2019) 年度において、学生用推薦図書 (専攻推薦図書)、学生希望図書、学習・研究の基盤として必要な高額図書など、1,116 冊 (総額 4,959,840 円) の図書を購入して配架した。部局からの配分図書費が前年度同額であったおかげで、学生希望図書ならびに高額図書の購入に充てることが出来た。また、平成 30 (2018) 年度購入学生用図書の 2019 年 1 月~12 月までの利用実績は、全体の貸出率で 48.49%、回転率で 137.41% であり、購入年である 2018 年の貸出実績を含めると、貸出率 62.49%、回転率 219.34% となり概ねよく利用されていた。スペースの有効活用の観点から、教育・研究上の

価値を失い、保管の必要がない資料や重複資料など 2,540 点 (10,404,551 円) を処分した。

予算的観点から、継続購読中の学生用雑誌について見直しを行うため、学科ごとに意向調査を行った。その集約結果により、電子ジャーナルで閲覧可能である 19 誌については、冊子の購読を中止した。また利用頻度が低くかつ意向調査でも継続の必要なしと判断された 28 誌についても購読中止とした。

教員の転出に伴う返却図書について、当該教員より譲渡ならびに返還申請のあった資料の審議・決定をした。

本年度は、4 回の図書委員会を開催するとともに、全学の附属図書館運営委員会に出席した。

(図書委員会委員長 加藤佳子)

### 2.5.2. 交流ルーム・アゴラ

今年度も従来通り、平日 11 時～18 時まで運営し、食事と飲み物を提供した。学生や教職員の他、学外からの利用もあり、特に昼食時間帯に混み合った。

#### 体制

今年度は、2 名のスタッフ（非常勤職員）および、知的障害のあるスタッフ 3 名、学生 3 名で運営を行い、常時 2 名体制を敷くことができた。

#### 活動状況

- ・前期毎週 1 回、大学院の授業が哲学カフェ、サイエンスカフェ形式で実施された。
- ・8 月 8 日のオープンキャンパスには、スタッフ 6 名と学生アルバイト 6 名が対応し、ランチ等を提供した。メニューは、カレー、パウンドケーキ、コーヒー、リンゴジュース、レモンスカッシュであった。また、実習生が構内でクッキーを販売した。
- ・知的障害のあるスタッフのうち 1 名は、交流ルームでの業務の他に、会議室や教室の清掃に従事した。
- ・スタッフと実習生が、教員ボックスへの郵便物の配達を行った。
- ・実習生 2 名が、スタッフ業務および構内でのクッキー販売を行った。加えて、神戸市障害者就労推進センターから 2 名の実習を受け入れた。

#### 展示

- ・7 月 1 日～10 月 31 日にかけて、アトリエ KOKI 展を開催した。また 7 月 8 日には、画家のこうき君の親御さんである木下真理子さんをお招きして、トークショーを開催した。

#### その他

- ・年度末に感染が拡大した新型コロナウイルス感染症の感染防止対策として、マニュアルを策定し、消毒液の設置、定期的な換気などを行った。

(交流ルーム運営委員会委員 赤木和重)

## 2.6. 教員研修

### 2.6.1. FD

研究科 FD 記録，及び神戸大学 HP 大学教育推進機構「FD 活動」FD カレンダーより抜粋した FD について，以下に記す。

- (1) 4月19日 「論文関係の指標の現状と国際共著論文増加に向けて」他
- (2) 7月1日 「人間環境学相関研究」に関する意見交換会
- (3) 7月12日 「人間発達総合研究Ⅱ」に関する意見交換会
- (4) 9月6日 科研費申請に向けて  
ー最近の制度変更点や評価の観点に沿った書き方の留意点について
- (5) 12月20日 鶴甲第二キャンパスの学生の進路とキャリアサポート体制  
(人間発達環境学研究科長・発達科学部長 青木茂樹)

### 2.6.2. 初任者研修

情報メディア委員会では，毎年，着任した教員に対して研修会を主催している。2019 年度に着任の教員はいないため，研修会は開催していない。

(情報メディア委員会委員長 宮田任寿)

## 3. 入試

### 3.1. 一般選抜入試

#### 3.1.1. 入学試験委員会

本研究科及び発達科学部が関係する入学試験全体を所管する入学試験委員会は，研究科長，副研究科長，専攻長，学生委員会委員長，発達科学部学科長の計8名で構成し，令和元年度委員長を平山洋介副研究科長が務めた。なお，学部の入学試験は国際人間科学部入学試験委員会の所掌下にある。

今年度の審議概要（日程と議題）は以下のとおり。

- ・第1回（4月17日）
  1. 2020年度大学院募集要項について
  2. 2020年度入学者に係る入学試験日程について
  3. 博士課程前期課程推薦入試の検討について
- ・第2回（8月30日）
  1. 2020年度博士課程後期課程人間環境学専攻（第Ⅰ期）入学試験・進学者選考試験合格者の判定について
  2. 大学院アドミッション・ポリシーの改定について
- ・第3回（9月25日）
  1. 2020年度博士課程後期課程入学試験合格者の判定について
- ・第4回（10月1日）

1. 2020 年度博士課程前期課程入学試験合格者の判定について
2. 大学院入試過去問（3 年分）の再点検について
  - ・第 5 回（10 月 4 日）
1. 2020 年度博士課程前期課程入学試験 2 次募集について
  - ・第 6 回（10 月 11 日）
1. 2020 年度博士課程前期課程学生募集要項〔募集要項〕について
  - ・第 7 回（1 月 22 日）
1. 2020 年度博士課程前期課程 1 年履修コース入学試験合格者の判定について
2. 2020 年度博士課程前期課程入学試験（第 2 次募集）合格者の判定について
3. 入試情報開示について
4. 大学院入試制度の改革について
5. 英語外部試験スコア換算について
  - ・第 8 回（2 月 18 日）
1. 大学院入試制度の改革について
  - ・第 9 回（3 月 4 日）
1. 2020 年度博士課程後期課程入学試験・進学者選考試験合格者の判定について
2. 大学院入試制度の改革について

（入学試験委員会委員長 平山洋介）

### 3.1.2. 一般選抜入試に係る総括と課題

今年度の人間発達環境学研究科の一般選抜入試に関する業務は、関係各位の尽力により大過なく遂行された。

平成 28 年度から導入された博士課程前期課程の英語外部試験は本年度も継続され、合否判定に有効に活用された。人間発達環境学研究科博士課程前期課程の学生定員に関しては、平成 28 年度より人間発達専攻では 52 名から 51 名に、人間環境学専攻では 40 名から 36 名に削減され、研究科全体の定員は、92 名から 5 名減の 87 名となった。

博士課程前期課程の 2020 年度入学試験結果は、人間発達専攻では、入学定員 51 名に対し、志願者数 68 名（志願倍率 1.33 倍）、合格者数 46 名であった。人間環境学専攻では、入学定員 36 名に対し、志願者数 40 名（志願倍率 1.11 倍）、合格者数 31 名であった。両専攻とも、合格者数が定員に達しなかったため、募集人員を若干名とする第二次募集を実施した。その結果は、人間発達専攻では、志願者数 10 名、合格者数 10 名、人間環境学専攻では、志願者数 6 名、合格者数 5 名であった。外数としている人間発達専攻（一年履修コース）の入学定員 4 名に対しては、志願者数 12 名、合格者数 5 名であった。これらの入試の結果、研究科全体では、定員 91 名に対し、志願者数 136 名（志願倍率 1.49 倍）、合格者数 97 人となった。博士課程後期課程については、人間発達専攻では、入学定員 11 名に対し、志願者数 16 名（志願倍率 1.45 倍）、合格者数 11 名、人間環境学専攻では、定員 6 名に対し、志願者数 8 名（志願倍率 1.33 倍）、合格者数 7 名であった（第 I 期と第 II

期の合計)。研究科全体に関しては、定員 17 名に対し、志願者数 24 名（志願倍率 1.41 倍）、合格者数 18 名となっている。

両専攻とも、博士課程前期課程に関し、合格者数が定員を下回り、第二次募集の実施が必要となったことは、受験者の確保がより重要な課題になっていることを示している。この課題に取り組むため、(1)人間環境学専攻については、2020 年度から英語での受験を可能とした、(2)両専攻とも、2021 年度入試から社会人特別枠における英語の配点割合を下げ、専門科目を重視した採点を行うことで、社会人受験生の増加を図る、(3)人間環境学専攻に関し、2022 年度入試から推薦選抜を実施する、などの一連の制度改革を進めた。一方、研究科に直結する学部の定員が減少し、その影響が 2021 年度入試から現れる可能性があり、この点を注視していく必要がある。大学院受験生の確保のあり方を引き続き検討していきたい。

入学試験に関する詳細なデータは『資料編』に掲載する。

(入学試験委員会委員長 平山洋介)

#### 4. 国際交流活動

##### 4.1. 学術交流協定

今年度は、大学院受け入れ留学生（正規生、研究生、教員研修生）及び短期受け入れ留学生の増加、大学院生の海外派遣（本学プログラムによる留学及び私費留学）の増加、ERASMUS+ 派遣推進、を目標として活動を行った。

###### (1) 新規

新たに以下の大学との交流協定を締結した。

###### 部局間協定

- ・トリブバン大学教育学部（ネパール） 学術交流協定
- ・ドレスデン工科大学（ドイツ） Erasmus+ Student Mobility for Traineeshipsにかかわる Inter-Institutional Agreement
- ・シレジア大学（ポーランド） Erasmus+IIA

###### 複数部局協定（タイプ2）

- ・ブタペスト・コルヴィヌス大学（ハンガリー） 学術交流 学生交流細則

###### 全学協定（タイプ1）

- ・ベルリン自由大学（ドイツ） 学術交流 学生交流細則
- ・コメニウス大学（スロヴァキア） 学生交流細則
- ・上海交通大学（中国） 学術交流 学生交流細則
- ・ヘント大学（ベルギー王国） 学術交流

(2) 更新

以下の大学との交流協定を更新した。

複数部局協定 (タイプ2)

- ・南フロリダ大学 (アメリカ合衆国) 学術交流

全学協定 (タイプ1)

- ・リール大学 (フランス) 学生交流細則
- ・ライデン大学 (オランダ) 学生交流細則

(国際交流委員会委員長 片桐恵子)

#### 4.2. 留学生

本年度, 本研究科で学んだ留学生は70名, 概要 (性別・国籍別・学年別・専攻・学科別・国費/私費別) は別表の通りである。

|    |    | 前期 | 後期 | 計  |
|----|----|----|----|----|
| 性別 | 女性 | 45 | 50 | 52 |
|    | 男性 | 22 | 20 | 23 |
|    | 計  | 67 | 70 | 75 |

|    |          | 前期 | 後期 | 計  |
|----|----------|----|----|----|
| 学年 | D3       | 6  | 4  | 6  |
|    | D2       | 3  | 3  | 3  |
|    | D1       | 4  | 4  | 4  |
|    | M2       | 23 | 23 | 23 |
|    | M1       | 17 | 17 | 17 |
|    | 学部4回生    | 1  | 1  | 1  |
|    | D研究生     | 3  | 4  | 4  |
|    | M研究生     | 6  | 12 | 13 |
|    | 学部研究生    | 0  | 0  | 0  |
|    | 学部特別聴講生  | 0  | 0  | 0  |
|    | 大学院特別聴講生 | 3  | 1  | 3  |
|    | 教育研修生    | 1  | 1  | 1  |
|    | 計        | 67 | 70 | 75 |

|    |         | 前期 | 後期 | 計  |
|----|---------|----|----|----|
| 国籍 | 中国      | 54 | 59 | 62 |
|    | 韓国      | 3  | 3  | 3  |
|    | 台湾      | 2  | 1  | 2  |
|    | マレーシア   | 1  | 1  | 1  |
|    | タイ      | 1  | 1  | 1  |
|    | コロンビア   | 1  | 1  | 1  |
|    | バングラデシュ | 2  | 1  | 2  |
|    | インドネシア  | 1  | 1  | 1  |
|    | オランダ    | 1  | 1  | 1  |
|    | マラウイ    | 1  | 1  | 1  |
|    | 計       | 67 | 70 | 75 |

|       |       | 前期 | 後期 | 計  |
|-------|-------|----|----|----|
| 専攻・学科 | 人間発達  | 32 | 36 | 38 |
|       | 人間環境学 | 34 | 33 | 36 |
|       | 人間形成  | 0  | 0  | 0  |
|       | 人間行動  | 0  | 0  | 0  |
|       | 人間表現  | 1  | 1  | 1  |
|       | 人間環境  | 0  | 0  | 0  |
|       | 計     | 67 | 70 | 75 |

|       |    | 前期 | 後期 | 計  |
|-------|----|----|----|----|
| 国費/私費 | 国費 | 2  | 2  | 2  |
|       | 私費 | 65 | 68 | 73 |
|       | 計  | 67 | 70 | 75 |

交換留学生（受入）：3名（前年度から引き続き受け入れている学生も含む。）

華東師範大学2名 ライデン大学1名

交換留学生（派遣）：9名（前年度から引き続き派遣されている学生も含む。）

ソウル国立大学校1名 高麗大学校1名 エトヴェシュ・ロラード大学1名

グラーツ大学1名 ウーロンゴン大学1名 オタワ大学1名 ドレスデン工科大学1名

ブリュッセル自由大学1名 バルセロナ大学1名

#### (1) チューター制度

留学生の来日直後の生活条件の整備，諸手続き遂行，また論文作成において補助を要するものに対して，個人チューターを配して日本社会，学生生活への円滑な適応，論文のレベルアップを図った。

#### (2) 留学生説明会及びチューター説明会

4月と10月に留学生説明会を行い，基本的な事項の説明及び諸注意を与えた。チューター説明会は3月と9月の2回行い，チューターに仕事の説明と諸注意を与えた。特に仕事内容について情報を共有し周知徹底できた。

#### (3) 留学生交流見学旅行

11月23日(土)，日帰りの交流見学旅行を実施した。23名（留学生21名，引率教職員2名）の参加があり，伊根の舟屋を遊覧船で見学したり，名勝地である天橋立を展望台から眺めたり散策することで日本理解を深めた。

#### (4) 派遣留学生報告書の閲覧

教務学生係において，過去の交換留学生の報告書をファイルにまとめ学生を対象に閲覧を継続している。

(5) 留学生向け就活ガイダンス

10月、1年間の就職活動を経て、企業から内定を得た留学生を招待し、就職活動体験談を披露してもらった。実際の具体的な就職活動体験は、非常に有益であった。

(6) メーリングリストの利用

留学生のメーリングリストを作成し、就活セミナーや旅行やイベントのほか、新型コロナウイルス最新情報などについて一斉メールで案内を送付した。

(7) 来年度に向けて

Erasmus+に参加できるのは、非常に有益なことであるので引き続き押し進めたい。しかし、同時に、専門能力や意欲などを慎重に吟味の上学生を派遣する必要性もある。また、より留学生受け入れのための体制を整えることが必要である。

(国際交流委員会委員長 片桐恵子)

#### 4.3. ダブルディグリー

今年度はあらたな海外協定校を開拓しダブルディグリー・プログラム実現可能性の高い海外協定校と具体的な検討を進め、Erasmus+による交流拡大を中心に、活動を行った。

(国際交流委員会委員長 片桐恵子)

#### 4.4. 学生・教員・職員の海外派遣

(1) 国際交流運営資金

・学生の国際学会発表への援助事業助成

2019年6月： 人間環境学専攻 1名 タイ 3rd Symposium and 2nd workshop e-Asia

2019年7月： 人間発達専攻 1名 オランダ 2019 International Conference on Environmental Ergonomics

2019年7月： 人間発達専攻 1名 チェコ共和国 24th Annual Congress of the European College of Sport Science

2019年7月： 人間環境学専攻 4名 ニューージーランド ICAVS10 10th International Conference on Advanced Vibrational Spectroscopy

2019年8月： 人間発達専攻 1名 中国 東北アジア体育・スポーツ史学会第13回大会

2019年9月： 人間環境学専攻 1名 インドネシア The 7th International Conference on DV-X $\alpha$  Method (ICDM)

2019年10月： 人間発達専攻 2名 中国 11<sup>th</sup> IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2019

2019年11月： 人間発達専攻 1名 アメリカ GSA2020 Annual Scientific Meeting

・国際交流運営資金で学会発表の助成以外のもの

・外国の大学との研究者交流事業

2019年7月：北野幸子 ミシェル・ヴァンデンブロック（ヘント大学，ベルギー）

・その他国際交流に関する事業助成

・海外研究者の招聘

2019年11月：秋元忍 戴焱森（上海体育学院，中国）

(2) 教員・職員派遣（研究科等の経費）

1) 教員の派遣

| 期日           | 氏名    | 国・地域    | 訪問先   | 内容   |
|--------------|-------|---------|---|--|
| 2019年6月      | 清野未恵子 | 中国      | Hangzhou Low-carbon Science Technology Museum | 12th Asia-Pacific Rce Meeting 2019にてESD推進の情報収集、意見交換、現地小学校のESDの取り組み視察 |
|              | 近江戸伸子 | タイ      | Rayong一帯、Bangkok一帯                            | GSPプログラム：バイオテクノロジースタディツアー引率  |
|              | 古川文美子 | インドネシア  | ハサヌディン大学 他                                    | 学生プログラムに向けた現地コーディネート   |
| 2019年7月      | 北野幸子  | 台湾      | Howard Civil Service International House 他    | GSP環太平洋乳幼児教育学会スタディツアー引率  |
| 2019年8月      | 古川文美子 | インドネシア  | ハサヌディン大学 他                                    | GSP/GCPにかかる事前準備、学生プログラム実施、打合せ  |
|              | 津田英二  | 韓国      | 韓国ナザレ大学，ソウル市立発達障害人福祉館 他                       | ナザレ大学、ソウル市立発達障害人福祉館にてスタディツアー引率                                       |
|              | 軽込郁   | アメリカ合衆国 | University of Oregon 他                        | オレゴン大学：パインマウンテン天文台プログラムスタディーツアー引率                                    |
|              | 源利文   | 中国      | 上海交通大学 他                                      | GCP/GSPプログラムにかかる引率、視察、打合せ  |
| 2019年9月      | 大田美佐子 | オーストリア  | EDUCULT・オーストリア現代美術館他                          | EDUCULTにて芸術教育と文化行政スタディーツアー引率   |
| 2019年10月～11月 | 奥山和子  | 韓国      | 済州大学学校教育大学                                    | 済州大学学校教育大学におけるスタディーツアー引率   |

|          |       |         |  |                             |
|----------|-------|---------|--|-----------------------------|
| 2019年12月 | 渡邊隆信  | ドイツ     | ギンター・グラス・ハウス、<br>ドレスデン工科大学・教師教育研究センター、<br>トーマス・ミュンツァー小学校 | 日独教師教育研究に関する調査など            |
|          | 太田和宏  | マレーシア   | Sultan Idris Education University                        | スルタン・イドリス教育大学におけるスタディーツアー引率 |
| 2020年3月  | 高見 和至 | アメリカ合衆国 | カリフォルニア州立大学ロングビーチ校 他                                     | 米国西海岸で学ぶ現代スポーツの諸相スタディーツアー引率 |

※このほか2件、2020年3月に國土将平（タイ・ネパール）、佐藤春実（タイ）がGSPプログラムの学生引率のため派遣予定であったが、世界的な新型コロナウイルス感染症拡大の影響で渡航中止となった。

## 2) 職員の派遣

- ・2019年6月 国際交流担当事務職員（教務学生係）1名

ドイツ ドレスデン工科大学 International Staff Training Week 2019参加のため

## (3) 紫陽会グローバル人材育成資金

| 期日               | 氏名   | 授業科目等 | 渡航先・学生等        |
|------------------|------|-------|----------------|
| 2019年7月1日～7月8日   | 佐藤幸治 | 特別研究Ⅱ | チェコ共和国<br>学生2名 |
| 2019年6月15日～6月24日 | 井上真理 | 衣環境ゼミ | チェコ共和国<br>学生1名 |

※なお、このほかに2020年2月～3月に学生2名が中国に行く予定であったが、世界的な新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中止となった

(国際交流委員会委員長 片桐恵子)

## 4.5. 海外研究者等の招聘・訪問

| 期日             | 氏名              | 国名       | 所属・職名                                   | 受入者   |
|----------------|-----------------|----------|---|-------|
| 2019年          |                 |          |   |       |
| 2019/9/25～9/29 | Kate N Thomas   | ニュージーランド | University of Otago・<br>講師              | 近藤徳彦  |
| 2019/9/20～9/29 | Robert Hasterok | ポーランド    | University of Silesia<br>in Katowice・教授 | 近江戸伸子 |
| 2019/9/4～9/6   | George Havenith | 英国       | Loughborough<br>Universty・教授            | 近藤徳彦  |

|                  |                          |              |   |       |
|------------------|--------------------------|--------------|---|-------|
| 2019/12/22～12/26 | 寶槻純子                     | 英国           | Dwight School of<br>London・Teacher of<br>Japanese | 川地亜弥子 |
| 2020 年           |                          |              |   |       |
| 2020/1/14～1/23   | IR. A. M. Imran          | インドネ<br>シア   | ハサヌディン大学・<br>教授                                   | 古川文美子 |
| 2020/2/19～2/27   | Rosemary Helen<br>Gibson | ニュージ<br>ーランド | Massey University・<br>Research Officer            | 近藤徳彦  |

※学術 WEEKS での招聘についてはその項を参照  
(国際交流委員会委員長 片桐恵子)

#### 4.6. 「英語による授業の実践—ESD 研究」

大学のグローバル化に対応して、英語で行われる授業を増やしていくことが期待されている。実態としては、英語の授業に対する学生からのニーズは乏しいものの、ESD（持続可能な開発のための教育）が地球規模での実践的な学際的交流を求めるものであることから、大学院に開設された ESD サブコースの授業科目のうち、「ESD 研究 1・2 (ESD study1・2)」は、英語で実施された。

本研究科の教員 5 名（太田和宏、津田英二、清野美恵子、稲原美苗、松岡広路）のコーディネートの下、毎回、履修生が英語でショートスピーチを行い、英語でグループディスカッションを行う、という形式である。一切日本語は使われない。履修生は 8 名で、うち中国人留学生 1 名、バングラデシュ人留学生 1 名であった。今年度は、中国からの客員教授にご参加いただいた。教員・院生共に試行錯誤であることは変わらないが、参加した留学生からは「自分の専門意義の討議を日本で行う喜びがあった」「国際舞台での発表を意識することができた」などを、日本人学生からは「英語でのコミュニケーションの面白さを体感できた」などの感想も得た。

夜間ということもあってか、履修院生数は少なく、とりわけ、日本人学生の履修が少なかった。次年度は、本学カリキュラムでの定着化をめざして、全学的に本授業の存在をアピールし、履修院生の拡大とともに、英語による授業の大切さを広めていくつもりである。

(人間発達専攻 ESD 研究担当 松岡広路)

## 5. 教育

### 5.1. 教育課程

#### 5.1.1. 今年度の特徴

令和元年度に新たに開始した取り組みや、本年度特記すべき事項などは以下のとおりである。

(1) ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーの見直し

本研究科のディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーが神戸大学のディプロ

マ・ポリシーと整合性があるかどうか確認作業を進め、必要箇所について修正を施した。  
(教務委員会委員長 岸本吉弘)

### 5.1.2. 研究科，専攻共通科目

#### (1) 人間発達総合研究 I

人間発達総合研究 I-1, I-2は前期課程の共通科目として、人間発達専攻の学生が学問領域を超えた問題意識を共有することを目的としており、専攻内における研究テーマの広がりや視点の多様性を俯瞰できる内容となっている。人間発達総合研究 I および人間発達関連研究の運営を充実させるため、人間発達専攻各系講座から1名ずつ、計4名での共通科目運営委員会が組織されている。前年度の運営委員会の振り返りや受講生のアンケートをもとに、本年度の運営委員会で授業内容の改善に取り組み、受講生の声を反映させた科目運営を行った。

(人間発達総合研究主担当 木村哲也)

#### (2) 人間発達総合研究 II

令和元年度の人間発達総合研究II は、例年通り、人間発達専攻に在籍する博士課程1年次生の博士論文構想発表会として実施した。開催日は、令和元年7月12日であり、会場は大会議室であった。参加院生は、司会などを分担して担当し、各自発表スライド・資料を提示しつつ、30分の発表（質疑込み）を行った。なお、資料などは事前に神戸大学LMSのBEEFで共有した。発表会においては、院生相互の質疑なども活発であり、博士論文作成の出発点として有意義な機会を提供できたと考えられる。以下には、当日の発表課題11件を示す。

- ・ 知的障害のある成人男性の性の権利と差別構造
- ・ 国際スポーツ大会開催によるスポーツエコシステムの形成過程に関する研究
- ・ 勝田守一の教育学における「教育と政治」の位置付けに関する研究
- ・ 社会における発達障害概念とは何か：発達障害者に対する態度に関する検討
- ・ 芸術家の創造的退行に関する臨床心理学的研究
- ・ 教員養成系学部におけるアーギュメントを小学校理科授業に導入する指導能力の育成
- ・ 明治・大正・昭和期の起伏をめぐる言説空間と「近代」の構築
- ・ ヒンデミットの音楽観
- ・ 多文化影響下における青島市民音楽活動
- ・ 昭和期の衣服における「日本的なるもの」のゆらぎ
- ・ 聴覚障害児者の読み方が文章理解に与える影響

(人間発達総合研究主担当 稲垣成哲)

#### (3) 人間発達関連研究

人間発達関連研究は、人間発達専攻の前期課程の学生がみずからの修士論文の構想をポスタ

一発表し、互いの研究領域の問題を学び、切磋琢磨することを目的としている。今年度も、12月13日にポスター発表がなされ、人間発達専攻所属教員も交えた活発な議論が行われた。

(人間発達関連研究主担当 木村哲也)

#### (4) 人間環境学関連研究

人間環境学専攻の多様な専門性を活かすべく、この授業は学生の研究プレゼンテーションに基づく多分野間の学際的な対話を行うことを目的としている。今年度は4教育研究分野44名の学生が、それぞれプレゼンテーションとコメント・ファシリテーションの役割を分担して相互に意見を交わし、さらに全員がプレゼンテーションに対する評価基準を自ら設定しながら各プレゼンテーションを評価した。その上で、担当教員が各プレゼンテーションとコメント・ファシリテーション、および毎回のフロアでの発言および評価レポートを評価した。これら多分野間の議論・意見交換と相互評価を通じ、自らの研究に対する異分野からの評価による気づきや自明視していた前提の再検討の契機を得るとともに、修士論文に向けた自らの研究の深化をはかることができた。

(人間環境学関連研究主担当 田畑智博)

#### (5) ヒューマン・コミュニティ創成研究

本年度は、さまざまな領域での研究を志す院生が参加して、知を横断する対話の創出に力点を置き、哲学対話の意味や進め方を実践的に学ぶ授業を展開した。コーディネーターは稲原美苗准教授と津田英二教授が務めた。また、神戸大学附属中等教育学校との連携を育て、中川雅道教諭の助言を得るなどした。

(ヒューマン・コミュニティ創成研究主担当 津田英二)

### 5.1.3. 教職教育

#### (1) 教育実習

教育実習の履修者(単位認定者)数は、幼稚園0(0)、小学校1(1)、中等教育11(11)、特別支援学校11(11)であった。

令和2年2月20日に附属校園との実習反省会を行い、令和元年度の実習に関する反省事項や次年度以降に向けての課題について意見交換を行った。

#### (2) 教員免許取得状況

本年度の教員免許実取得人数は一種免許状が108名、専修免許状が23名であった。

#### (3) 教職実践演習

本年度の「教職実践演習(幼・小)」は10月4日から1月24日の間に15回開講し、幼稚園、小学校、特別支援学校の現任教員及び本学部卒若手教員による授業を行った。

(教務委員会委員長 岸本吉弘)

#### 5.1.4. 博物館学芸員資格

博物館学芸員資格専門委員会は、発達科学部の4年生と国際人間科学部の2、3年生、ならびに大学院博士課程前期課程学生の学芸員養成課程における博物館実習の運営と、履修を終えた3年生以上に単位認定を行った。これらの活動に関連して、3回の委員会（4月、12月、2月）を開催した。

##### 1) 令和元年度博物館実習説明会と各実習の実施

① 全体事前指導（4月12日）：昼休みを利用して、2、3年生を対象とした博物館実習全体のカリキュラムについての説明会を、鶴甲第1キャンパスと鶴甲第2キャンパスの2か所で、同時開催した。

② 見学実習（夏期）：合同見学（6月15日）を板倉史明准教授が担当した。西宮市大谷記念美術館で開催された「生誕120年 山沢栄子 私の現代」展を履修生全員で見学し、展覧会担当の学芸員より説明を受けた。自由見学では、各自任意の博物館・美術館・科学館等を選び、開催されている常設展と企画展を観覧したうえで展示方法に着目した見学実習を実施することとした。いずれもレポート提出を課した（10月4日締め切り）。

③ 学内施設「あーち」における実務実習（1回）：

前期（9月24～28日、10月1～3日）：学内施設「あーち」において、例年通り、津田英二教授の指導の下、講師に脇谷紘氏（版画家・舞台芸術家）を招き、社会福祉法人たんばと連携して、空間アートの展示・解説を行った。今年度の空間アートのテーマは「FLOWER」であった。（履修者数4名）

④ 館園実習：5月中旬から9月下旬にかけて、4年生が3館園、3年生が8館園、大学院博士課程前期課程2年生が1館園にて実習に参加した。神戸市立青少年科学館、兵庫県立美術館、明石市立文化博物館（各2名）、大阪市立美術館、神戸市立森林植物園、神戸市立須磨海浜水族館、華僑歴史博物館、京都市考古資料館、竹中大工道具館（各1名）で指導を受けた。

⑤ 全体・館園事後指導ならびに館園実習前事前指導（12月6日）：一昨年度来実施している通り、今年度も3年生以上を対象とした全体・館園事後指導と、2年生以上を対象とした館園実習前事前指導を合同で開催した。事後指導対象の実習生が学外での博物館・美術館における館園実習の体験談や問題意識を口頭報告した。次年度に館園実習に赴く下級生が事前指導の一つとして聴いた。この報告会における質疑応答も含めて、事後指導履修生は博物館実習全体の総括を行った。事前指導履修生には別途、学外実習先の説明ならびに館園実習に向けての諸注意を行った。

2) 平成30・令和元年度の博物館実習単位認定：博物館実習単位は2年間をかけて取得する。3年生8名、4年生3名、大学院前期課程2年生1名、計5名に対して博物館実習の単位認定を行った。

### 3) 国際人間科学部の学芸員養成課程におけるプログラムの実施

一昨年来、発達科学部と国際文化学部との統合により開設された国際人間科学部における、学芸員養成課程の統合・改編を進めた結果、今年度で委員会活動が軌道に乗り、円滑に行われた。

### 4) 今後の課題

国際人間科学部では、グローバルスタディプログラム(GSP)における海外留学と博物館実習との時期的なバッティングが懸念される。また、博物館学芸員資格取得を希望する学生が、掲示板の見落としによる履修登録や実習参加の機会を逃す事例が増えてきた。そのため今年度は課題を従来よりも厳しく課した。より効果的な対応策を検討する必要がある。

(博物館学芸員資格専門委員会委員長 白杉直子)

### 5.1.5. ESD サブコース

ESD (Education for Sustainable Development=持続可能な開発のための教育) をテーマとするこのコースは、学部を超えた領域横断型のコースとして、2008年度より開講されている。2015年度より授業運営を担うESD 教育部会(部会長:清野未恵子)は、国際教養教育院に設置されたが、中核となっているのは、人間発達環境学研究科である。全学に配置されている同コース運営委員会の委員長は、松岡広路(人間環境学専攻教授)となっている。また、実務的には、松岡のほか、総合コーディネーターの鴨谷真(学術研究員)や清野未恵子(人間発達専攻准教授)が、神戸大学の新しい教育モデル「ESD コース」の運営に当たっている。

今年度は、「ESD 基礎 A・B」「ESD 論 A・B」「ESD ボランティア論」「ESD 生涯学習論 A・B」および「ESD 演習 I・II」を実施した。全学のESD 関係教員の協力を得て、アクティヴ・ラーニングやフィールドワークを中心とした授業を行っている。それらの基幹にあるのは、本研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターが実務を担当する「ESD スタディツアープログラム」である。阪神間の20以上のESD 関係の団体に活動を提供してもらい、そこに学生が参加し気づきを持ち帰り、共有することで、ESD の世界の実像に触れることが意図されている。ESD 基礎科目群と各学部で開講されている関連科目を履修したのち、ESD 演習で学びの総合化・交流を行う、という学びの流れをもつESD コースは、新しいサービス・ラーニング(学校と社会サービスの連結した学習スタイル)のモデルにもなりえるであろう。

参加部局が全部局に広がり、全学部参加のコースとして本格的に動き始めている。本コースの運営の母体であるヒューマン・コミュニティ創成研究センターの役割は大きく、SDGs に貢献する教育的活動でもある。全学にその存在感を示すことが期待されている。

(人間発達専攻 松岡広路)

### 5.1.6. ゲストスピーカー及びティーチング・アシスタント

#### (1) ゲストスピーカー

令和元年度は7万円（1件につき1万円）の予算配分のもとで、前期5件、後期1件の計6件が実施された。提出された実施報告書の点検を通じて、受講学生、招聘講師、担当教員のいずれからも良好な評価が得られており、高い教育効果を生んでいることが確認できた。

#### (2) ティーチング・アシスタント

優秀な大学院学生及び学部学生に対し、教育的配慮のもと教育補助業務を行わせ、学部教育におけるきめ細かい指導の実現や学生に将来教員・研究者等の職に就くためのトレーニングの機会を提供し、これに対する手当支給により、学生の処遇の改善の一助とするためにティーチング・アシスタント制度を設けている。学部学生をスチューデント・アシスタント（SA—時給920円）、大学院前期課程学生をティーチング・アシスタント（TA—時給1200円）、同後期課程学生をシニア・ティーチング・アシスタント（STA—時給1500円）とし、従事可能な業務内容につき差別化を行ったうえで任用した後期課程学生をTAとして任用することも可能—時給1400円）。実施報告書（学生用・教員用）からは、担当教員・学生のどちらからも高い評価を得ていることが確認できた。

平成29年度から発達科学部と国際人間科学部で同時開講の科目に関するティーチング・アシスタントは国際人間科学部の予算でまかなわれている。そのため、人間発達環境学研究所・発達科学部における令和元年度の予算配分は約45万円（445,166円）であり、昨年度比で25.18%であった。任用学生数は以下のとおりである。

前期 SA 0名 TA 6名 STA 0名 計 6名

後期 SA 0名 TA 8名 STA 0名 計 8名

（教務委員会委員長 岸本吉弘）

## 5.2. 各学科等の教育

### 5.2.1. 人間形成学科

#### (1) 運営

人間形成学科は、心理発達論コース、子ども発達論コース、教育科学論コース、学校教育論コースの4つのコースから構成されている。日常的な運営は、主にコース単位で実施しているコース会議ないしはコース主任による学科運営会議で行っている。学科全体の予算、教育、入試等の議案やコース間の役割分担等については、学科長とコース主任による学科運営会議において適宜連絡・協議し、調整を図りながら運営した。しかしながら、新学部設置以降は、これらの主要な業務は、新学部の側に移行している。2019年度は、最終年度の4年生が在籍したのみであった。

## (2) 予算

予算は大学院の各専攻講座に配分されている。よって、学部学科独自の予算はない。大学院と学部のコースが対応しているところでは、一括して予算執行されている。ただし、大学院との対応がない学校教育論コースについては、子ども発達論コースと教育科学論コースを構成する教員組織への予算配分から共通経費を捻出し、共同の運営としている。その他、実験・実習経費を得ている。なお、学科共通経費は計上していない。

## (3) 入学試験

すべての入試が国際人間科学部に移行している。

## (4) 教育

各コースにおいて、在籍したのは、原則4年生だけであった。学科としての特記事項としては、教員の授業改善の試みとして、ゲストスピーカーなどの招聘を行い、講義内容に実践的な側面を付加させた。

なお、コース別の特記事項は以下の通りであった。

**心理発達論コース**：昨年同様に、学びが書物の上だけになってしまわないように、各種の実験、実習を行い、実践的な側面からも学びが充実したものになるよう心がけた。加えて、実験・実験を伴う授業を中心に、TAを配置し、教育の質向上を目指した。一例として「心理検査法1」「心理検査法2」において、実施した検査の分析、解釈を含むレポート執筆のメンターとして、TAが受講生を支援した他、「心理統計法」において、一斉指導時において理解ができない学生に対する個別支援に従事してもらった。また、外部でのボランティアなども推奨し、学びが社会とのつながりの中で体験され、実感されることを目指した。その他、幅広い見識を得るために、心理・教育の現場で活躍する人材を、ゲストスピーカーとして招聘した。例えば、「教育発達心理学」において、元神戸市立小学校校長に「幼稚園・小学校における教育相談のあり方」について、神戸市スクールカウンセラーの方に「スクールカウンセラーの仕事」について、「人間関係発達論」において、前大阪府ソーシャルワーカーの方に「児童相談所の児童福祉司からみた家族病理の実際と介入」について、「発達障害心理学2」において、エコールK0BE学園長に「知的障害のある青年と学び」について、それぞれお話しいただいた。

**子ども発達論コース**：子どもをめぐる諸問題を、社会の形成者一員として当事者意識をもってとらえ、個々の範疇でその解決に向けて行動できる力量を形成するために、学際的実践的な教育・研究を目指した。そのため、「日本と香港の乳幼児教育」「ヨーロッパ・ベルギーの子育て支援」「アメリカ・ワシントン州における保育の質の維持・向上システム」「ノルウェーの乳幼児教育」「イギリスの初等教育と子ども・家族支援」「ラオスの初等教育制度」など海外の来訪研究者等による講話、大学院生・学部生との共同授業や共同フィールドワーク、附属お

よび地域の幼稚園・小学校における授業の実施を積極的に行った。

**教育科学論コース**：例年通り、卒業研究において副査制度を導入し、卒業研究の質の保証に取り組んできた。また、コース内で、教員・大学院生との共同で、『教育科学論集』の発行を行ってきている。これらの試みは、所属学生の卒業研究への取り組みに対して、効果的な影響を与えている。その他、教育基礎研究道場やゲストスピーカー制度とタイアップして講演会を開催し、例えば、「発達理論とProcessology」「障がいのある子ども・青年の権利保障のあゆみと運動」「兵庫県下における臨床発達心理士による発達相談・発達支援の具体と事例」「高校生・若者パネル調査からの示唆」「マラウィの教育」「イギリスの初等教育と子ども・家族支援」「アダプティブ・ラーニングにおける教育コンテンツの効果的な活用」「サイエンスコミュニケーションの未来」「ICT技術を応用した身体化デザインの成果と課題」等、教育や人間発達に関わる特定の課題や地域についての関心と知見を深める機会を提供した。その他、各ゼミあるいはゼミ合同によって多数の合宿研修（南あわじ市等）がなされており、教員・学生の教育研究の交流が行われた。特記すべきことでは、本コースでは、学術研究への参加も奨励しており、本年度は、国内ばかりではなく、ボローニャで開催されたESERA2019、バルセロナで開催されたCHI Play2019という国際会議等で3名の学生が査読付きポスター発表をしている。

**学校教育学コース**：幼稚園・小学校の教員としての資質及び実践力形成とともに、広い視野での教養と研究的問題解決力の形成を目指した。4年生では、特に卒業研究指導が重要であり、6月7日（金）には「卒業論文構想発表会」、10月11日（金）には（教育科学論教員ゼミ所属の学生につき）「卒業論文中間発表会」、2月14日（金）には「卒業論文発表会」をそれぞれ開催し、各自の研究内容への批判的検討と学生間の研究交流を図った。また、国際人間科学部子ども教育学科と共催で、10月に西はりま天文台にて合宿研修を実施した。

（人間形成学科長 稲垣成哲）

## 5.2.2. 人間行動学科

### （1）運営及び入学試験

2017年4月に国際人間科学部が設立され、発達科学部の募集は停止されているため、人間行動学科の在籍生は4年生のみである。健康発達論コース（教員4名）、行動発達論コース（教員6名）、身体行動論コース（教員7名）によって、それぞれのコースの運営にあたった。日常的な運営は基本的にコース単位で行い、コース間の役割分担等については、学科長とコース主任によって適宜連絡・協議した。

### （2）予算

予算は大学院の各専攻・系講座に配分されており、学部独自の予算はない。学部学生当経費の扱いに関しては各コースの指導学生数に応じて配分した。コースによって各教員への配分の仕方に違いがあるが、概ね、4年次学生分は指導学生数に応じて配分した。

### (3) 入学試験

すべての入試が国際人間科学部に移行している。

### (4) 教育

各学年における学生指導は、4年生のみであり、ゼミ教員が中心となって指導にあっている。学生の教育研究活動が円滑かつ効果的に進むよう、学科として下記の行事を実施した。

|        |                 |
|--------|-----------------|
| 9月 下旬  | 卒業研究中間発表会（コース別） |
| 2月 12日 | 行動発達論コース卒業研究発表会 |
| 2月 12日 | 身体行動論コース卒業研究発表会 |
| 2月 13日 | 健康発達論コース卒業研究発表会 |

#### ○卒業研究指導

履修コースにより卒業研究指導のスケジュールが若干異なるが、最も多数の学生が所属する身体行動論コースでは、5月に卒業研究届を提出したのち、9月末頃に中間発表会にて口頭発表、12月25日に卒業論文をコース内提出した。主査（指導教員）と副査により、翌年1月中旬に口頭試問を実施・審査した。口頭試問等で指摘された箇所を加筆・修正した後、1月31日に教務学生係へ提出した。その後、2月に開催した卒業研究発表会で口頭発表し、教員が最終合否判定を行った。他の2コースでも、ほぼ同様の手順での卒業研究指導が行われた。

（人間行動学科長 河辺章子）

## 5.2.3. 人間表現学科

### (1) 運営

人間表現学科（発達科学部）は人間発達専攻表現系（人間発達環境学研究科）の構成員と同一のため、学科に関する意思決定は、構成員全員による学科／系講座会議に適宜メール審議を加えて、予算、入試、教務、学生に関わる案件を審議・決定した。なお、人間表現学科は1学科1コース（人間表現論コース）であるため、学科長がコース主任を兼務しているが、3コース制（表現創造論、表現文化論、臨床・感性表現論）の過年度生に対応するため、別に3名のコース主任も置いている。

### (2) 予算

当学科の予算は大学院人間発達専攻表現系として措置され、年度初めに一定の共通経費を確保し、学部分については等分、博士課程前期課程と同後期課程については主指導担当学生数に応じて比例配分している。学科共通経費は複写・印刷代、教育機器の修理、整備等に充てた。

### (3) 入学試験

すべての入試が国際人間科学部に移行している。

#### (4) 教育

##### 1) 指導体制

本年度の4年生が、標準修業年限での発達科学部最後の学年となる。人間表現学科では、卒業研究に向けて3年次にゼミ配属を行い、学科共通科目とゼミによって継続的な指導態勢をとっているが、4年生にとって本年度は、これまでの蓄積を卒業論文として具体化する年であった。

学部改組にともなう時間割の複雑化を受けて、平成30年度以降に発達科学部生(3, 4年生)を対象にコース単位でより丁寧な履修指導を行うことが確認され、当学科(=コース)においても、ゼミ単位での確認作業を複数回行い、学科レベルでの情報共有をはかった。その結果、さまざまな事情による過年度生のうち、すでにゼミ配属が決定している者はゼミ担当教員が、休学等によりゼミ配属に到っていない者は学科長が担当することとした。

##### 2) 卒業研究指導

令和2年2月7日開催の「卒業研究審査会」において全部41題の卒業論文発表が行われ、他ゼミの教員・学生参加のもと、活発な質疑口頭と意見交換が行われた。評価については、審査会出席教員の見解をふまえて各指導教員が行う。

##### 3) 学術 WEEKS

- ・音楽文化のトランスボーダーvol.5 青野原収容所不慮の記憶を辿る(10月31日、大田美佐子ゼミ)
- ・即興演奏を考える(2月9日、谷正人ゼミ)

##### 4) ゲストスピーカー

- ・コミュニティ音楽療法概論, 沼田里衣(音楽療法論1, 岡崎香奈, 5月30日)
- ・コミュニティ音楽療法ワークショップ, 沼田里衣(音楽療法論演習, 岡崎香奈, 10月31日)
- ・言葉から身体表現〜リリカルダンス〜, 花岡麻里名(ダンサー/ミュージカル女優)(身体表現論, 関典子, 4月22日)
- ・マイム・レクチャー・ワークショップ, いいむろなおき(演出家/マイム俳優), (舞踊表現, 関典子, 11月5, 12日)
- ・音楽でない音の美学—チンドン屋の響きとサウンドスタディーズの動向, 阿部万理江(ボストン大学准教授), (卒業研究・特別研究合同, 大田美佐子, 4月19日)
- ・時代の音を聴くということ: その着眼点と研究法, 斎藤桂(京都市立芸術大学准教授)(卒業研究・特別研究合同, 大田美佐子, 6月14日)
- ・On the Town 制作の視点から, 古谷靖人(兵庫県立芸術文化センターオペラプロデューサー)(卒業研究・特別研究合同, 大田美佐子, 11月15日)

- ・イランの伝統楽器タールとイラン音楽の旋法理論（音楽民族学，谷正人，2月8日）
- ・インドの伝統楽器タブラとインド音楽のリズム理論（音楽民族学，谷正人，2月8日）

#### 5) その他

F棟改修工事で新設された「ギャラリー虹」や「アクティブラーニング・ルーム」では、絵画ゼミ（岸本吉弘教授）を中心に学生の学修成果発表が行われており、教育効果をあげている。

#### (5) 広報

ホームカミングデイにおいて、発達科学部人間表現学科および国際人間科学部発達コミュニティ学科の表現系学生有志によるスタジオ・パフォーマンスが、主体的に企画・実施された。また、「アートプロジェクト実践1, 2」「ミュージックプロジェクト実践1, 2」の授業発表において「サイトスペシフィック」をキーワードとしたインスタレーションやオブジェの展示、パフォーマンスや音楽の演奏などを、オープンキャンパス時に開催し、来場した高校生から好評を得た。

その他、国際人間科学部におけるオープンキャンパスにおいては、来場高校生ならびに保護者からの質問に対して、発達科学部生が国際人間科学部生と協力して活躍した。

（人間表現学科長 梅宮弘光）

### 5.2.4. 人間環境学科

#### (1) 運営

学科に関する意思決定は、例年どおり、人間環境学科運営会議において行った。本運営会議は、国際人間科学部環境共生学科長と4コースの主任の計5名から構成される。今年度は14回開催し、予算配分、入試、教務等に関わる重要案件を審議・決定した。国際人間科学部の環境共生学科の運営についても、同メンバーで審議した。

#### (2) 予算

各コースの学生の所属人数に応じて、配分した。コース1名配属の特命助教人件費専攻負担分を考慮して、予算を配分した。

#### (3) 入学試験

すべての入試が国際人間科学部に移行している。

#### (4) 教育

今年度は4年生および過年度生についての教育を担った。今年度のコース別配属人数は、4年生の学生の内訳は、自然環境論コース：35名、数理情報環境論コース：19名、生活環境論コース：32名、社会環境論コース：34名、全120名である。この学生たちの卒業研究

教育は、主に所属する研究室の指導教員、そして履修についての指導は所属するコース主任や科目担当教員が全体で取り組んだ。

(人間環境学科長 近江戸伸子)

### 5.2.5. 発達支援論コース

#### (1) すべての学科からの編入生による「プロジェクトと連動したコース」

本コースは、人間発達環境学研究科及び発達科学部における「実践性」を特徴とした研究と社会貢献を展開するヒューマン・コミュニティ創成研究センター（以下、「HCセンター」と略）の多様なプロジェクトと連動している。また、本コースの大きな特徴は、4つの学科の学生が、3年生になる時に編入することで成り立つという点である。編入した学生は、主に、「社会教育・サービスラーニング支援部門」「インクルーシヴ社会支援部門」「ジェンダー・コミュニティ支援部門」「自然共生地域支援部門」が取り組んでいる実践的研究に関わりながら、地域・行政・企業・NPOとの協働のあり方を実際に学んだり、現代的課題を解決する研究の原理と方法を修得したりできる。

学生が携わることのできる各部門の主な研究プロジェクトは次の通りである：HCセンターのサテライト施設である「のびやかスペースあーち」における社会的実践、ESDプラットフォームWILL事業、大船渡ESDプロジェクト（震災復興支援）、ESD推進拠点の創造（「RCE兵庫-神戸」の実質化）プロジェクト、「哲学対話（哲学カフェ）」プロジェクト、イノシシ調査プロジェクト、自然共生社会づくり（篠山市）プロジェクトなど。

#### (2) 2019年度のふりかえり

2019年度で終了するため編入生はなく、学士課程の学生は4年生10名のみである。ちなみに、発達支援論コースと直接つながっている大学院（人間発達専攻学び系）在籍者は、博士課程前期課程12名、同課程1年制履修コース5名、博士課程後期課程5名である。

本コースは、2年生まで所属していた学科・コースのカリキュラム（3年生以降）に束縛されることなく、学生自らの研究テーマに応じて自由に履修科目を選択する（学習プログラムを作り上げる）ことができるという特徴もある。学生の問題意識・関心と最新の学問的 이슈が交差するように、教員と学生が共同して学習プログラムを作成する。学生にとっては「自らの学習過程を自ら創造する」という体験を通して、学習支援の本質を理解することとなる。卒業論文・修士論文・博士論文は、そのような学習と研究の集約である。これら論文の具体的な研究テーマは、ウェブページ「発達支援論コース 卒業論文発表会／人間発達専攻 発達支援 修士論文発表会 [2019年度] (<http://www.h.kobeu.ac.jp/ja/node/5000>) を参照されたい。

2019年度学部卒業生（4年生）の進路は、人数が少なかったが、国家公務員、地方公務員、人材育成関連企業、学校教員、民間企業などで、博士課程（前期）修了者は、博士課程後期課程進学、地方公務員、特別支援学校教員、民間企業などとなっている。発達科学部・人間発達環境学研究科の全体的な傾向同様、本コースの卒業生・修了生も、多様な社会領域に進出している。学部・領域横断的かつ実践主義的な本コースで学んできた彼らに

は、現実社会の輻輳した問題を解決に導くヒューマンキャピタル（人的資本）・ソーシャルキャピタル（社会関係資本）を、より豊かにしていく実践者として、各領域において活躍してもらうことを期待している。

### (3) 改組によって消える発達支援論コース 「発展的解消！」

2019年度をもって10数年以上にわたる発達支援論コースの幕が下りる。多様な専門性を実践レベルで総合化することを目標に掲げた本コースの教育実践は、多分に実験的であった。文理融合型学習、アクションリサーチへの正統的周辺参加、フィールドワーク学習、ボランティア学習、ネットワーク学習、交流・共同学習などの学習理論を実践仮説としながら、新しい教育モデルの構想をめざしてきた。多様な関心や専門性をもつ学生が集い、実践をとおして互いにより深いコミュニケーションをとりながら学び合う場の教育効果は、これまでの専門特化したコースとは異なる意義をもつものと確認することができた。SDGs（持続可能な開発目標）を追求し、持続可能な社会（SD）を実現するような人材は、多様な領域や利害関係の調整を行える人間であることが望ましい。いわば、マネジメントへの深い理解と実践的な力量を備えていなければならない。それは、労働だけではなく、市民活動の場面においても発揮されることが期待される。こうした社会生活の多様な場面のなかで活躍する卒業生を大勢見て取れることは、本コースの成果ということができるであろう。NPOや福祉関係の法人を立ち上げたり、ボランティア団体で中核的な役割を担っていたり、あるいは、起業をしている卒業生は、他のコースと比較して、その割合はかなり高いのではないか。多様な社会問題を総合的に解決するような人材を少なからず輩出できたとの自負がある。

2017年度からの学部の統合・改組のなかで、学部の規模が拡大し、全学科からの編入のスタイルを取る体制が整えにくいこともあり、今年度を最後に発達支援論コースは消滅する。しかし、若いうちから専門性を研ぎ澄ますことと多様性のなかで力を発揮することを尊重する教育プログラムは、新学部のなかでも息づくことであろう。たとえば、発達コミュニティ学科では、5つのプログラムが互いの壁を低くし、学生が主体的に異なる専門プログラムを往来することができるような仕組みが創られた。あるいは、全学のESDサブコースに所属することで、複数の教育プログラムを経験できる仕組みも整備されつつある。発達支援論コースのエッセンスは、新しい学部だけではなく、全学の教育プログラムに影響を与え、いわゆる「神戸大学モデル」として今後も残るのではないだろうか。

発達支援論コースは、所属教員だけで運営されてきたわけではない。他コースの先生が副指導教育になる仕組みもあった。それゆえ、多くの先生方の支えの中で運営されてきたとあってよい。また、フィールド学習などでは、HCセンター部門研究員（外部の研究者や実践者）にもご協力いただいた。こうした方々のおかげで本コースは成り立ってきた。この場を借りて御礼申し上げる。発達支援論コースは消滅するも、異なる形でその思い・理想は引き継がれることになる。今後ともご協力いただけるよう、改めてお願いする次第である。

（発達支援論コース主任 松岡広路）

### 5.3. 各専攻講座の教育

#### 5.3.1. 人間発達専攻

##### (1) 運営

各教員は、4つの系講座（こころ系、表現系、からだ系、学び系）に所属している。専攻の運営は、基本的に、この各系講座を中心に行われている。運営にあたっては、専攻長と各系講座の主任により構成された人間発達専攻運営会議を組織し、月1回の定例会議のほか、適宜臨時の会議やメール審議により、専攻に関わる重要案件（人事、予算、入試、共通科目運営、共通備品運用等）に関わる審議等を行った。今年度は、特に採用人事における人事選考委員会の構成などについての議論と入試改革に関する議論が中心であった。

##### (2) 予算

予算は、専攻に配分されたものを従来通り各系講座に振り分けた。共通経費は設定していないが、例年、大型プリンタ運用経費については、各系講座より予算の一部を拠出している。また、この大型プリンタの経費については、その用途が共通必修科目におけるポスター発表に集中しているため（共通必修以外の学会発表での使用も可）、専攻長が実験・実習等に要する経費を申請して、系講座の拠出金とともに対応している。本年度は表現系講座が運用担当であり、原則的に、利用者には無料で使用させている。なお、昨年度からは、大型プリンタの設置場所がF棟に固定されたので、毎年の移設設置の手間が大幅に削減されている。この大型プリンタについては、学会等におけるポスターセッションの拡大、アクティブラーニングの普及などの観点から、その運用・維持管理において研究科全体での体制に移行すべきであるとの意見が多いが、いまだに専攻内にとどまっている。

##### (3) 入学試験

博士課程前期課程入試については、学び系の一部の受験区分において応募者が極端に少なく、また、合格辞退者も頻出し、結果的には2次募集をすることになった。定員確保問題は、昨年からのわかに大きな課題となってきたといえる。合格辞退の理由は、他大学院への合格などであり、近隣の有力大学大学院との併願が多いのも一つの理由に挙げられる。来年度以降の博士課程前期課程入試については、入試体制に変更があるものの、本専攻の体制はそれほど大きく変わるものではないので、広報活動等の継続的な強化が喫緊の課題である。一方、博士課程後期課程については、確実に定員を充足することができている。なお、からだ系では、本年度より、前期課程入学試験の内容を、それまでの専門科目2科目選択（筆記試験）から、専門科目（筆記試験）1科目とプレゼンテーションによる口述試験に変更した。

##### (4) 教育

共通必修科目として、人間発達総合研究I/II、及び人間発達相関研究が設定されている。人間発達総合研究Iは、専攻内における多様な研究関心とテーマの広がりや修得できる内容であるが、ここ数年、受講生の評価がいまひとつ低調であり、近い将来の専攻再編によ

るカリキュラムの改善が期待される場所である。一方、修士論文の構想発表の場である人間発達相関研究では、例年通り、ポスター発表がなされ、活発な議論が行われた。この科目については、受講生からの評価が極めて良好である。さらに、博士論文の構想発表会を兼ねる人間発達総合研究IIでは、口頭発表によって、それぞれの博士論文構想並びにその進捗状況が発表され、極めて充実したものとなっている。この科目についても、博士課程後期課程の院生からの評価は高いものとなっている。大学院生への教育は、修士論文・博士論文の作成を大きな目標として、関連講義科目を学修しつつ、研究を進めていくことが中心であり、指導はそれぞれの主指導教員や副指導教員（複数指導体制）がその役割を担っている。博士課程前期課程から学会発表（博士課程後期課程では国際学会での発表を奨励）や学術誌への投稿を勧めており、一定の成果が認められている。

以下、各系講座における特色を列挙する。

### ●こころ系講座

主要な教育面での活動は以下の通りである。

#### 1) 学生の国際学会発表

- ・ 王一然, 加藤佳子, Examination of the Factor Structure of Self-Regulation Scale for Healthy Lifestyle in University Students 77th Annual Conference International Council of Psychologists
- ・ Tanigichi, A. (2019). Reliability and validity of the Japanese version of Developmental Disorder Stigma Scale. ISSID2019, 7月30日

#### 2) 学生の国内学会発表

- ・ 呉文慧 (2019) 特別支援教育における「ニーズ概念」に関する文献レビュー 日本特別ニーズ教育学会第25回研究大会
- ・ 呉文慧 (2019) 特別支援教育における「ニーズ概念」の再考: 「非認知ニーズ」の可能性 心理科学研究会秋集会
- ・ 呉文慧・郭旭坤・金丸彰寿・挽本優・前岡良汰・大塚真由子・赤木和重 (2019) インクルーシブ時代の「転籍」に関する定量研究: 小学校通常学級在籍児童の「転籍率」の定義と算出方法の提案 日本特殊教育学会第57回大会
- ・ 金丸彰寿・呉文慧・郭旭坤・挽本優・前岡良汰・大塚真由子・赤木和重 (2019) インクルーシブ時代の「転籍」に関する定量研究 (2): 1968-2018年における小学校通常学級在籍児童の「転籍率」の歴史的変遷 日本特殊教育学会第57回大会
- ・ 赤木和重・郭旭坤・挽本優・前岡良汰・呉文慧・金丸彰寿・大塚真由子 (2019) 小学校時期における「転籍」に関する定量研究 (3): 1968-2013年における小学校通常学級の「在籍率」の推移 日本特殊教育学会第57回大会
- ・ 周雄正傑・古谷真樹 (2019). 自動思考が主観的幸福感および寝つきに及ぼす影響 日本健康心理学会第32回大会

### 3) ゲストスピーカーの招聘

- ・協定校のエトベシユローランド大学のProfessor Adrien Pigniczkiné Rigó を招聘 (Erasmus+ Staff Mobility for teaching/10月15日から11月3日) , Introduction to (clinical) health psychology とChronotype (morningness - eveningness) and health のワークショップを行った。

財源：Erasmus+のファンド

- ・ゲスト：松本博雄准教授（香川大学）

5月12日の大学院ゼミで「英語で論文を書く」というテーマで話題提供いただいた。そのうえで、院生とディスカッションを行った。ほかのゼミの大学院生（博士課程後期課程）も参加し、活発な議論を行った。

### 4) 学術講演の開催

- ・2019年7月24日（水）山田剛史氏（岡山大学）「信頼区間，効果量，メタ分析 ～標本分布，標準誤差を基礎として」

## ●表現系講座

大学院教育においては、学生の学位論文指導を軸にしながら、その周辺に関連する学術情報・知的活動を配置することに努力している。その内容は、学会発表に加え、学内・外における多様な機関や表現実践との連携に当系の特徴がある。以下に今年度の事例のうちから代表的なものをあげる。

#### 1) 学生の査読付き論文

炭谷将史，保育所園庭の傾斜付砂場が園児に与える遊びの機会，生態心理学研究 12(1)，3-13，（2020）.

#### 2) 学生の学会発表：

- ・高屋安優美，サテライトオフィス創設による「ワーカーの健康度」「まちの活性度」に関する研究 徳島県神山町におけるヒアリング調査について，日本建築学会大会梗概集，2019年9月5日，金沢工業大学
- ・李雅心，青島における伝統音楽の伝承と発展の現状，2019年度神戸大学・北京大学・復旦大学主催 フォーラム「人文と社会 学際的視野からの東アジア研究」（2019年11月8日）

#### 3) 学生の作品発表（個展・グループ展等）

- ・川原百合恵，川原百合恵 絵画展（ギャラリー白（大阪），7月1日～6日）
- ・川原百合恵，Room N 振る舞いの色彩（But not for me（京都）9月7日～28日）
- ・荒井凜，石田絵里香，辻本静香，林一真，平出大，古垣あずみ，松本菊世（岸本ゼミ），

七つの徹窟（ギャラリー虹（鶴甲第二キャンパスF棟内）10月25日～12月20日）

4) 学術 WEEKS :

- ・音楽文化のトランスボーダーvol.5 青野原収容所不慮の記憶を辿る(大田ゼミ)
- ・即興演奏を考える (谷ゼミ)

5) ゲストスピーカー

- ・On the Town as performance, Carol J. Oja (Harvard 大学教授) (音楽文化史特論 I-2, 大田美佐子, 7月29日)
- ・フルクサスの音楽 詩的な記譜, Luciana Galiano (音楽学者) (音楽文化史特論演習 2, 大田美佐子, 12月9日)
- ・Language as Inspiration, Katrin von Maltzahn (感性研究特論 1, 野中哲士, 4月24日)

6) 学生の受賞

- ・森重美千香, 宇野美桜 (ピティナピアノコンペティション 2019, 2台ピアノ部門上級 全国大会ベスト賞, 一般社団法人 全日本ピアノ指導者協会ピティナ, 8月22日)
- ・森重美千香, 宇野美桜 (第20回大阪国際音楽コンクール ピアノ連弾部門第2位・2台ピアノ部門第3位, 大阪国際音楽コンクール実行委員会, 10月9日)

7) インターン等 :

- ・竹中工務店技術研究所 (高屋安優美)
- ・国立国際美術館 (川原百合恵)

●からだ系講座

からだ系講座は自然科学から人文・社会科学分野までの多岐にわたる学問分野を含んでいるので、これらの学際的観点から解析する方法や枠組みを習得し、課題解決のための柔軟な思考能力や洞察力を涵養することを目的に、大学院生それぞれの分野の学会やセミナーでの発表することのみならず、学内での各種発表会・研究会などの実質的な計画・準備・運営に参画し、積極的参加を行わせている。また、系講座の教員が携わっている「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト」「や「マスターズ甲子園」などの活動に積極的にかかわり、プロジェクト運営を補助する役割を十分に担っている。

研究指導においては、各指導教員の熱心な指導の下、多数の大学院生が国内外の学会や研究会等で研究発表を行い、積極的な研究活動を展開している。そのリストの一部を以下に示した。

《学会発表》(発表題目・共同研究者は省略)

【前期課程学生】

1) 国際学会

- Kumazawa, Y. 24th Annual Congress of the European College of Sports Science, Prague, Czech Republic, 2019.
- Tatara, K. 24th Annual Congress of the European College of Sports Science, Prague, Czech Republic, 2019.
- Deto, T. 26th TAFISA World Congress Tokyo 2019
- 任昱霖 東北アジア体育・スポーツ史学会第13回大会, 台東大学 (中国), 2019.
- Fujiwara, M. 2019 International conference on environmental ergonomics (Amsterdam)
- Miura, K. 26th TAFISA World Congress Tokyo 2019
- Yaegashi, M. 24th Annual Congress of the European College of Sports Science, Prague, Czech Republic, 2019.
- Yamashita, K. 26th TAFISA World Congress Tokyo 2019

## 2) 国内学会

- 岩井勇樹 (2019) 日本機械学会シンポジウム：スポーツ工学・ヒューマンダイナミクス 2019 (福岡工業大学)
- 安芸祐作 (2019) 日本機械学会シンポジウム：スポーツ工学・ヒューマンダイナミクス 2019 (福岡工業大学)
- 安芸祐作 (2019) 兵庫体育・スポーツ科学学会第30回大会 (親和女子大学)
- 乾順紀 (2019) 日本生涯スポーツ学会第21回大会 (北翔大学, ポスター発表賞 大学院生部門優秀賞)
- 岩井勇樹 (2019) 日本陸上競技学会第18回大会 (大阪国際大学)
- 岩井勇樹 (2019) 兵庫体育・スポーツ科学学会第30回大会 (親和女子大学)
- 折戸友哉 (2019) 日本陸上競技学会第18回大会 (大阪国際大学)
- 折戸友哉 (2019) 兵庫体育・スポーツ科学学会第30回大会 (親和女子大学)
- 出戸寿明 (2019) 日本生涯スポーツ学会第21回大会 (北翔大学, ポスター発表賞 大学院生部門優秀賞)
- 藤原雅志 (2019) 第74回 日本体力医学会大会 (筑波大学)
- 藤原雅志 (2019) 第33回 運動と体温の研究会 (筑波大学)
- 三浦敬太 (2019) 日本生涯スポーツ学会第21回大会 (北翔大学, ポスター発表賞 大学院生部門優秀賞)
- 山下耕平 (2019) 日本生涯スポーツ学会第21回大会 (北翔大学, ポスター発表賞 大学院生部門優秀賞)

### 【後期課程学生】

## 3) 国際学会

- Aoyama, M. World Congress of Sociology of Sport 2019
- Aoyama, M. 26th TAFISA World Congress Tokyo 2019
- Matsumura, Y. 26th TAFISA World Congress Tokyo 2019

- ・ Matsuzaki, J. 26th TAFISA World Congress Tokyo 2019 (Best Student Paper Award 受賞)

#### 4) 国内学会

- ・ 青山将己 (2019) 日本生涯スポーツ学会第 21 回大会 (北翔大学, ポスター発表賞  
大学院生部門優秀賞)
- ・ 松崎淳 (2019) 兵庫体育・スポーツ科学学会第 30 回大会 (親和女子大学)
- ・ 松崎淳 (2019) 日本生涯スポーツ学会第 21 回大会 (北翔大学, ポスター発表賞  
大学院生部門優秀賞)
- ・ 松村雄樹 (2019) 日本生涯スポーツ学会第 21 回大会 (北翔大学, ポスター発表賞  
大学院生部門優秀賞)
- ・ 山本健太 (2019) 第 57 回日本特殊教育学会 (広島大学)
- ・ 山本健太 (2019) 第 83 回日本心理学会 (立命館大学)

#### ● 学び系講座

学び系講座の教育科学関連では、2013 年以来「教育基礎研究道場」特別講義シリーズを開講してきており、関係教員、特別講師、参加院生における協同体制で、それぞれの当該専門分野の最新の知見について議論してきている。2019 年度は、計 19 件の特別講義を実施した。内容は、「教育行政学」「地域教育学」「比較教育学」「教育方法学」「教育工学」「科学教育学」「博物館学」「理科教育学」等、多岐に渡っており、その概要は、研究科 HP に掲載されている (<http://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/5743>)。また、国際インターンとして、2 名の院生をフランスの国際学校小学部に長期派遣している。

一方、子ども発達関連では、教育連携推進室と共同で、発達科学部人間形成学科の学生、国際人間科学部子ども教育学科の学生と一緒に、子どもの発達、教育、並びに学習について、グローバルな視点から学習会を開催した。本年度実施した主なテーマは、「日本と香港の乳幼児教育」、「ヨーロッパ・ベルギーの子育て支援」、「アメリカ・ワシントン州における保育の質の維持・向上システム」、「ノルウェーの乳幼児教育」、「イギリスの初等教育と子ども・家族支援」、「ラオスの初等教育制度」など海外の来訪研究者等による講話を実施し、それぞれでディスカッションの場を設定し、それぞれの理解を深めることができた。加えて、環太平洋乳幼児教育学会 (PECERA) へ院生 3 名を派遣し、シンポジウムや発表の討論、学校訪問などを通じて、専門的な力量を高めることができた。

学生の学術的活動の主要なものを以下に示しているが、学会誌・研究科紀要への論文投稿・掲載、学会発表等として成果が表れている。今年度は、台風、感染症拡大等の影響が大きかったためか、学術 WEEKS や学内での研究会発表を活用した院生の活躍に関する報告は比較的少なかった。こうした経験を院生が着実に積むことができるような計画・設計が求められる。

#### 1) 査読付き論文

- ・佐野孝, 國土将平, 近藤亮介, 上田恵子, 川勝佐希, 小学生における開脚跳び動作の熟達度の評価とそれに合わせた指導観点の検討, 発育発達研究, 84, 11-22, 2019
- ・萩原大河, 金山千広, 國土将平, インクルーシブ体育における指導体制と授業実践に対する教師の評価 : A 県における小学校の通常学級担任および特別支援学級担任の意識をもとに, アダブテッド・スポーツ科学 17(1), 3-13, 2019
- ・中橋葵, 岡部恭幸 幼児期の豊かな数感覚につながる経験と保育者の援助を考える:— 5 歳児の概念的さび退陣具の実態分析を通して—, 保育学研究 57 (1) , 6-16, 2019
- ・江藤真生子・嘉数健悟 (2019) 「体育科教師教育研究の動向と課題について : Tinning の理論的方向性による研究の分類から」『体育科教育学研究』第 35 卷, 第 2 号, 1-16.
- ・江藤真生子 (2019) 「小学校体育授業の指導観の変容に関する事例研究 : 養成段階の学生を対象とした教科の指導法に関する講義に着目して」『日本教科教育学会誌』第 42 卷, 第 3 号, 83-94.
- ・江藤真生子 (印刷中) 「小学校教師志望学生の体育授業の言葉かけに関する事例研究 : 教育実習における体育授業を対象として」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 13 卷, 第 2 号.
- ・大山正博・新友一郎 「合意形成後の社会を体験させる『継続的社会構成学習』の提唱— 『貿易ゲーム』のルール改変後の社会をプレイさせる授業を通じて—」『社会科教育研究』No. 138, 日本社会科教育学会, pp. 39-50, 2019 年 12 月。
- ・星川佳加 「『仲間づくり』における集団に関する一考察 : 小西健二郎『学級革命』に焦点をあてて」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 13 卷第 1 号, 2019 年 9 月, pp. 1-10.
- ・松本圭朗 「勝田守一における生活指導概念の史的展開に関する一考察— 『生活指導と教育課程との統一』をめぐって—」日本教育方法学会編『教育方法学研究』第 45 号, 2020 年 3 月発行予定。

## 2) 査読なし論文

- ・青木良太ら (2019) 里山環境保全教育コンテンツ「里山管理ゲーム」『日本科学教育学会研究会研究報告』, 34(3), 237-240
- ・高橋あおい・山口悦司・小川義和・稲垣成哲 (2019) 「国立科学博物館における幼年期を対象とした展示室「親と子のたんけんひろばコンパス」」『日本科学教育学会研究会研究報告』34 (3), 135-138.
- ・都倉さゆり・山口悦司・久光克樹・俣野源晃・山本智・坂本美紀 (2020) 「科学技術の社会問題を取り上げた小学生向け教育プログラムの評価 (4) : 提案型意思決定能力に着目して」『日本科学教育学会研究会研究報告』34 (5), 61-64.
- ・西口啓太・渡邊隆信 「学校における「特別の教科 道徳」の教科書分析— 「内容項目」との関連を中心に—」神戸大学大学院人間発達環境学研究科・教育科学論コース編『教育科学論集』第 23 号, 2020, 1-7.

- ・星川佳加「戸田唯巳の教育実践に関する証言（その1）：元教え子Yさんへのインタビュー記録」『研究論叢』第25号，2019年6月，39-45。
- ・星川佳加「保育者養成校における民舞『荒馬』に関する研究：領域『表現』の指導及び教育方法論との関連に着目して」『創発：大阪健康福祉短期大学紀要』第19巻，2020年3月，印刷中。

### 3) 国際会議等発表

- ・Tokura, S., Yamaguchi, E., Sakamoto, M., Yamamoto, T., Inagaki, S., Wakabayashi, K., & Matano, M. (2019). Development and evaluation of dialogue-videos for socioscientific issues based learning in elementary schools. In J. Theo Bastiaens (Ed.), *Proceedings of EdMedia + Innovate Learning 2019* (pp. 1216-1221). Amsterdam, Netherlands.
- ・Tokura, S., Yamaguchi, E., Sakamoto, M., Yamamoto, T., Inagaki, S., Wakabayashi, K., & Matano, M. (2019, August). Investigating perspective-taking on socioscientific issues among Japanese primary school students. Poster presented at the 13th conference of European Science Education Research Association (ESERA), Bologna, Italy.
- ・Ueda K, Kokudo S, Standardization of foot growth curves for Japanese children aged 18-78 months, SSHB 2019, Oxford Brookes University, 9-11 September 2019
- ・Ueda K, Kokudo S, Devkota B, Foot Growth Characteristics of Nepali Major Ethnic Groups Children Aged 5-16 Years, 24th Annual Congress of the European College of Sport Science, Prague, 3-6 July 2019
- ・Ueda K, Kokudo S, Seasonal Change of the Outdoor Play After School and Sleeping Habit During 2 Years in Japanese Preschool Children. The 20th PECERA International Conference, Taipei, 12-14 July 2019
- ・Nakahashi A, Okabe Y, Learning Conceptual Subitizing Spontaneously in Play: Tangible Examples of Young Children in Japan. The 20th PECERA International Conference, Taipei, 12-14 July 2019

### 4) 学会発表

- ・太田知実「現代米国における教員養成研究の今日的動向 —Cochran-Smith, M. (コ克蘭=スミス)らのレビューを手がかりに—」関西教育行政学会4月例会，2019年4月20日（於：京都大学）
- ・太田知実「近年の米国教員養成実践（制度）・研究の特質の再検討 —ナショナル・アイデンティティという観点から—」日本教育学会第78回大会（ラウンドテーブル（「現代米国教育改革におけるナショナル・アイデンティティの問題を問う」），2019年8月6日（於：学習院大学）

- ・太田知実「米国教員養成研究における“教員アイデンティティ”形成過程への着眼とその意味」日本教育行政学会第54回大会，2019年10月20日（於：埼玉大学）
- ・太田知実「青年期教育としての大学授業実践と授業担当者の自己形成」（パネルディスカッション「教育行政学における知的蓄積の継承と刷新—若手研究者による『教育行政学』講義実践の可能性—」）関西教育行政学会11月例会，2019年11月16日（於：滋賀大学）
- ・佐藤博志・植田みどり・貞広齋子・末富芳・高橋望・照屋翔大・西野倫世「学校管理職の専門性と育成システムに関する国際比較研究—アメリカ，イギリス，オーストラリア，ニュージーランド—」日本教育経営学会第59回大会，2019年6月9日（於：名古屋大学）
- ・菅慶子「『人間を選ぶ』判断力を育成する主権者教育の授業2—高等学校での授業実践を通じて—」2019年11月9日，全国社会科教育学会
- ・武貞隆之「判断力を育成する小学校社会科授業の開発—他者の意見を自らの意見に反映するスクエア型ワークシート」2019年11月9日，全国社会科教育学会
- ・馬場大樹「『制限時間』を意識した意思決定・合意形成学習の提案」2019年11月9日，全国社会科教育学会
- ・大山正博・新友一郎「意思決定・合意形成を行うゲーム型学習を繰り返し経験することによる学び—過去2年間に行った学習の子ども自身により振り返りを通じて—」2019年11月9日，全国社会科教育学会
- ・松山航平「歴史における対立の争点を顕在化させる学習の効果検討—『満蒙問題』を題材としたゲーム型学習を通じて—」2019年11月10日，全国社会科教育学会
- ・星川佳加「戸田唯巳の教育実践」全国作文教育研究大会第68回大会研究発表，2019年7月，於桐朋小学校
- ・星川佳加「戸田唯巳『学級というなかま』実践における生活指導：相違性・多様性の重視と『子どもの声をきく』こと」日本生活指導学会第37回大会自由研究発表，2019年9月，於大阪教育大学
- ・松本圭朗「勝田守一教育学における教育的価値の位置をめぐる試論—教育的価値と『教育に埋め込まれた政治』の関係に着目して—」神戸大学教育学会，2019年7月27日，於神戸大学。
- ・松本圭朗「勝田守一における生活指導概念の史的展開」日本教育方法学会第55回大会，2019年9月28日，於東海学園大学

##### 5) 書評

- ・太田知実「書評 佐久間亜紀『アメリカ教師教育史』『研究論叢（神戸大学教育学会）』第25号，pp. 57-60，2019年。
- ・西野倫世「藤村祐子著『米国公立学校教員評価制度に関する研究—教員評価制度の変遷と運用実態を中心に—』風間書房，2019年」『関西行財政研究（関西教育行政学会）』第47号，頁未定，2020年3月。

（人間発達専攻長 稲垣成哲）

### 5.3.2. 人間環境学専攻

#### (1) 運営

専攻に関する意思決定は、例年どおり、人間環境学専攻運営会議において行った。本運営会議は、専攻長と各コースの主任の計5名から構成される。今年度は、定例会議を13回開催し、予算配分、人事、入試、教務等に関わる重要案件を審議・決定した。なお、本専攻運営会議は同じメンバーで構成されるため、人間環境学科の運営会議、環境共生学科の運営会議と同時に開催している。

今年度は、若手教員を増やす学域方針に沿って、専攻としての人事方針を立てるための議論を重ねた。その結果として、助教採用人事の検討と選考を3件行った。2件は、2020年4月より採用が確定している。1件は学域会議において人事選考委員会の設置を認められ、現在、選考中である。

#### (2) 予算

各コースの学生の所属人数に応じて、配分した。

#### (3) 入学試験

前期ならびに後期課程入試とも2回行った。後期課程（博士）入試については、応募者が定員を上回った。一方、前期課程（修士）入試については、定員を充足することができなかった。次年度での適正化が、両方の課題である。前期入試II期および後期課程入試に関し、「受験生のプレゼンテーションに対し、主論文等審査委員と論文等審査委員が所見を述べ、各コースから口述試験委員が採点する」という方式を引き続き採用した。

#### (4) 教育

大学院生は修士論文・博士論文の作成を中心目標として勉学・研究を進めることから、彼らに対する指導はそれぞれの指導教員に負うところが大きい。博士課程前期課程に関して、専攻共通科目「人間環境学相関研究」を行っている。内容に関しては学生からの要望も聞き取り、検証、改良する必要がある。在学中の7名の大学院生が研究発表などにおいて受賞した(学生の受賞のページ参照)。

#### (5) 広報

修士課程受験検討者に対し、オープンラボの期間が設けられ、受験相談を行った。

#### (6) 学外研究者を招いての国際講演・シンポジウム等

・グローバルな視点で実践研究・教育の可能性を問う日本とインドネシアの交流プログラム

Asia Fieldwork Course

主催者：古川文美子

開催日：2020年1月16日～1月25日

主な参加者：インドネシア・ハサヌディン大学（教員1名，学生6名） 参加者 24名  
内容：日本とインドネシアの両国の学生，教員が共にグローバルな視野をもちつつ，自国の環境・社会特性を活かした共生社会システムを鑑みるためにも相互的な交流プログラムの継続が必要である。そこで，昨年に引き続き，ハサヌディン大学とともにシンポジウムで開催した。

・第7回 環境に資するゲノム・染色体情報の活用

Utility of Plant Genome and Chromosome Information for Environment（使用言語 英語）

主催者：近江戸伸子

開催日：2019年9月23日

主な参加者：University of Silesia, Institute of Experimental Botany, 鳥取大学, 千葉大学, 大阪大学など 参加者 61名

2名の国外からの講師ならびに2名の国内からの講師を招いて，国際シンポジウムを行った。世界の植物をめぐる植物染色体研究の最新技術開発，イネ科モデル植物の生態多様性研究の研究の推進を図った。

（人間環境学専攻長 近江戸伸子）

## 6. 進路

### 6.1. キャリア形成支援

#### 6.1.1. キャリアサポートセンター

人間発達環境学研究科キャリアサポートセンター（CSC）は，発達科学部の学部生と人間発達環境学研究科の大学院生を対象に，学生のキャリア形成を実践的にサポートする活動を行った。これらは，就職活動支援，キャリア形成支援，大学院進学支援の3つに大別される。以下，各支援活動に関し詳述する。

#### (1) 就職活動支援

例年通り，就職活動中の学生を対象に，下記の個別相談（カウンセリング）を行った。

- ・自己分析支援
- ・エントリーシート作成支援
- ・模擬面接
- ・就活・キャリアに関する相談
- ・大学院進学に関する相談

個別相談の総人数は691人であり，その内訳は，発達科学部：207人，人間発達環境学研究科：159人，国際人間科学部：299人，国際文化学部（院含む）2人，理学部（院含む）：2人，文学部（院含む）：6人，経済学部（院含む）：1人，経営学部（院含む）：1人，法学部（院含む）：7人，工学部（院含む）：6人，卒業生：1人，であった。

さらに，下記のセミナー・説明会を開催した。

- ・就職活動全般（就活スケジュール，自己PR，志望動機，業界・仕事研究，グループディス

カッション練習会等)

- ・教員採用試験対策（公立，私立）
- ・自治体教育委員会による説明会
- ・心理・福祉職に焦点を当てた公務員試験対策

セミナーの一覧は、次ページを参照されたい。セミナーの総数は105で、総参加人数は1,198人であった。参加人数の内訳は、発達科学部：173人，人間発達環境学研究科：92人，国際人間科学部：597人，国際文化学部（院含む）11人，農学部（院含む）：22人，理学部（院含む）：65人，文学部（院含む）：58人，経済学部（院含む）：46人，経営学部（院含む）：37人，法学部（院含む）：51人，工学部（院含む）：22人，海事科学部（院含む）：9人，医学部（院含む）：1人，国際協力研究科：4人，科学技術イノベーション研究科：9人，他大学：1人，であった。

上記に加え，今年度も，発達科学部・人間発達環境学研究科のOBOG訪問のアレンジ，大学推薦の求人票の案内，他大学の大学院募集情報の案内を行った。

また，昨年度と同様，「内定者獲得紹介システム」を運用した。本紹介システムは，CSCの仲介により，就職先の内定獲得あるいは合格を果たした発達科学部・人間発達環境学研究科に在学中の学生に対し，同じ就職先を志望する学生が直接会って，当該就職先に向けての就職活動に関する情報（例えば，具体的な採用選考内容）を得ることを目的とするものである。今年度は，先生方の強力な支援を得て，内定獲得者の登録人数を大幅に増やすことができた。具体的な実績値は以下の通りである。

- ・内定獲得者の登録人数：120（68）
- ・内定先（企業か官公庁等）の数：225（119）
- ・下級生（就活生）の登録人数：24（24）
- ・面談回数：39（35）

※括弧内の数字は昨年度の実績値。面談回数は申込ベース。

内定獲得者の登録人数および内定先数が大幅に増えたが，下級生の利用回数が増えていない。来年度は採用選考の早期化が一段と進む中で，より早い時点から内定獲得者の登録と本紹介システムの周知を行う必要がある。

## (2) キャリア形成支援

- ①前述の個別相談で個々の学生に対し，進路・キャリアに関するカウンセリングを継続的に実施した。
- ②キャリアアドバイザーの笹倉氏が，初年次セミナーなどでの講師を担当し，下記の学生を対象にCSCの紹介と共に，キャリア形成に関する話を行った。
  - ・発達科学部3年次編入生
  - ・人間発達環境学研究科M1生（CSCの紹介のみ）
  - ・外国人留学生（CSCの紹介のみ）

### (3) 大学院進学への支援

- ①当研究科の大学院入試のポスターを360部作成し、各大学のキャリアセンターを中心に郵送配布した。

【今年度開催したセミナー一覧】会場はすべて鶴甲第2キャンパス。

1. 4月10日(水) 教員採用試験対策「大阪府豊能地区採用選考試験説明会」
2. 4月10日(水) 教員採用試験対策「堺市教員採用選考試験説明会」
3. 4月12日(金) 教員採用試験対策「神戸市教育委員会説明会」
4. 4月15日(月) 教員採用試験対策「京都市教育委員会説明会」
5. 4月15日(月) 教員採用試験対策「大阪府教育委員会説明会」
6. 4月16日(火) 就職活動支援「就職活動スタートアップ講座(企業就職編)」
7. 4月16日(火) 教員採用試験対策「教員採用試験志願書相談会」
8. 4月17日(水) 教員採用試験対策「大阪市教育委員会説明会」
9. 4月17日(水) 就職活動支援「就職活動スタートアップ講座(企業就職編)」
10. 4月18日(木) 公務員試験対策「大阪府説明会 福祉専門職(社会福祉職, 心理職)」
11. 4月19日(金) 就職活動支援「就職活動スタートアップ講座(公務員就職編)」
12. 4月19日(金) 教員採用試験対策「教員採用試験志願書相談会」
13. 4月22日(月) 教員採用試験対策「私立教員(公立との違い)」
14. 4月23日(火) 就職活動支援「インターンシップ準備講座(参加方法と活用方法編)」
15. 4月24日(水) 就職活動支援「インターンシップ準備講座(参加方法と活用方法編)」
16. 4月25日(木) 教員採用試験対策「滋賀県教育委員会説明会」
17. 4月26日(金) 就職活動支援「インターンシップ準備講座(参加方法と活用方法編)」
18. 4月26日(金) 教員採用試験対策「和歌山県教育委員会説明会」
19. 5月7日(火) 教員採用試験対策「兵庫県教育委員会説明会」
20. 5月9日(木) 教員採用試験対策「京都府教育委員会説明会」
21. 5月10日(金) 教員採用試験対策「面接試験対策」
22. 5月13日(月) 就職活動支援「インターンシップ選考対策講座(書類応募編)」
23. 5月13日(月) 就職活動支援「インターンシップ選考対策講座(書類応募編)」
24. 5月13日(月) 就職活動支援「インターンシップ選考対策講座(書類応募編)」
25. 5月14日(火) 就職活動支援「インターンシップ選考対策講座(書類応募編)」
26. 5月14日(火) 就職活動支援「インターンシップ選考対策講座(書類応募編)」
27. 5月14日(火) 就職活動支援「インターンシップ選考対策講座(書類応募編)」
28. 5月16日(木) 教員採用試験対策「教育時事対策」
29. 5月17日(金) 教員採用試験対策「奈良県教育委員会説明会」
30. 5月20日(月) 教員採用試験対策「山口県教育委員会説明会」
31. 5月24日(金) 就職活動支援「自己分析・自己PR講座」
32. 5月24日(金) 就職活動支援「自己分析・自己PR講座」

33. 5月27日(月) 就職活動支援「インターンシップに向けた業界研究講座(基礎)」
34. 5月27日(月) 就職活動支援「インターンシップに向けた業界研究講座(詳細)」
35. 5月31日(金) 就職活動支援「インターンシップに向けた業界研究講座(基礎)」
36. 5月31日(金) 就職活動支援「インターンシップに向けた業界研究講座(詳細)」
37. 6月3日(月) 教員採用試験対策「面接試験ポイント」
38. 6月4日(火) 就職活動支援「インターンシップ選考対策講座」
39. 6月5日(水) 就職活動支援「インターンシップ選考対策講座」
40. 6月13日(木) 教員採用試験対策「面接試験ポイント」
41. 6月18日(火) 就職活動支援「グループディスカッション講座」
42. 6月19日(水) 就職活動支援「グループディスカッション講座」
43. 6月24日(月) 教員採用試験対策「面接試験ポイント(実践)」
44. 6月26日(水) 教員採用試験対策「面接試験ポイント(実践)」
45. 6月27日(木) 就職活動支援装力セミナー
46. 6月28日(金) 就職活動支援GD練習会#1
47. 7月1日(月) 教員採用滋賀県教師塾説明会※予約者ゼロのため開催中止
48. 7月4日(木) 就職活動支援GD練習会#2
49. 7月10日(水) 就職活動支援GD練習会#3
50. 7月11日(木) 教員採用面接試験ポイント(実践)
51. 7月12日(金) 教員採用面接試験ポイント(実践)
52. 7月22日(月) 就職活動支援GD練習会#4
53. 7月26日(金) キャリア教育国際人間科学部3年生限定プレミアムセミナー
54. 8月2日(金) キャリア教育国際人間科学部3年生限定プレミアムセミナー
55. 8月8日(木) 教員採用教員採用試験面接練習
56. 9月6日(金) 就職活動支援業界研究セミナー ～IT業界～
57. 10月8日(火) 教員採用私立教員への道
58. 10月9日(水) 就職活動支援後期スタートアップ講座
59. 10月9日(水) 就職活動支援業界研究セミナー ～専門商社～ (OB訪問会)
60. 10月9日(水) 就職活動支援業界研究セミナー ～専門商社～ (OB訪問会)
61. 10月21日(月) 就職活動支援自己分析・自己PR【完成】講座
62. 10月21日(月) 就職活動支援自己分析・自己PR【完成】講座
63. 10月28日(月) 就職活動支援”業界・企業研究【実践】講座  
3限：優良企業の見つけ方編
64. 10月28日(月) 就職活動支援業界・企業研究【実践】講座  
4限：「志望動機」の作り方編
65. 10月30日(水) 就職活動支援事業研究セミナー ～国際文化交流・博物館事業～
66. 11月1日(金) 就職活動支援業界・企業研究【実践】講座  
3限：“優良”企業の見つけ方編

67. 11月1日(金) 就職活動支援業界・企業研究【実践】講座  
4限:「志望動機」の作り方編
68. 11月6日(水) 就職活動支援国立大学職員として働く
69. 11月7日(木) 就職活動支援中止 GD 練習会①
70. 11月8日(金) 教員採用教員採用試験対策スタートガイダンス
71. 11月12日(火) 就職活動支援体育会系向けガイダンス
72. 11月13日(水) 就職活動支援体育会系向けガイダンス
73. 11月14日(木) 公務員家庭裁判所調査官の仕事
74. 11月15日(金) 教員採用教採合格者座談会
75. 11月15日(金) 就職活動支援業界研究セミナー  
～コンサルティング&クリエイティブ業界～ [概略]
76. 11月15日(金) 就職活動支援業界研究セミナー  
～コンサルティング&クリエイティブ業界～ [本編]
77. 11月18日(月) 教員採用神戸市教育委員会説明会
78. 11月19日(火) 就職活動支援 GD 練習会②
79. 11月20日(水) 就職活動支援働き始める前に知っておきたい!
80. 11月29日(金) 教員採用大阪府豊能地区教職員人事協議会説明会
81. 12月2日(月) 就職活動支援 GD 練習会③
82. 12月3日(火) 就職活動支援業界別対策講座(食品業界)
83. 12月3日(火) 就職活動支援業界別対策講座(食品業界)
84. 12月4日(水) 就職活動支援業界別対策講座(インフラ業界)
85. 12月4日(水) 就職活動支援業界別対策講座(インフラ業界)
86. 12月5日(木) 公務員心理・福祉系公務員, 家庭調査官を目指そう
87. 12月6日(金) 就職活動支援事業研究セミナー ～国際文化交流～
88. 12月12日(木) 就職活動支援私立学校で教える
89. 12月16日(月) 就職活動支援自己PRアップデートとES対策講座
90. 12月17日(火) 就職活動支援ビジネスマナーチェック講座 3限
91. 12月17日(火) 就職活動支援ビジネスマナーチェック講座 4限
92. 12月18日(水) 就職活動支援 GD 練習会④
93. 12月19日(月) 就職活動支援自己PRアップデートとES対策講座
94. 1月8日(水) 就職活動支援面接対策講座(企業就職編)
95. 1月9日(木) 就職活動支援 GD 練習会⑤
96. 1月10日(金) 就職活動支援面接対策講座(企業就職編) お昼休み
97. 1月16日(木) 就職活動支援私立学校教員を目指すために  
～私立と公立の違いを知る～
98. 1月20日(月) 就職活動支援就活総まとめ講座 3限
99. 1月20日(月) 就職活動支援就活総まとめ講座 4限

- 100. 1月21日(火) 就職活動支援GD練習会⑥
- 101. 1月22日(水) 就職活動支援面接&プレゼン講座(予約制) お昼休み
- 102. 1月22日(水) 就職活動支援面接&プレゼン講座(予約制) 3限
- 103. 2月3日(月) 就職活動支援GD練習会⑦
- 104. 2月21日(金) 就職活動支援GD練習会⑧
- 105. 2月21日(金) 教員採用面接対策

(キャリアサポートセンター運営委員会委員長 澤宗則)

### 6.1.2. 学振特別研究員申請支援

学生委員会の主催の「学振特別研究員への応募のススメ」と題したセミナーを平成31年4月2日(火)に開催した。

まずは、青木茂樹研究科長より特別研究員制度の概要についての説明、ついで佐藤春実教授から審査委員経験を踏まえた申請書作成などに関するアドバイスがなされた。その後、人間発達環境学研究科で採用されている特別研究員2名(DC1 およびDC2)による採用に至る経験談や申請や審査に関わる留意点などの紹介がなされた。また、本学学術研究推進室の寺本特命准教授と城谷特命講師から4月23日開催の「特別研究員申請書の書き方セミナー」および5月16日開催の「特別研究員申請書ワークショップ」について紹介がなされた。説明会には約20名の学生が参加した。参加者から、申請書の書き方やヒアリング時の自己PRの方法に関して活発な質疑応答が行われた。また、本セミナーで紹介のあった「申請書の書き方セミナー」および「申請書ワークショップ」にはそれぞれ12名、4名ほどの参加者があった。なお、令和2年度特別研究員DC採用者は、新規で2名(DC1が1名、DC2が1名)で、うち1名はセミナー・ワークショップ参加者であった。

#### ○「学振特別研究員への応募のススメ」

・日時:4月2日(火) 14時15分～16時15分 ・場所:発達科学部 大会議室

14:15 - 14:20 開会の辞 (学生委員長 丑丸敦史)

プログラムの説明と講師紹介 (学生委員長 丑丸敦史)

14:20 - 15:45 特別研究員制度の概要と本研究科の現状 (研究科長 青木茂樹 教授)

審査・選考の実際-審査経験者の立場から (佐藤春実 教授)

(質疑応答)

申請の実際-応募者の立場から(1) (人間発達専攻こころ系講座)

申請の実際-応募者の立場から(2) (人間環境学専攻自然環境論コース)

(質疑応答)

URAの支援による「特別研究員申請書の書き方セミナー」の案内

15:45 閉会の辞

(学生委員会委員長 丑丸敦史)

## 6.2. 卒業・修了後の進路

令和元年度の発達科学部卒業生の就職状況はほぼ例年通りであり、概ね良好であった。博士課程前期課程修了生も企業や公務員への就職者数や進学者数はほぼ例年通りであった。博士課程後期課程は学部や博士課程前期課程と異なり、公募による就職が主となるため年度毎に様相が異なるが、令和元年度の就職内定者が2名であった。なお、進路状況、産業別就職者数、大学院進学者数などの詳細は『資料編』に記載した。

(学生委員会委員長 丑丸敦史)

## 7. 研究

### 7.1. 今年度の特長

#### 7.1.1. 研究動向

##### (1) 本研究科教員の研究活動

本研究科における過去6年間の研究活動の実績は、下表のとおり、概ね順調に推移してきている。2019年度の活動(KUIDをもとに調査)は、「論文」319、「著書」53、「研究発表等」440であり、昨年度と比較し、著書数の減少が若干目立つものの、論文や研究発表等の数は昨年度並みと言える。

|       | 平成26年度 | 平成27年度 | 平成28年度 | 平成29年度 | 平成30年度 | 2019年度 |
|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 論文    | 328    | 311    | 371    | 396    | 310    | 319    |
| 著書数   | 83     | 75     | 73     | 67     | 79     | 53     |
| 研究発表等 | 488    | 419    | 547    | 432    | 474    | 440    |

##### (2) 研究科ミッションの実現に向けた共同研究への支援

本研究科では、研究科のミッションの実現に向けた研究の推進・発展を図ることを目的として、「研究推進支援経費」を継続的に設定してきた。

すなわち、複雑・重層化する国内外の社会的課題を克服し、多世代・多様な人々の安全・安心で豊かな生活(well-being)を実現するためには、課題解決の基盤となるコミュニティにおける社会関係資本(社会的ネットワークにおける人間関係や信頼関係、社会的結束力)の構築や持続可能な環境共生社会の形成が急務である。このことを踏まえ、「研究推進支援経費」は、人間発達環境学研究科がこれまで蓄積してきた研究教育活動の成果を活かした先端的かつ独創的な研究(人間発達環境学研究科の機能強化に資する研究)をより一層推進することを目的として、領域横断的型プロジェクト研究や文理融合型プロジェクト研究、国際共同研究に重点配分するとともに、若手教員による積極的な申請を奨励した。2019年度に研究推進委員会にて選定した共同研究は、以下のとおりである。

- ① 研究課題：次世代の環境共生社会を担う子どもの環境共生リテラシーの発達に関する国際共同研究

研究代表者：山口 悦司  
共同研究者：坂本 美紀  
決 定 額：700 千円

② 研究課題：社会的許容可能性を背景とした環境共生社会におけるリスクコミュニケーションに関する検討

研究代表者：村山 留美子  
共同研究者：伊藤 真之，稲垣 美苗，清野 美恵子  
決 定 額：740 千円

(人間発達環境学研究科長・発達科学部長 青木茂樹)

### 7.1.2. 学生の受賞

令和元年度における大学院生の受賞は以下の通りである。

1) 受賞者：Jun Matsuzaki (松崎淳，人間発達専攻博士課程後期課程)

受賞名：TAFISA BEST STUDENT PAPER AWARD, The 26th TAFISA World Congress

受賞対象：Formation Process of Inter-Organizational Network on World Masters Games 2021 Kansai: Focusing on Pre-Event Phase

受賞年月：令和元年11月13日

受賞理由：卓越した国際的研究としての評価

2) 受賞者：後藤聡美 (人間発達専攻博士課程前期課程)

受賞名：日本福祉教育・ボランティア学習学会第20回研究大会 大会発表賞受賞

受賞日：令和元年11月24日

受賞理由：本賞は、大会ごとに会員および選考委員の投票によって特に優れたものとされた研究発表に贈られるものである。本研究発表は、これまでの学習論に新しい観点を加えるものと評されたため

3) 受賞者：森重美千香，宇野美桜 (いずれも博士課程前期課程人間発達専攻)

受賞名：ピティナピアノコンペティション 2019 2台ピアノ部門上級 全国大会ベスト賞

受賞日：令和元年 8 月 22 日

4) 受賞者：森重美千香，宇野美桜 (いずれも博士課程前期課程人間発達専攻)

受賞名：第 20 回大阪国際音楽コンクール ピアノ連弾部門第 2 位

受賞日：令和元年 10 月 9 日

5) 受賞者：森重美千香，宇野美桜 (いずれも博士課程前期課程人間発達専攻)

受賞名：第20回大阪国際音楽コンクール 2台ピアノ部門第3位

受賞日：令和元年10月9日

6) 受賞者：出戸寿明（人間発達専攻博士課程前期課程）、松村雄樹（同後期課程）、青山将己（同後期課程）、松崎淳（同後期課程）、乾順紀（同前期課程）、山下耕平（同前期課程）、三浦敬太（同前期課程）

受賞名：日本生涯スポーツ学会第21回大会（ポスター発表賞大学院生部門優秀賞）

受賞対象：国際生涯スポーツイベントの開催準備期における大会関連事業のプロセス評価  
ーワールドマスターズゲームズ2021 関西の開催地に着目してー

受賞日：令和元年8月25日

受賞理由：発表の独自性と論理性の評価

7) 受賞者：山元優美子（人間環境学専攻博士課程前期課程）

受賞名：優秀ポスター賞

受賞対象：「テラヘルツ分光法および低波数ラマン分光法によるポリエチレンテレフタレート及びポリブチレンテレフタレートの分子間相互作用と高次構造の研究」

受賞年月：令和元年5月31日

受賞理由：第68回高分子学会年次大会ポスター発表での発表が優秀であると評価されたため。

8) 受賞者：那須達郎（人間環境学専攻博士課程前期課程）

受賞名：優秀ポスター賞

受賞対象：「低波数ラマン分光法による高吸水性ポリマーの水との相互作用」

受賞年月：令和元年8月2日

受賞理由：日本分析化学会 第13回近畿支部夏季セミナー ぶんせき秘帖 巻ノ拾参におけるポスター発表が優秀であると評価されたため。

9) 受賞者：那須達郎（人間環境学専攻博士課程前期課程）

受賞名：優秀賞

受賞対象：「低波数ラマン分光法を用いた高吸水性樹脂に閉じ込められた水の構造」

受賞年月：令和元年12月19日

受賞理由：神戸大学 研究基盤センター 若手フロンティア研究会におけるポスター発表が優秀であると評価されたため。

10) 受賞者：速水花奈（人間環境学専攻博士課程前期課程）

受賞名：第2回環境DNA学会神戸大会ポスター賞優秀賞

受賞対象：ポスター発表「ダム湖における魚類環境DNAの鉛直分布」

受賞日：令和元年11月3日

受賞理由：上記のポスター発表が優秀であると評価されたため

11) 受賞者：嶋田仁（人間環境学専攻博士課程前期課程）

受賞名：第10回イオン液体討論会 優秀ポスター賞

受賞対象：ポスター発表「トリブチルアルキルホスホニウムカチオンを内包したセミクラスレートハイドレートの物理化学特性」

受賞日：令和元年11月22日

受賞理由：上記のポスター発表が優秀であると評価されたため

12) 受賞者：嶋田仁（人間環境学専攻博士課程前期課程）

受賞名：若手フロンティア研究会2019 機器分析部門賞

受賞対象：ポスター発表「セミクラスレートハイドレートの低波数ラマン領域における振動モードと結晶構造の対比」

受賞日：令和元年12月19日

受賞理由：上記のポスター発表が優秀であると評価されたため

13) 受賞者：嶋田仁（人間環境学専攻博士課程前期課程）

受賞名：第29回日本MRS年次大会 奨励賞

受賞対象：口頭発表「Phase Equilibrium Behavior of Bromide Semiclathrate Hydrates with Different Alkyl Chains of Phosphonium Cations」

受賞日：令和2年1月20日

受賞理由：上記の口頭発表が優秀であると評価されたため

14) 受賞者：高松優子（人間環境学専攻博士課程前期課程）

受賞名：日本調理科学会近畿支部第45回研究発表会 若手優秀発表賞

受賞対象：口頭発表「圧力センサを用いた嚥下動作の簡易計測法」

受賞日：令和元年12月1日

受賞理由：上記の口頭発表が優秀であると評価されたため

(学生委員会委員長 丑丸敦史)

## 7.2. 学術 WEEKS

学術 WEEKS は、平成 20 年より大学院 GP（正課外活動の充実による大学院教育の実質化）を契機とし、本研究科の国際交流推進の一環として実施されている。学術 WEEKS2019 にあっても、これまでの基本方針を継承し、国内外の学術交流活動を通して、大学院生・学部学生の視野を広げ、研究会の企画・運営・発表などの技能習得に資することを目的とした。また、多様な研究領域を擁する本研究科の特色を生かし、教員・大学院生・学部学生をまじえた領域横断的な学術交流の場を提供するものである。例年同様、本年度も多く

の企画の応募があり、11 企画が採択された。今年度の特別な事情として、学術 WEEKS 中に警報発令のために実施が中止または延期になったプロジェクトが複数あった。昨今の気候変動が学術 WEEKS にも影響を与えたことになる。そのような中ではあったが、保育・教育、特別支援教育、芸術、に関するグローバルな視点での企画も実施された。各企画では教員、院生及び学部生が立案、準備、運営を自主的に行い、外部の専門家を交えて専門性を深化させる一方で、よりグローバルな視点で物事を考えることができる良い機会となった。日ごろは専門分野に特化して研究を行う研究者や院生が異なる視点に立つ研究に接することで、自らの研究活動を相対化し、さらに異分野との協同や融合の可能性に対する気づきを持つ機会となったと評価できる。

(学術 WEEKSW2019WG 主査 鳥居深雪)

### 7.2.1 学術 WEEKS の各事業・セミナー

(1) 「アメリカ・ワシントン州における保育の質の維持・向上システム」講演会・トークセッション・情報交換会

【日程】9月4日(水) 14:00~17:00, (17:00~情報交換会) 【参加者】約50名

【概要】学術 WEEKS 企画で、教育連携推進室と乳幼児教育学研究室の共同企画による、「アメリカ・ワシントン州における保育の質の維持・向上システム」講演会・トークセッション・情報交換会を実施した。

講演会は、ワシントン大学 (University of Washington) の研究機関「Cultivate Learning (学習開拓)」シニア・ディレクターのシモンズ先生が「ワシントン州における保育の質の評価、維持・向上システムについて」と題して行った。

続いてのトークセッションでは、「アメリカと日本のエカーズを活用した質評価の実際とこれから」について、ワシントン大学のシモンズ先生、同志社女子大学の埋橋玲子先生、元ローハンプトン大学の麓浩子先生、ひかり幼稚園主事の平林祥先生(ひかり幼稚園主事)が活発な議論を行った。コーディネーターは北野が務めた。会の後、情報交換会も行った。

本研究科の学生と、各地の行政関係者、園長、保育学研究者が、教育の質の維持・向上システムについて学び、活発な意見交換を行った。乳幼児教育の無償化や義務教育化が各国で進んでおり、乳幼児教育の質を維持・向上するためのシステムづくりについて熱心な議論が進められ、時機にあった実り多い会となった。なお、本企画については、雑誌「遊育」の2019年9月号の記事となっている。

(人間発達専攻 北野幸子)

(2) ESD に関わる実践者・研究者の普段着の集い 第4回 ESD 実践研究集会「続・大研究 SDGs」

【日程】9月22日(日), 23日(月祝) 【参加者】200名

【概要】本研究科において「第4回 ESD 実践研究集会」が開催された。関西圏を中心とした ESD (持続可能な開発のための教育) や SDGs (持続可能な開発目標) に関心のある研究者・実践者・活動家・一般市民・学生、のべ200名が集い、講演・カフェワークショップ・

分科会・総合討議のなかで、「続・SDGs 大研究！」をテーマとして議論を行った。主催は、本研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターとESD推進ネットひょうご神戸(国連大学RCE認証組織)である。

本学の院生は、本集会の全体運営に携わっただけではなく、ESDカフェの企画運営、ポスターセッションや自由研究発表セッションでの発表、分科会でのシンポジストとしての登壇など、多様な役割をこなした。参加した院生は約15名、学部学生は20名程度であった。参加者は、国際舞台や最先端の活動をしている人たちとの交流の中で、みずからの学びのベクトルを再設定したり再確認したりすることができたようである。「すごい人たちと出会えた」という、ある院生の言葉が印象に残っている。今後も、ESD実践や研究の発展の場というだけではなく、学生たちの学びの具体化の場面として本集会を企図し継続していく予定である。

なお、本研究集会は、『ESD実践研究2019』(2019年3月、HCセンター)に特集としてまとめられている。

(人間発達専攻 松岡広路, 清野未恵子, 人間環境学専攻 伊藤真之)

(3) 地域におけるグローバル化と多文化共生におけるグローバル化と多文化共生 —受け入れ国と送り出しの家族・子ども教育—

【日程】10月12日(土) 13:00~16:00 開催予定。大型台風接近のため中止。

【概要】日本家政学会家族関係学部会第39回家族関係学セミナーの一環として企画されたシンポジウムである。例年、家族関係学部会会員以外にも公開している。

2019年4月施行された改正出入国管理法を背景に、加速する日本のグローバル化に伴う外国をルーツとした人々の家族・子ども・教育における諸問題を取り上げ、日本の地域社会における多様性の尊重と多文化共生の可能性を模索することを課題とした。上野加代子氏(東京女子大学)による「移民社会と児童虐待問題—日本で子育てをすること—」、志岐良子氏(NPO法人神戸定住外国人支援センター)による「外国にルーツを持つ子どもと保護者への神戸での実践と課題」、上野顕子氏(金城学院大学)による「外国につながるのある子どもたちと家庭科教育」の報告を受け、フロアからの質疑応答を経て、本テーマに関する理解を深める予定であった。企画・準備等、順調に進められていたが、超大型台風の接近の影響から本シンポジウムを中止とした。

(人間発達専攻 中谷奈津子)

(4) 発展途上国における教育の質を向上させる初等教育の取組み～学校環境・学校保健活動の観点から～

【日程】11月3日(日祝) 13:30~15:30 【参加者】教員8名, 大学院生6名, 学部生11名

【概要】開発途上国であるネパール, ラオス, ミャンマー, スリランカにおける子どもの健康問題と学校生活のその取り組みの紹介, 成功例, 課題を共有した。発表は友川幸氏(信州大学)よりラオスにおけるエコヘルス教育, 中野貴博氏(名古屋学院大学)よりミャンマー

における学校保健プロジェクト、佐川哲也氏（金沢大学）より、スリランカにおける学校保健と学校給食プログラム、國土将平（神戸大学）よりネパールにおける子供クラブを活用した学校保健活動の話題が提供された。なおラオス国立大学のワンタラ・ソウバンサイ氏よりラオスにおけるチャイルド・ヘルス・クラブの実践を発表予定であったが、日程変更のため、出席することができなかった。以上の開発途上国における初等教育における実践事例や課題の共有によって、「教育の質」を支える学校のあり方について複眼的な思考が深まった。また、文化や学校教育が子どもの健康や価値観にどのように関わっているのかを考える機会となった。

（人間発達専攻 國土将平）

(5) まともがゆれる：インクルーシブ社会の脱力的拡張

【日程】2020年2月8日（土）14:00～16:20 【参加者】約60名

【概要】NPO法人スウィング理事長の木ノ戸昌幸氏をお招きし、講演とディスカッションを行った。教育関係者、福祉関係者、学部生・院生など合計60名ほどが参加した。当日は、「親の年金でキャバクラ展」といったユニークな実践のお話を伺いながら、様々な人々が様々な形で参加できる社会のありかたについて、考え、対話する機会を持つことができた。それぞれのまともや常識をゆらされ、新たな研究の方向性を構想するきっかけとなった。

（人間発達専攻 赤木和重）

(6) 音楽文化のトランスボーダー Vol.5 青野原収容所俘虜の記憶を辿る

【日程】10月31日（木）

【参加者】50名（学生30名、外部者20名（研究者や音楽家、日奥交流関係者など））

【概要】講演 大津留厚（神戸大学名誉教授） 聴き手 大田美佐子（表現系講座・音楽学）  
演奏 セレーノ弦楽四重奏団 / 有馬圭亮  
演奏曲目 グリーク《ソルヴェイグの歌》/ F. シューベルト 《魔王》/ E.W. コルンゴルト ピアノと二代のヴァイオリンとチェロのための組曲より

表現系講座（音楽学）では、「音楽文化のトランスボーダーをめぐって」というテーマで、内外の音楽研究者、音楽家、俳優などとの対話を通して、音楽文化の多様な状況への理解を深めてきた。5回目の今回は、第1次世界大戦時に兵庫県青野原収容所にいた300人のオーストリア＝ハンガリー帝国の捕虜たちの物語である。大戦の最中、捕虜たちは遠く日本の地で生き、制限された環境下ではあるものの人間的で、文化的な生活を送っていた。2019年末には彼らの本国帰還100年を記念して、故郷であるオーストリアの博物館で遺留品の展示会を行う。日本とオーストリアの両方の地で捕虜たちが演奏した音楽の再現演奏会を行い、当時の彼らの思いに心を寄せ、文化的記憶を語り、日奥の友好と未来を思う機会を設けた。

10月31日のレクチャーコンサートでは、前半に大津留厚名誉教授が、貴重な一次資料を

紐解き、青野原俘虜収容所の歴史的背景と俘虜が働いた戦時の日常について講演した。後半には、1919年3月、シベリアの収容所で困窮する仲間を支えるために、青野原俘虜収容所で俘虜たちが演奏したチャリティーコンサートの曲目や、第一次世界大戦で右手を失ったピアニストに捧げられたコルンゴルトのピアノと二台のヴァイオリンとチェロのための組曲が演奏された。俘虜収容所の生活のなかで行われた表現活動の実態を明らかにするとともに、本来の編成を工夫して編曲した様子など、音楽の変容についても、重要な観点が提示された。

(人間発達専攻 大田美佐子)

#### (7) 環太平洋特別支援教育シンポジウム

【日程】11月6日(水)【参加者】神戸大学学部生、院生、職員、外部参加者 計26名  
【概要】特別支援教育の制度は国によって異なる。また、日本の特別支援教育で重要な役割を果たす「個別の指導計画」は、米国における Individual Education Plan: IEP とは異なるものである。社会文化的な相違も背景には存在し、言葉の翻訳だけでは十分に理解しきれない概念の違いがある。そこで、アメリカ合衆国、中国、台湾、オーストラリア、環太平洋諸国それぞれの特別支援教育制度についてシンポジウムを行い、各国の特別支援教育の制度・概念の相違点を明確にし、望ましい特別支援教育の在り方について検討した。シンポジウムは、台湾出身で、アメリカの大学院で学位を取得し、マサチューセッツ州とミズーリ州の療育センターでの勤務経験を有する荘季静博士(米国と台湾)、本学院生の王嘉玉氏(中国)、オーストラリアに留学した本学院生の佐藤綾香氏(オーストラリア)、および本学院生、中村みさと氏、石山周氏(日本)である。シンポジウムを通じて、中国、日本、台湾にはアジア文化圏としての共通点も見られること、米国は「法」や「契約」を明確にすることで多文化共生を成立させているが、オーストラリアはむしろ細かい差異にはこだわらないことで共生を成立させている。文献で読んでいただけでは理解しきれない各国の文化や制度の相違を明確にできたことが成果である。

(人間発達専攻 鳥居深雪)

#### (8) 学生のための睡眠セミナー 眠りの活用術

【日程】11月22日(金) 13:30-15:00【参加者】38名(教員他4名、学生34名)

##### 【演題】

- ・睡眠負債って何?意外と知らない睡眠問題(睡眠評価研究機構 白川修一郎)
- ・スポーツパフォーマンスを上げるには?睡眠環境の整え方(東北福祉大学 水野康)

【概要】睡眠教育の2名のエキスパートをお招きし、睡眠不足とその影響について学び、自らの生活に活かす方法を考えることを目的とした。白川修一郎氏からは、睡眠の基礎的知識から睡眠不足が引き起こす様々な問題まで、幅広く睡眠についてご講演頂いた。水野康氏からは、学生競技者の睡眠不足の問題と改善した場合のパフォーマンス向上効果についてご講演頂いた。活発に質疑応答がされ、参加者の感想には、「自分が今まで睡眠に関して持つ

ていた知識について間違っているものが多くあり、驚くことが多かった。」といったように、驚きをもって睡眠に対する正しい知識を獲得することができたようである。さらに、「睡眠が足りないとどんなリスクがあるのか、と睡眠を十分とった場合のプラス面の両方が聞けたので、まず自分で実践してみようと思った。」といった感想もあり、参加者が積極的に自らの生活を振り返り、生活に活かそうとする様子が伺え、本セミナーの目的は達成できたと思われる。

(人間発達専攻 古谷真樹)

(9) サイエンスコミュニケーションの未来

【日程】12月13日(金) (17:30-19:30)

【参加者】教員4名、院生6名、一般1名

【概要】本シンポジウムは、教育基礎研究道場との共同開催という形式を取って開催された。講演者は、サイエンスコミュニケーション研究に関する第一人者である国立科学博物館・連携推進センター長の小川義和氏と博物館展示デザインに造詣の深い多摩美術大学の楠房子教授であった。いわゆる、サイエンスコミュニケーションとデザインに関する学術的諸課題が集中的に議論され、さらに、それらに触発される形で院生2名による関連ポスター発表が同時に行われ、院生の研究に対しても非常に示唆的なシンポジウムとなった。なお、当日の参加院生2名による参加報告は研究科HPに掲載されている (<https://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/5874#d0521>)。

(人間発達専攻 稲垣成哲, 山口悦司)

(10) 公開シンポジウム:「共生教育」を考える (3): 日本における「共生教育」カリキュラム創造に向けた課題を探る

【日程】2020年1月11日(土) 14:40~17:45 【参加者】院生を中心に12名

【講師】戸野塚厚子(宮城女子学院大学)

【演題】スウェーデンの義務教育における「共生」のカリキュラム——“Samlevnad”の理念と展開

【概要】人間発達環境学において、多様な人間相互の「共生」や「共生教育」の具体化は重要な課題である。この課題意識に基づき、これまで、2015年度はスウェーデンにおける「共生教育」カリキュラムの展開過程を、2017年度は「加害者性」(暴力性)を自覚する「共生教育」を、学術WEEKSとして企画した。今回の企画では、戸野塚厚子教授(宮城女子学院大学)をお招きし、スウェーデンの「共生教育」カリキュラムの分析手法について学んだ。さらに戸野塚氏の講演とともに、1970-80年代に隆盛した京都府下の障害児と非障害児の「共同教育」実践の研究報告も加えて、日本において「共生教育」を具体化する上での展望と課題についてフロアを交えて議論し理解を深めた。

(人間発達専攻 渡部昭男)

(11) 即興演奏を考える

【日程】2020年2月9日(日)午後2時【参加者】25名(在学生, 一般参加者)

【概要】本シンポジウムでは, 民族音楽学の立場から, 即興演奏という現象について, 文化化された見えないルールに「制約」を受けているという立場から考察を行った。実演を交えながら, 特に「自由」の概念そのものが多様であることをイランやインド音楽を中心的な事例として議論した。ゲストにはイラン音楽演奏家の北川修一氏, インド音楽演奏家の立岩潤三氏を招き, それぞれ, タールやタブラという伝統楽器の実演を交えながらプレゼンテーションを行ってもらい, 質疑応答も行った。

(人間発達専攻 谷正人)

### 7.3. 研究科支援プロジェクト研究

(1) 次世代の環境共生社会を担う子どもの環境共生リテラシーの発達に関する国際共同研究

#### 1. 研究目的の概要

子どもたちが将来において, 生物多様性や森林の環境保全といったSDGsの優先課題の解決・実現に主体的に参画するために必要となると想定される環境共生リテラシーの発達プロセスについて国際比較研究を行う。

#### 2. 研究組織

① 代表者 山口悦司(人間発達専攻) 科学教育

② 共同研究者 坂本美紀(人間発達専攻) 教育心理学

Hayat Hokayem (Texas Christian University, U.S.A.) 科学教育

Hui Jin (Educational Testing Service, U.S.A.) 教育評価

#### 3. 研究実績の概要

① 調査フレームワークの作成・調査項目の作成

文献レビューと電子メール・Webミーティングによる協議を行い, 環境共生リテラシーに関する調査フレームワークを策定した。

② 調査の実施・データ収集

各国・地域の小学生を対象とした半構造化個別面接法による調査を実施した。

③ データ統合・分析

調査で得られた音声データのトランスクリプトを作成・英訳するとともに, 質的分析法を中心としたデータ分析を行った。

④ 研究成果発表

科学教育の国際会議 International Conference on Teaching Science and Mathematics in Culturally and Linguistically Diverse Settings などで研究成果発表を行った。

⑤ 大型科研費を含む複数の科研費の申請

本研究課題に関する大型科研費(基盤研究(A)(一般))および科研費(挑戦的萌芽)を申請した。申請区分は, いずれも「大区分A・中区分9:教育学およびその関連分野」であった。

(研究代表者 山口悦司)

(2) 環境共生社会における，社会的許容可能性を背景とした新たなリスクコミュニケーション手法の検討

### 1. 研究の目的

日本においては近年，地震，豪雨などの災害リスク，福島第一原子力発電所事故(3.11)などにみるような科学技術や各種の化学物質に関わるリスクの発現などを経て，環境に係わるリスクが市民の身近な問題となりつつあり，このようなリスクに対して，安全と安心の獲得のためのリスクマネジメント及びリスクコミュニケーションが重要視されている。このような環境に係わるリスクの「安全」は，ゼロリスクを前提としたものがある一方，例えば発がんの生涯リスクレベル  $10^{-5}$  を「許容リスクレベル」とした発がん性化学物質の環境基準のように，実質安全量に基づく「安全」も含まれる。すなわち，現代社会において我々を取り巻く環境の「安全」は，科学的な客観性とともな，社会の具体的な許容可能性から測られるものとなっている。「安心」を獲得するためのリスクコミュニケーションに際しては，これらの「安全」を前提とするために，そのリスク事象の「安全」に関する科学的な理解とともに，社会での許容の可能性やその許容の程度を把握した上で実施される必要がある。しかしこのようなリスクに対する主観的判断を含む許容可能性の概念は特に環境の問題に関わる中では未だ人口に膾炙しているとは言えず，実際の環境リスクコミュニケーションにそれが十分に考慮されていないのが現状である。

そこで，本研究では従来の市民の環境リスク認知の観点に，共同研究者が専門とする哲学的観点による当事者同士の対話（哲学プラクティス）や，自然共生社会論の観点による獣害の問題を含む野生動物管理のコミュニティにおける実践，またこれまで科学技術に関わる情報伝達や意思決定支援などを目的としてその手法を開発してきたサイエンスコミュニケーションの基礎的な観点を評価軸として加え，各現場で実践的に行われてきた相互理解に関わる実践的な手法を考慮し，公共的理解や，異なる許容特性を持つ人々とのコミュニケーションに必要な観点を整理し，一般的な市民のリスク受容に関する特性を検討しながら，それらを考慮したリスクコミュニケーション手法開発を行うことを目的とした。

### 2. 研究実績の概要

#### ① 既存のリスク事象等に関する社会の許容可能性についての検討

一般市民の，環境リスク事象あるいは科学技術に関する意見や態度，リスク認知などについてのデータを収集し，その許容可能性の構造についての把握を行うと共に，属性や所属コミュニティに関わる要件について検討を行った。データ収集については，既存の調査結果の再検討を行った上，その結果から必要とされた項目について，地域，年代，性別で層化したパネルを対象に web 調査を実施した。

#### ② 各種コミュニケーションに関わる事例研究

異なる許容特性を持つ集団で行われているコミュニケーションの実践事例についての検討を行った。特に，哲学的な課題について，経験が異なる多様な当事者が対話という方法を用いて共同で探究し，当事者や市民の行動や態度を変容しようとする哲学プラクティスの実践活動や，農村地域において様々な利害の調整をしつつ，多様な生物との共生を図り

ながら獣害等への実際的な問題解決をコミュニティの現場において行う事例、また、一般に向けたサイエンスコミュニケーションの手法の変遷や、現代の科学技術が必要とする異分野におけるリテラシーの共有のあり方など、現在は分野別に行われている手法とその実際的な実施法、あるいはそれに使用するテキストや用具類を具体的の把握を行うとともに、その実践に関わるとりまとめを行った。

#### ③ 現在の社会的許容可能性を考慮したリスクコミュニケーション手法開発

上記①、②の研究結果をまとめ、現在の日本社会における当事者の属性やそれによる許容可能性を背景とした新たなリスクコミュニケーション手法についての検討を行い、リスクコミュニケーションモデルの構築を行った。

#### ④ 研究成果の公表

2020年に入り新型コロナウイルス感染症の世界的流行が発生したために、これに関するリスク認知等の知見を急遽加え、学術論文として公開を予定している。

(研究代表者 村山留美子)

### 7.4. 高度教員養成プログラム

教育連携推進室の新設以降、その研究開発部門において、高度教員養成プログラムの企画運営を引き継ぎ、例年通り実施した。年間6回のセミナーを実施した。そのうち1回は外国人講師によるものであった。加えて、本年度は、グローバルな視座に立ち、外国人の登壇者を迎えた特別セミナーを5回、企画・実施した（セミナー報告は、次のサイトにある。<https://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/5701>）。参加者は、研究科において専修免許取得を目指す4名の院生であり、大学院後期課程院生4名をサポーターとして参入し、附属学校と連携しながらアクションリサーチを主たる研究方法として採用し、研究に取り組んだものである。参加院生には、不十分ながら国内学会等への参加発表支援を当該プログラム予算から行った。参加院生の研究業績は、学術論文9編（審査付き3編）、学会発表7件であった。

#### (1) 高度教員養成プログラムセミナー

第1回 高度教員養成プログラムへ参加するために：附属学校部と大学院人間発達環境学研究科の連携による本プログラムに関するガイダンス

講師：北野幸子

日時：2019年5月17日（金）17:00～17:30

会場：鶴甲第2キャンパス F255（高度教員養成プログラム室）

第2回 教育実践につながる基礎研究の位置づけの工夫

講師：辻弘美（大阪樟蔭女子大学 教授）

日時：2019年6月21日（金）17:00～18:30

場所：鶴甲第2キャンパス F255（高度教員養成プログラム室）

第3回 Education in Lao. PDR

講師：Vanthala Souvanxay（ラオス国立大学 講師）

日時：2019年10月18日（金）17:00～18:30

場所：鶴甲第2キャンパス F255（高度教員養成プログラム室）

第4回 教員にとっての教養—学び続ける教員とは何か—

講師：大関達也（兵庫教育大学大学院 准教授）

日時：2019年11月15日（金）17:00～18:30

場所：鶴甲第2キャンパス F255（高度教員養成プログラム室）

第5回 的確な教育実践に必要な前提条件—子どもの認識と教育内容の本質の把握—

講師：渡邊伸樹（関西学院大学 教授）

日時：2019年12月20日（金）17:00～18:30

会場：鶴甲第2キャンパス F255（高度教員養成プログラム室）

第6回 リサーチ報告会 教育実践研究の実態～附属幼・小・中学校における事例～

講師：三村真弓（広島大学大学院教授）

日時：2020年1月24日（金）17:00～18:30

会場：鶴甲第2キャンパス F255（高度教員養成プログラム室）

(2) 高度教員養成プログラム特別セミナー

日本と香港の乳幼児教育 意見交換会

コーディネーター：北野幸子（人間発達環境学研究所）

参加者：香港教育庁関係者4名，香港幼稚園長36名，

本学教員・院生・学生の希望者

日時：2019年5月22日（水）13:00～14:30

場所：鶴甲第2キャンパス大会議室（A棟2階）

ヨーロッパ・ベルギーの子育て支援

講演者：ミシェル・ヴァンデンプロック先生（ヘント大学 教授）

日時：2019年7月17日（水）13:20～14:50

場所：鶴甲第2キャンパス大会議室（A棟2階）

「アメリカ・ワシントン州における保育の質の維持・向上システム」講演会・トークセッション・情報交換会

講演者：DeEtta Simmons 先生（ワシントン大学）

埋橋玲子先生（同志社女子大学）

麓浩子先生（元ローハンプトン大学）

平林祥先生（ひかり幼稚園主事）

コーディネーター：北野幸子

日時：2019年9月4日（水）14:00~17:00

場所：鶴甲第2キャンパス大会議室（A棟2階）

ノルウェーの乳幼児教育

講演者：Irene Trønnes Strøm先生（Inland Norway University of Applied Sciences）

企画者：北野幸子

日時：2019年11月21日（木）15:10~16:40

場所：鶴甲第2キャンパス大会議室（A棟2階）

イギリスの初等教育と子ども・家族支援

講演者：Junko Grant Hotsuki（Dwight School London 教諭，The Meadows  
Children Family Wing 運営委員）

日時：2019年12月24日（火）17:00~18:30

場所：鶴甲第2キャンパス F257（F棟2階）

### (3) 学術論文（9件）

1. 山本智一・柳澤真・神山真一（2019）小学校中学年におけるアーギュメント構成能力の育成「風やゴムのはたらき」の実践を通して，理科教育学研究，第60巻，第1号，71-84. [審査付き]
2. 森夢芽子・山口悦司・坂本美紀・田中達也・俣野源晃・神山真一・山本智一（2019），証拠-主張-理由付けを含むアーギュメント構成能力の育成を目指した授業実践の評価：小学校第3学年理科「磁石の性質」の事例，日本科学教育学会研究会研究報告，第33巻，第7号，5-8. [審査なし]
3. 神山真一・俣野源晃・山本智一（2019），アーギュメント教師教育プログラムが教師に与えた影響に関する事例的研究：アーギュメントに対する教師の信念に着目して，理科教育学研究，第60巻，第2号，1-13. [審査付き]
4. 神山真一・山本智一・稲垣成哲（2019）教員志望の大学生対象にアーギュメントを小学校理科授業に導入する指導能力育成プログラムのデザイン，日本科学教育学会年会論文集，第43巻，630-631. [審査なし]
5. 神山真一・栗川尚暉・山本智一・稲垣成哲（2019），教員志望の大学生対象にアーギュメントを小学校理科授業に導入する指導能力育成プログラムの評価，日本科学教育学会研究会研究報告，第34巻，第3号，175-180. [審査なし]
6. 青木良太，新階幸也，稲垣成哲，溝口博，武田義明，楠房子，山口悦司，舟生日出男，杉本雅則，俣野源晃（2019）里山環境保全教育コンテンツ「里山管理ゲーム」，

日本科学教育学会研究会研究報告, 34 (3), 135-138 [審査なし]

7. 新階幸也, 溝口博, 武田義明, 楠房子, 青木良太, 山口悦司, 稲垣成哲, 舟生日出男, 杉本雅則 (2019) 里山環境保全教育コンテンツ「里山管理ゲーム」の発展過程と今後の展望, 日本科学教育学会研究会研究報告, 34 (3), 131-134 [審査なし]
8. 新階幸也, 溝口博, 武田義明, 楠房子, 青木良太, 山口悦司, 稲垣成哲, 舟生日出男, 杉本雅則 (2020) 里山環境保全教育コンテンツ「里山管理ゲーム」-複数の里山への対応, 情報処理学会研究報告ヒューマンコンピュータインタラクション, 2020-HCI-186(32) 1-8, 2020[審査なし]
9. 中橋葵, 岡部恭幸 (2019) 幼児期の豊かな数感覚につながる経験と保育者の援助を考える:—5歳児の概念的サビタイジングの実態分析を通して—, 保育学研究 57(1), 6-16 [審査付き]

(4) 学会発表 (7 件)

1. 森夢芽子・山口悦司・坂本美紀・田中達也・俣野源晃・神山真一・山本智一 (2019) 証拠-主張-理由付けを含むアーギュメント構成能力の育成を目指した授業実践の評価: 小学校第3学年理科「磁石の性質」の事例, 日本科学教育学会研究会 (関西支部), 姫路商工会議所, 2019. 6. 1
2. 神山真一・山本智一・稲垣成哲 (2019) 教員志望の大学生対象にアーギュメントを小学校理科授業に導入する指導能力育成プログラムのデザイン, 第43回日本科学教育学会年会, 宇都宮大学, 2019. 8. 24
3. Yamamoto, T., & Kamiyama, S. (2019) Results of improved program to develop teachers' abilities to construct and evaluate arguments. Poster presented at the ESERA 2019 conference. The beauty and pleasure of understanding: engaging with contemporary challenges through science education. Bologna, Italy, 2019. 8. 26-30
4. 神山真一 (2019) アーギュメントを小学校理科授業に導入する指導能力育成プログラムの評価, 第69回日本理科教育学会全国大会, 静岡大学, 2019. 9. 22
5. 神山真一・栗川尚暉・山本智一・稲垣成哲 (2019), 教員志望の大学生対象にアーギュメントを小学校理科授業に導入する指導能力育成プログラムの評価, 日本科学教育学会研究会, 長崎大学 2019. 12. 21
6. 青木良太, 新開幸也, 稲垣成哲, 溝口博, 武田義明, 楠房子 (2020) 里山管理ゲームにおける注視要素と得点の関係, 計測自動制御学会 第22回社会システム部会研究会, 2020. 3. 16
7. 小林和奏, 青木良太, 新階幸也, 稲垣成哲, 溝口博, 武田義明, 楠房子 (2020) 里山環境保全教育コンテンツ「里山管理ゲーム」: 複数の里山への対応による学習効果, 計測自動制御学会 第22回社会システム部会研究会, 2020. 3. 16

(教育連携推進室長 国土将平)

## 7.5. 附属中等教育学校を活用した高大接続研究

「神戸大学－附属中等教育学校高大接続研究」

神戸大学が、「グローバルキャリア人の育成」を教育目標に掲げる附属中等教育学校を活用した高大連携・接続の在り方に関して行う研究に対し、発達科学部（人間発達環境学研究科）の教員が積極的に協力した。具体的な連携事業としては、「根源を問い革新を生む国際的科学技术人材育成挑戦プログラム（ROOTプログラム）」「ESD Food プロジェクト」「被災地をめぐる哲学対話」「グローバル・リーダーセミナー・国際協力講話」「ESD 実践研究集会」といった発達科学部（人間発達環境学研究科）が実施するグローバルな課題に関するプログラム等に、附属中等教育学校生徒に参画（参加）してもらった。また、附属中等教育学校生徒が卒業研究として取り組む「課題研究」に、発達科学部（人間発達環境学研究科）の教員が指導・助言を行った。とくに課題研究では、教育研究アドバイザーである教員が、附属中等教育学校4年生から6年生の生徒に対して、研究の進め方や分析のしかたについての講義や、発表会での講評などを行った。

（神戸大学附属中等教育学校 教育研究アドバイザー 林創）

## 7.6. 研究推進

### 7.6.1. 研究推進委員会

本委員会は研究科長，副研究科長，専攻長，発達科学部学科長及びその他研究科長が必要と認めた者として国際人間科学部学科長（グローバル文化学科長を除く）を加えた10名で構成され、研究科における共同研究の推進，研究シーズの発見と育成，外部資金の獲得に向けた組織的対応等について議論を行った。

2019年度の検討事項は以下のとおりである。

|            | 検討事項  |
|------------|---|
| 第1回(4月5日)  | 1. 2019年度研究支援経費について<br>2. 2019年度科研採択数について<br>基盤研究A・B・C，若手研究，挑戦的研究<br>3. 学振特別研究員DCの申請支援の取り組みについて |
| 第2回(4月26日) | 1. 平成30年度研究支援経費 報告書（研究報告と経費の使途）について<br>2. 「令和2年度助成科研費」早期支援プログラムの募集について                          |

|            |   |
|------------|---|
| 第3回(6月7日)  | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2019年度「研究推進支援経費」応募に対する審査について</li> <li>2. 平成29年度研究支援経費 成果報告書について</li> <li>3. 先端融合研究環開拓プロジェクトキックオフシンポジウム(7/22)の案内</li> </ol>                          |
| 第4回(7月5日)  | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2019年度「研究支援経費」応募にかかる審査について</li> <li>2. 法人評価(第3期中期目標期間4年目終了時評価)について</li> <li>3. 科研費採択状況(挑戦的研究(萌芽))</li> <li>4. 科研費申請に向けて(FD, 若手向けワークショップ)</li> </ol> |
| 第5回(9月13日) | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 科研費申請に向けて(若手向けワークショップ)</li> </ol>   |

(研究推進委員会委員長 青木茂樹)

### 7.6.2. 研究倫理審査委員会

本年度は95件の新規申請があり、46件が承認、41件が条件付承認、1件が非該当、3件が変更の勧告であった。まだ審議中のものが4件残っている状況である。2016(平成28)年度の新規申請が71件、2017(平成29)年度は69件、2018(平成30)年度は59件で、件数としては漸減していたが、本年度は一転して大幅に増加したと言える。

平成27年4月1日から「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」が施行された。平成29年には「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」の一部改正、「個人情報保護法等の改正に伴う研究倫理指針」の改正、「個人情報保護法等の改正に伴う研究倫理指針」の改正もなされている。そうした動きに対応して、本審査委員会では本年度、昨年度末に改正された新しい審査申請書(様式第1号)に基づいて、審査を行った。また、本年度も規程の一部改正を行うとともに、申請者の意見も取り入れながら、様式第1~3号、説明書、同意書のひな形の修正も行った。本研究科の研究倫理審査の質を保ちつつ、申請者にとっても審査申請書の作成がより容易になったと考えている。

(研究倫理審査委員会委員長 渡邊隆信)

### 7.6.3. 研究紀要編集委員会

令和元年度研究紀要編集委員会は、4回の対面会議ならびにメール審議を通して「神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要」第13巻第1号、第2号の編集・刊行を行ったほか、編集工程の電子化を徐々に進めている。2019年9月30日付けで刊行した第13巻第1号は、研究論文4編(査読あり)、研究報告9編(査読なし)を掲載した。2020年3月31日付けで刊行予定の第13巻第2号は、研究論文6編(査読あり)、研究報告6編(査読なし)を掲載予定である。

(研究紀要編集委員会委員長 坂本美紀)

## 7.7. 各専攻の研究

### 7.7.1. 人間発達専攻

以下、各系講座別に研究の概要を示す。

#### ●こころ系講座

##### (1) 国際共同研究

研究代表者（本専攻教員）：加藤佳子

共同研究者：鳥居深雪（本専攻教員）、山根隆宏（本専攻教員）、古屋敷智之（神戸大学医学研究科）

研究課題：心の健康の保持増進のための国際支援プログラム評価指標の開発

研究資金：科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金（国際共同研究(B)）

研究概要：心の支援を必要とする者（要心理支援者）への家族や支援者（支援関係者）からの支援は、疾病や障害などの困難を克服する上で重要である。しかし支援関係者らは、要心理支援者との関係性において、固有の重篤なストレスに直面する可能性がある。そのため支援関係者らが心理支援を円滑に行うには、支援者関係者ら自身の心の健康の保持増進を図る必要がある。そこで支援関係者とそのストレスにうまく対処し、心の健康を保持増進し、生きがいを促進する機序について探求し支援関係者の心の健康・生きがい増進モデルを構築する。そのために歴史的にも先進的な心理支援に取り組み、一定の効果を上げている海外の地域（オーストリア）に中核共同研究拠点を置き国際ネットワークを構築する。最終的に国際社会で活用可能な支援関係者用心理支援プログラムおよび評価指標を開発し、その妥当性を検証する。

##### (2) 国内共同研究等

研究代表者（本専攻教員）：齊藤誠一

共同研究者：松河理子（花園大学）

研究課題：子が思春期にあるときの子及び親の発達性認知・相互交渉が子及び親の発達に与える影響

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：思春期の子及びその親が相手の発達性をどのように認知し、どのように相互交渉するかに着目して、こうした発達性認知と相互交渉が子の思春期の発達課題の解決や精神的健康性に、親の中年期の発達課題の解決や精神的健康性にどのように影響しているかを明らかにし、子の思春期と親の中年期が発達上重層的な相互作用を有することを明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：鳥居深雪

共同研究者：梅田真理（宮城学院女子大学）近藤武夫（東京大学）小川修史（兵庫教育大学）

式部陽子（帝塚山大学）西尾祐美子（畿央大学）

研究課題：高校における発達障害へのスティグマ改善プログラムの開発—生徒の教育と教員の研修—

研究資金:科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要: 発達障害に対するスティグマの改善のために、オンラインによる高校生への発達障害理解プログラムと教員の研修プログラムの開発を行った。

本専攻研究者: 鳥居深雪

共同研究者: 岡田智 (北海道大学) 大谷和大 (北海道大学)

研究課題: 発達障害特性の影響因を加味した知能検査解釈システムの構築

研究資金: 科学研究費助成事業 基盤研究(B) (代表: 岡田智)

研究概要: ウェクスラー知能検査の再検査信頼性, 生態学的情報, 検査行動, 測定値の関連を調査し, 知能検査解釈システムの構築に取り組んでいる。

本専攻研究者: 鳥居深雪

共同研究者: 村中泰子 (神戸大学キャンパスライフ支援センター), 森麻友子 (和歌山大学)

研究課題: 発達障害者の職場コミュニケーションにおける合理的配慮

研究資金: 科学研究費助成事業 基盤研究(C) (代表: 村中泰子)

研究概要: 発達障害のある学生が就労に際して最も困難を感じるのは職場コミュニケーションである。職場コミュニケーションにおける合理的配慮の在り方について検討する。

研究代表者 (本専攻教員): 加藤佳子

共同研究者: 黒川通典 (大阪樟蔭女子大学) 黒川浩美 (大阪青山大学)

研究課題: 行動科学を活用する食習慣改善支援ツールの開発

研究資金: 科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要: 食習慣の改善は, 生活習慣病を予防し, 個人の生活の質の向上に寄与する。そして健康寿命の延伸につながり, 医療費の削減など社会保障費の負担抑制にもなる。しかし食習慣は子どもの頃から長年にわたって形成されることから, いったん形成された食習慣を改善することは容易ではない。そのため家族支援者 (家族) と専門職支援者 (栄養教諭, 養護教諭, 家庭科や保健の教諭, 管理栄養士, 保健師) など支援関係者が連携を図り, エビデンスに基づいた行動科学を活用した食習慣改善支援が必要である。ところが我が国では行動科学が食習慣改善支援に導入されて, いまだ初期段階の状況にあり十分な成果を上げることができていない。この課題を解決するためには, 専門職支援者のやるべき目標を明確にするマイルストーンを設定し, 行動科学を活用した支援の活性化を丁寧に図ることが有効である。そのために, 食習慣改善支援促進モデルを構築し, やるべき目標を明確にした食習慣改善支援プログラム評価指標や支援教材を作成し, 食習慣改善支援促進ツールを開発する。

本専攻研究者: 加藤佳子

共同研究者: 小島亜未 (神戸大学先端融合研究環)

研究資金: 科学研究費助成事業 基盤研究(C) (代表: 小島亜未)

研究課題：食に焦点をあてた健康寿命環境促進要因指標の開発

研究の概要：健康寿命の延伸は、個人の生活の質を向上させるとともに経済的な負担の軽減につながる。健康寿命の延伸を図る生活習慣病の予防事業が推進されている。健康寿命につながる食育の推進が重点課題とされており、自治体においても実効性の高い事業として展開する必要がある。申請者らは、食習慣の改善には、生きがい、健康保持能力、ソーシャルサポートなどの強化が必要であることを確認している。これらの要因は、健康寿命に関連する他の健康行動との関連性も示唆されている。本研究では自治体と協力し、食に焦点をあてながら、健康寿命環境を促進・阻害する要因を明らかにし、これを評価する指標を作成することを目的とする。

研究代表者（本専攻教員）：中村晴信

共同研究者：甲田勝康（関西医科大学）、伊木雅之（近畿大学）、藤田裕規（近畿大学）

研究課題：体脂肪分布が臓器機能障害におよぼす影響についての大規模疫学研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（代表：甲田勝康）

研究概要：二重エネルギーエックス線吸収法による住民ベースの体脂肪分布のデータから、体脂肪分布の多様性が心血管疾患や内分泌代謝疾患等の臓器機能障害に及ぼす影響について検討する。

研究代表者（本専攻教員）：中村晴信

共同研究者：間瀬知紀（京都女子大学）

研究課題：幼児における体格・体組成と生活習慣因子との関連性

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)（代表：間瀬知紀）

研究概要：幼児を対象として食事・身体活動を中心とした生活習慣因子と体格・体組成の変化との関連性を評価することにより、幼児期の脂肪の急増および体組成の変化に影響を及ぼす生活習慣因子について解明する。

研究代表者（本専攻教員）：中村晴信

共同研究者：青柳潔（長崎大学）、有馬和彦（長崎大学）、前田隆浩（長崎大学）、西村貴孝（長崎大学）、安部恵代（長崎大学）

研究課題：日本人における性ホルモン・骨代謝回転・骨量間関連の生理的・遺伝的研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（代表：青柳潔）

研究概要：欧米人とは遺伝的背景が異なる一般日本人中高年男女において、性ホルモンや骨代謝回転マーカーと骨量との関連を体格、遺伝子多型、さらにライフスタイルといった環境的要因を含め検討する。

研究代表者（本専攻教員）：伊藤俊樹

研究課題：画家、彫刻家、音楽家、舞踏家の「自我のための退行」の有り様の違いについて

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：ロールシャッハ法を用いて、ジャンルの違う芸術家の「自我のための退行」のありようを比較検討する。特に Holt(1977)のスコアリングシステムに従って、一次過程的反応のありようの違いを調べる。

研究代表者（本専攻教員）：坂本美紀

共同研究者：稲垣成哲（本専攻教員），山口悦司（本専攻教員），山本智一（兵庫教育大学），西垣順子（大阪市立大学），益川弘如（静岡大学）

研究課題：トランス・サイエンス問題の解決に資する知識共創型アーギュメンテーションの教師教育

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (B)（代表：坂本美紀）

研究概要：トランス・サイエンス問題のひとつである科学・技術に関する公共的な問題 (SSI) の教育利用に着目して、科学教育における指導理論・指導法・評価法を体系化し、それらを踏まえた教師教育プログラムを、科学教育の専門家と学習科学等の研究者による学際的な共同研究によって、開発・検証することを目指すものである。

研究代表者（本専攻教員）：坂本美紀

共同研究者：山口悦司（本専攻教員），伊藤真之（本専攻教員），松河秀哉（東北大学）

研究課題：市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシー教育モデル開発

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究（萌芽）

研究概要：科学に対する関心・関与を持続的に保持しながら、科学へ主体的に参加・支援するための資質・能力・態度の総体を「オープンサイエンス・リテラシー」と定義し、エンゲージメント理論を応用して、その理論化を行うとともに、市民の科学への主体的な参加・支援を促進する教育モデルを開発することを目的とする。

本専攻研究者：相澤直樹

共同研究者：石橋正浩（大阪教育大学），齋藤大輔（金沢大学），内海千種（徳島大学），牧田潔（愛知学院大学），平石博敏（金沢大学）

研究課題：自己制御課題としてのロールシャッハ法の神経基盤の探求

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)（代表：石橋正浩）

研究概要：fMRI を用いてロールシャッハ法課題実施時の脳機能を自己制御課題の観点から検討する。

研究代表者（本専攻教員）：相澤直樹

研究課題：青年期における対人恐怖傾向（社交不安）ならびに自己愛傾向の心理

研究資金：構成員の個人研究費

研究概要：青年期男女を対象とした質問紙調査により対人恐怖傾向（社交不安）ならびに自己愛傾向の心理の解明を目指す。

研究代表者（本専攻教員）：相澤直樹

共同研究者：中山明子（神戸市西部療育センター）、古屋有華（西宮市保健所）、山根麻千子（医療法人杏和会阪南病院）、川添文子（神戸市立西神戸医療センター）

研究課題：ロールシャッハ検査法を用いた被虐待児の心理の理解

研究資金：構成員の個人研究費

研究概要：ロールシャッハ検査法を用いて事例研究を中心として被虐待児の心理の理解を目指す。

研究代表者（本専攻教員）：赤木和重

共同研究者：小淵隆司（北海道教育大学）、戸田竜一（北海道教育大学）

研究課題：異年齢教育による障害の「不可視化」機能：インクルーシブ教育の新次元

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：インクルーシブ教育を進めるうえで、異年齢教育に着目し、アメリカ・シラキュースの学校訪問や、へき地教育における子どもの発達について検討を行った。

研究代表者（本専攻教員）：赤木和重

共同研究者：金丸彰寿（神戸松陰女子学院大学）、大塚真由子（いぶき明生支援学校）、呉文慧（神戸大学大学院生）

研究課題：なぜ特別支援学級・学校の在籍児は急増しているのか？：排除としての「途中転籍」に注目して

研究資金：博報財団 児童教育実践についての研究助成（第14回）（代表：赤木和重）

研究概要：本研究の目的は、インクルーシブ教育を進展させるうえでの障害要因と考えられる小学校時期における途中転籍の児童数の推移およびその理由を実証的に明らかにすることであった。そのために、小学校時期における途中転籍者の動態分析を行った。

本専攻研究者：赤木和重

共同研究者：三木裕和（鳥取大学）

研究課題：自閉症児の授業づくりにおける教育目標・教育評価に関する研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)（代表：三木裕和）

研究概要：以下の三点について検討を行っている。①自閉症児を中心とした発達障害児の教育実践における教育目標・教育評価の構造を明らかにすること。その際、「人と共鳴し共感すること」「創造的に考えること」の内容と方法に研究の視点を置く。②社会性の障害に対して「社会適応的行動の獲得」だけでなく、社会性そのものの発達を教育目標とし

て設定可能であるかどうか研究の視点を置く。③特別支援学校における個別の教育支援計画、個別の指導計画、年間指導計画、成績表、通知表などを分析検討した。

本専攻研究者：赤木和重

共同研究者：山田康彦（三重大学）

研究課題：対話的事例シナリオを核とした教員養成カリキュラムの創造と評価方法の開発研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)（代表：山田康彦）

研究概要：本研究では、対話的事例シナリオを核としたPBL教育のカリキュラム開発、および評価方法の開発研究という2つの柱からなる研究を行っている。とくに、事例シナリオを用いたPBL教育を核とした教員養成授業科目のベストミックス（専門的知識・技能の形成、現場体験と理論の往還等を含めた最適カリキュラム）を創り出し、個々の授業科目の目的・目標との整合性をはかることについて検討している。

研究代表者（本専攻教員）：林創

研究課題：子どもの社会性を支える「察する」心の発達心理学的研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：幼児期から児童期の子どもを対象に、特に向社会的行動の発達について実証的な視点から着目することで、これらが人間の社会性を支える「察する」心の発達に重要な意味をもつことを明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：古谷真樹

研究課題：幼児期から学童期の保護者への健康教育支援プログラムの考案と効果検証

研究資金：科学研究費助成事業 若手研究(B)

研究概要：幼児期から学童期の保護者が子どもの生活リズムを確立させ、心身の健康を維持・増進させていくことを支援する簡便な健康教育支援プログラムを考案し、その効果を検証する。

研究代表者（本専攻教員）：山根隆宏

研究課題：自閉症児の親におけるオンラインソーシャルサポートの実態と有効性に関する縦断的検討

研究資金：科学研究費助成事業 若手研究

研究概要：自閉症児の親におけるオンラインソーシャルサポートの利用実態と、その有効性について縦断的な調査を通して検討する。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：石本雄真（鳥取大学）、松本有貴（徳島文理大学）

研究課題：放課後等デイサービスにおける支援機能向上に資する複層的な支援リソースの

開発と検証

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C) (代表：石本雄真)

研究概要：放課後等デイサービスで実施可能でかつ、発達障害児の不安の問題に介入できるプログラムを開発すること、および効果的な研修システムの開発とその効果検証を行うものである。

(3) 国際共著論文 (Web of Science 収録論文)

NCD Risk Factor Collaboration (including Nakamura H).

National trends in total cholesterol obscure heterogeneous changes in HDL and non-HDL cholesterol and total-to-HDL cholesterol ratio: a pooled analysis of 458 population-based studies in Asian and Western countries. *Int J Epidemiol* 2019 [Epub ahead of print]. (Science Citation Index Expanded)

NCD Risk Factor Collaboration (NCD-RisC) (including Nakamura H).

Rising rural body-mass index is the main driver of the global obesity epidemic in adults.

*Nature*. 569(7755):260-264, 2019. (Science Citation Index Expanded)

Kouda K, Iki M, Ohara K, Nakamura H, Fujita Y, Nishiyama T.

Associations between serum levels of insulin-like growth factor-I and bone mineral acquisition in pubertal children: a 3-year follow-up study in Hamamatsu, Japan.

*J Physiol Anthropol* 38:16, 2019. (Science Citation Index Expanded)

Ohara K, Mase T, Kouda K, Miyawaki C, Momoi K, Fujitani T, Fujita Y, Nakamura H.

Association of anthropometric status, perceived stress, and personality traits with eating behavior in university students. *Eat Weight Disord* 24(3):521-531, 2019.

(Science Citation Index Expanded)

Kouda K, Iki M, Fujita Y, Nakamura H, Ohara K, Tachiki T, Nishiyama T. Trends in serum lipid levels of a 10- and 13-year-old population in Fukuroi City, Japan (2007 - 2017). *J Epidemiol* 30(1):24-29, 2020. (Science Citation Index Expanded)

Miyawaki C, Ohara K, Mase T, Kouda K, Fujitani T, Momoi K, Kaneda H, Murayama R, Okita Y, Nakamura H. The purpose and the motivation for future practice of physical activity and related factors in Japanese university students. *J Hum Health Sport Exerc* 14(1):61-74, 2019. (Emerging Sources Citation Index)

Hayashi, H., & Nishikawa, M. (2019). Egocentric bias in emotional understanding of children and adults. *Journal of Experimental Child Psychology*, 185, 224-235.

Ishimoto, Y, Yamane, T, Matsumoto, Y (2019). Anxiety levels of children with developmental disorders in Japan: based on reports provided by parents. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 49, 3898-3905.

(4) 国際共著論文

Yoshiko Kato, Elfriede Greimel, Chenghong Hu, Maria Müller-Gartner, Beate Salchinger, Wolfgang Freidl, Seiichi Saito and Roswith Roth The Relationship between Sense of Coherence, Stress, Body Image Satisfaction and Eating Behavior in Japanese and Austrian Students *Psych* 1 504-514.

(5) 国際学会発表

Sakamoto, M., Yamaguchi, E., Yamamoto, T., Inagaki, S., Wakabayashi, K., & Tokura, S. (2019, August). An intervention study on student's decision-making using trade-offs to resolve socio-scientific issues. Poster presented at the 13th conference of European Science Education Research Association (ESERA), Bologna, Italy.

Aizawa, N. Factor Structure of Cognitive Biases in Japanese Young Adults: Construction of the Comprehensive Cognitive Biases Questionnaire. ECDP 2019 Abstract Book, 662-662, 2019年9月

(6) 著書 (分担執筆)

鳥居深雪, 『『通級による指導』での指導の実際』石塚謙二, 広瀬由美子編著「アクティベート教育学 特別支援教育」第10章, ミネルヴァ書房, 165-182

坂本美紀 (印刷中) 「知能と学力」 糸井尚子・上淵寿編著「教師のための教育学シリーズ 5 教育心理学」学文社, 83-94.

赤木和重 (2019) 「遊びと遊び心の剥奪: 障害と貧困が重なるところで」川田学ほか (編) 遊び・育ち・経験: 子どもの世界を守る (シリーズ子どもの貧困2), 明石書店 (pp. 97-124)

赤木和重 (2019) 「発達研究: 教育学における発達論の衰退のさなかで」下司晶ほか (編) 教育学年報 11: 教育研究の新篇章, 世織書房 (pp. 161-183)

赤木和重 (2019) 「どの子にも豊かな毎日と発達を」 心理科学研究会 (編), 新・育ちあう乳幼児心理学, 有斐閣 (pp. 228-248)

赤木和重 (2019) 「強度行動障害のある人に対する教育実践の現状と展望」 三木裕和ほか (編) 自閉症児・発達障害児の教育目標・教育評価 2, クリエイツかもがわ (pp. 36-49)

下山晴彦・佐藤隆夫・本郷一夫 (監修) 林 創 (編) (2019) 『発達心理学 (公認心理師スタンダードテキストシリーズ 12) 』, ミネルヴァ書房

岩見理華・林創 (2019) 「探究の力を育む課題研究」 稲井達也 (編) 『高等学校「探究的な学習」実践カリキュラム・マネジメント』, 学事出版, pp. 116-121.

林創 (2019) 「子どもの道德性の発達」 荒木寿友・藤澤 文 (編) 『道徳教育はこうすればくもっと > おもしろい ―未来を拓く教育学と心理学のコラボレーション―』 北大路書房 pp. 140-147.

古谷真樹 (2019) 「睡眠の評価法」 日本睡眠改善協議会 (編) 『基礎講座 睡眠改善学 第2版』 ゆまに書房 pp149-163.

#### (7) 論文

谷芳恵・齊藤誠一・宮竹優 (2019) 「子どもの習い事と母親の育児不安および育児幸福感の関連: 母親の就労状態に着目して」 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 13, 32-36.

濱田綾・齊藤誠一 (2019) 「定年退職に関する心理学的研究の現状と課題」 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 13, 81-15.

山本謙治・齊藤誠一 (印刷中) 「若年労働者の社会的困窮場面における援助要請意図及び関連要因の検討」 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 13, 161-169.

相澤直樹 「認知特性体験尺度作成の試み―因子構造と構成概念妥当性の検討②」 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 13(1) 67 - 72 2019年9月 【査読なし】

赤木和重・村上公也 (2020) 「ゆれる正しさ, ほどける自閉症」 発達, 160, 60-68.

古村真帆・赤木和重 (2019) 「通常学級における個別支援を他児童はどのように捉えているのか: 公正段階および親密度に着目して」 SNE ジャーナル, 25, 83-101.

赤木和重・大塚真由子（2019）「特別支援学校教員を対象とした個別の指導計画に関する意識調査：作成上の悩みや困難に焦点をあてて」SNE ジャーナル, 25, 162-175.

赤木和重（2019）「書評：『インクルーシブ授業の国際比較研究』」SNE ジャーナル, 25, 201-204.

赤木和重（2019）「書評『教える・学ぶ：教育には何ができるか シリーズ子どもの貧困3』」授業づくりネットワーク, 119, 33

林創（2019）「子どもの社会的な心の発達—子どもの「うそ」はどのように発達するか」兵庫県小児科医会報, 72, 71-73.

Sugiyama H, Maiya K, Furutani M, Muranaka Y. (2019) An action study on the cognitive behavioral training effect on dozing during class. 大学教育研究 27, 93-102.

山根隆宏（2019）「自閉症スペクトラム障害児者をもつ親のオンラインソーシャルサポート利用の実態」神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 13(1), 73-80.

坂本美紀（2020）「科学的な思考と表現の力を育てる協調学習の授業」月刊『兵庫教育』3月号, 4-7.

河崎佳子（2019）「子どもの「生きる」を紡ぐために—「育ち」をつなぐ“telling”」世界の児童と母性, vol.85, 44-47.

#### (8) こころ系講座の研究の総括と課題

こころ系講座では、心理学、健康科学、脳科学を総合した観点、障害児教育を含む教育と発達支援の観点から研究が進められてきた。具体的には、心身の発達や健康について、そのプロセスや促進・阻害要因、新たな測定方法を探究する研究の他、科学教育や障害児教育、発達支援にかかわる実証研究や実践研究が展開されている。国外の研究者の研究課題をグローバルな立場から俯瞰することで新たな研究を模索し、国際共著論文等の件数をさらに増やしていくことが今後の課題である。

#### ●表現系講座

##### (1) 国際共同研究

本専攻研究者：大田美佐子

共同研究者：Carol J. Oja (Harvard University)

研究課題：20世紀における米日音楽交流（占領期を中心に）

研究資金: JSPS (2017), Harvard University (Reischauer Institute of Japanese Studies)  
研究概要: 2017 年の JSPS による招聘を契機に始まった米日両国間の音楽文化交流に関する研究。2019 年度は American Music に査読論文掲載。2020 年度は占領期の音楽文化交流の出版準備。

本専攻研究者: 大田美佐子

共同研究者: Douglas Shadle (Vanderbilt University), JoyCalico (Vanderbilt University)

研究課題: At the Border of Art and Power: Western Classical Music in the Age of Global Market.

研究資金: Vanderbilt University

研究概要: Vanderbilt 大学の招聘で五大陸 8 人の音楽学者が共同研究。2020 年 2 月 10 日と 11 日にナッシュビルでワークショップ。今後の展開は未定。詳細は以下の web で。

<https://news.vanderbilt.edu/2020/01/31/workshop-to-examine-impact-of-global-marketplace-on-western-classica>

本専攻研究者: 野中哲士

共同研究者: Thomas A. Stoffregen (University of Minnesota)

研究課題: Social interaction in the emergence of toddler's daily skills

研究概要: 2019 年 7 月にオランダで行われた International Conference on Perception and Action で Stoffregen 教授がオーガナイズしたシンポジウム "Nested Affordances" への登壇した縁で、同シンポジウムで発表した内容の国際共同論文 "Social interaction in the emergence of toddler's mealtime spoon use" を共同執筆し WoS 掲載誌に投稿した (現在査読中)。

本専攻研究者: 野中哲士

共同研究者: John A. Endler (Deakin University), Enora Gandon (University College London), Reinoud Bootsma (Aix-Marseille Université)

研究課題: Individual variations in the morphogenesis of traditional ceramic shapes

研究資金: The Marie Skłodowska-Curie Grant, No 793451 (EU, Enora Gandon)

研究概要: 本研究の目的は、世界各地の伝統的な陶芸技能の実験的検討を通して、Cultural Transmission (技能の文化的伝承) に関する実証的な知見を得ることである。陶芸形状の定量化に Elliptical Fourier Analysis と呼ばれる数理手法を用い、生態学、運動学、人類学の学際的なチームで検討を行っている。2 編の国際共同論文を共同執筆し WoS 掲載誌に投稿した (現在査読中)。

## (2) 国内共同研究等

本専攻研究者：岸本吉弘

研究協力者：大島徹也（多摩美術大学）、吉川民仁（武蔵野美術大学）、小川佳夫（ロゾー絵画教室主宰）小池隆英（画家）

研究課題：現代美術（絵画）におけるフォーマリズムの可能性

研究資金：構成員の個人研究費及びロゾー絵画教室（民間企業）

研究概要：現代における本格的な抽象美術（絵画）の有り様や可能性を追求すべく、研究会「Studio 138」を結成した。表現者や美術評論家、美術史家等で構成される研究会で、構成員は創立メンバーとなった。第1回研究会「アメリカ抽象表現主義再考」（2019年12月22日：東京・神楽坂のロゾー絵画教室）、第2回研究会「抽象表現主義／ニューヨーク・スクールの芸術家たちの自主的集団活動」（2020年3月7日：東京・神楽坂のロゾー絵画教室）が開催され、今後は定期的な研究発表会、展覧会、機関誌刊行などが予定される。

本専攻研究者：岸本吉弘

共同研究者：石川裕敏（大阪府内公立中学校美術教諭）、圓城寺繁誉（大阪府内公立高校美術教諭）、河合美和（大手前大学）、善住芳枝（親和学園）、中島一平、渡辺信明（京都市立芸術大学）、コーディネーター：尾崎信一郎（鳥取県立博物館）

研究課題：ペインタリネスな抽象絵画の有様について

研究資金：ギャラリー白（民間企業）

研究概要：関西近県の活動する抽象画家が集い、拠点であるギャラリー白（大阪・西天満）において大型作品の展示と同時に、トークイベントも併載し、抽象絵画における現状とその可能性を探る試みを実施した。（2019年9月開催。リーフレットも作成し、テキスト「ペインタリネスは反動か」を尾崎信一郎が執筆した。）

本専攻研究者：岸本吉弘

共同研究者：寺島みどり（大阪教育大学）

研究課題：制作者からみた絵画表現の可能性について

研究資金：あしやシューレ（民間企業）

研究概要：絵画表現を实践する画家2名の多くの実作品（大型作品）を2人展形式で紹介し、その方法論等の差異を浮き彫りにする中で、トークイベントも併載し、絵画表現における現状とその可能性を探る試みを実施した。（2019年7月にあしやシューレにて開催）

研究代表者（本専攻教員）：谷正人

研究課題：文化環境との関わりからみた即興演奏技能の発達—イラン音楽を事例として

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：本研究は、イラン伝統音楽を対象として、演奏家コミュニティという環境のなかで、個々人は即興の技能をどのように発達させているのか。集団が持つ多層的秩序の網の目

という環境の中で、一個人がどのように他者との相互行為によって、即興演奏というコミュニケーション形態を発達させているのかを探るものである。

具体的には即興技能の様々な発達段階にいる演者を複数含んでいるコミュニティの即興セッションに参加観察し、初心者が継続的にセッションに参加することで、どのように環境に対応していくようになるのかについて質的分析を行っている。

本専攻研究者：谷正人

共同研究者：飯野りさ（東京大学）、米山知子（京都外国語大学）

研究課題：中東少数派の音文化に関する研究—共有と非共有に着目して—

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（代表：飯野りさ）

研究概要：本研究は中東の少数派、特にイラン・イラク・シリア・トルコの国境が重複する地域クルディスタンに住む人々、その中でもクルドとアレヴィーの音文化を「共有と非共有」をキーワードとしてアラブ、イラン、トルコの音楽研究者が分析・考察することを目的としており、谷正人はイランの担当として研究に参加している。

研究代表者（本専攻教員）：平芳裕子

研究課題：思想としてのファッション—20世紀後半の芸術における身体表象の関係から

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：本研究課題は、20世紀後半の芸術における身体表象の変容が、日本における「思想としてのファッション」の生成に与えた影響を明らかにすることによって、現代アートにおけるファッションの価値化、ミュージアムにおけるファッション展の発展、アカデミズムとしてのファッション研究成立の歴史的文脈を検証するものである。

本専攻研究者：平芳裕子

共同研究者：平芳幸浩（京都工繊維大学）、池側隆之（京都工芸繊維大学）太田純貴（鹿児島大学）高木彬（龍谷大学）藤田尚志（九州産業大学）牧口千夏（京都国立近代美術館）若林雅也（関西大学）

研究課題：「ポスト身体社会」における芸術・文化経験の皮膚感覚についての横断的研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（代表：平芳幸浩）

研究概要：本研究課題は、芸術・文化表現において私たちの「皮膚感覚」が今日どのように扱われ、芸術・文化経験において「皮膚感覚」が今後どのような意義を持ちうるのかを多角的に考察し、学祭的な知見を得ることによって、人工皮膚を含む人工器官の展開の方向性に対して、人文学的知見からの新たな視座を提供しようと試みるものである。

研究代表者（本専攻教員）：野中哲士

共同研究者：伊藤精英（はこだて未来大学）

研究課題：アクティブタッチ技能の獲得過程の解明：身体の触運動ダイナミクスからの検討

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：本研究提案は、複雑な刺激情報を選び分け、有用な一群の刺激を浮かび上がらせる身体運動の側面から、実世界における能動触知覚（アクティブタッチ）技能の獲得プロセスの理解を目指すものである。視覚障害児を対象とし、大人になってからの習得が困難とされる点字の触読の獲得過程を縦断的に検討し、実世界におけるアクティブタッチの技能発達において探索的な身体運動のダイナミクスが果たす役割について明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：野中哲士

研究課題：乳児の日常生活技能獲得場面をとりまく乳児－養育者間共同行為の実証的検討

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C) 特設分野研究「オラリティと社会」

研究概要：本研究は、まだ言葉を使う前の乳児が日常生活技能を獲得する過程で生起する乳児－養育者間の共同行為（joint action）と、これらの共同行為の乳児の発達にともなう推移を縦断的に記述することを通して、状況や発達を反映して複雑にゆらぐ乳児の行為に寄り添う養育者の行為が乳児の動作や場面の状況のどのような特徴に呼応して調整されているのかを実証的に明らかにする。

### (3) 国際共著論文（Web of Science 収録論文）

Callam Katie, Kimoto Makiko, Ohta Misako, Oja Carol J., Marian Anderson's 1953 Concert Tour of Japan: A Transnational History, in *American Music*, 2019, 266-329, 2019-37/3. (Web of Science 収録論文)

Nonaka, T. (2020). Locating the inexhaustible: Material, medium, and ambient information. *Frontiers in Psychology*, 11:447. doi: 10.3389/fpsyg.2020.00447. (Web of Science 収録論文)

### (4) 著書

Nonaka, T. (2019). The Triad of Medium, Substance, and Surfaces for the Theory of Further Scrutiny. In J. Wagman & J. Blau (Eds.) *Perception as Information Detection: Reflections on Gibson's Ecological Approach to Visual Perception* (pp. 21-36). New York: Routledge.

野中哲士 (2019) 生態学的アプローチ. サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実編『質的研究法マッピング』新曜社, 2019年

梅宮弘光, 山脇巖の建築の仕事, 深川雅文, 杉田佳穂 (監) 『開校100年きたれ, バウハウス』アートインプレッション, 2019年8月

梅宮弘光, 円形校舎とその時代, マハヤナ学園 100 年史編集委員会 (編) 『マハヤナ学園 100 年史』 社会福祉法人マハヤナ学園, 2019 年 10 月

梅宮弘光, 融合する音と空間—山田耕筰の音楽堂構想「音楽の法悦境」をめぐって, 木村理恵子 (編) 『山田耕筰と美術』, 栃木県立美術館, 2020 年 1 月

#### (5) 訳書

デイヴィッド・ライアン (田畑暁生訳) 『監視文化の誕生』 青土社, 2019 年

マイケル・バックランド (田畑暁生訳) 『新・情報学入門』 日本評論社, 2020 年

#### (6) 国際会議等発表

Misako Ohta, “Several thoughts about transnational approach in historical music research”, Workshop: At the Borders of Art and Power; Western Classical Music in the Global Market Place (Global VU Initiative), 2.11. 2020, Vanderbilt University.

#### (7) 表現系講座の研究の総括と課題

表現系講座教員の研究領域, その成果発表の方法や媒体は各領域を一律共通に適用できる評価指標を設定することは難しいが, それぞれの分野では独自で顕著な研究活動が展開されている。このことをふまえたうえで, 今後は次の各点が課題であろう。1) 教員相互に共有できる認識や研究関心も潜在的には小さくなく, そうしたことは修士論文, 博士論文の集団指導態勢に活かされているものの, 系講座内・専攻における相乗効果が発揮されるような共同研究に向けた態勢づくりと機運の醸成に向けた努力が必要である。2) 国際共同研究については, 背景や枠組みが異なり必ずしも一律には規定できず, また成果発表までには比較的長期にわたる研究継続が必要なことも事実である。こうした事情のもとで, 本年度にはその成果が見られるので, 今後のさらなる発展が求められる。3) 学生の研究について, 各領域での学会をベースとした口頭発表・論文投稿といった研究活動に向けて指導が行われ一定の実績があがっているが, 研究領域や学会ごとに学生の成果発表に対する取り組みも異なる。研究科紀要が学術 WEEKS の機会も活用した指導が求められる。

### ●からだ系講座

#### (1) 国際共同研究

研究代表者 (本専攻教員): 近藤徳彦

共同研究者: Dr. Toby Mundel (Massey Univ. NZ)

研究課題: 身体機能調節の統合的視点による熱中症リスク評価とその予防

研究資金: 神戸大学外国人研究員招へい費

研究概要: 地球温暖化の影響で, 日本では熱中症が大きな社会的課題となっている。この課

題解決には体温と血圧の両調節から統合的に検討することが重要となる。しかし、これまでの予防対策は前者からのアプローチが多く、予防を検討する上では不十分である。身体の調節機能を統合的にみることで、これまでの熱中症予防の指針に新たな視点を加えることを目的とする。

研究代表者（本専攻教員）：片桐恵子

共同研究者：Han Gyoung-hae (Seoul National University), 原田和弘（本専攻教員）, 福沢愛（東京大学）, Hee-jin Choi (Seoul National University)

研究課題：都市居住高齢者の日常活動と健康：日本と韓国の国際比較研究

研究資金：日本学術振興会 国際交流：韓国との共同研究

研究概要：健康寿命の増進にはどのような日常生活をおくっているか、というライフスタイルが重要である。本給では、後期高齢者の日常生活の実態をダイアリー調査と活動量計の装着により多面的に把握し、健康状態などとの関連を明らかにすることを目的としている。

本専攻教員：片桐恵子

研究代表者：ジョン スンドル（梨花女子大学）

共同研究者：キム ジュヒョン（忠南大学）, アン スンテ（梨花女子大学）, ジャン チョルジュン（檀国大学）, ジュ ギョンヒ（Hanshin University）, ジュ ソヒョン（梨花女子大学）, チェ ヘジ（ソウル女子大学）, ホン ヨンラン（Korea Educational Development Institute）, パク ナンスク（University of South Florida）

研究課題：Age integration: Building a new social paradigm in aged society

研究資金：National Research Foundation of Korea

研究概要：高齢者の社会的孤立を防ぎ、社会的統合を図るための方策を検討する。

本専攻教員：片桐恵子

研究代表者：Jacquelyn B. James（Lynch School of Education）

共同研究者：Sloan Research Network on Aging & Work の参加者

Ruth Kanfer (Georgia Institute of Technology), Christina Matz-Costa (Boston College), Phyllis Moen (University of Minnesota), Alicia H. Munnell (Boston College), Marcie Pitt-Catsouphes (Middlesex University), Sara E. Rix, Ursula M. Staudinger (German National Academy of Sciences), Harvey L. Sterns (The University of Akron), Philip Taylor (Monash University), Julie M. Zissimopoulos (University of Southern California)

研究課題：高齢就労者に関する国際的・学際的研究

研究資金：Alfred P. Sloan Foundation. S

研究概要：各国における older worker の社会からの疎外/統合の現状を検討し、older worker にとって age friendly な環境を築くための方策を検討する

研究代表者（本専攻教員）：片桐恵子

共同研究者：Trudy Corrigan (Dublin City University)

研究課題：シニアの生涯学習の包括的概念と効果の検討

研究資金：ダイバーシティ事業 人事交流プログラム

研究概要：日本とアイルランドにおけるシニアの生涯学習の現状と課題の検討を行い、国際比較を実施する。

研究代表者（本専攻教員）：長ヶ原誠

研究課題：ワールドマスターズゲームズ開催地におけるレガシー創出効果の検証

研究資金：国際マスターズゲームズ協会

研究概要：ワールドマスターズゲームズ関西大会を対象として、生涯スポーツ国際大会が開催地にもたらすレガシー（遺産）の測定指標を開発し検証する。

研究代表者（本専攻教員）：長ヶ原誠

研究課題：五輪大会とワールドマスターズゲームズの連続開催による相乗効果モニタリング指標の開発

研究資金：国際マスターズゲームズ協会

研究概要：東京五輪とワールドマスターズゲームズ関西大会の同国連続開催による相乗的な社会活性化効果の測定指標を開発し縦断的に検証する。

## (2) 国内共同研究等（科学研究費助成事業（科研費）代表者）

研究代表者（本専攻教員）：原田和弘

研究課題：心理学的要因が退職に伴う高齢夫婦の健康変化に及ぼす影響

研究資金：科学研究費助成事業 若手研究(A)

研究概要：高齢者の健康的な生活習慣づくりを支援し、健康増進を目指すことの社会的意義は自明である。本人のみならず配偶者の生活習慣もリセットされる人生有数の出来事であるため、多くの高齢者夫婦にとって、健康的な生活習慣づくりのターニングポイントは退職である。研究では、健康心理学と老年心理学の理論に基づき、どのような心理学的要因が、退職に伴う高齢夫婦の生活習慣・健康状態の変化に影響を及ぼしているのかを明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：原田和弘

共同研究者：増本康平，近藤徳彦，岡田修一（3名とも本専攻教員）

研究課題：買い物環境が高齢者の外出・日常身体活動量に及ぼす影響：移動能力による差異

研究資金：ロッテ財団・奨励研究助成

研究概要：高齢期の健康増進において、積極的に外出を行い、歩数などの日常の身体活動量を高めることの重要性は明らかである。高齢者にとっては、買い物は、外出や身体活動を行う主な機会となっているため、適切な買い物環境は、高齢者の外出や身体活動の促進

に重要な役割を果たす可能性がある。そこで本研究では、高齢者の外出頻度・日常身体活動量を保つためには、どの程度の買い物環境が望ましいかを明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：増本康平

研究課題：高齢期の意思決定バイアスの国際比較：多様な価値観に応じた自律支援を目指して

研究資金：科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化)

研究概要：文化的価値観の違いが高齢期の意思決定プロセスと選択後の後悔や満足度に及ぼす影響を明らかにし、多様な価値基準に応じた意思決定支援方法の確立を目指す。

研究代表者（本専攻教員）：増本康平

共同研究者：佐藤幸治（本専攻教員），原田和弘（本専攻教員），塩崎麻里子（近畿大学）

研究課題：エンド・オブ・ライフにおける感情調整機能の機序と役割

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：本研究は、「高齢期の感情調整機能はなぜ低下せず、向上するのか？」また、「感情調整機能は高齢期の人間関係，社会的役割，健康の喪失にどのように影響するのか？」この二つの学術的問いを解明することを目的とする。

研究代表者（本専攻教員）：増本康平

共同研究者：原田和弘（本専攻教員），塩崎麻里子（近畿大学）

研究課題：高齢者の自律支援に最適化された情報提示方法の確立

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究（萌芽）

研究概要：高齢者の自由意志を阻害しない，かつ，高齢者が後悔しない判断を支援するための，高齢者の意思決定時の認知バイアスを考慮した情報提示のあり方を確立するのが本研究の目的である。

研究代表者（本専攻教員）：木村哲也

研究課題：循環・立位バランス両調節システムの協働効果の解明

研究資金：科学研究費助成事業 若手研究(B)

研究概要：静的二足立位姿勢における，立位バランス調節システムと循環調節システムの関連について検討を行っている。

研究代表者（本専攻教員）：岡田修一

共同研究者：近藤徳彦（本専攻教員），増本康平（本専攻教員），谷口隆晴（神戸大学システム情報学研究科），原田和弘（本専攻教員）

研究課題：健康増進に資する社会的ネットワーク可視化手法の開発と地域介入の効果検証

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究（開拓）

研究概要：地域コミュニティにおける人とのつながりを定量的に測定するデバイスと測定

されたデータからつながりを可視化する統計手法の開発，及びこれらを用いた地域介入研究の効果検証を目的とする。

研究代表者（本専攻教員）：近藤徳彦

共同研究者：天野達郎（新潟大学），井上芳光（大阪国際大学），西保岳（筑波大学）

研究課題：運動と遺伝子が高温下での運動パフォーマンスに関係する汗イオン濃度調節に及ぼす影響

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：運動と汗腺の構造に関連する遺伝子が汗イオン調節に及ぼす影響を明らかにし，それをもとに高温下での運動パフォーマンス低下の予防について検討する。

研究代表者（本専攻教員）：近藤徳彦

研究課題：高温高湿環境下での暑熱順化と脱順化が汗腺機能と皮膚血管拡張に及ぼす影響，

研究資金：科学研究費助成事業 特別研究員奨励費

概要：高温高湿・高温低湿環境下での暑熱順化と脱順化がどのように異なるのかを，汗腺機能と皮膚血管拡張機能から検討する。また，日本における夏の適応（季節変化）も加え，高温高湿環境下での暑熱順化特性を総合的に明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：片桐恵子

共同研究者：菅原育子（東京大学）

研究課題：マイクロとマクロからみた新たなサードエイジ発達モデルの構築

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：サードエイジの発達モデルの構築

研究代表者（本専攻教員）：河辺章子

研究課題：運動が苦手な人をなくすための運動制御能力テストの開発と習得支援への展開

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：身体運動の制御能力を構成する基本的要素を明確にするため，今までの研究とは逆の観点から運動が苦手な人の動作を詳細に分析し，随意運動制御の基本要素を明らかにした上で，運動の制御能力テストを開発し，運動が苦手な人への習得支援へと結びつける。

(3) 国内共同研究（科学研究費助成事業（科研費）研究分担者として）

本専攻教員：佐藤幸治

研究代表者：藤田聡（立命館大学）

研究課題：ビタミン D と運動併用による筋肥大メカニズムの解明と新たなサルコペニア予防法の開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：高齢者における，ビタミンD摂取と，レジスタンス運動が，筋力・筋量・筋機能に及ぼす影響を生化学的解析により，メカニズムを明らかにすることを目的としている。

本専攻教員：増本康平

研究代表者：原田悦子（筑波大学）

共同研究者：和田有史（立命館大学），榊美知子（高知工科大学），須藤智（静岡大学）

研究課題：高齢者の学習：認知的制御，感情，動機づけを考慮した学習機種の解明と支援の検討

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(A)

研究概要：高齢者が日常的活動の中で求められる学習について，認知的機序を明らかにし，学習の支援を行う基礎知見を得る。

本専攻教員：片桐恵子

研究代表者：橋元良明（東京女子大学）

共同研究者：木村忠正（立教大学），森康俊（関西学院大学），北村智（東京経済大学）是永論（立教大学）

研究課題：日本人の情報行動，その四半世紀にわたる変遷と超高齢社会における課題の検討

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(A)

研究概要：日本人の情報行動の変化の把握と高齢者の情報行動の解明

本専攻教員：片桐恵子

研究代表者：田畑智博（人間環境学専攻教員）

研究課題：超高齢化社会の進行とごみ分別行動の関係性評価

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的萌芽研究

研究概要：高齢者の身体認知機能とゴミ分別行動の関係の検討

#### （4）国内共同研究等（民間助成）

研究代表者（本専攻教員）：木村哲也

研究課題：静的立位時の追加荷重に対する適応メカニズム解明

研究資金：中富健康科学振興財団研究助成金

研究概要：静的二足立位姿勢における，荷重負荷に対するバランス制御則の変化について検討を行っている。

研究代表者（本専攻教員）：片桐恵子

研究課題：人々はなぜクラウドファンディングをするのか

研究資金：吉田秀雄記念事業財団

研究概要：人々がクラウドファンディングをするメカニズムの解明

研究代表者（本専攻教員）：片桐恵子

共同研究者：秋山弘子（東京大学）、北本佳子（昭和女子大学）、福沢愛（東京大学）

研究課題：シニアのセカンドキャリアとしての介護分野の可能性

研究資金：損保ジャパン日本興亜福祉財団委託研究

研究概要：介護分野での人手不足は深刻であることを踏まえ、シニアが介護分野でセカンドキャリアを気づくにはどのような方策が有効なのかを検討する

研究代表者（本専攻教員）：長ヶ原誠

研究課題：宝塚市スポーツモニタリング

研究資金：宝塚市委託調査

研究概要：宝塚市民を対象としたスポーツ活動調査の追跡調査および現状評価調査による宝塚計画策定に向けた基礎データの作成

#### (5) 著書

原田和弘 その気にさせる支援法，宮地元彦編，はじめてとりくむ身体活動支援—メタボ・フレイル時代の栄養と運動，医歯薬出版株式会社：東京，2019，pp. 91-102.

#### (6) 論文 (Web of Science 収録誌掲載論文)

**Harada K, Masumoto K, Kondo N.** (2019) Daily and longitudinal associations of out-of-home time with objectively measured physical activity and sedentary behavior among middle-aged and older adults. *Journal of Behavioral Medicine*, 42;315-329.

**Harada K,** Lee S, Lee S, Bae S, Harada K, Shimada H. (2019) Environmental predictors of objectively measured out-of-home time among older adults with cognitive decline. *Archives of Gerontology and Geriatrics*, 82;259-265.

**Harada K, Masumoto K, Kondo N.** (2019) Exercising alone or exercising with others and mental health among middle-aged and older adults: longitudinal analysis of cross-lagged and simultaneous effects. *Journal of Physical Activity and Health*, 16;556-564.

**Harada K,** Lee S, Lee S, Bae S, Harada K, Suzuki T, Shimada H. (2019) Psychological and environmental correlates of moderate-to-vigorous physical activity and step counts among older adults with cognitive decline. *Perceptual and Motor Skills*, 126;639-655.

**Harada K, Masumoto K, Kondo N.** (2020) Different associations of routine work time with exercise behavior and objectively measured physical activity among middle-

aged and older adults: A daily and longitudinal analysis. *Journal of Behavioral Medicine*, 43;44-56.

**Harada, K., Masumoto, K.,** Fukuzawa, A., Touyama, M., **Sato, K., Kondo, N., & Okada, S.** (2019). Social Interaction in Walking Groups and Affective Responses Among Japanese Older Adults. *Journal of aging and physical activity*, 1 (aop), 1-7.

Fukuzawa A, **Katagiri A, Harada K, Masumoto K, Chogahara M, Kondo N, Okada S.** (2019) A longitudinal study of the moderating effects of social capital on the relationships between changes in human capital and ikigai among Japanese older adults.. *Asian Journal of Social Psychology*, 2019;22; 172-182.

Lee S, Lee S, Bae S, **Harada K,** Jung S, Makizako H, Shimada H. (2019) Impact of sedentary time on chronic kidney disease and disability incidence in community-dwelling Japanese older adults: A 4-year prospective cohort study. *Journal of Aging and Physical Activity*, 27; 184-190.

Nakamura S, Inayama T, **Harada K,** Arao T. (2019) Perceived food environment predicts vegetable intake according to income: a cross-sectional study. *SAGE Open*, 9; 10.1177/2158244019864202.

kedo A, Kido K, Ato S, **Sato K,** Woo Lee J, Fujita S, Imai Y. (2019) The effects of resistance training on bone mineral density and bone quality in type 2 diabetic rats. *Physiological Reports*. 7, e14046.

Tatara K, **Sato K.** (Contribution equal). Aerobic exercise training and dehydroepiandrosterone administration increase testicular sex steroid hormones and enhance reproductive function in high-sucrose-induced obese rats. *J Steroid Biochem Mol Biol*. 190, 37-43, 2019.

Matsumoto, T, Egawa, M, **Kimura, T,** Hayashi, T. (2019) A potential relation between premenstrual symptoms and subjective perception of health and stress among college students: a cross-sectional study. *BioPsychoSocial Medicine*, 13(26) : 1-9.

Yamamoto, K., & **Masumoto, K.** (2019). Memory for Rules and Output Monitoring in Adults with Autism Spectrum Disorder. *Journal of autism and developmental disorders*, 49(12), 4780-4787.

Ueno, D., **Masumoto, K.**, Sato, S., & Gondo, Y. (2019). Age-Related Differences in the International Affective Picture System (IAPS) Valence and Arousal Ratings among Japanese Individuals. *Experimental Aging Research*, 45(4), 331–345.

Lei TH, Schlader ZJ, Che Muhamed AM, Zheng H, Stannard SR, **Kondo N**, Cotter JD, Mündel T. (2020) Differences in dry-bulb temperature do not influence moderate-duration exercise performance in warm environments when vapor pressure is equivalent. *Eur J Appl Physiol*. Feb 18. doi: 10.1007.

Fujii N, McGarr GW, Kenny GP, Amano T, Honda Y, **Kondo N**, Nishiyasu T. (2020) NO-mediated activation of KATP channels contributes to cutaneous thermal hyperemia in young adults. *Am J Physiol Regul Integr Comp Physiol*. Feb 1;318(2):R390–R398.

Lei TH, Matsukawa H, Okushima D, Gerrett N, Schlader ZJ, Mündel T, Fujiwara M, **Kondo N**. (2020) Autonomic and perceptual thermoregulatory responses to voluntarily engaging in a common thermoregulatory behaviour. *Physiol Behav*. Mar 1;215:112768. doi: 10.1016/j.physbeh.2019.112768.

Fujii N, Amano T, Kenny GP, Honda Y, **Kondo N**, Nishiyasu T. (2019) Nicotinic receptors modulate skin perfusion during normothermia, and have a limited role in skin vasodilatation and sweating during hyperthermia. *Exp Physiol*. Dec;104(12):1808–1818.

Fujii N, Kenny GP, Amano T, Honda Y, **Kondo N**, Nishiyasu T. (2019) Evidence for TRPV4 channel induced skin vasodilatation through NOS, COX, and KCa channel mechanisms with no effect on sweat rate in humans. *Eur J Pharmacol*. Sep 5;858:172462. doi: 10.1016/j.ejphar.2019.172462

Choo HC, Peiffer JJ, Lopes-Silva JP, Mesquita RNO, Amano T, **Kondo N**, Abbiss CR. (2019) Effect of ice slushy ingestion and cold water immersion on thermoregulatory behavior. *PLoS One*. Feb 27;14(2):e0212966. doi: 10.1371/journal.pone.0212966.

Gerrett N, Amano T, Havenith G, Inoue Y, **Kondo N**. (2019) The influence of local skin temperature on the sweat glands maximum ion reabsorption rate. *Eur J Appl Physiol*. Mar;119(3):685–695.

(7) 論文 (Web of Science 未掲載論文)

原田和弘, 村上晴香, 宮地元彦, 近藤徳彦. 運動に関する感情経験, 態度, および行動意図尺度の作成と運動行動との関連性の検討. 体力科学, 2019:68;105-116.

原田和弘, 岡田修一. 小売業勤労者における就業中の転倒に関連する要因: 横断研究. 日本転倒予防学会誌, 2019:6;25-34.

長ヶ原誠 (2019) マスターズゲームズの戦略とビジョン. 月刊事業構想 6 号, pp. 40-41.

長ヶ原誠 (2019) 高齢者のスポーツ・身体活動. 健康づくり情報, No. 498 pp. 10-13.

Chogahara, M. (2019) Possibilities of a Synergistic Legacy of the World Masters Games 2021 Kansai, Asia-pacific Economic Cooperation Sports, volume 8, 21-23.

濱口祐實・前田正登 (2019) バスケットボールのフリースローにおけるシュート技術と方略に関する研究 バスケットボール研究, 5:65-74.

前田正登 (2019) やり投げ系種目としてのジャベリックボール投げにおけるリリースパラメータが飛距離に及ぼす影響 体育学研究 64(2):749-760.

前田正登ほか (2020) 健康・スポーツ科学実習における授業カリキュラム—熱中症による事故予防と体力テストの改善を目指して— 大学教育研究 28:101-116.

福井純平・前田正登 (2020) 砲丸投げにおける投射角度の変化が投てき動作に及ぼす影響 身体行動研究 9: 11-19.

福地慶太郎・河辺章子 (2020) 的と周囲の関係が投球の正確性に与える影響 —デルブーフ錯視図形を用いての検討— 身体行動研究, 9: 1-10.

渡部真悟・高田義弘 (2020) 関西学生フットサルリーグにおけるフットサル審判員の判定精度に関する研究 身体行動研究, 9: 21-26.

(8) 受賞

佐藤幸治 (研究分担者として)

秩父宮スポーツ医・科学賞 奨励賞 (代表: 田畑泉, 立命館大学)

日本スポーツ協会, スポーツ庁より, 故秩父宮妃殿下からの御遺贈金をもとに基金を設立したスポーツの向上と振興には欠くことのできないスポーツ医・科学の分野を対象とした奨

励賞（高強度・間欠的トレーニング（HIIT）研究開発グループ）を立命館大学・田畑泉教授を代表としたメンバーの一員で、賞の受賞が決定している。

#### (9) からだ系講座の研究の総括と課題

本年度も研究資金獲得を伴う研究の進展とその成果は着実に挙げられている。国際共同研究も拡大しつつあり、来年度以降にその成果が表れてくるものと考えられる。今後は各研究分野における更なる研究の進展とともに、外部資金の獲得にも注力しつつ、国際的な共同研究をさらに推進する。また、大学院生の研究活動について、一層の指導と活動支援を行うことが課題である。

### ●学び系講座

#### (1) 国際共同研究

本専攻研究者（研究代表者）：国土将平

共同研究者（海外）ビムセン・デブコタ，ケマラジ・アディカリ（トリブバン大学），ンゴイ・ケオサダ，ワンタラ・ソウバンサイ，ボアサントン・ワンナスック，ケッサナ・カンヤサン（ラオス国立大学）

研究課題：アジアの後発開発途上国における学校保健モデル事業のインパクト評価

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B) (海外学術)

研究概要：ネパールではトリブバン大学，ラオスではラオス国立大学と共同して，両国において子どもクラブを活用した学校保健プログラムを2年間にわたり実施し，制度の確立，マニュアルの作成と，ソーシャルキャピタルの変容などを通して，その成果を確認し，加えて実践から派生する課題を明らかにする。

本専攻研究者：国土将平

研究代表者：佐川哲（金沢大学）

共同研究者（海外）サンサン・ルイン，カイチュ・ライン，ポインポイン・アウン，モーモー・カイン（ヤンゴン教育大学），イシヤンカ・ピヤリス，パトリック・ラトナヤク，ジャヤンタ・カランスーリア（ケラニア大学），レヌカー・ピアリス，スダルシャナ・ペイリス，（スリランカ教育省）

研究課題：政治的抑圧からの回復期におけるアジアの子どもの身体・文化・生活の相互変容研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：ミャンマーでは2011年に軍事独裁政権から民主化に移行し，また，スリランカでは2009年に内戦が終了し，両国は政治的抑圧からの回復期にあるといえる。このような時期に学校で学ぶ子ども達は，新たな身体・文化・生活様式を獲得しつつあるといえる。本研究は，ミャンマーではヤンゴン教育大学，スリランカではケラニア大学ならびに教育省と共同して，両国の児童生徒を対象として，子どもの身体・文化・生活の実態ならびに相互関係がどのような変容をしてきたかを明らかにする。

(2) 国内共同研究等

研究代表者（本専攻教員）：岡部恭幸

研究課題：幼小接続期の数理認識の発達に着目した評価スケールの開発

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究(萌芽)

研究概要：幼児教育から初等教育への接続期の数理認識の発達に着目して、学習評価のスケールを開発しようとする。

研究代表者（本専攻教員）：北野幸子

研究課題：就学前教育の質的充実に向けた調査研究

研究資金：文科省 令和元年度「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究」

「ICT や先端技術の活用などを通じた幼児教育の充実の在り方に関する調査研究」「遊びと生活場面における個々の子ども理解と援助の充実につながる ICT の活用方法に関する調査研究」

研究概要：ICTを活用した、保育者の遊びと生活場面における個々の子ども理解と援助の支援方法を開発した。

研究代表者（本専攻教員）：北野幸子

研究課題：乳幼児教育実践の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性に関する研究～公開保育と実践検討を中心に～

研究資金：令和元年度 神戸市共同研究

研究概要：神戸市の乳幼児教育の保育者の専門性を研究するもの。特に本年度は、55園での公開保育、事後検討会、事例検討等を、全市をあげて実施した。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：三村真弓（広島大学）

研究課題：音楽科固有の資質・能力の基礎となる音楽的感觉及び音楽能力育成カリキュラムと指導法

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：音楽的感觉及び音楽能力育成カリキュラムと指導法について開発した。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：埋橋玲子（同志社女子大学）

研究課題：「音と声」に注目した保育者研修プログラム－ECERS 及び音環境調査に基づいて－

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：ECERS 及び音環境調査による保育者研修プログラムを開発した。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：岩橋道世（こども園るんびにい）

研究課題：人的環境としての保育者の語彙力と子どもの育ちの関係性についての研究～言葉のやり取りを通して見えてくるもの～

研究資金：令和元年度 厚生労働省 日本保育協会保育科学研究所「指定研究」

研究概要：人的環境としての保育者の言葉かけの実際と子どもの育ちの関係性について検討した。

研究代表者（本専攻教員）：木下孝司

研究課題：幼児期における「内容と目的に応じた教示行為」の発達とその認知的基盤

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：幼児が、他者に教える内容と目的に応じて、教示行為を調整するプロセスを明らかにして、その能力と認知発達の間連を検討した。

本専攻研究者：國土将平

研究代表者：石井好二郎（同志社大学）

研究課題：全国大規模調査による思春期小児の身体活動・生活習慣と睡眠の検討

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：思春期小児の良好な睡眠を得るための身体活動強度・時間・タイミングを、生活習慣も関連付けながら検証する。

本専攻研究者（研究代表者）：國土将平

研究課題：運動観察法による思春期不器用時に生じる走動作変容の解明

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：走運動における思春期不器用の発生から消失までの動きの変化を横断的・縦断的に追跡し、急激な発育が走動作ならびに走パフォーマンスに与える影響を明らかにし、該当時期における運動指導上の新たな知見を得る。

本専攻研究者：勅使河原君江

研究代表者：ロニー・アレキサンダー（神戸大学国際協力研究科）

研究課題：被災者が表現活動を通して具現化する「安心」～寄り沿い支援の実証的研究と理論の展開

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究（萌芽）

研究概要：東日本大震災の被災地での表現活動の効果を検証する研究である。

研究代表者（本専攻教員）：中谷奈津子

研究課題：保育所等における生活困難家庭に対する組織的支援と実践理論の構築

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：保育所等において生活困難を抱える家庭を早期に発見し、対応するための方策

を検討し、それを可能とする組織的特性、子どもへの影響を明らかにする。

本専攻研究者：目黒強

研究代表者：稲垣恭子（京都大学）

研究課題：戦後日本における政治家・財界人の教育観に関する教育社会学的研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：戦後日本の教育界に影響力を行使してきた政治家および財界人の教育観や教育政策との関係について、教育審議会等の検討を通して明らかにする。

本専攻研究者：目黒強

研究代表者：土居安子（一般財団法人大阪国際児童文学振興財団）

研究課題：大正期における児童出版文化史の研究－実業之日本社の果たした役割

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：実業之日本社が大正期の児童出版文化の発展に果たした歴史的役割について、出版文化史・児童文学史・美術史等の学際的観点からの検討を通して明らかにする。

本専攻研究者：稲垣成哲，山口悦司

研究代表者：野上智行（神戸大学名誉教授）

研究課題：幼年期における科学的素養醸成のための科学コミュニケーションに関する学際的研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(A)

研究概要：幼年期の科学コミュニケーションを促進する実践プロトタイプの開発と評価，科学系博物館・動物園等の社会教育施設における実践モデルの実証を行った。

本専攻研究者：稲垣成哲，山口悦司

研究代表者：坂本美紀（本専攻研究者）

研究課題：トランス・サイエンス問題の解決に資する知識共創型アーギュメンテーションの教師教育

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：トランス・サイエンス問題の解決に資する知識共創型アーギュメンテーションの教師教育プログラムを開発した。

本専攻研究者：稲垣成哲，山口悦司

研究代表者：武田義明（神戸大学名誉教授）

研究課題：生物多様性の実感的学習を可能とするSDGsを志向した里山環境保全教育プログラム

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：生物多様性の実感的学習を可能とするSDGsを志向した里山環境保全教育プログラムを開発した。

本専攻研究者：稲垣成哲

研究代表者：楠房子（多摩美術大学）

研究課題：ユニバーサルデザインに基づいたデジタル人形劇の開発と実践

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：ユニバーサルデザインに基づいたデジタル人形劇の開発と実践を行った。

本専攻研究者：稲垣成哲，増本康平，野中哲士

研究代表者：稲垣成哲

研究課題：科学系博物館におけるユニバーサルデザイン手法の開発と実践モデルの提案

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(A)

研究概要：各種科学系博物館におけるユニバーサルな課題を検討するとともに，その解決のためのデザイン手法を開発している。

本専攻研究者：稲垣成哲

研究代表者：杉本雅則（北海道大学）

研究課題：実世界センシングデータからの行動 - 学習モデルの構築と学習支援環境の設計

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：実世界センシングにより学習者の行動を常時取得し，構築される大規模時空間データを利活用するための研究を行っている。

本専攻研究者：川地亜弥子，赤木和重

研究代表者：三木裕和（鳥取大学）

研究課題：知的障害，発達障害の教育目標・教育評価に関する研究：資質・能力論の観点から

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：現代日本のコンピテンシー論について教育目標・評価研究を通じて批判的に検討する。本年度は特に理論的な研究を行った。

本専攻研究者：川地亜弥子，赤木和重，勅使河原君江

研究代表者：川地亜弥子

研究課題：日英における「意味深さの評価」の理論と実践に関する研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：日英の実地調査及び理論調査をもとに，意味深さの評価の理論と実践について検討した。

本専攻研究者：山口悦司

研究代表者：坂本美紀（本専攻研究者）

研究課題：市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシー教育モ

デル開発

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究（萌芽）

研究概要：市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシー教育モデルを開発した。

本専攻研究者：山下晃一

研究代表者：浜田博文（筑波大学）

研究課題：校長のリーダーシップ発揮を促進する制度的・組織的条件の解明と日本の改革デザイン

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(A)

研究概要：本研究は、校長のリーダーシップ発揮の促進要因を、校長職をとりまく制度的・組織的条件に焦点つけて実証的に解明し、とりわけ制度的・組織的条件の解明と整備＝システムアプローチの観点から日本における改革デザインを提示することを目的とする。

本専攻研究者：山下晃一

研究代表者：小野田正利（大阪大学）

研究課題：対応困難な保護者とのトラブル事例分析と紛争化の防止及び解決支援に関する学際的研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(A)

研究概要：本研究は、教育学・心理学・精神医学・社会福祉学・法律学などの学際的観点から、学校と地域をめぐる対応困難なトラブルの緩和と解決のためにケース分析を行い、学校管理職に焦点化したトラブルアセスメント・対応プランニングの開発を目指す。

本専攻研究者：山下晃一

研究代表者：白石陽一（熊本大学）

研究課題：高校の教科外活動に着目したグローバルなアクティブ・シティズンシップ教育モデル開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：本研究の目的は、教科外活動を中心としたグローバルなアクティブ・シティズンシップ高校教育モデルの開発・評価である。EU 生徒会連合やイギリス・アメリカのシティズンシップ研究の理論・実践をふまえ、日本の異なるタイプの教科外教育実践から、高校生のアクティブ・シティズンシップ育成をはかる教育モデルを析出する。

本専攻研究者（研究代表者）：山下晃一

研究課題：地方創生に資する若手教員支援・育成システムの存立要件に関する米英調査研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：研究概要：本研究は、近年の米国と英国で展開される“地域に根ざした若手教

員の支援・育成”を目指した制度の構築・運用の実態分析を通じて、地方創生に資する若手教員の支援・育成システムの存立をめぐる理論的・実践的示唆を得ることを目的とする。

本専攻研究者（研究代表者）：吉永潤

研究課題：社会参加の主体性と協働的問題解決能力を育成する未来創出型社会科授業の開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

課題概要：社会的事実に即して社会認識形成を図る社会科において「可能的事実」概念を位置づけ、不確実性をはらむ状況において学習者の協力的な問題対処を促す学習課題を設定し、それを通じて社会参加の主体性と協働的問題解決能力を育成する未来創出型社会科授業の開発と評価。

本専攻研究者：渡部昭男

研究代表者：坪井由実（北海道大学）

研究課題：公教育の共同統治を推進する分散型リーダーシップシステムと学習環境調査票の開発研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：学習環境調査結果に基づく四者による学校づくり会議のアクションリサーチを行った。対話プログラムにおける「アンケート」シートを開発するとともに、学習環境調査票の改善を図った。

本専攻研究者（研究代表者）：渡部昭男

研究課題：高等教育における経済的負担軽減及び修学支援に係る法・制度・行財政の日韓比較研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

概要：独自開発した「漸進的無償化プログラム（高等教育版）2017」の枠組みを用いて、経済的負担軽減及び修学支援に係る制度・行財政（国家政策・地方施策）を把握し、その意思決定過程を分析した。

本専攻研究者（研究代表者）：渡部昭男

研究課題：教育無償はどこまで進むのか！～「子育て・教育の社会共同化」を探ろう～

研究資金：科学研究費助成事業 研究成果公開発表(B)（ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI）

概要：科研費による学術研究を基礎として科学の興味深さや面白さを中学生・高校生を対象に分かりやすく発信する出前講座を、鳥取県南部町で開催し受講生に未来博士号を授与した。

本専攻研究者（研究代表者）：渡邊隆信

研究課題：新教育運動における「国際化」の進展と「郷土」形成論の相克に関する比較史的研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：英米独日の4か国における新教育の思想と実践を対象に，教育における「国際化」と「郷土」の関係性を一次史料に基づき実証的に解明した。

本専攻研究者：山口悦司

研究代表者：望月俊男（専修大学）

研究課題：ポスト真実社会の情報信頼再構築に向けた認識的能力育成に資する学習環境デザイン

研究資金：（公財）電気通信普及財団・研究調査助

研究概要：ポスト真実社会の情報信頼再構築に向けた認識的能力育成に資する学習環境デザインを開発した。

本専攻研究者（研究代表者）：吉永潤

課題名：社会科教育においてゲームの学習体験を事後の学びに生かすディブリーフィングの設計

研究資金：公益財団法人科学技術融合財団研究助成

課題趣旨：社会科学習におけるゲーム学習体験が「楽しさ」で終わり，必ずしも事後の学習に活用されない現状に対し，ゲーム後のディブリーフィングにおいてゲーム体験の活用を図る学習課題を設定し，ゲーム体験の事後活用促進を図るプログラムの開発と評価をした。

本専攻研究者：松岡広路，津田英二，村山留美子，稲原美苗

研究代表者（本専攻教員）：稲原美苗

研究課題：哲学プラクティスと当事者研究の融合：マイノリティ当事者のための対話と支援の考察

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：哲学・倫理学，当事者研究，ジェンダー学，社会教育学，環境リスク学などの領域の多様な知見を取り入れ，対話実践を支援に繋げることを目的とする研究である。

本専攻研究者：稲原美苗

研究代表者：村上旬平（大阪大学）

研究課題：障害者の親のQOLを高めるための歯科治療における包括的家族支援プログラムの開発

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究（萌芽）

研究概要：障害者歯科の利用者の保護者を対象とし，歯科学，臨床哲学，ジェンダー学，臨床心理学，社会福祉学，看護学の見地から家族支援のあり方を考察する学際的研究である。

研究代表者（本専攻教員）：津田英二

共同研究者：伊藤篤（甲南女子大学）・寺村ゆかの（神戸大学）・松岡広路（本専攻教員）・  
渋谷篤男（日本福祉大学）・中島真紀（認定NPO法人フードバンク関西）

研究課題：脆弱性をもつ子どもを見守るボランティアな組織の形成過程に関する実践的研究

研究資金：ニッセイ財団

研究概要：子どもの貧困への社会的関心の高まりによって生まれてきている市民の自発的な行動が、貧困のもつ多義的な性質の認知を深めながら、社会連帯を強め、市民協働による福祉社会を形成していく可能性とその過程を探求する実践的共同研究である。

研究代表者（本専攻教員）：津田英二

共同研究者：稲原美苗，清野未恵子，赤木和重，岡崎香奈，大田美佐子，松岡広路（全て本専攻教員）

研究課題：障害者の文化芸術活動の実践分析に基づくエンパワメント評価及び支援システム開発研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：障害者の文化芸術活動を対象として，1)それらがどのような効果をもたらえるものであるのか，2)その効果を把握する現実的な評価方法はいかなるものであるべきか，3)多様に展開されている障害者の文化芸術活動を社会や行政はいかに支援しえるか，という3点を明らかにする共同研究である。

本専攻研究者（研究代表者）：津田英二

共同研究者：吉田圭吾（本専攻教員）・赤木和重（本専攻教員），西堂直子（神戸大学附属特別支援学校），古本光男（神戸市教育委員会），簗内大介（兵庫県教育委員会）

研究課題：国立大学の教育資源を知的障害者に開放していく方策に関する実践研究

研究資金：文部科学省「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」

研究概要：障害者の生涯学習を推進していく文部科学省の施策に関わって，知的障害者に大学教育を開くことをめぐる理論的・実践的課題を明らかにしつつ，実際に知的障害者に対して大学教育プログラムを開発・実施する実践的なモデル開発研究である。

本専攻研究者：松岡広路

研究代表者：朴木佳緒留（神戸大学名誉教授）

研究課題：女性被災者の実感を活かした被災者支援の方法再構築

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：岩手県大船渡市赤崎町において被災地の小物づくりを行っている女性グループのヒアリングワークショップを行った。

(3) 国際共著論文 (Web of Science 収録論文)

Hokayem, H., Jin, H., & Yamaguchi, E. (2020). Feedback loop reasoning and knowledge sources for elementary students in three countries. *Eurasia Journal of Mathematics, Science and Technology Education*, 16(2), em1819. doi.0.29333/ejmste/112582

(4) 国際会議発表論文 (Web of Science 収録国際会議論文)

Iio, T., Sasaki, Y., Tokuoka, M., Egusa, R., Kusunoki, F., Mizoguchi, H., Inagaki, S., Nogami, T. (2019). Animal observation support system based on body movement: Hunting with animals in virtual Environment. *Proceedings of the 11th International Conference on Computer Supported Education, CSEDU 2019, Heraklion, Crete, Greece*, 421-427

Morita, T., Taki, Y., Iwatate, S., Kusunoki, F., Inagaki, S., Mizoguchi, H. (2019). AHIATO: Advanced system to enable human to play interactively with animated tokens. *CHI Play 2019: Extended abstracts of the annual symposium on computer-human interaction in play*. 565-571. doi:10.1145/3341215.3356279

Morita, T., Taki, Y., Iwatate, S., Kusunoki, F., Inagaki, S., Mizoguchi, H. (2019). Applying 3D range sensor to enhance children's experience of art. *Proceedings of International Conference on Sensing Technology (ICST2019)*, 111-115.

Saito, N., Kusunoki, F., Inagaki, S., Mizoguchi, H. Novel application of an RGB-D camera for face-direction measurements and object detection --Towards understanding museum visitors' experiences--. *Proceedings of International Conference on Sensing Technology (ICST2019)*, 120-123.

(5) 著書

吉永潤・近藤敦・豊田祐輔・宮脇昇 (編著) 『大学の学びを変えるゲーミング』晃洋書房, 2020年1月

(6) 論文

佐野孝, 国土将平, 近藤亮介, 上田恵子, 川勝佐希, 小学生における開脚跳び動作の熟達度の評価とそれに合わせた指導観点の検討, 84, 11-22, 2019 (査読あり)

萩原大河, 金山千広, 国土将平, インクルーシブ体育における指導体制と授業実践に対する教師の評価: A県における小学校の通常学級担任および特別支援学級担任の意識をもとに, *アダプテッド・スポーツ科学* 17(1), 3-13, 2019 (査読あり)

中橋葵, 岡部恭幸, 幼児期の豊かな数感覚につながる経験と保育者の援助を考える:—5 歳児の概念的サビタイジングの実態分析を通して—, 保育学研究 57(1), 6-16, 2019 (査読あり)  
目黒強「児童文学とジェンダー」の報告 (子ども社会研究の窓), 子ども社会研究(25), 173-183, 2019 (査読あり)

木下孝司, 保育実践と発達心理学 : 相互の学びあいに向けて (特集 保育と心理学 : 新しい関係を目指して) 心理学ワールド (85), 13-16, 2019-04 (査読なし)

江草遼平, 楠房子, 野中哲士, 稲垣成哲, 視線計測装置を用いた吹き出し型字幕提示法の視線移動量低減効果に関する有効性の検討, ヒューマンインタフェース学会論文誌, 21 (4), 381-390, 2019 (査読あり) doi:10.11184/his.21.4\_381

(7) 国際会議発表

Kokudo S, Sagawa T, Nakano T, Ueda K, Devkota B, Adhikari K, Acharya U, Growth standards of Brahman/Chhetri and Newar/Janajati in Nepal. SSHB 2019, Oxford Brookes University, 9 - 11 September 2019

Ueda K, Kokudo S, Standardization of foot growth curves for Japanese children aged 18-78 months, SSHB 2019, Oxford Brookes University, 9-11 September 2019

Kokudo S, Sano T, Kawakatsu S, Kondo R, Ueda K, Three-Year Longitudinal Transformation of Sprint Motion Caused by Awkwardness in Early Adolescence, 24<sup>th</sup> Annual Congress of the European College of Sport Science, Prague, 3-6 July 2019

Ueda K, Kokudo S, Devkota B, Foot Growth Characteristics of Nepali Major Ethnic Groups Children Aged 5-16 Years, 24<sup>th</sup> Annual Congress of the European College of Sport Science, Prague, 3-6 July 2019

Hasegawa R, Kitano S, Kokudo S, Okabe Y, The Impact of Using Monitoring Tool to Enhance the Understanding of Each Child's Development: Through Quantitative Content Analysis on Answers for Questionnaire Survey. The 20th PECERA International Conference, Taipei, 12-14 July 2019

Ueda K, Kokudo S, Seasonal Change of the Outdoor Play After School and Sleeping Habit During 2 Years in Japanese Preschool Children. The 20th PECERA International Conference, Taipei, 12-14 July 2019

Nakahashi A, Okabe Y, Learning Conceptual Subitizing Spontaneously in Play: Tangible Examples of Young Children in Japan. The 20th PECERA International Conference, Taipei, 12-14 July 2019

(8) 国際シンポジウムの企画・運営

Shohei Kokudo: Promotion of child health club, participation of children in school health activities, Prasarnmit Campus, Srinakharinwirot University, Bangkok, Thailand, 2019. 12. 21-22

(9) 教員の受賞

本専攻研究者：山口悦司

年月日：2019年9月22日

一般社団法人日本理科教育学会 日本理科教育学会賞

本専攻研究者：目黒強

『〈児童文学〉の成立と課外読み物の時代』（和泉書院，2019年）にて第43回日本児童文学学会奨励賞受賞

(10) 学び系講座の研究の総括と課題

学び系講座の各教員の研究領域の幅広さが研究成果にも表れている。国際共同研究と国内共同研究のそれぞれに進展があり，双方とも研究資金の獲得を伴って着実に進行している。今後の論文発表，共同研究成果発表等に結びつくことが期待される。

系講座を超えた学内の共同研究の組織に積極的であることも特徴として挙げられる。報告書では明示していないものの，学会等の役職を担う教員も多く，国内外の研究を支える重要な役割を果たしている。

教員個人の研究についても，2件の受賞があった。その他，各人がKUIDで報告しているように，著書（本報告書に掲載している単著のみでなく，共著，分担執筆），論文等の成果も着実に積み重ねてきている。

（人間発達専攻長 稲垣成哲）

### 7.7.2. 人間環境学専攻

本専攻では，多分野の教員が自身のテーマを発展させ，多彩な研究プロジェクトに従事することで，人間環境学と研究ネットワークの発展に貢献してきた。今年度時点で，本専攻研究者は，人間環境学に関する多様なプロジェクトを国内外で共同実施し，統括する役割をはたしている。また，それらの業績を論文や著書としてまとめ，報告している。

研究公表の内訳と数は，(1) 研究プロジェクト（代表者で，研究費総額200万円以上）計24件，(2) 国際共同研究 計12件，(3) 教員の受賞 計2件，(4) 国際共著論文 計11報，

(5)著書 計6報(単著1報, 共著5報), (6)WoS論文 計38報, (7)その他論文 計28報である。  
以下に, 本専攻研究者が展開する研究の概要と成果内容を紹介する。

(1) 研究プロジェクト(専攻研究者が代表者で, 研究費総額 200 万円以上)  
研究代表者(本専攻教員): 青木茂樹  
共同分担者: 中野敏行(名古屋大学), 連携研究者: 高橋寛(本専攻教員)  
研究課題: 気球搭載型エマルジョン望遠鏡による宇宙ガンマ線未解決課題の解明  
研究資金: 科学研究費助成事業 基盤研究(S)  
研究概要: 気球搭載型のエマルジョン望遠鏡を開発し, 天体などからのガンマ線観測を行う。

研究代表者(本専攻教員): 高橋寛  
研究課題: 宇宙高エネルギーガンマ線の偏光観測の開拓  
研究資金: 科学研究費助成事業 基盤研究(B)  
研究概要: 気球搭載型のエマルジョン望遠鏡を開発し, 天体などからのガンマ線観測を行う。

研究代表者(本専攻教員): 蘆田弘樹  
研究課題: CO<sub>2</sub>固定酵素ルビスコの機能発現最適化による光合成の機能改良  
研究資金: 科学研究費助成事業 基盤研究(B)  
研究概要: CO<sub>2</sub>固定酵素ルビスコの機能発現最適化を行い植物の光合成能向上を目指す。

研究代表者(本専攻教員): 蘆田弘樹  
研究課題: 光合成 CO<sub>2</sub>固定代謝の進化的分子基盤の解析  
研究資金: 科学研究費助成事業 挑戦的研究(萌芽)  
研究概要: 光合成生物の進化過程で CO<sub>2</sub>固定代謝経路がどのように確立された分子機構を解析する。

研究代表(本専攻教員): 丑丸敦史  
研究課題: 複雑な花形態が適応的になる生態学的条件の解明: 種間比較・群集間比較を通じた検討  
共同研究者: 石井博(富山大学), 岡本朋子(岐阜大学)  
研究資金: 科学研究費助成事業 基盤研究(B)  
研究概要: 複雑な形をした花(複雑花)が単純な形をした花(単純花)よりも適応的になる生態学的な条件を明らかにするため, 複数の草原群集を詳細に調べ検証する。

研究代表(本専攻教員): 丑丸敦史  
共同研究者: 平岩将良(農研機構)  
研究課題: 伊豆諸島における長口吻送粉者の不在が植物の繁殖に与える影響

研究資金：(公財) 市村清新技術開発財団・植物研究助成金

研究概要：長口吻送粉者が少ない伊豆諸島と長口吻送粉者が多い本州において、植物相が類似する海浜群集を対象とし、長口吻送粉者の不在による送粉者群集の訪花パターン変化が植物群集の繁殖成功や花形質の進化に与える影響を検証する。

研究代表者（本専攻教員）：高見泰興

研究課題：機械的生殖隔離による種分化：交尾器形態分化の要因と帰結

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：オオオサムシ類の多様な交尾器の遺伝発生、進化要因と、種分化への影響を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：高見泰興

研究課題：性的形質の緯度クラインをもたらす性淘汰の環境依存性の解明

共同研究者：Jong Kuk Kim (Kangwon National University, Korea), Jun Lark Kim (Uiduk University, Korea), Yong Hwan Park (Korea National Arboretum)

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：朝鮮半島産ツヤオサムシ類の交尾器形態の緯度クラインの成因を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：源利文

共同研究者：山中裕樹（龍谷大学）

研究課題：環境 DNA/RNA を利用した生物調査の新展開：水を汲んで生物の行動や状態を知る

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：環境中の核酸を用いた生物調査手法を用いて生物の行動や状態を知ることのできる新たな手法を開発する。

研究代表者（本専攻教員）：伊藤真之

研究課題：バーチャルリアリティ技術を利用した宇宙教育プログラムの開発と展開

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究（萌芽）

研究概要：バーチャルリアリティ技術を利用した宇宙教育プログラムを開発・展開する。

研究代表者（本専攻教員）：谷篤史

研究課題：局所的な自然放射線環境の復元に基づく表層型メタンハイドレート生成史の解明

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：局所的な自然放射線環境を復元するためのプログラムを開発し、メタンハイドレートの生成史解明を目指す。

研究代表者（本専攻教員）：大串健一

研究課題：急激な温暖化に対する深海生物の応答の研究：ベーリング海の底生有孔虫の解析

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：ベーリング海の見終氷期の底生有孔虫群集を解析し、深海底の環境変動と群集変遷を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：平山洋介

共同分担者：川田菜穂子（大分大学）

研究課題：超高齢・持ち家社会における住宅相続の増大と階層化

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究（萌芽）

研究概要：住宅相続による住宅・資産事情の階層化について、理論構築と実証分析を行う。

研究代表者（本専攻教員）：井上真理

研究課題：自動車、家電製品、日用雑貨等の人の手に触れる部材の触感評価の体系化

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：自動車、家電製品、日用雑貨など手に触れて用いられる材料の最終用途に応じた望ましい触感を生み出す材料特性の範囲を明らかにし、必要とされる触感の体系化・標準化を行い、材料・商品設計に結びつけることを目的としている。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Jaroslav Doležel, Petr Cápál (Institute of Experimental Botany, Czech Republic)

研究課題：Altered gene expression in alien plant chromosome introgression lines  
外来植物染色体添加系統における遺伝子発現の改変

研究資金：日本学術振興会 二国間交流事業共同研究

研究概要：異種の染色体が導入された状況で生じる、外来の染色体の構造変化、遺伝子の修飾変化とそれに関連する遺伝子のエピジェネティックな発現の改変を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤 真行

共同研究者：山本充（小樽商科大学）、林岳（農林水産政策研究所）、田畑智博（神戸大学）

連携研究者：栗山浩一（京都大学）、國井大輔（農林水産政策研究所）、山口臨太郎（国立環境研究所）

研究課題：国・地方公共団体における生態系勘定の導入に向けた研究

研究資金：環境省受託研究（環境経済の政策研究）

研究概要：2010年に名古屋で開催されたCOP10愛知目標に向けた生態系勘定の開発を行う。

研究代表者：大野朋子

共同分担者：大形徹（大阪府立大学）

研究課題：伝統的文化を背景とした植物利用が地域性の形成と地域環境に与える影響に関する研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：伝統的文化，特に宗教行事を背景とした植物利用が地域固有の景観形成にどのように寄与するかを解明するとともに，過剰な資源利用が地域環境に与える影響について論考する。

研究代表者（本専攻教員）：浅野慎一

研究課題：戦後日本の夜間中学とその生徒の史的変遷：ポスト・コロニアリズムの視座から

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：戦後日本の夜間中学とその生徒の変遷を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：浅野慎一

研究課題：中国残留日本人をめぐる「正義ある和解」の学的探究

研究資金：科学研究費助成事業 新学術領域研究(研究領域提案型)

研究概要：中国残留日本人をめぐる歴史問題について「正義ある和解」の可能性を学的に探究する。

研究代表者（本専攻教員）：澤宗則

共同研究者：南埜猛（兵庫教育大）

研究課題：空間的实践とエスニシティからみた在日インド人と在日ネパール人—戦術から戦略へ

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：在日インド人移民とネパール人移民を比較しながら，「空間的实践」（「戦術」から「戦略」への移行プロセスと，「戦術」の多様化や変化）を分析することにより，エスニシティと空間との関係性を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：太田和宏

研究課題：フィリピンの労働レジーム - グローバル資本主義下の自由化と伝統の接合

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：柔軟雇用，インフォーマルセクター，海外出稼ぎの接合した特異なフィリピンの労働構造について明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：岩佐卓也

研究課題：企業横断的労使関係の存立構造とその変容—ドイツを主な対象として

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：企業横断的な労使関係の存立構造を実証的・理論的に明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：井口克郎

研究課題：過疎・少子高齢社会下の介護領域における公私役割分担システムに関する研究

研究資金：科学研究費助成事業 若手研究(B)

研究概要：日本と諸外国のケア保障システムの比較から、現在日本で主流となっている公私・多セクター役割分担によるケアシステムの現状、課題と限界について考察し、それを克服できる人権保障としてのケアシステムのあり方（発展的具体像）を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：福田博也

研究課題：低コストで使い捨てが可能な歩行計測用スマートインソールの開発

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究（萌芽）

研究概要：「歩き方」や「走り方」を評価するために、市販の安価なセンサと他の材料を組み合わせて、低コストで使い捨てが可能な歩行計測用デバイスを開発する。

## (2) 国際共同研究

研究代表者（本専攻教員）：佐藤春実

共同研究者：Young Mee Jung, Yeonju Park (Kangwon National University, Korea)

研究課題：2次元相関分光法を利用した PHB ポリマーブレンドの分子間相互作用と高次構造の研究

研究概要：低波数領域と高波数領域のヘテロ2次元相関分光法を用いて、PHB /PVPhブレンドの分子間相互作用と高次構造を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤春実

共同研究者：Andrey Shukurov (Charles University, Czech Republic)

研究課題：低波数ラマン分光法を用いたポリマーナノ粒子の物理的特性の研究

研究概要：プラズマ重合によって様々なサイズのポリマーナノ粒子の合成に成功した。本研究ではその物理的特性について低波数ラマンスペクトルの温度変化測定を用いて解析した。

本専攻研究者（本専攻教員）：高見泰興

共同研究者：Jong Kuk Kim (Kangwon National University, Korea), Jun Lark Kim

(Uiduk University, Korea), Yong Hwan Park (Korea National Arboretum)

研究課題：朝鮮半島におけるオサムシ類の多様性と進化に関する研究

研究概要：気候変動に対するオサムシ群集の変動予測と、各種の地理的分化をもたらした生態的、歴史的要因の解明を行う。

本専攻研究者：谷篤史

共同研究者：塚本すみ子 (Leibniz Institute for Applied Geophysics), 竹内太郎 (The consortium for Guitar Research), 宮入陽介 (東京大学), 横山祐典 (東京大学)

研究課題：初期撥弦楽器に使われていたガット弦のESR年代測定と炭素年代測定

研究概要：初期撥弦楽器に使われていたガット弦が古楽器と同年代の弦であるかを調べるため、ESR年代法と炭素年代法を用いて調査する。

本専攻研究者 (本専攻教員)：源利文

共同研究者：Zhiqiang Liang (Hunan Fisheries Science Institute),

研究課題：中国におけるチュウゴクオオサンショウウオの分布および生態把握に関する研究

研究概要：国際自然保護連合のレッドリストでCRとして記載される希少種であるチュウゴクオオサンショウウオの分布及び繁殖状況などの生態を環境DNA分析等を用いて把握する手法を開発する。

本専攻研究者 (本専攻教員)：源利文

共同研究者：Tianxiang Gao (Zhejiang Ocean University),

研究課題：東シナ海における魚類の多様性にかかる研究

研究概要：中国有数の漁場である舟山付近の東シナ海における魚類の多様性を環境DNA分析等を用いて調査する。

本専攻研究者：伊藤真之

共同研究者：森浩二 (代表：宮崎大学), 上田佳宏 (京都大学), 中澤知洋 (名古屋大学), 松本浩典 (大阪大学), 馬場 彩 (東京大学), 岡島 崇, William Ann

Hornschemeier, W. Zhang (NASA/Goddard Space Flight Center) 他

研究課題：広帯域X線高感度撮像分光衛星 FORCE (Focusing On Relativistic universe and Cosmic Evolution) ミッションの検討

研究概要：巨大質量ブラックホールの宇宙論的進化の解明等を目的とした広帯域X線高感度撮像分光衛星 FORCE 計画の検討を行い、製作・打ち上げに向けて提案を行う。

本専攻研究者 (本専攻教員)：平山洋介

共同研究者：Misa Izuhara (Bristol University)

研究課題：超高齢社会における孤立・孤独と居住条件

研究概要：これまで社会学, 保健学, 社会福祉などの分野の対象であった孤立・孤独に関し, 居住条件の分析からアプローチする。

研究代表者 (本専攻教員)：近江戸伸子

共同研究者：Jaroslav Doležal, Petr Čápal (Institute of Experimental Botany,

Czech Republic)

研究課題：Altered gene expression in alien plant chromosome introgression lines  
外来植物染色体添加系統における遺伝子発現の改変

研究資金：日本学術振興会 二国間交流事業共同研究

研究概要：異種の染色体が導入された状況で生じる，外来の染色体の構造変化，遺伝子の修飾変化とそれに関連する遺伝子のエピジェネティックな発現の改変を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Kornsorn Srikulnath (Kasetsart University, Thailand)

研究課題：Development of nano-visualization for structural analyses of genetic materials and early infection process for further innovation of functional bio-nanotechnology

遺伝物質の構造および初期感染過程のナノ可視化法の開発によるバイオナノテクノロジーの新たな展開

研究資金：戦略的国際共同研究プログラム (SICORP)

研究概要：アジアに特有の生物種を材料に用い，細胞核および細胞分裂期に構築される遺伝物資の担体である染色体の構造についてナノ可視化法を用いて明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Astari Dwirant (Department of Biology, Faculty of Mathematics and Natural Sciences, Universitas, Indonesia)

研究課題：Chromosomes Inner Structure Study using High-resolution Electron Microscopy

高感度電子顕微鏡を用いた染色内部構造

研究資金：寄付金

研究概要：染色体の内部構造について，様々な陽イオンの状態を変化させて明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Misa Hayashida (NRC-NANO, National Research Council, Canada)

研究課題：3D observation of chromosome scaffold structure using electron tomography  
電子トモグラフィーを用いた染色体スキャホールド構造の3D観察

研究概要：染色体を構成するクロマチン軸構造について，位相差トモグラフィーを用いて明らかにする。

### (3) 教員の受賞

受賞者：源利文

受賞名：Limnology Excellent Paper Award

受賞対象：Limnology 誌掲載論文「A simple method for preserving environmental DNA in water samples at ambient temperature by addition of cationic surfactant.」

受賞日：令和元年 10 月 1 日

受賞理由：上記の論文で報告された環境 DNA 分析用のサンプルの新たな保管手法が環境 DNA 分野における基礎的な研究の 1 つとしてその波及効果は大きいと評価されたため

受賞者：高橋 寛

受賞名：神戸大学優秀若手研究者賞

受賞対象：エマルジョン望遠鏡による宇宙ガンマ線の観測（GRAINE 計画）をはじめとするこれまでの研究開発の成果に対して

受賞日：令和 2 年 1 月 16 日

#### (4) 国際共著論文（海外との研究）

1. Pleskunov P, Nikitin D, Tafiichuk R, Shelemin A, Hanus J, Kousal J, Krtouš Z, Khalakhan I, Kúš P, Nasu T, Nagahama T, Funaki C, Sato H, Gawek M, Schoenhals A, and Choukourov A (2020) Plasma Polymerization of Acrylic Acid for the Tunable Synthesis of Glassy and Carboxylated Nanoparticles, J. Phys. Chem. B, 124, 668–678.
2. Marlina D, Park Y, Hoshina H, Ozaki Y, Jung M, Sato H (in press) A study on blend ratio-dependent far-IR and low-frequency Raman spectra and WAXD patterns of poly(3-hydroxybutyrate)/poly(4-vinylphenol) using homospectral and heterospectral two-dimensional correlation spectroscopy, Analytical Science.
3. Marlina D, Hoshina H, Ozaki Y, Sato H (2019) Crystallization and crystalline dynamics of poly(3-hydroxybutyrate) / poly(4-vinylphenol) polymer blends studied by low-frequency vibrational spectroscopy, Polymer, 181, 121790.
4. Hu J, Wang J, Wang M, Ozaki Y, Sato H, Zhang J (2019) Investigation of crystallization behavior of asymmetric PLLA/PDLA blend using Raman Imaging measurement, Polymer, 172, 1–6.
5. Fornillos RJC, Sato MO, Tabios IKB, Sato M, Leonardo LR, Chigusa Y, Minamoto T, Kikuchi M, Legaspi ER, Fontanilla IK (2019) Detection of *Schistosoma japonicum* and *Oncomelania hupensis quadrasi* environmental DNA and its potential utility to schistosomiasis japonica surveillance in the Philippines, PLOS ONE, 14, e0224617.
6. Calata FI, Caranguian C, Mendoza JE, Fornillos RJ, Tabios IK, Fontanilla IK, Leonardo L, Sunico L, Chigusa Y, Kikuchi M, Sato MO, Minamoto T, Sato M, Baoanan Z (2019) Analysis of environmental DNA and edaphic factors for the detection of the snail intermediate host *Oncomelania hupensis quadrasi*, Pathogens, 8, 160.

7. Valko O, Labadessa R, Palpurina S, Burrascano S, Ushimaru A, Venn S (2019) Conservation and diversity of Palearctic grasslands – Editorial to the 5th EDGG special issue in *Hacquetia*, *Hacquetia*, 18, 143-146.
8. Tsukamoto S et al. (2020) ESR and Radiocarbon Dating of Gut Strings from Early Plucked Instruments, *Methods and Protocols*, 3, no.1, 13.
9. Kamata S et al. (2019) Pluto's ocean is capped and insulated by gas hydrates. *Nature Geosci*, 12, no.6, 407-410.
10. Phengchat R, Hayashida M, Ohmido N, Homeniuk D, Fukui K. (2019) 3D observation of chromosome scaffold structure using a 360° electron tomography sample holder. *Micron* 126, 102736.
11. Polosoro A, Enggarini W, Ohmido N (2019) Global epigenetic changes of histone modification under environmental stresses in rice root. *Chromosome Res.* 27: 287-298.

(5) 著書

単著

平山洋介 (2020) 『マイホームの彼方に——住宅政策の戦後史をどう読むか』 筑摩書房

分担執筆

1. Ushimaru A, Uchida K, Ikegami M, Suka T (in press) Grasslands and shrublands in Japan. In *The Encyclopedia of the World's Biomes* (eds.) Goldstein, M. I. & DellaSala, L. Elsevier, Oxford.
2. 井上真理 (2019) ナノファイバーの製造・加工技術と応用事例, 第10章 ナノファイバーの医療, 衛生材料への応用, 第7節 不織布の快適性評価 451-455 (技術情報協会) 技術情報協会
3. Sato M, Managi S (2019) “Public debt as a negative stock in sustainability indicator”, in Shunsuke Managi (ed), *Wealth, Inclusive Growth and Sustainability*, Routledge, pp.77-86.
4. 佐藤真行・新山陽子(2020) 食品購買時の提示情報量と消費者の選択行動. (新山陽子編著) *フードシステムの未来へ* (3) —消費者の判断と選択行動—. 昭和堂, 京都市山科区, 近刊
5. 浅野慎一 (2019) 「学ぶ都心—夜間中学にみる大阪」, 鯉坂学・西村雄郎・丸山真央・徳田剛編著『*さまよえる大都市・大阪*』 東信堂, pp. 279-294

(6) WoS 論文 (10%論文には, 文頭に\*を付す)

1. Jo T, Fukuoka A, Uchida K, Ushimaru A, Minamoto T (2020) Multiplex real-time PCR enables the simultaneous detection of environmental DNA from freshwater

- fishes: a case study of three exotic and three threatened native fishes in Japan, *Biological Invasions*, 22 (2), 455–471.
2. Takagi K, Hayashi T, Sawada S, Okazaki M, Hori S, Ogata K, Kato N, Ebara Y, Kaihatsu K (2020) SNP Discrimination by Toluene-Modified Peptide Nucleic Acids: Application for the Detection of Drug Resistance in Pathogens, *Molecules*, 25 (4), 769.
  3. Matsuhisa S, Ushimaru A (2019) Does sexual dimorphism exist in flowering phenology traits in anemophilous dioecious species?: a test with *Rumex acetosa*, *Amer. J. Bot.* 106, 1365–1364. 61.
  4. Katsuhara KR, Nakahama N, Komura T, Kato M, Miyazaki Y, Isagi Y, Ito M, Ushimaru A (2019) Development of microsatellite markers for the annual andromonoecious herb *Commelina communis* f. *ciliata* (Commelinaceae), *Genes Genet. Syst.* 94, 133–138. 59.
  5. Katsuhara KR, Ushimaru A (2019) Prior selfing can mitigate the negative effects of mutual reproductive interference between coexisting congeners, *Funct. Ecol.*, 33, 1504–1513.
  6. Wu Q, Takami Y, Minamoto T, Ishikawa T (2019) The life history with seasonal migration of the lacustrine shrimp *Palaemon paucidens* in an ancient lake in Japan, *Ecosphere*, 10, e02628.
  7. Sato Y, Mizuyama M, Sato M, Minamoto T, Kimura R, Toma C (2019) Environmental DNA metabarcoding to detect pathogenic *Leptospira* and associated organisms in leptospirosis-endemic areas of Japan, *Scientific Reports*, 9, 6575.
  8. Jo T, Arimoto M, Murakami H, Masuda R, Minamoto T (2019) Particle size distribution of environmental DNA from the nuclei of marine fish, *Environmental Science & Technology*, 53, 9947–9956.
  9. Horiuchi T, Masuda R, Murakami H, Yamamoto S, Minamoto T (2019) Biomass-dependent emission of environmental DNA in jack mackerel *Trachurus japonicus* juveniles, *Journal of Fish Biology*, 95, 979–981.
  10. Matsuhashi S, Minamoto T, Doi H (2019) Seasonal change in environmental DNA concentration of a submerged aquatic plant species, *Freshwater Science* 38, 654–660.
  11. Calata FI, Caranguian C, Mendoza JE, Fornillos RJ, Tabios IK, Fontanilla IK, Leonardo L, Sunico L, Chigusa Y, Kikuchi M, Sato MO, Minamoto T, Sato M, Baoanan Z (2019) Analysis of environmental DNA and edaphic factors for the detection of the snail intermediate host *Oncomelania hupensis quadrasi*, *Pathogens*, 8, 160.

12. Kakuda A, Doi H, Souma R, Nagano M, Minamoto T, Katano I (2019) Environmental DNA detection and quantification of invasive red-eared sliders, *Trachemys scripta elegans*, in ponds and the influence of water quality, *PeerJ* 7, e815.
13. Pleskunov P, Nikitin D, Tafiichuk R, Shelemin A, Hanus J, Kousal J, Krtouš Z, Khalakhan I, Kúš P, Nasu T, Nagahama T, Funaki C, Sato H, Gawek M, Schoenhals A, Choukourov A (2020) Plasma Polymerization of Acrylic Acid for the Tunable Synthesis of Glassy and Carboxylated Nanoparticles, *J. Phys. Chem. B*, 124, 668–678.
14. Marlina D, Park Y, Hoshina H, Ozaki Y, Jung YM, Sato H (in press) A study on blend ratio-dependent far-IR and low-frequency Raman spectra and WAXD patterns of poly(3-hydroxybutyrate)/poly(4-vinylphenol) using homospectral and heterospectral two-dimensional correlation spectroscopy, *Analytical Science*.
15. Marlina D, Hoshina H, Ozaki Y, Sato H (2019) Crystallization and crystalline dynamics of poly(3-hydroxybutyrate) / poly(4-vinylphenol) polymer blends studied by low-frequency vibrational spectroscopy, *Polymer*, 181, 121790.
16. Yamamoto S, Ohnishi F, Sato H, Hoshina H, Ishikawa D, Ozaki Y (2019) Low-Frequency Vibrational Modes of Nylon 6 Studied by Using Infrared and Raman Spectroscopies and Density Functional Theory Calculations, *J. Phys. Chem. B*, 123, 5368–5376.
17. Aoyama T, Sato H, Ozaki Y (2019) Crystallization of poly(3-hydroxybutyrate-co-3-hydroxyhexanoate) during melt extrusion promoted by residual crystals, *Polymer Crystallization*, e10076.
18. Hu J, Wang J, Wang M, Ozaki Y, Sato H, Zhang J (2019) Investigation of crystallization behavior of asymmetric PLLA/PDLA blend using Raman Imaging measurement, *Polymer*, 172, 1–6.
19. Nishimura F, Hoshina H, Ozaki Y, Sato H (2019) Isothermal crystallization of poly(glycolic acid) studied by terahertz and infrared spectroscopy and SAXS/WAXD simultaneous measurements, *Polymer J.*, 51, 237–245.
20. Fujisawa T, Sasabe M, Nagata N, Takami Y, Sota T (2019) Genetic basis of species-specific genitalia reveals a role in species diversification, *Science Advances*, 5, eaav9939.
21. Satomi D, Koshio C, Kudo S, Tatsuta H, Takami Y (2019) Latitudinal variation and coevolutionary diversification of sexually dimorphic traits in the false blister beetle *Oedemera sexualis*, *Ecology and Evolution*, 9, 4949–4957.
22. Nakanishi T, Hong W, Kuwahata K, Sugiyama S, Shimoyama S, Ohkushi K,

- Yamaguchi T, Park J-H, Park G, Nanayama F (2019) Radiocarbon age offsets of plants and bioclasts in the Holocene sediments from the Miyazaki plain, southeast coast of Kyushu, southwest Japan, *Radiocarbon*, 61, 1939-1950.
23. Tsukamoto S et al. (2020) ESR and Radiocarbon Dating of Gut Strings from Early Plucked Instruments. *Methods and Protocols* 3, no.1, 13.
  24. Kamata S et al. (2019) Pluto's ocean is capped and insulated by gas hydrates, *Nature Geosci.*, 12, no.6, 407-410.
  25. Dinh H, Nakata E, Lin P, Saimura M, Ashida H, Morii T (2019) Reaction of ribulose biphosphate carboxylase/oxygenase assembled on a DNA scaffold, *Bioorganic and medicinal chemistry*, 27(22), 115120.
  26. Abe K et al. (2019) Search for light sterile neutrinos with the T2K far detector Super-Kamiokande at a baseline of 295 km, *Phys. Rev.*, D99 no.7, 071103.
  27. Abe K et al. (2019) Search for heavy neutrinos with the T2K near detector ND280, *Phys. Rev.*, D100 (2019) no.5, 052006.
  28. Abe K et al. (2019) Measurement of the muon neutrino charged-current cross sections on water, hydrocarbon and iron, and their ratios, with the T2K on-axis detectors, *Prog Theor Exp Phys*, vol. 2019 (2019) no.09, 093C02.
  29. Agafonova N et al. (2018) Final results on neutrino oscillation parameters from the OPERA experiment in the CNGS beam, *Phys. Rev.*, D100 (2019) no.5, 051301.
  30. Rokujo H et al. (2018) Development of a balloon-style pressure vessel gondola for balloon-borne emulsion gamma-ray telescopes, *JINST*, vol.14 (2019) no.09, P09009.
  31. Kano K, Kudo M, Yoshizawa G, Mizumachi E, Suga M, Akiya N, Ebina K, Goto T, Itoh M, Joh A, Maenami H, Minamoto T, Mori M, Morimura Y, Motoki T, Nakayama A, Takanashi K (2019) How science, technology and innovation can be placed in broader visions - Public opinions from inclusive public engagement activities, 18(3), A02.
  32. Phengchat R, Hayashida M, Ohmido N, Homeniuk D, Fukui K. (2019) 3D observation of chromosome scaffold structure using a 360° electron tomography sample holder. *Micron* 126, 102736.
  33. Polosoro A, Enggarini W, Ohmido N (2019) Global epigenetic changes of histone modification under environmental stresses in rice root. *Chromosome Res*, 27: 287-298.
  34. Pachakkil B, Terajima Y, Ohmido N, Ebina M, Irei S, Hayashi H, Takagi H. (2019) Cytogenetic and agronomic characterization of intergeneric hybrids

- between *Saccharum* spp. hybrid and *Erianthus arundinaceus*, *Sci Rep*, 9: 1748.
35. Tabata T and Tsai P (2020) Fuel poverty in summer: An empirical analysis using microdata for Japan. *Science of the Total Environment* 703(10): 135058.
  36. Nakahara Y, Tabata T, Ohno T, Furukawa Y, Inokuchi K, Katagiri K, Hirayama Y (2019) Discussion on Regional Revitalization using Woody Biomass Resources as Renewable Energy. *International Journal of Energy and Environmental Engineering*, 10(2): 243-256.
  37. Tabata T, Onishi A, Saeki T, Tsai P (2019) Earthquake disaster waste management reviews: prediction, treatment, recycling, and prevention. *International Journal of Disaster Risk Reduction* 36: 101119.
  38. Ikeda K, Masuda H, Shirasugi (Kataoka) N, Honda S, Horie T, Ohmura N (2019) CFD Analysis of Effective Human Motion for Whipping Heavy Cream by Hand, *Chemical Engineering Transactions*, 75, 121-126.

(7) その他論文

1. Wu, Q., Kawano, K., Ishikawa, T., Sakata, M.K., Nakao, R., Hiraiwa, M.K., Tsuji, S., Yamanaka, H., and Minamoto, T. (2019) Habitat selection and migration of the common shrimp, *Palaemon paucidens* in Lake Biwa, Japan - an eDNA-based study, *Environmental DNA*, 1, 54-63.
2. Kano, K., Kudo, M., Yoshizawa, G., Mizumachi, E., Suga, M., Akiya, N., Ebina, K., Goto, T., Itoh, M., Joh, A., Maenami, H., Minamoto, T., Mori, M., Morimura, Y., Motoki, T., Nakayama, A., and Takanashi, K. (2019) How science, technology and innovation can be placed in broader visions? -Public opinions from inclusive public engagement activities-, *Journal of Science Communication*, 18, A02.
3. 今村彰生, 速水花奈, 坂田雅之, 源利文 (2019) 河川横断構造物とニジマスが北海道のイワナ属の生息に与える影響: 環境 DNA 分析の結果をもとに, *保全生態学研究*, 24, 71-81
4. Sakai Y, Kusakabe A, Tsuchida K, Tsuzuku Y, Okada S, Kitamura T, Tomita S, Mukai T, Tagami M, Takagi M, Yaoi Y, Minamoto T (2019) Discovery of an unrecorded population of Yamato salamander (*Hynobius vandenburghi*) by GIS and eDNA analysis, *Environmental DNA*, 1, 281-289.
5. 赤塚真依子, 高山百合子, 伊藤一教, 渡辺謙太, 桑江朝比呂, 大澤亮介, 森本哲平, 源利文 (2019) 海草場を対象とした環境 DNA の季節変化・日変化・形態変化に関する基礎研究, *土木学会論文集 B2 (海岸工学)*, 75 (2), I\_1075—I\_1080
6. 高山百合子, 赤塚真依子, 伊藤一教, 源利文 (2019) 環境 DNA を活用した固着性水生

- 生物モニタリング手法の成立性について, 土木学会論文集 B2 (海岸工学), 75(2), I\_1087—I\_1092.
7. Uchii K, Doi H, Okahashi T, Katano I, Yamanaka H, Sakata MK, Minamoto T (2019) Comparison of inhibition resistance among PCR reagents for detection and quantification of environmental DNA, *Environmental DNA*, 1, 359-367.
  8. Fornillos, RJC, Sato, MO, Tabios, IKB, Sato, M, Leonardo, LR, Chigusa, Y, Minamoto, T, Kikuchi, M, Legaspi, E.R., Fontanilla, I.K. (2019) Detection of *Schistosoma japonicum* and *Oncomelania hupensis quadrasi* environmental DNA and its potential utility to schistosomiasis japonica surveillance in the Philippines, *PLOS ONE*, 14, e0224617.
  9. 陈治, 宋娜, 源利文, 邬倩倩, 高天翔 (2020) 舟山近海水样环境 DNA 获取方法的建立, *水生生物学报*, 44, 1-7.
  10. Tsuji, S., Miya, M., Ushio, M., Sato, H., Minamoto, T., and Yamanaka, H. (2020) Evaluating intraspecific genetic diversity using environmental DNA and denoising approach: A case study using tank water, *Environmental DNA*, 2, 42-52.
  11. 源利文 (2019) 環境 DNA を用いた生物調査法の発展とその応用, *科学*, 89, 1029-1035.
  12. 平山洋介 (2020. 2) 「住宅セーフティネット政策の位置と性質について」『個人金融』(冬号)
  13. 平山洋介 (2019. 6) 「新自由主義の政策改革と公共賃貸住宅」『現代消費者法』第 43 号, 35-42.
  14. 平山洋介 (2019. 6) 「超高齢・持ち家社会における住宅相続の階層性について」『日本建築学会計画系論文集』84 (760), 1433-42.
  15. Morii S, Sakamoto K, Kataoka-Shirasugi N (2019) The Reverse Phenomenon in Water Absorption Rate in Japonica Rice Grains Caused by Long-term Soaking in Water at Different Temperatures, *日本調理科学会誌*, 52, 159-168
  16. 三浦加代子, 坂本薫, 中谷梢, 作田はるみ, 橘ゆかり, 岩城啓子, 升井洋至, 森井沙衣子, 川西正子, 堀内美和, 片平理子, 白杉 (片岡) 直子, 井奥加奈, 横溝佐衣子, 岸田恵津 (2020) 教員からみた小学校家庭科における炊飯実習の現状と課題, *日本調理科学会誌*, 53, 44-52
  17. Polosoro A, Enggarini W, Hadiarto T, Ohmido N Morphology changes of rice root nucleus under iron stress IOP Conf. Series: Earth and Environmental Science 383 (2019) 012008
  18. 高松優子, 福田博也 (2019) 圧力センサを用いた嚙下動作の検出, *電気学会論文誌 E*, 139-4, pp. 85-86
  19. 佐藤真行・栗山浩一・藤井秀道・馬奈木俊介 (2019) 日本における森林生態系サービスの経済評価. *統計数理*, 第 67 巻, 第 1 号, pp. 3-20.

20. 田畑智博, 縄井あゆみ, 大野朋子 (2019) ネパール地震における建物の復旧状況の調査, 環境科学会誌. 32(5): 164-168.
21. 森田紘圭, 大西暁生, 田畑智博 (2019) 水害時のがれき処理に対する地域負担に関する基礎的分析—多摩川流域における洪水発生時をケーススタディとして—. 環境科学会誌 32(4): 113-124.
22. 浅野慎一・佟岩(2020)「中国残留日本人二世の生活史と社会文化圏の形成(前篇)—中国での生活と日本への永住帰国」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』13-2 印刷中
23. 浅野慎一(2020)「夜間中学校とその生徒の史的変遷過程(前篇)—『60年の歩み 全国夜間中学校研究大会史料集成』を主な素材として」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』13-2 印刷中
24. 太田和宏 (2019) 開発協力大綱と日本の外交戦略——内向きな「国益」追求『アジア・アフリカ研究』 59- 3, pp. 60-77
25. 井口克郎 (2019) 『『全世代型社会保障』と介護労働者の処遇問題』『住民と自治』 No. 678, 自治体研究社, pp. 19-22
26. 井口克郎 (2020) 『『全世代型社会保障』における医療・介護分野の改革動向の問題点』『月刊全労連』 No. 277, pp. 12-19 橋本直人(2019)現代正義論の陥穽としての正戦論. 唯物論と現代 61, 34-51.
27. 橋本直人(2020) マックス・ウェーバーとルドルフ・シュタムラーの論争について. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 13(2), 印刷中
28. 澤宗則 (2020) インド人 IT 技術者とインド人コミュニティ, 『移民・ディアスポラ研究』8, 印刷中

(人間環境学専攻長 近江戸伸子)

## 8. 産官学共同・地域連携による教育・研究活動

### 8.1. 産官学共同プロジェクト

(1)兵庫県や龍野市からの依頼により, 保健師や管理栄養士などの健康教育の専門職を対象に, 行動変容に注目した保健指導に関する研修会を開催した。引き続き来年度に向けて, 兵庫県との連携を深め保健指導の研修会開催方法について検討を行った。この活動は, アクションリサーチとして研究につなげている。

(人間発達専攻 加藤佳子)

(2)三田市からの依頼により, 住民を対象として心の健康に関する健康教育を行った。

(人間発達専攻 加藤佳子)

(3)大阪府の依頼により, 「聴覚に障がいのある子どもと保護者の相談支援ネットワーク事業」に携わり, 新生児聴覚スクリーニング検査(要再検査)後, ならびに確定診断後の赤ちゃん

と保護者への早期支援のあり方について、福祉、医療、教育のネットワークを構築してきた。

(人間発達専攻 河崎佳子)

(4)大阪府手話言語条例評価部会長として、手話言語によるバイリンガルろう教育を行っている現場（フランスのポアティエとトゥールーズ）を視察、また、「大阪府手話言語条例シンポジウム」（2019年11月30日）を企画し、「きこえない子どもの手話獲得と、手話で学び、手話を学ぶことの大切さ」について、医学、教育学、言語学、心理学等の視点から学際的な討論の場をコーディネートし、報告集を編集した。

(人間発達専攻 河崎佳子)

(5)神戸大学 e スポーツ研究会キックオフシンポジウムの開催

概要：人間発達環境学研究科、医学研究科の教員と広報課が連携し、e スポーツに関するシンポジウムを開催した。関西プレスクラブと共催し、メディアや企業関係者、自治体職員、他大学の研究者など約60人が参加し、神戸大学が新しい研究分野開拓に挑戦していることをアピールできた。本シンポジウムには、国際交流運営資金、人間発達環境学研究科研究科長裁量経費、奨学寄附金（株式会社AZ）の助成を受け、NTT 東日本より機材提供による後援を得た。開催日は、2019年11月20日。場所は、神戸大学梅田インテリジェントラボラトリであった。共催・後援等：関西プレスクラブ（共催）、株式会社AZ（後援）

(人間発達専攻 秋元忍)

(6)兵庫県三木市と神戸大学とが協定を結んで 2012 年度から連携事業（教育関連としては「次世代育成プロジェクト事業」）を行ってきたが、その期間終了後も継続して、本研究科から「確かな学力向上プロジェクト」に参画している。2019 年度には、三木市学力向上推進委員会の開催（2012 年度から継続／渡部：委員長，山下：副委員長），三木市学力向上サポート事業の継続（市立 8 中学校の校区を順次指定。2018-19 年度指定＝三木東中学校区の 1 中 2 小の 3 校が 2 年次を迎えて研究発表会を開催（吉永：三木東中学校助言者）。2019-20 年度指定＝は別所中学校・志染中学校区の 2 中 4 小が初年次の研究に着手。），学習の見通しを自分でつくる「[たしかなまなび] みっきいすてっぷ」の実用化，タブレットの導入，ひょうごがんばりタイム（放課後における補充学習等推進事業）の拡充，重点指導資料の活用，学習指導案データベースの運用，家庭学習啓発リーフレットの配布などがなされた。

(人間発達専攻 渡部昭男・山下晃一・吉永潤)

(7)国立教育政策研究所・所外研究委員として、「幼児期からの育ち・学びとプロセスの質に関する研究」に携わり、幼児期から児童期にかけて同じ幼児・児童を継続的に調査することにより、幼児期から児童期への教育の意義や幼児期の教育・保育の質がその後の育ちと学びに与える影響などについて基礎的な知見を得る。

(人間発達専攻 北野幸子)

(8) グローバルサイエンスキャンパス ROOT プログラム

国立研究開発法人科学技術振興機構のグローバルサイエンスキャンパス（GSC）事業の支援（2017-2020 年度）を受け、神戸大学が兵庫県立大学、関西学院大学、甲南大学と共同で、高校生等を対象に実施する ROOT プログラムについて、サイエンスショップが事務局を務め、運営の中核を担った。GSC 事業は、将来グローバルに活躍しうる科学技術人材を育成することを目的とし、大学が、地域で卓越した意欲・能力を有する高校生等を募集・選抜し、国際的な活動を含む高度で体系的な理数教育プログラムを開発・実施することを支援する。地域の教育委員会、先端的研究機関等ともコンソーシアムを形成し連携している。

（人間環境学専攻 伊藤真之）

(9) 株式会社クオルテック、他数社との共同研究 戦略的基盤技術高度化支援事業「ペプチド核酸を用いた高感度・オンサイト利用可能な家畜感染ウイルス検出システムの開発」

我が国の畜産現場における、豚流行性下痢 (PEDV)、豚コレラ、口蹄疫、鳥インフルエンザといったウイルス性伝染病を迅速にモニターするため、本研究では、化学修飾核酸とイムノクロマト法を組み合わせることにより、畜産現場で PEDV ウイルスの存在を目視で検出できる迅速検査キットの開発を行った。

（人間環境学専攻 江原靖人）

(10) Kobe Studio Seminar

Studio Phones と数理情報環境論が産学連携で実施する少人数と分野横断などをコンセプトとするセミナー活動である。2019 年度は、20 件の講演等のセッションを実施した。

（人間環境学専攻 長坂耕作）

(11) パナソニック株式会社アプライアンス社 おしゃれ着の風合い劣化メカニズムに関する研究

新規洗濯手法等により洗濯を行った衣類（おしゃれ着）の風合い等の劣化抑制メカニズムを解明することを目的とした。編物の劣化メカニズムについて、仮説に基づいた風合い測定方法の定義を再度行うとともに、衣類に機械力を繰り返し発生させる試験系と試験条件を決定し、劣化メカニズムの仮説検証を行った。

（人間環境学専攻 井上真理）

(12) パナソニック株式会社アプライアンス社 タオルの風合い評価に関する研究

新規洗濯手法等により洗濯乾燥を行ったタオルの風合い、触感・風合いの評価を確立することを目的とした。タオルの評価項目の定量化手法の開発及び信頼性の高い定量値の確立のために、タオルの物理特性の測定条件を決定し、風合いの各指標の定量値の算出、風合いの定量値と定性値の整合性の解明を行った。

（人間環境学専攻 井上真理）

(13)株式会社カネカ 再生コラーゲン繊維を用いた生地 of 風合いに関する研究  
再生コラーゲン繊維を用いた生地 of 風合いに関する特性評価を行い、肌着等の用途開発につなげることを目的とした。再生コラーゲン繊維を用いた生地 of 力学特性、表面特性、接触冷温感等の特性評価を行い、風合いの評価を行うとともに用途開発を試みた。

(人間環境学専攻 井上真理)

(14)環境省 国・地方公共団体における生態系勘定の導入に向けた研究  
生物多様性条約第10回締約国会議 (COP10) で採択された愛知目標1および2を念頭に置いて、生態系サービス評価と生態系勘定の作成による生態系サービスの可視化および主流化を目指した研究を行った。将来の生態系サービス評価に関わる時間割引、空間的スピルオーバーの評価に関わる空間割引など、新しい課題に取り組んだ。

(人間環境学専攻 佐藤真行)

## 8.2. 地域連携プロジェクト

### (1)手話言語のあふれる早期支援の実践

公益社団法人大阪聴覚障害者協会と大阪府が連携・協力して実施する乳幼児期手話言語獲得支援事業「こめっこ」(日本財団助成事業)のスーパーヴァイザーとして、月2回大阪市内(府立ドーンセンター)で開催される活動の企画、運営に携わってきた。併せて、親子間の愛着形成、ろう児のアイデンティティ形成、手話言語獲得といった観点から研究を展開し、特殊教育学会でのポスター発表、自主シンポジウム開催を行った。

(人間発達専攻 河崎佳子)

### (2)障害児の感覚運動指導実践

神戸市総合児童センターと神戸松蔭女子学院大学と連携・協働し、障害のある子どもと家族を対象とした感覚運動指導教室PRIMEを神戸市総合児童センターにて開催した。計12組の家族を対象とした1クール14回の計2クルールの継続指導や、次期活動希望者を対象とした教育相談等、本学や神戸松蔭学院大学の学部生・大学院生および地域の心理職とともに実践とその効果検証を行った。

(人間発達専攻 山根隆宏)

### (3)重度重複障害児の感覚運動指導実践

神戸市総合児童センターと神戸松蔭女子学院大学、姫路大学と連携・協働し、重度重複障害児とその家族を対象に、神戸大学名誉教授中林稔堯主催で「チャレンジルーム」を神戸市総合児童センターにて開催した。本学の学部生・大学院生も参加し、年3回ほど重度重複障害児への感覚運動指導を行った。

(人間発達専攻 山根隆宏)

(4)兵庫県の音楽療法士卒後教育モデルの開発

兵庫県音楽療法士会の顧問として、研修会（「脳梗塞後遺症の失語症患者対象の音楽療法」と題し、疾病に関する知識および音楽療法の事例紹介とリハビリ現場における音楽の使い方についての講義）とスーパーヴィジョンを、兵庫県福祉センターで行った。また、兵庫県音楽療法士会の役員と密接に連携しながら、県内の実習場所を開拓した。

（人間発達専攻 岡崎香奈）

(5)兵庫県立芸術文化センター所蔵「薄井憲二バレエ・コレクション」企画展・常設展

同コレクションのキュレーターとして、企画展2回、常設展6回を開催。GSP国内研修「キュレーションサポートプログラム：薄井憲二バレエ・コレクション展」とも連携。世界でも有数の規模を誇るコレクション資料の中から、同センターで開催される公演に関連する内容などを選定し、バレエや芸術による地域振興、普及事業を展開した。

（人間発達専攻 関典子）

(6)自然学校は、兵庫県下の公立小学校5年生を対象とした4泊5日以上自然体験活動で、教育施策として昭和63年に開始され、平成3年度からは県下の全公立小学校で実施されている。その中核施設である県立南但馬自然学校には調査研究委員会が設置され、教育効果の検証、保護者意見収集、プログラムの開発について、実証的な研究を行っている。現在、報告者が本委員会の委員長として参画しており、研究成果を本施設の研究紀要として報告している。令和元年・2年度の研究テーマは「五感を使った自然にふれる体験活動が参加児童に及ぼす影響について」で、児童の自然体験をより深化させるプログラムの開発に従事している。

（人間発達専攻 高見和至）

(7)健やかで安心して暮らせるまちの実現を目指し、灘区鶴甲地区で、住民同士のつながりづくりを支援する取り組みを行っている。具体的には、つながりづくりの場として、大学の資源を活用した地域イベント「アカデミックサロン」を月1回程度開催している。このプロジェクトは、自治会や住民ボランティア等の協力を得ながら進めている。

（人間発達専攻 原田和弘）

(8)2004年に第1回大会として始動し、今後は日本の「フィールド・オブ・ドリームス」として、全国200万人と推計される元高校球児による各地域でのOB/OG野球クラブの活性化、生涯スポーツとしての野球文化の発展、熟年（マスターズ）世代と共に、現役高校球児を含めたユース世代にも応援メッセージを発信しながら、活力と夢に満ちた個人・地域・社会・未来への創造と発展に寄与していくことを目指している。

（人間発達専攻 長ヶ原誠）

(9)大阪府私立幼稚園連盟と連携し、幼児教育の質的向上をめざし、幼稚園における教育実践への指導助言、教員の研修、保護者に対する講演を行った。

(人間発達専攻 北野幸子)

(10)福井県私立幼稚園・認定こども園協会と連携し、幼児教育の質的向上をめざし、幼稚園における教育実践への指導助言、教員の研修、保護者に対する講演を行った。

(人間発達専攻 北野幸子)

(11)尼崎市教育委員会と連携して、既存の資料を活用するとともに、性格特性などの調査を実施し、生育環境や教育環境が子供の諸能力、機能の発達にどのような影響があるかを検証している。

(人間発達専攻 北野幸子、國土将平)

(12)兵庫県教育委員会と連携して、小学生と中学生を対象とした体力アップサポート事業の運営、企画、モデル事業の選定・表彰を行っている。加えて、兵庫県の児童生徒の体力の実態を調査し、経年的変化傾向や、体力に影響を及ぼす要因について研究を行った。

(人間発達専攻 國土将平)

(13)ESD グローカルネットワーク推進プロジェクト

学び系の教員が中心となって、国連大学の ESD 推進組織 RCE (Regional Centers of Expertise on ESD) の事務局として認証されたヒューマン・コミュニティ創成研究センターを拠点に、持続可能な開発 (SD) に関連する阪神間の NPO、企業、行政などのローカルネットワーク化支援、世界約 130 か所の RCE とのグローバルネットワークの構築支援を行ってきた。「RCE 兵庫-神戸 (ESD 推進ネットひょうご神戸)」の現段階での構成員は、80 を超えている。

(人間発達専攻 清野未恵子)

(14)ESD ユースネットワーク推進プロジェクト

SDGs 推進のカギとされるユース (35 歳未満：国連定義) の国内外のネットワーク化を促進するため、2 月に国内 RCE 実務者会議におけるユースカンファレンスを実施した。ESD プラットフォーム WILL から選抜された院生 3 名、学部生 4 名が、カンファレンスの企画・調整・運営を行い、日本国内のユースが SDGs 時代においていかに世界に貢献していくかが協議された。本専攻の教員 2 名が、他専攻教員の協力も得ながら、神戸大学を中心とした ESD ユースネットワークの組織化を支援した。

(人間発達専攻 松岡広路・清野未恵子)

(15)第 4 回 ESD 実践研究集会の開催

2016 年より、ESD に関連する実践者・研究者の情報交換、課題研究の探究、共同研究の創成

の場として、ヒューマン・コミュニティ創成研究センター主催の「ESD 実践研究集会」を開催してきた。本専攻教員5名が中心的な役割を果たしている。本年度は、2019年9月22, 23日の二日間、人間発達環境学研究科の学舎で開催し、約200名の参加を得た。大会テーマは、昨年度に引き続き、SDGs（持続可能な開発目標）とESDの関係を問うことに定められた。

（人間発達専攻 松岡広路・清野未恵子・津田英二・稲原美苗）

#### (16)ESD ボランティアぼらばんの実践支援

本研究科と連携協定を結んでいる国立ハンセン病療養所邑久光明園での、学生やOBによるボランティア活動プログラムを企画・支援している。当園の納涼祭、わくわく保養ツアー、入居者ランチ交流会、文化祭などでの運営補助、岡山県虫明行業協同組合との連携による海岸清掃などを内容とする宿泊型ボランティアプログラムの企画立案・効果検証などを行った。

（人間発達専攻 松岡広路・清野未恵子）

#### (17)東日本大震災公民館支援プロジェクト

2011年3月11日に発災した東日本大震災被災地、岩手県大船渡市赤崎町における復興のまちづくり支援活動を、8年来、継続している。本年度は、同町の「赤崎復興市」（住民の六次産業体験の場、年5回）や3月の「赤崎安全訪問隊」での慰霊碑整備とともに、赤崎中学校と地域まちづくり組織の協働による防災学習プログラムの企画・運営をサポートした。また、赤崎町地区公民館において持続可能な開発を実現するまちづくりのための住民ワークショップなどを企画した。人間環境学専攻の教員らと共に、本専攻の松岡広路教授が中心となっている。

（人間発達専攻 松岡広路）

#### (18)子育て支援拠点モデル開発

神戸市との連携による「のびやかスペースあーち」の日常的な運営を通して、「ドロップイン・サービス」「ペアレンティング・セミナー」「赤ちゃんふれあい体験学習」などを引き続き実施した。その他、地域子育て応援プラザ灘、灘区公立保育園、園田学園女子大学、灘区歯科医師会、各種NPO法人、社会福祉法人との連携・協働によって、多様なプログラムを展開した。

（人間発達専攻 津田英二）

#### (19)子どもの居場所づくりモデル開発

神戸市の委託によって「子ども居場所づくり」事業を実施し、灘区連合婦人会との連携・協力によって、子ども食堂、学習支援など、さまざまな課題をもつ人びとが集まり、相互支援の場の提供を行った。また、「都市型中間施設」概念の生成を契機とした施設も出る開発を展開した。

（人間発達専攻 津田英二）

(20) 知的障害者に大学教育を開く実践研究

文部科学省の委託によって、知的障害者 10 名を聴講生として受け入れ、授業を展開した。この事業推進にあたって連携協議会を組織し、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、神戸大学附属特別支援学校と連携した。

(人間発達専攻 津田英二)

(21) 自然共生地域支援プロジェクト

神戸大生と高校生が交流する機会として、「獣がい対策の多様な担い手研修会」に学生を誘い、参加してもらった。また、その研修会の集大成として、「第 1 回獣害フォーラム」を開催し、その会の運営をともにおこない、野生動物管理に携わる様々な業種の方と交流する機会を設けた。

(人間発達専攻 清野未恵子)

(22) 千種川流域の環境保全・モニタリング活動

サイエンスショップのコーディネートにより、千種川流域圏で活動するグループ「千種川圏域清流づくり委員会」による環境モニタリングの取組「千種川一斉水温調査」(8 月)に対して、総合地球環境学研究所および兵庫県立大学の研究者とともに協力・支援を行った。この取組みには、神戸大学学生も参加している。

(人間環境学専攻 伊藤真之・大串健一)

(23) 小学生を対象とした理科実験教室の開催

神戸市立鶴甲小学校 PTA の依頼を受け、同小学校児童を対象とした理科実験教室を 7 月に開催し、78 名の児童が参加した。実験の一部を学生グループが企画・実施した他、運営にも参加した。

(人間環境学専攻 伊藤真之)

(24) 市民グループ等による科学コミュニケーション活動への支援

サイエンスショップを通じて、伊丹市、姫路市、南あわじ市などの市民グループ、および公益財団法人ひょうご科学技術協会等による、サイエンスカフェを中心とした科学コミュニケーション活動に対して、広報、企画・実施などを通じて協力した。

(人間環境学専攻 伊藤真之・大串健一)

(25) 植物性廃棄物起因のセルロースから作成される各製品の要求特性評価方法の確立

公益財団法人ひょうご環境創造協会の助成を受け、神鋼リサーチ(株)の調査協力を得て、関西の中小企業と共同で、地球温暖化対策に資する低炭素化に貢献するために、植物性廃棄物起因のセルロースによる資源化モデルの確立をめざすプロジェクトに参画した。

(人間環境学専攻 井上真理)

## 9. 社会的活動・震災復興支援

### 9.1. メンタルケア関係

#### (1) 心のケア事業

神戸大学 2019 年度震災復興支援・災害科学研究推進活動サポート経費として採択された「東日本大震災の心理的影響と支援のあり方に関する継続的研究」の資金を活用して、福島県中通り地区などで以下の事業を行った。

##### ①教員等に対するセミナー・助言指導

福島県北養護教諭部会の冬季研修会（12月25日／福島県立福島南高校）：「東日本大震災後における福島の不登校状況：東日本大震災の被災と不登校の関連」について講習を行うとともに、各教員が抱えている関連問題について議論と助言指導を行った。

②高校への出前授業（11月6日／福島県立福島工業高校）：震災後人口流動が大きい環境では違法薬物に接触する機会が多いことから、定時制生徒及び保護者を対象に薬物乱用防止に関わる授業を行った。

#### (2) 情報発信活動

これまでの事業や調査で得られた成果を以下の学会などで発信した。

①ECDP（ヨーロッパ発達心理学会）第19回大会（8月29日-9月1日／ギリシャ・アテネ）

②神戸大学震災復興支援・災害科学研究推進室第8回シンポジウム（1月22日／神戸）

③日本発達心理学会第31回大会（3月17日-19日／大阪，ただし会場への参集はなし）

東日本大震災の心理的影響について、被災当時福島在住者（現在まで移転なし／移転あり）と震災時東京在住者のサンプルを比較しながら、震災が及ぼす生き方の変化などについて情報発信をした。③では現在福島県で被災者支援に関わっている福島大学教員から福島の現状と今後について報告も得た。

（人間発達専攻 齊藤誠一）

### 9.2. 災害地への支援活動

#### 東日本大震災復興支援 岩手県大船渡市赤崎町

2011（平成23）年3月11日に津波によって大きな被害を受けた岩手県大船渡市への復興支援は、今年度で9年になる。今年度も、本学教員（人間発達専攻2名，人間環境学専攻1名），学生（のべ40名），他大学学生（上武大学5名），卒業生（のべ10名），社会人（5名）をメンバーとする複数のボランティアプログラムを実施した。

具体的には、5月，6月，7月，9月，11月，年5回の定期訪問と，3月のコロナウイルスの感染拡大を配慮した「赤崎安全訪問隊」（NHK全国放送等で紹介された）である。定期訪問の主な活動は，同市赤崎町で行われている「赤崎復興市」の支援，災害公営住宅や高台移転住宅への見回り活動であるが，今年は，赤崎中学校と現地まちづくり組織をつなぐコーディネート活動を行った。建物が全壊し2019年に高台に移転・新築された赤崎中学校の生徒たちは，全員が被災の経験があるものの，復興の過程にはほとんど参加していない。同中学校の校長・教諭と，われわれが相談し，防災学習のプログラムを現地まちづくり組織である「赤崎復興隊」と連携して企画実施することができた。参加生徒数は約50

名で、赤崎復興隊やわれわれとともに、復興市の準備として草引きや机・椅子の運びだし、テントの設営などを行い、復興市の当日（11月16日）も、地域の人々やわれわれとともに野菜、小物、手作り食品の販売、たこ焼きづくり、接客などを行った。活動した生徒たちの「まちの発展に貢献したい」という笑顔での一言は、このまちの未来に希望を与えてくれるものであった。

3月の「赤崎安全訪問隊」は、新型コロナウイルスの蔓延に配慮し、当初予定していた大規模なボランティアプログラムを中止し、その代わりとして実施されたものである。教員1名、院生3名が神戸-大船渡間をレンタカー（ワンボックスカー）に乗り込み、できるだけ他者と接触せずに、3月11日の慰霊の日に被災住民が参拝できるような準備をすることを目的とした。現地ではテント泊で住民とはできるだけ接触しないように配慮した。慰霊碑の周辺の清掃・花の飾りつけを一部の住民と行った様子が、3月10日夕方のNHKのTVニュースで報じられ、11日には住民が大勢慰霊碑に手を合わせに来られたようだ。新型コロナウイルスの騒ぎの中「自粛」という内的な感覚を制御しようとする社会的圧力に対して、本活動の母体は、大船渡ESDプロジェクトおよびESDプラットフォームWILLのメンバーであるが、彼らが「自分たちで考え、みずからの責任で行動する」というボランティアの原点を考え直すきっかけになったようだ。

現在、大船渡市では、防災集団移転、災害公営住宅移転、防潮堤建設などが終わり、復興道路も工事段階に入り、ハードの整備はほぼ終わりかかっている。それに伴い、教育・福祉・医療の仕組みも徐々に正常に戻りつつあって、社会の基本的な枠組み、いわば「外形」は復興してきたように見える。しかし、津波によって失われた人の活力、町のコミュニティの力は、いまだ「戻ってきた」とはいいがたい。「復興疲れ」と言われて久しいが、漸減的な活力の低下が見て取れる。公民館活動の減少、地域自治会の弱体化、婦人会などの地縁組織の解体、人口減少による学校の統廃合、より現象的には地域祭りや各種地域行事の不開催などがある。

こうした現状のなかで、9年間つむいできたご縁は、きわめて大切なものとなる。学生らの存在が、被災住民の地域活動への意欲を呼び起こし、あるいは、これからの新しい住民の力をまちづくりにつなげる媒体になっていく。赤崎のまちづくりが順調に進むには、まだまだ時間が必要である。外部からの資本（人的・物的・アイデア・社会関係）なしには、その継続的な発展は、到底、望めない。いかに、被災地と外部地域の関係を切り結ぶのか、あるいは、ESD（持続可能な開発のための教育）が被災地支援のなかに立ち現れるには、どのような取組が求められるのかをテーマとしたアクションリサーチを、今後も続けていく。10年目の2020年度は、本年度に芽吹き始めた新しいまちの力を絶やすことなく支えるべく、節目の年として活動をさらにブラッシュアップさせていく覚悟である。

また、最後に付言すると、このボランティアプログラムは、本学名誉教授の朴木佳緒留の科研費『女性被災者の実感を活かした被災者支援の方法再構築』、本大学院院生人間発達専攻博士課程長田真の心理学会での奨励研究の取得にも貢献するものとなっている。

（人間発達専攻 松岡広路）

## 10. 附属施設

### 10.1. 発達支援インスティテュート

#### 10.1.1. 発達支援インスティテュート運営委員会

本委員会は青木茂樹発達支援インスティテュート長（研究科長）、松岡ヒューマン・コミュニティ創成研究副センター長、相澤直樹心理教育相談室長、伊藤真之サイエンスショップ室長、国土将平教育連携推進室長、片桐恵子アクティブエイジング研究センター長、及び近藤徳彦先端融合研究環コーディネーターで構成される。また、中野下勉事務課長も出席した。

今年度も本委員会を毎月1回のペースで開催し、研究科としての研究基盤の強化を図ると同時に、毎回各室・センターの活動報告を定例化し相互の連携を強めた。特に、2019年度年次計画にも挙げている「SDGsに関わる活動」及び『Well-Being 研究拠点』シンポジウムに係る検討を行った。

なお、本委員会の検討事項は以下のとおりである。

|             | 検討事項  |
|-------------|---|
| 第1回（5月9日）   | 1. 2019年度人間発達環境学研究科年次計画；発達支援インスティテュート関連の確認<br>2. 平成32年度発達支援インスティテュートに係る評価について   |
| 第2回（6月28日）  | 1. 2019年度年次計画を踏まえた対応について  |
| 第3回（8月2日）   | 1. 2019年度年次計画を踏まえた対応について（SDGsに関わる活動）<br>2. 『Well-Being 研究拠点』シンポジウムについて  |
| 第4回（9月24日）  | 1. 2019年度年次計画を踏まえた対応について（SDGsに関わる活動）<br>2. 『Well-Being 研究拠点』シンポジウムについて  |
| 第5回（10月25日） | 1. 2019年度年次計画を踏まえた対応について（SDGsに関わる活動）<br>2. 「未来世紀都市学」（“Well-Being 研究拠点”）合同シンポジウムについて                                   |
| 第6回（11月22日） | 1. 2019年度年次計画を踏まえた対応について（SDGsに関わる活動）<br>2. 「未来世紀都市学」（“Well-Being 研究拠点”）合同シンポジウムについて                                   |
| 第7回（1月31日）  | 1. 2019年度年次計画を踏まえた対応について（SDGsに関わる活動）<br>2. 「持続可能な開発目標(SDGs)」に対する全学での取組<br>3. 「未来世紀都市学」（“Well-Being 研究拠点”）合同シンポジウムについて |
| 第8回（3月27日）  | 1. 新型コロナウイルス関連での対応について<br>2. 2019年度年次計画を踏まえた対応について（SDGsに関わる活動）  |

「未来世紀都市学」(“Well-Being 研究拠点”)合同シンポジウムの詳細については、次に示す。

「未来世紀都市学」(“Well-Being 研究拠点”)合同シンポジウム

テーマ：Well-being と未来世紀都市学

ーレジリエント社会をめざしたヒューマンネットワークの構築ー

日時：2月6日(木)14時～16時30分

場所：神戸大学瀧川記念学術交流会館「大会議室」

主催：神戸大学先端研究融合環未来世紀都市学研究ユニット「Well-being 研究拠点」

神戸大学大学院人間発達環境学研究科「発達支援インスティテュート」

神戸大学大学院保健学研究科「アジア健康科学フロンティアセンター」

コーディネーター：近藤徳彦教授(神戸大学大学院人間発達環境学研究科)

和泉比佐子教授(神戸大学大学院保健学研究科)

講演：

増本康平准教授(神戸大学 大学院人間発達環境学研究科)

「高齢期の Well-being と 人とのつながり」

稲場圭信教授(大阪大学 大学院人間科学研究科 共生学系)

「地域資源と科学技術による 減災・見守り」

千葉理恵教授(神戸大学 大学院保健学研究科 看護学領域)

「災害後の人々への支援 ～人と人とのつながり～」

瀬藤乃理子准教授(福島県立大学 災害心の医学講座)

「2つの震災から学んだ今後の災害への備え ～心のケアの視点から～」

(発達支援インスティテュート長 青木茂樹)

### 10.1.2. 心理教育相談室

心理教育相談室は、市民を対象とし、地域に開かれた相談室である。臨床心理学や心理療法に関する知見を生かして、地域の人々の心の健康に貢献することを目的としている。同時に、当相談室は、本研究科人間発達専攻臨床心理学コースが臨床心理士養成第Ⅰ種指定校としての認可を維持するために必要な実習機関であり、コース所属の学生たちの臨床訓練の場として機能する目的を有している。平成12年度に総合人間科学研究科の附属施設として設立され、平成17年度からは同研究科附属発達支援インスティテュートの一部門に位置づけられた。心理教育上のさまざまな問題について、臨床心理学の立場から専門的な援助を提供する活動を行っている。年間を通じて開室し(年末年始、夏季の休室期間を除く)、カウンセリング、プレイ・セラピーなどの心理療法を中心に、必要に応じて心理テストを実施するなどの心理臨床実践を行っている。相談は有料である。相談内容は、幼児期・児童期に家庭や学校でみられる発達教育上の問題、青年期のアイデンティティ形成に絡む課題、成人期のメンタルヘルス、熟年期の家族関係や生き方に関することなど、

多岐にわたっている。

また、平成 30 年度より本学研究科人間発達専攻博士課程前期課程こころ系講座臨床心理学コースにおいて、国家資格である公認心理師の養成が始まり、心理教育相談室はその実習の一部を引き受けている。心理教育相談室に所属する臨床相談員が実習指導者となり、公認心理師のカリキュラムに指定された実習時間（450 時間以上、そのうち心理に関する支援を要する者等を対象とした心理的支援等 270 時間以上）の一端を担う役割をしている。なお、心理教育相談室における研修生の面接担当時間の確保等、今後公認心理師カリキュラムに対応するための対策が重要な課題の一つとなってくるものと思われる。

相談室の組織構成、ならびに相談システムについては以下のとおりである。

心理教育相談室は、心理教育相談室運営委員会により管理運営される。委員会の構成員は、運営委員会委員長の発達支援インスティテュート長（研究科長）をはじめ、相談室長、副相談室長、ほか 2 名の委員からなる。また、本年度の相談室スタッフは、教員 5 名（臨床心理学コース担当、臨床心理士、公認心理師）、博士後期課程こころ系 A 講座院生 3 名、前期課程臨床心理学コース院生 25 名（M1：12 名、M2：13 名）、修了生 1 名、事務補佐員 1 名である。

新規の相談申込みは、基本的に電話受付によって行われている。この受付業務も、臨床心理学コースの授業「臨床心理基礎実習」の一環となっており、修士課程 1 年（M1）の学生たちが相談室スタッフの一員として交代で臨んでいる。受付時間は、月曜日の午後 1 時～2 時 45 分、火曜日～金曜日の午後 1 時～6 時（いずれも祝日は除く）である（年末年始、夏季のお盆期間は閉室）。毎年 30 件弱の新規相談申込みがあり、受理面接、インテークカンファレンスを経て面接受理、担当者、継続面接の形式等が決定される。年間相談件数は、平成 22 年度以降おおむね 800 から 1000 件程度で推移しており、地域住民の心の健康に貢献する心理相談機関として、ならびに、臨床心理士養成に関わる実習機関として適切な程度の活動実績を保持している。なお、詳細な面接受付件数、面接受理数、面接回数等は年次報告資料編に掲載するとおりである。

平成 22 年度より心理教育相談室は、年 1 回『神戸大学大学院発達支援インスティテュート心理教育相談室紀要』を発刊しており、院生たちに心理臨床の実践研究をまとめる場を提供している。今年度第 10 号は、事例研究論文 4 篇、相談室主催子育て支援セミナー報告、相談室活動報告、相談員・研修生活動報告から構成される。なお、掲載された 4 篇の事例研究論文の題目は以下の通りである。

- ・ 鈴子温子 母との関係に苦しみ、生きる意味を模索する母親との面接
- ・ 中田愛美・吉田圭吾 理想像から解放され、悩みを実感し始めた高校生男子との面接
- ・ 西恭平 自分なりの生き方を模索するが、母親に抗いきれない 20 代女性との面接
- ・ 安岡勇輝・吉田圭吾 自己評価が低いために他者の意見に揺さぶられ、子どもと関わる自信をなくした母親との面接

また、平成 28 年度から、発達支援インスティテュート HC センターとの共同で「サテライト施設のびやかスペース・あーち」において、一般の子育て中の保護者を対象とした「心

理教育相談室子育て支援セミナー」を開催している。4回目となる今回は、「マイノリティを生きる子どもの心と支援」と題して、心理教育相談室の臨床相談員4名が講師となり、「こらぼ・あーち」にて11、12月に計4回開催され、延べ37名の参加があった。セミナーの担当講師、日時、講演内容は以下のとおりである。

- ・令和元年11月21日（木）10：45～12：15 LGBTQの子どもを理解する—多様な生き方を受け入れること 講師：吉田圭吾教授
- ・令和元年11月29日（金）10：45～12：15 周りの子となじめない子ども達について 講師：伊藤俊樹准教授
- ・令和元年12月5日（木）10：45～12：15 特異な感覚世界を生きる子どもたち—感覚処理からみる子どもの困難と手立て 講師：山根隆宏准教授
- ・令和元年12月6日（金）10：45～12：15 きこえない・きこえにくい子どもたちの心・ことば・家族 河崎佳子教授

（心理教育相談室長 相澤直樹）

### 10.1.3. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

#### (1) ジェンダー・コミュニティ支援部門

一人一人が日常生活の中で抱えているさまざまな問題やを共に考える対話のコミュニティ（一般的に「哲学カフェ」と呼ばれている）を創成する試みをしてきた。それらの問題を「マジョリティ」の立場ではなく、むしろ「マイノリティ」の立場に立って考えていこうとする臨床哲学的な実践を行い、多様な側面から一人一人の「語り」の地平を拓き、全ての支援にかかわる営みには欠かせない「生きづらさ」の哲学を探究する。男女間の格差やセクシャリティに関する差異などについて考える上で、社会のさまざまな場所で潜在的に問題となっていることを、社会の中で生きている人々との対話を通して掘り起こし、問いを作り、ゆっくりじっくり考察すること、つまり、哲学的実践に取り組んでいる。例えば、ジェンダーやセクシュアリティの問題をはじめ、医療、介護、福祉、教育、テクノロジー、環境などについて、それらの問題に常に関わっている人々との対話実践を行う中で「何が問題であるのか」を吟味することを重視してきた。2019年度中にジェンダー・コミュニティ支援部門が開催して4つの活動について報告する。

#### 1. 「ジェンダーや身体の多様性について考えるメルロ＝ポンティ現象学研究会」

2019年度、当該研究会を計6回（4/20, 6/8, 7/13, 8/14, 11/2, 2/11）開催した。メルロ＝ポンティ研究者である松葉祥一氏（同志社大学）を招き、主に、『知覚の現象学』の輪読を行いながら、ジェンダー、看護、介護、生老病死、身体、表現などをテーマに、参加者全員で対話をした。現象学的アプローチを用いた研究にの意義についても議論を重ねた。本学の学生、院生、教員、他大学の院生や教員の方々、そして一般の方々も参加し、ジェンダーや現象学を中心に掘り下げて議論を続けてきた。現象学などの専門書の読解に並行して、医療、看護、介護、ダンス、気功などの実践者や専門家た

ちと対話をする中で、それぞれの「生きられた経験」を考察した。さらに、私たちの経験、身体の動き方、感情などを詳細に記述する現象学的アプローチを行うことで、生老病死のライフステージにいる一人一人の当事者の社会的・心理的な状態の理解と支援のあり方について考えた。

2. 「WACCA 女性やシングルマザーと子どもたちの居場所」(神戸市長田区)での哲学カフェ NPO 法人「女性と子ども支援センターウィメンズネット・こうべ」が運営している WACCA の支援者(主にスタッフ・ボランティア)が対象の哲学カフェを隔月のペースで開催した。2019 年度は 4 回(5/12, 7/27, 10/19, 1/25)開催した。この哲学カフェプロジェクトは、WACCA の代表である茂木美知子氏と大阪大学 CO デザインセンターの特別講師をしている高橋綾氏と共に企画・運営している。さらに、2019 年度は、フリーランスで活動されている編集者であり、多くの Zine を制作してきた太田明日香氏をお招きし、『私』を表現する～文章を書いて自分と向き合う～ワークショップ』を 3 回(7/28, 9/29, 11/4)開催した。太田氏は、『愛と家事』というエッセイ集を 2018 年に出版し、他人には相談しにくい自分の悩み、母親との関係、結婚や離婚、家族のことなど「私」から見た世界や経験を赤裸々に綴った。WACCA の利用者や支援者の方々に「私」を表現することの重要性、それらを文章化するノウハウ、そして、Zine のまとめ方などを太田さんにレクチャーしていただいた。2019 年 12 月に『Herstory』というタイトルで WACCA の Zine を刊行した(印刷経費は WACCA が負担)。「私」を表現することを通して、「生きづらさ」を抱えている女性たちや支援者たちが自らを受け止めて、表現することによって、エンパワメントの機会を提供できた。WACCA と繋がり始めた当初は、女性・子ども支援を行う場所で哲学カフェやワークショップを開催するということを考慮し、スタッフやボランティアなど支援者間のジェンダー意識を高めるのが目的だったが、回数を重ねることによって、スタッフやボランティアの方々(哲学カフェの参加者の大半が女性であり、WACCA の元利用者、ワークショップの参加者は女性限定)が自らの問題(家庭や職場での生きづらさやジェンダー問題など)を他の参加者と共有し、語り合い、そして、ともに考える「居場所」へと変容してきた。支援者のエンパワメントが利用者のエンパワメントへつながり、女性、特に、シングルマザーとその子どもたちの居場所づくりや様々な支援を構築していくプロセスにとって、ピアサポート的な哲学カフェやワークショップの果たした役割は大きかったと言えよう。今後も継続していく予定である。(WACCA での哲学カフェやワークショップは科研費研究の一環として実施した。)

3. 「のびやかスペースあーち」でのジェンダー・コミュニティを考える哲学カフェ  
神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設「のびやかスペースあーち」を使って、ジェンダーや時事問題などをテーマにし、誰もが気軽に考えられるように哲学カフェを企画・運営している。このプロジ

エクトは、大学院生や学生に開かれた環境を作り、ジェンダー問題を多角的に考える機会を提供すると同時に、哲学カフェのファシリテーションスキルを習得できる学びの場としても機能していくことを目標にしている。地域の住民の方々、「のびやかスペースあーち」の利用者の方々が参加しやすいように、毎回、テーマ設定に工夫をしている。2019年度は、大学院生や学生に対話実践の企画・運営に携わってもらった。今年度は、哲学カフェを6回開催した（うち2回はあーちの利用者（子育て中の母親）に限定）。開催日、テーマ、参加人数を下記の表にまとめておく。

| 開催日         | テーマ                                   | 参加人数（スタッフ） |
|-------------|---------------------------------------|------------|
| 2019年4月13日  | 家族（あーちの利用者限定）                         | 8（1）       |
| 2019年5月18日  | 男らしさ・女らしさ                             | 19（2）      |
| 2019年6月15日  | 感覚とイメージ                               | 28（4）      |
| 2019年8月29日  | ワンオペ（あーちの利用者限定）                       | 8（1）       |
| 2019年9月21日  | 絵本 de てつがくカフェ<br>ヨシタケシンスケ著『りんごかもしれない』 | 14（2）      |
| 2019年11月16日 | 皆が参加しやすい場とは？                          | 6（2）       |

このプロジェクトの哲学カフェは、2のWACCAの哲学カフェとは異なり、誰でも参加でき、日常生活の中にあふれている（普段あまり深く考えない）問いについて、少し立ち止まって考えてみようという試みであり、異世代間交流をしながらジェンダーを考えるグローバルな視野をもてるように市民の学びの場を構築していくことを目的にしている。なお、本プロジェクトは、本学GSPの研修型プログラム（国内フィールド学修）として学生を受け入れている。今後も、大学院生や学生の力を借りながら、「哲学カフェ」の実践を続けていきたい。

（担当 稲原美苗）

## （2）社会教育・サービスラーニング支援部門

2017年4月のヒューマン・コミュニティ創成研究センター（以下、HCセンター）の組織変更によって、新たに「社会教育・サービスラーニング支援部門」が創設された。この部門は、文字通り、学校教育以外のノンフォーマルな教育（社会教育）の教育原理・方法の探究と、ノンフォーマル教育だからこそつ開拓性・斬新性・柔軟性・実際性を学校教育と連動させる「サービスラーニング」の在り方の探究を、実践研究のターゲットにおく部門である。

一般に、社会教育は、学校教育以外の組織的な教育活動と理解されるが、本部門では、制度化されていない幅広い教育的な活動（インフォーマル・エデュケーション）を視野に入れ、「いかに新しい教育が立ち現れるのか？」を問いとする実践的な研究も課題とする。すなわち、社会的活動のなかで「教育らしきもの＝学び」が立ち現れ、ノンフォー

マル教育として輪郭をもち、その過程で制度化された教育（フォーマル教育）としての学校教育と連動して教育的効果が高まっていく、という教育生成の流れを、全体構図とする。

それゆえ、「ボランティア」「エンパワメント」「インクルージョン」「アンラーニング」「対話」「共生」「ネットワーキング」「ソーシャルアクション」「持続可能な開発」など、他の部門で注視されるキーワードは、本部門においても重要となる。教育生成の全体の流れを意識したうえで、多様な領域を視野にいれながら、各キーワードを基盤とした実践・研究の連環の様態を探究することが、本部門の使命である。

現在は、こうした全体構図を否が応でも意識することになる「ESD（持続可能な開発のための教育）」をターゲットに、HCセンターの他部門との連携・協力のなかで研究的実践を展開している。ESDは、持続可能な開発という理想を実現するうえで生起する、さまざまな社会的課題間の葛藤・矛盾を教材とする新しい教育である。「ESDがいかに立ち現れるか」を問いとしてモデル実践を組み立て、ESD実践の理論化を図ることを目標としている。

具体的には、以下の5つの実践フィールドをもつ。

#### ①ESD ネットワーキング支援事業

国連大学認証組織（RCE 兵庫 - 神戸：「ESD 推進ネットひょうご神戸」）の組織化・企画創出の過程におけるアクションリサーチ（参与観察・関与観察など）を主とする。「自然共生地域支援部門」「インクルーシヴ社会支援部門」「国際開発実践支援部門」などのHCセンターの他の部門及び発達支援インスティテュート「サイエンスショップ」と連携しつつ、環境系・福祉系・国際開発系・まちづくり系などの多様な市民・企業・行政組織が互いの活動ベクトルを接近・交差させる過程や、協働的活動のコーディネート の在り方、及び、その過程での学習プロセスの特徴を解明する。

本年度のRCEの主な活動は、ESD グローカルスタディーツアープログラム、ESD カフェ、第4回ESD 実践研究集会の実施であった※。

※「(4) 自然共生地域支援部門」参照

#### ②ESD プラットフォーム「WILL」創成事業

これは、HCセンターが主催・支援する高校生・大学を中心とするESD関連事業（「ESD ボランティアぼらばん」「大船渡ESDプロジェクト」など）の人的・物的資源の流動化を促進する時空間づくり、すなわち、プラットフォーム創成の過程を企図する事業である。「大船渡ESDプロジェクト」は、その支援母体が「ボランティア社会・学習支援部門」から「社会保障・ソーシャルアクション支援部門」へと移り、「ESD 学び隊」は、「自然共生地域支援部門」が主たる支援母体となっているが※、これらと本部門が所管する「ESD ボランティアぼらばん」が、実質的に一元的な動きするようになることを企図する事業である。2017年度末に3部門の間で協議され、今年度より本格的に実施の運びとなった。こうしたプラットフォーム化のなかで、あるいは、その結果として、学生などの若者だけではなく関係者すべてにESDが立ち現れることが期待される。このプロセスから

ESD 実践に必要な条件を輪郭化しようとするものである。

※「(4) 自然共生地域支援部門」「(6) 社会保障・ソーシャルアクション支援部門」参照。

### ③ESD ボランティア育成事業

2006 年に開始した「ESD ボランティアぼらぼんプロジェクト」は、当初、新しい福祉教育・ボランティア学習の場として構想された。ワークキャンプ方式の意味をさぐるなかで、フィールドワーク・ワークショップを実験的な組み合わせで配置し、参加者のエンパワメント・アンラーニングのプロセスとその生成条件を探究するアクションリサーチである。

本年度は、6 月のオリエンテーションプログラムからはじまり、ボランティア誘い合い WEEKS、福島被災家族支援活動、ハンセン病療養所ボランティア活動、夏のワークキャンプ、1 月のスタディツアープログラムなどを実施し、学習者の学びのプロセスについてのデータ収集を行った。

### ④ESD フォーマル教育推進事業（フォーマル教育×ノンフォーマル教育）

神戸大学のフォーマルカリキュラムとして 2006 年に設立された ESD サブコースのカリキュラム・授業内容を実験的にデザインすることを主とするアクションリサーチである。

第 1 学年に配当される「ESD 基礎 A」「ESD ボランティア論」は、上記のノンフォーマルな ESD 事業との連動の中でデザインされている。ESD が立ち現れるサービ斯拉ーニングの在り方、および、その教育が ESD を推進する実践者育成に及ぼす効果を、比較的自由度の高い高等教育において探究することをめざしている。ESD 総合コーディネーターの協力の元、学習者の学びのプロセスをデータ化した。

### ⑤ESD 社会教育・生涯学習支援促進事業

これまでも神戸市・堺市・岸和田市などの生涯学習に関する施策策定に ESD を位置づける活動を行ってきた。あるいは、いなみ野学園（高齢者大学校）のカリキュラムの変更のなかで ESD を位置づけるために指導助言を行ってきた。今年度は、神戸市教育振興基本計画に ESD を位置づけるべく、同策定委員会に参加している。

以上の 5 つの活動を通して、ESD としての教育の形成過程の研究、すなわち、教育哲学論、学習論、主体論、方法論の各視座から ESD とは何かを探究する研究を行ってきた。

（担当 松岡広路）

### (3) インクルーシヴ社会支援部門

A. 2005 年度よりヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設として開設している「のびやかスペースあーち」において、「子育て支援をきっかけにした共に生きるまちづくり」の実践を継続して行った。特に力を入れて実施したのは①毎週金曜日の夕方から夜にかけて実施している「よる・あーち」、②「あーち博物館」である。

「よる・あーち」は、2006 年度より実施している「あーち居場所づくり」を基盤として、

2016 年秋から開始したプログラムである。神戸市の「子どもの居場所づくり事業」の助成を受け、灘区連合婦人会との連携で、学習支援、子ども食堂、遊び、交流の 4 つの活動を柱とした複合的な場づくりである。さまざまな困難（主に社会性の問題、学力の問題、障害の問題など）をもつ子どもや家庭の支援に関心の中心に置き、その他にも障害のある青年や成人など、多様な課題を抱える人たちが、市民や学生と相互に学び合う状況を創出している。教育・研究・社会的実践の三つ巴の活動で、毎週 60 名前後の人たちが集まる。研究面としては、日本生命財団の委託研究を受託しており、「よる・あーち」に集う市民や学生と共に参加型調査研究チームによる活動を行い、研究成果報告書『子どもの居場所づくり「元気の出る調査」キット』を編集・刊行した。また、「よる・あーち」をフィールドとして、赤木和重准教授との共同研究「ユーモア的即興から生まれる表現の創発：発達障害・新喜劇・ノリツッコミ」を実施した。

「あーち博物館」は、多様な住民が地域文化創成を介して関係形成する実践として、「のびやかスペースあーち」開設当初から実施しているプログラムである。また、本プログラムは発達科学部の博物館学芸員課程の「学内実習」に位置づき、実習生が展示の方法や展示の社会的意義などを学ぶ機会となっている。本年度は、9 月に社会福祉法人たんぼぼ、彫刻家・舞台芸術家の協谷紘氏との協働で「Flower」（空間アートの世界）を実施した。

B. 文部科学省受託により、知的障害者に大学教育を開く実践研究を行った。10 月～2 月に知的障害者 10 名を聴講生として受け入れ、その成果に基づき報告書『神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム』を編集・刊行した。

C. 学内の交流ルームに 2008 年度に設置されたカフェ・アゴラの運営に携わり、障害者雇用及び実習のモデル開発を継続した。

D. 障害児の放課後保障の観点から 2008 年度から開始したインクルーシブな学童保育の支援を継続して行った。

E. 知的障害者のセルフ・アドボカシーグループの支援として、新聞編集支援を継続的に実施した。毎月 1 回の編集活動を支援し、12 月に第 22 号「フレンド新聞」を発行した。

（担当 津田英二）

#### （4）自然共生地域支援部門

本部門では、自然と共生した地域社会の実現を目的として農村部等をフィールドにアクションリサーチ型の研究を行っている。本年度は主に以下の 4 つの内容を中心に研究・実践に取り組んだ。

##### 1) 地縁型・テーマ型コミュニティを基盤とした獣害対策の推進

###### ・地縁型コミュニティによる放棄柿収穫イベントの実施支援

野生動物による農作物および生活被害は「獣害問題」と呼ばれ、全国各地で様々な対策がなされている。兵庫県丹波篠山市畑地区では、人里に慣れた野生動物と地域住民との棲み分けを目標に、放棄柿を早期収穫し野生動物の集落への出没を防ぐ取り組みが 6 年前から行

われている（さる×はた合戦）。この取り組みは都市農村交流や、地域住民の獣害対策に関する情報共有の場としても活用されており、今年度も運営実施を支援した。参加者数もほぼ毎年同数で推移しており、6年間を通して、現代も柿取りのニーズはあり、それが続くことが明らかになった。また、地域の方々のみでほぼイベントの運営が可能であることも明らかになった。

・高校生らによる獣害問題への理解促進と実践者の育成

本部門では、NPO 法人里地里山問題研究所と連携し、野生動物を「害」と考えず、住民にとってプラスの存在に変えていく対策（＝獣がい対策）を全国に発信している。今年度は、昨年度に引き続き丹波篠山市にある県立東雲高等学校および鳳鳴高等学校の高校生を対象とした「獣がい対策」実践塾を実施支援し、シカ・イノシシ・サルの対策それぞれについて学び、高校生らが獣害問題に関わる仕組みを考案した。7/20, 8/31, 9/28, 10/27, 12/11 の5回の研修会を経て、12/14～15 に開催された第2回獣がいフォーラムで成果を発表した。参加者の学年は1年～2年生で、担当の先生方からも好評のプログラムであった。フォーラムを終えた高校生からは実際に自分たちで企画したツアーを実践したいという意気込みも聞いており、実践塾を単年度の事業として終えるのではなく、継続的に高校生が関われる事業とすることが課題である。

2) 自然を生かした子育て・子育て拠点施設の運営支援

兵庫県丹波篠山市の「おとわの森子育てママフィールド～petit prix（以下、プティプリ）」は、旧味間認定こども園おとわ園舎を活用して平成28年7月に設立された地域子育て支援施設である。当施設の周囲には、子どもたちのために地域住民がボランティアに整備を行ってきた森林がある。こうした自然を生かした子育て拠点としての可能性も期待されている。そこで、自然環境を生かした子育て・子育ての環境づくりのための学びの場として「ツキイチ勉強会」を2年前からコーディネートしている。勉強会の目的は1)プティプリの新規利用者層の開拓、2)子育て中の親の興味関心を広げることが意識した学びの場づくりである。「ツキイチ勉強会」の参加者数は昨年度とほぼ同様であった（以下の表を参照）。テーマや講師についてはスタッフの意見を聞きながら選定しているが、リピーターとなる参加者がみられるようになり、この勉強会での交流を通じたプティプリ利用者とスタッフとのつながりの強化も成果としてあげられる。

■ 2019年度ツキイチ勉強会のラインナップ

| 日     | タイトル                          | 講師                    | 参加人数 |
|-------|-------------------------------|-----------------------|------|
| 5/31  | 子供の育ちトークカフェ「就学前後の子どもの発達とその支援」 | 伊藤篤（甲南女子大学教授）         | 16人  |
| 6/28  | 雨ふりあじさいペンダント～ちぎってまぜて色遊び～      | 山中詩子（遊びワークショッププランナー）  | 18人  |
| 7/8   | 子どものこころに寄り添う～こどもとのコミュニケーション～  | 寺村ゆかの（神戸大学人間発達環境学研究科） | 20人  |
| 8/5   | 音羽の森探検！！～音羽の滝を見に行こう～          | 金坂尚人（NPO法人S-space）    | 22人  |
| 9/13  | 消費と生産を考える～買い物かごが世界を変える～       | 齋藤優子（コープこうべ）          | 13人  |
| 10/18 | ミュージック・セラピー体験                 | 岡崎香奈（神戸大学人間発達環境学研究科）  | 16人  |
| 11/8  | 多様な性を親・大人がどう受け入れるか？           | 稲原美苗（神戸大学人間発達環境学研究科）  | 7人   |
| 12/13 | 家族のコミュニケーションとれてますか？           | 高橋綾（大阪大学COデザインセンター）   | 12人  |
| 1/16  | 身近な災害と日頃の備え                   | 中村伸一郎（みんなで減災し隊！）      | 14人  |
| 2/19  | 家族の幸せと健康を「おやつ」から考えてみませんか？     | 藤岡亜季子（里山旬菜料理ささらい）     | 26人  |
| 3/30  | 保健師さんに子育てノウハウ聞いてみよう！          | 臼井幾子（丹波篠山市）           | 18人  |

3) 農村地域における河川および田畑の生物多様性保全に向けた取り組み支援

丹波篠山市では平成25年に生物多様性篠山戦略(森の学校復活大作戦)を策定し、生物多様性を保全する取り組みを始めた。農業を基幹産業とする本市では、生物多様性に配慮した農業と地域づくりに取り組むことが課題とされたが、市内の生物分布の実態は点でしか明らかにされておらず、また、それらをモニタリングする仕組みも整っていなかった。今年度は上述した「獣がい対策」実践塾を契機に、東雲高校の生徒らによるカメラトラップを用いた大型哺乳類の撮影を支援した。また、NPO法人里地里山問題研究所が主催する田んぼオーナー制度のイベントで生き物観察会を実施し、その結果をもとに地域の方と今後の農業のあり方について議論した。

#### 4) フリースクールにおける ESD 推進手法の検討

神戸市西区の公立フリースクールである神出学園は、平成 29 年 3 月にユネスコスクールとして認定され、ESD を推進する様々な取り組みを行っている。平成 30 年度は、教科総合連携型（ホールスクールアプローチ）を目指して、全教員を対象とした ESD の講義・意見交換を皮切りに、教科総合連携型の ESD が推進できるよう支援した。その結果、教員が各教科間のつながりを意識したことで、プログラムを進めるうえで出てきた廃材を様々なものに利活用する取り組みが各教科をつなぐ形で行われた。

(担当 清野未恵子)

#### (5) ヘルスプロモーション・健康行動支援部門

ヘルスプロモーションの理論的枠組みとされている健康生成モデルの立場から、生きがい意識を日本固有の Well-being としてとらえ、アクション・リサーチを展開している。そして、Well-being を中核に据えたヘルスプロモーション・健康行動支援事業を進めている。

今年度は、以下のとおり地域および学校との連携を中心とした国内での事業に加え、グローバル化の進展を視野に入れヘルスプロモーションのグローバルモデルの構築をめざして国際的な事業や調査も開始した。

### 1. 地域におけるヘルスプロモーション・健康行動支援活動

#### ① 健康あーち 子育て支援を通じたヘルスプロモーション・健康行動支援事業を行った。

【目的】 乳幼児の保護者を対象とし、食生活を中心に健康について話し合いを行い、話し合いの中から課題を見つけたり、悩みの解決方法を考えたりしながら、子どもとその保護者の健康増進をめざすことを目的として事業を展開した。

【場所】 神戸市灘区民ホール 3 階 のびやかスペースあーち  
神戸大学大学院人間発達環境学研究科 実習観察園

【開催日とテーマ】 下記のテーマで全 10 回の健康あーちを開催した。

| 開催日           | テーマ                 |
|---------------|---------------------|
| 4 月 16 日 (土)  | オリエンテーション           |
| 5 月 10 日 (土)  | 野菜を食べよう (種まき/実習)    |
| 6 月 22 日 (土)  | 野菜を食べよう (ワークショップ)   |
| 7 月 19 日 (金)  | 野菜を食べよう (収穫/実習)     |
| 7 月 20 日 (土)  | 野菜を食べよう (クッキング/実習)  |
| 9 月 20 日 (土)  | 野菜を食べよう (芋ほり/実習)    |
| 10 月 11 日 (土) | 朝型と夜型 (ワークショップ/国際)  |
| 11 月 16 日 (土) | ストレスについて (ワークショップ)  |
| 12 月 21 日 (土) | 睡眠と成長ホルモン (ワークショップ) |
| 2 月 15 日 (土)  | 野菜を食べよう (クッキング/実習)  |

プログラムは、企画会議で保護者およびスタッフと話し合い前年度の振り返りを経て作成、実施した。永野和美氏（管理栄養士/神戸大学附属中等教育校 栄養教諭）、黒川通典氏（大阪樟蔭女子大学/管理栄養士）、黒川浩美氏（大阪青山大学/管理栄養士）からも専門的な支援を得ることができた。10月11日はリゴ・アドリエン（エトベシュローランド大学/臨床心理師）による朝型・夜型のレクチャーが行われ、睡眠を中心とした生活習慣の確立について意見の交換を行った。今年度は、実習観察園への参加者を含め、のべ145名（内のびやかスペースあーちでの参加者は103名）の参加があった。

企画会議および運営会議：開催にあたり、合計10回程度の企画会議を行った。

- ② 特定保健指導者向け研修プログラムの開発と実践：兵庫県の特定保健指導の指導者や関係者を対象とし、ヘルスプロモーション・行動変容に関わる理論や実践に関する研修を行った。また、これまでの研究と研修会での実践に基づき特定保健指導の指導者を向けのパンフレット、「生きいき食教育プログラム」を作製した。  
さらに2020年度の研修会に向けて、兵庫県および兵庫県尼崎市の担当者と企画会議を行い、尼崎市の実践報告を研修に導入し、実践への理論の適用強化を図るプログラム開発について検討した。
- ③ インセンティブによる動機づけの導入を視野に入れた事業計画立案への助言：兵庫県龍野市からの依頼で保健指導を行っている専門職（保健師、管理栄養士など）を対象に、保健事業計画立案におけるインセンティブによる動機づけに関する研修を行った。
- ④ ストレス・マネジメント・プログラムの開発と実施：ストレス・マネジメント・プログラムを開発し、兵庫県三田市で講演を行った。

## 2. 学校におけるヘルスプロモーション・健康行動支援活動

- ① 神戸大学附属中等教育校のヘルスプロモーション部会と共同事業を行っている。今年度は、公開授業研究会で「ヘルスプロモーションの理念に基づく健康教育の実践－養護教諭・栄養教諭・神戸大学との連携研究－」が協力体制のもと開催された。
- ② 神戸大学附属初等教育学校の教員と今後の共同研究について検討を行った。

## 3. 国際的な事業

- ① 生活習慣改善のための国際プログラムの開発を旨とした教育研究活動：エトベシュローランド大学との協定に基づき、エラスムス+のプログラムの一環として、神戸大学大学院人間発達環境学研究科から教員と学生の派遣を行った。具体的な活動の内容としては、のべ4名の教員がエトベシュローランド大学で、ワークショップ、セミナー、講義を行った。また、博士後期課程の学生1名を派遣した。これにより双方の大学の博士後期課程の学生を通じた教育・研究指導グループを構築し共同で研究指導を開始することができた。その成果として、現在、2名の学生が国際共著としてそれぞれ1本ずつ、合計2本の論文を国際誌に投稿中である。一つは食行動の動機づけに関する国際比較

研究であり、もう一方は生活習慣の自己制御に関する研究である。いずれも生活習慣改善の実践のための研究であり、将来的に生活習慣改善のための国際プログラムの開発につながる計画である。

- ② 心の健康のための国際プログラムの開発をめざした研究活動：心の支援にあたる支援者を対象とした心の健康に関する国際調査を行うために、オーストリアに研究拠点を築き、海外での研究を開始した。

(担当 加藤佳子)

#### (6) 社会保障・ソーシャルアクション支援部門

東日本大震災津波跡地・高台移転先におけるまちづくり支援、「赤崎復興市」等の活動支援  
本学学生たちは、2012年11月以後、月に一度、5人～20人ほどが赤崎地区公民館（2012年5月1日に、本研究科と連携協定と締結）に赴き、支援活動をしてきた。本年度も学生ボランティアの協力を得て、津波の跡地を活用して開催された赤崎町の復興市の企画・運営等の開催支援を行った。現地の住民組織である「赤崎復興隊」および現地出身の小中学生・高校生、大学生などの若者らによる「赤崎復興隊ユース」メンバーとともに復興に向けた様々な活動および交流を行った。本年は、地元赤崎中学校のご協力の下、中学生との交流の輪も広がった。

赤崎町のまちづくりが順調に進むには、まだまだ様々な課題が存在する。今年度も先述の諸活動の他、赤崎地区公民館で開催される「復興隊のつどい」にメンバーとして参加するなどし、地域づくり構想の立案に対して助言を行うなどの活動を行った。

(担当 井口克郎)

#### 10.1.4. のびやかスペースあーち

##### 1. 「のびやかスペース あーち」全体の取組について

本研究科のヒューマン・コミュニティ創成研究センターは、2005（平成17）年9月より、神戸市との連携の下、灘区役所旧庁舎（灘消防署2階）において、サテライト施設「のびやかスペースあーち（以下、「あーち」とする）」の運営を開始した。本施設は、開設当初より「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」の拠点となることを目指して、様々な取組（プログラム等の提供）を行うとともに、実践的研究の場や学生・院生の実践の場（研究フィールド）を提供してきた。2017年度以降は、実践場所を「灘区民ホール（3階）」に移している（2016年10月より「子どもの居場所づくり事業（後述）」を先行して実施、2016年度末には「あーち」全体が移転）。

本年度は、12月頃、中国で新型コロナウイルス感染のアウトブレイクが起こり、その後、日本や他の国・地域でも感染が拡大するなか、2月末、神戸市からの要請により灘区民ホールが3月1日～16日まで閉館することになった。同じく神戸市から「あーち」もその措置に合わせるよう指示があったため、3月16日まで休館することを決定した。なお、17日以降、再開しても3月に予定していた各プログラムは実施しないことも合わせて決定した（2

月 28 日現在)。

これまで「あーち」は、多様な人々や団体・組織などがこの場で出会うような働きかけを通して、徐々に地域のあらゆる立場の人々の居場所やプラットフォームとして機能するようになった。言い換えれば、互いの立場や境遇の違いを認め合い・理解し合える場、あるいは、互いに暮らしやすい地域を創っていくためにどのような活動ができるのかを考え・共有する場となってきているのである。これが「あーち」の大きな特徴であるが、その他にも、地域のボランティアに支えられた多様なプログラムのほとんどが開設当初から現在まで継続しており、多くの人々がそのプログラムを楽しんでいる点、また、新規のボランティアによる新しいプログラムも年々増えている点なども「あーち」の特徴と言える。以上のことから、「あーち」が大学の果たすべき役割のひとつである「社会貢献」を着実に果たしていると判断できよう。なお、これまでに「あーち」は次のような受賞歴がある：兵庫県「ユニバーサルまちづくり賞」平成 19 年度 神戸市「市民福祉奨励賞（児童福祉）」平成 21 年度／神戸大学「学長表彰」平成 22 年度／兵庫県「ひょうご子育て応援賞」平成 27 年度。

神戸市から委託されている「\*地域子育て支援拠点事業（2007 年度より）」と「\*\*子どもの居場所づくり事業（学習支援・子ども食堂）（2016 年度より）」も継続しており、特に後者の事業の「子ども食堂」に関しては、灘区連合婦人会による協力のもと、毎週金曜日の夜間に開催している。

「\*地域子育て支援拠点事業」とは 地域に暮らす子育て中の親子の交流促進や育児相談等を実施し、子育ての孤立感、負担感の解消を図り、全ての子育て家庭を地域で支えるという目的のもとに 2007 年度より予算化された国事業である。全国で約 7,431 箇所（2018 年度現在）ある。「あーち」では、主に「子ども家庭支援部門」が本事業の委託を受け、基本 4 事業（① 交流の場の提供・交流促進 ② 子育てに関する相談・援助 ③ 地域の子育て関連情報提供 ④ 子育て・子育て支援に関する講習等）を週 5 日（6 時間／日）実施している。

「\*\*子どもの居場所づくり事業」は、その背景として「子どもの貧困対策の推進に関する法律（2003 年成立）」がある。貧困対策のひとつとして、国が地方自治体に予算を配分し、各地域の実情に応じた多様な取り組みを促すのがこの事業である。具体的には、「子ども食堂」や「学習支援」がそれに相当する。事業の対象者としては、例えば、ひとり親であったり経済的に困難であったりするため、食事面で何らかの支援が必要な子ども、学習面においては、学校の授業についていくことが困難であったり、学習の機会が乏しいといった子どもとその保護者らである。

こうした流れも受けて、「あーち」では、それまでの「居場所づくり」実践を発展させる形で、「子どもの居場所づくり事業」を取り込んでプログラム化した。その名称は「よる・あーち」であり、週 1 回（金曜日の午後 4 時～9 時）開催している。毎回、多くの未就学児・小学生・中学生・高校生および青年とその保護者、そして市民ボランティア、学生（他大学含む）・院生らが集まってくる。子ども・青年たちは学習支援を受けたり、ボランティアや保護者と夕食を共にしたり、遊びのプログラムに参加したりして、それぞれが自分のニーズ

に合わせて自由に過ごしている。市民ボランティアや学生らは、子どもの学習支援を担当したり保護者と交流したりしながら互いに親睦を深めている。毎回のプログラム終了後には、学生が主体となって、その日の振り返りをおこない、学生や市民ボランティア同士で意見交換を行っている。また、本事業の運営においては、高齢者給食に関する豊富な実績のある「灘区連合婦人会」との協働事業となっており、灘区の婦人会会員が50余名登録し、シフト制で調理を担当している。本年度は、文部科学省から委託された知的障害者の学びに貢献する事業「学ぶ楽しみ発見プログラム KUPI」を、本研究科が開講したことを受けて、「よる・あーち」もそのプログラムの実践活動のひとつの場として協力した（後述）。

「あーち」の年間利用者数（月別は後述の表1で提示する）は、2月末現在で、24,839人（延べ）である。年間の利用者数を開館日数の223日で割ると一日平均、約111人が利用している。一日の利用者数が平均して100名／日を超えるという実績は2007年度より12年間続いている。本年度のプログラム開催状況を集計（2月末現在）すると、教員・一般ボランティアが主催するプログラムの実施回数（延べ数）は396回、大学の正規教育プログラムの実施回数（延べ数）は33回である。例年どおり、資格関連科目である博物館実習も1回開催された。また、2008年度より毎年継続してESDサブコースの授業（前期：ESDボランティア論、後期：ESD生涯学習論BおよびESD論B）に協力し、学部生が実践活動をおこなう場を提供している。このように、本年度も、「あーち」は学生の教育・実践を支援する機能を果たした。また、学部生・院生が卒業研究・修士研究の場として「あーち」を活用することも多く、発達支援論コース在籍生に限っても、これまで、卒業論文9編・修士論文14編・博士論文3編が提出されている（2006～2019年度）。さらに、他大学の実習やボランティア実践の場としても提供しており、6年前から園田学園女子大学人間健康学部人間看護学科の4年次生（経験値統合実習）、3年次生（育成連携支援実習）を継続的に受け入れているが、看護学生らが子どもに関わったり、保護者へのヒアリングを行ったりすることは、利用者にとっても、良い刺激となっている。

大学に設置されている「のびやかスペースあーち運営委員会」とは別に、日常的に「あーち」のプログラム等にかかわっているメンバーが参加する「あーち連絡協議会」が、5月・7月・9月・11月・1月に開催された。この会では、「あーち」の利用者、プログラムリーダーとそのスタッフ、「ふらっと」相談員、一般のボランティア、学生、灘区まちづくり課、灘区連合婦人会、灘区社会福祉協議会、教職員が一同に会して、「あーち」の現状・プログラムの近況・新しいプログラム等に関する報告や検討がおこなわれている。また、学生などによる研究の場として「あーち」が活用されるので、この協議会は、学生からの研究依頼・計画を承認・検討する場にもなっている。

プログラム予定表、学生や利用者による絵本の紹介、利用者が担当する取材記事・コラム等を掲載する月刊広報誌を編集するために、毎月1回「あーち 通信編集会議」が開催されている。開設以来、「あーち通信」は一度も発刊を欠いておらず、「あーち」のホームページ上で順次公開されている。「あーち通信」は、これまで同様、利用者に配布されているだけでなく、灘区役所や灘社会福祉協議会および各児童館、さらに連携先の産婦人科クリニック

にも配布・設置している。本年度末で「あーち通信」は174号になった。

## 2. 教員・職員が中心に進めている主な活動について

<ドロップイン・サービス（神戸市からの委託事業「地域子育て支援拠点事業」>

地域子育て支援拠点事業を神戸市との連携によって引き続き実施した。乳幼児とその保護者が安心して多様な人との交流を深めながら、社会的なつながりや活動に関わることができる場である。週5日（6時間/日）、開設している。「あーち」において利用者の最も多い活動であり、さまざまなプログラムの拠点としても機能している。

<子育て相談事業（同上）>

上記ドロップインの場に、助産師・保育士などの資格を持つ相談員を配置し、保護者からの相談に応じた。灘区のまちづくり課から派遣されている地域活動支援コーディネーター（1回/週）や、地域のNPOのボランティア（1回/月）も子育て相談に応じてくれている。その他、灘区歯科医師会との連携相談事業（4回/年）も行った。これらの相談内容を整理・分析した結果、子どもの生活に関するもの、発育・発達に関するもの、離乳食・幼児食に関するもの、育児不安、地域資源に関するものが多かった。また、分類結果等は、毎年、神戸市に報告されている。

<よる・あーち>

学習支援、子ども食堂、居場所づくりなどを並行して実施する複合プログラムで、毎週1回、夕方から夜にかけて実施している。多様な年齢や属性の人たちが70名~80名ほど集まり、相互に学び合う場を形成している。今年度は、日本生命財団の委託研究を受け、学生や地域住民が参加する参加型調査研究を実施した。ボランティアな市民が主体となって実施している子どもの居場所づくりの「エンパワメント評価」の実施に向けて、定期的な研究会を開いた。

(1) あーち学習支援（神戸市からの委託事業「神戸市子どもの居場所づくり事業」>

神戸市の委託を受け、毎週1回、「よる・あーち」プログラムの一環として実施している。学習面、社会性の面で課題をもつ児童・生徒・青年が毎回20名前後参加している。支援者は学生を中心に構成され、学習支援を契機とした支援者の学びに焦点を置いた取り組みを行っている。地域住民や保護者も支援に加わり、参加型研究のフィールドにもなっている。

(2) あーち子ども食堂（同上）

神戸市の委託を受け、灘区連合婦人会と連携して実施している事業で、毎週1回、「よる・あーち」プログラムの一環として実施している。兵庫こども食堂ネットワークに加盟し、その運営への協力も行った。

### (3) あーち居場所づくり

毎週1回、「よる・あーち」プログラムの一環として実施している多様な人びとの間の関わりを促進する実践である。障害のある子どもの十分な参加をテーマとして活動を構成し、さまざまな年齢や属性の人たちが遊びや会話を通してエンパワーした。「都市型中間施設」概念に基づくモデル開発実践プログラムとしても位置づけている。

#### <学ぶ楽しみ発見プログラム Kobe University Program for Inclusion (KUPI)>

大学の資源を無理なく効果的に活用することで、言語によるコミュニケーションが可能な知的障害のある青年が、学ぶことの楽しさを感じ、自己理解や他者理解、人格を陶冶するプログラムである。10月～2月間の金曜日の夜、「よる・あーち」を活動の場として多様な人々との交流し、プログラム終了後も参加者の数名は、新たに「あーち」の新規会員として活動を継続している。

#### <ペアレンティング・セミナー（神戸市からの委託事業「地域子育て支援拠点事業」）>

ほぼ毎月1回土曜日に開催している神戸市との連携プログラムで、名称は「0歳児のパパママセミナー&中・高校生の赤ちゃんふれあい体験学習」である。乳児を育てる保護者どうしの交流並びに子育てに関する学習機会を提供する。また同時に、児童・生徒とのふれあいが乳児とふれあう体験の機会を提供している。今年度は児童・生徒の参加が少なかったが、参加した保護者は生き生きと交流し学んだ。

#### <地域子育て応援プラザ灘・灘区公立保育所との協働実践>

灘区内の公立の子育て支援関係施設と連携し、保育士の「あーち」への派遣事業（見守り、相談、親子遊びの実施）、公立・私立保育所の保育士向け研修会、広報活動を行った。

#### <地域の医療機関との協働実践>

灘区歯科医師会と連携し、近隣の歯科医師が来館し、子育て中の親子の歯の相談を行った。計4回開催。また、近隣の産婦人科の医師や助産師が、日常的に「あーち」の広報を行うことで、生まれてまもない乳児がいる家庭の利用促進をはかった。

#### <ビギナーズ交流会（神戸市からの委託事業「地域子育て支援拠点事業」）>

「あーち」を初めて利用する母親を対象としたコネクション・プログラムで、毎月1回実施している。生後6ヶ月未満の乳児とその母親が毎回8組程度参加し、特に母親のエンパワメントに焦点を当てた取り組みを行っている。

#### <あーち博物館>

地域文化を創造していく拠点として、博物館の手法のおもしろさを取り入れることをめざして実施しているプログラムであり、国際人間科学部、発達科学部、国際文化学部、人間

発達環境学研究科，国際文化学研究科の博物館学芸員課程の学内実習として実施している。2019年度は空間アートの展示企画（FLOWER）を1回実施した。

#### <新喜劇プログラム>

新喜劇という形式を用いて，多様な個性をもつ人たちの表現を引き出す実践的研究プログラムである。さまざまな年齢や属性の人たちが集まる「よる・あーち」プログラムの一部として，練習や発表を合わせて4回実施した。

#### <子育て支援セミナー>

人間発達環境学研究科心理教育相談室の教員が担当し，2019度は「マイノリティを生きる子どもの心と支援」をテーマに4回シリーズで，セミナーを実施した。

#### <健康あーち（食育プログラム）>

食に関する子育て中の親子の疑問や悩みに対応しながら，食のあり方を考えるセミナーと交流会である。参加者である親たちが主体となり運営できるよう教員や学生らが支援している。（8回実施）

#### <てつがくカフェ（こらぼ開催），ピアカフェ（ふらっと開催）>

子育てやジェンダーを意識した哲学対話のプログラムで，2019年度のテーマは「家族」「男らしさ・女らしさ」「感覚」「みんなが参加しやすい場」「ワンオペ育児（ピアカフェ）」などであった。（6回実施）

#### <あーち通信編集会議>

月々のプログラム等の予定を掲載する情報誌で毎月1号発行し，紙媒体で配布するとともにホームページでも公開している。「あーち」利用者である住民の情報発信の媒体としても活用している。毎号，利用者参加のオープンな編集会議を開催し，紙面を作成している。

#### <あーち連絡協議会>

利用者である住民の参加に対して開かれた，「あーち」の日常的な運営に関する協議を行う会議で，奇数月に年6回実施している。住民が発案するプログラムの審議や，「あーち」関係者が分担して進める企画の審議などを行っている。本年度は3月閉館のため，利用者参加の開催は1月までの実施になった。

### 3. プログラム概要・その他

ここでは，①プログラム概要，②見学・視察数，③月別年間利用者数（表1），④プログラム数とそれに対応するボランティア数（表2），⑤「よる・あーち」利用者数・ボランティア数とその内訳（表3），⑥連携・協力関係にある組織・団体（表4）を示す。

## ①プログラムの概要

### 子どもとその保護者を主な対象にしたプログラム

＜★は本年度から開始したプログラム＞

- ・ふらっと：地域子育て支援拠点事業（ドロップイン・サービス）として週5日開設
- ・おひさまひろば あーち：神戸市地域子育て支援センター灘の保育士・灘区公立保育所の保育士がドロップイン・サービスの利用者に対し、見守り・相談と親子遊び（ショートプログラム）を提供
- ・ベビーマッサージ：「あーち」利用者である母親がリーダーとなっておこなう交流プログラム
- ・あーち ビギナーズ交流会：「あーち」を初めて利用する、または利用して日が浅い母親対象の仲間づくりプログラム（子どもの月齢6か月未満対象）
- ・ほのぼの音ランド：音楽療法士によるリズム遊びプログラム
- ・おはなしの国：ボランティアによるストーリー・テリングと絵本の読みきかせ
- ・めだか親子クラブ：退職教員が中心となった手作りおもちゃのプログラム
- ・おりがみ遊び：「あーち」の利用者である母親が子どもや保護者に楽しいおりがみを伝えるプログラム
- ・らくがきおばさんがやってきた：地域の画家が展開する自由なアート空間
- ・アートセラピー：草木などの自然のものなどを用いてアートを展開するワークショップ
- ・人形劇団 むー：「あーち」支援者や利用者が立ち上げた人形劇団
- ・おもちゃ病院：地域住民の有志によるグループが、壊れたおもちゃなどを修理してくれるプログラム
- ・親子のびのび体操：フリーランスで活躍する保育士による親子あそび
- ・リフレッシュ YOGA：「あーち」利用者による産後の母親の体調改善をめざすプログラム
- ・えいごであそぼう！：「あーち」利用者による幼児を対象とした英語あそび
- ・親子あそびと子育て講座：元神戸市保育士による子育て支援プログラム（4回シリーズ）
- ・くりにかるあーと：子どもと一緒に作品をつくりながら子どもの新たな一面を見出す
- ・おかたづけ講座：整理収納アドバイザーが片付けのコツを伝授する
- ・あらかると音楽あそび：手づくり紙芝居や絵本に音をつけて、一緒に音楽遊びを楽しむ

### 発達障害のある子どもの保護者を対象にしたプログラム

- ・家族教室：発達障害児をもつ保護者支援プログラム
- ・パパママほっと：自閉症プログラムのお子さん絵を持つ、保護者のための、語らいと情報交換の場

### おとなを主な対象としたプログラム

- ・筆をもとう：地域の書家による書の初歩を気軽に学ぶプログラム
- ・0歳児のパパママセミナー：子育て中の親を対象にした学習・交流プログラム
- ・赤ちゃんのふれあい体験学習：地域の子どもたちが0歳児とその保護者が毎月1回交流する

○保育士のための子育て支援研修会（1回）

#### その他

- ・よる・あーち（居場所づくり/学習支援+子ども食堂）：多様な立場にある人たちが交流し、その時々々のプログラムを企画し実践する/子どもや青年に対して学生や市民ボランティアが個別に学習支援を実施した後、子どもや保護者、ボランティアなどが、灘区連合婦人会が調理した夕食を一緒に楽しむ）
- ・音楽の広場：本研究科の院生や教員・ボランティアが主催する、誰でも楽しめる自由な音楽プログラム
- ・みんなで歌おう！：地域の作業所スタッフや実習生によるゴスペル
- ★学ぶ楽しみ発見プログラム（KUPI）：大学の資源を無理なく効果的に活用することで、言語によるコミュニケーションが可能な知的障害のある青年が、学ぶことの楽しさを感じ、自己理解や他者理解、人格を陶冶するプログラム

#### 博物館実習

○博物館実習：2019年9月29日～10月4日「Flower」（社会福祉法人たんぼぼ、版画家脇谷紘氏との連携）

- ・あーち 通信編集会議：利用者や学生を交えて「あーち」通信をつくる場
- ・あーち 連絡協議会：プログラムリーダー、利用者、教職員等による「あーち」運営に関する会議

## ②「あーち」への見学・視察数

大学のサテライト施設として、社会的責任や地域貢献をはたし、アクション・リサーチの成果を社会に対してモデル提示したり発信したりする手段として、見学者やメディア取材の受け入れを行っている。以下は、2019年4月から2020年2月末までの「見学者数」「視察者数」を機関・組織別に整理したものである。

◎「あーち」見学者など

<見学（総数66名）>（順不同）

国立市 1名 神戸市 5名 神戸市子ども家庭局子育て支援部 1名 灘区子ども家庭支援課 2名

三田市社会福祉協議会 1名 灘区社会福祉協議会 3名 原田児童館 1名

トライやるウィーク（中学生5名 区民ホール職員1名）灘区消防士（防災イベント下見）6名

神戸松蔭女子学院大学教育学科 学生4名 神戸大学国際文化学部 1名

神戸大学大学院人間発達環境学研究科総務係 2名 神戸大学国際人間科学部 学生30名

日本維新の会 1名 神戸友の会 1名 他個人 1名

<視察・ヒアリング等（総数40名）>

香港行政関係者および幼稚園園長会代表 40名

\*参考\*「よる・あーち」見学者（順不同 多数）

文部科学省 兵庫県社会教育課 国立市公民館 兵庫県教育委員会  
 ESRC プロジェクト英国チーム（オープンユニバーシティ他） 日本チーム（天理大学・上智大学他）  
 神戸市国際交流推進部 神戸市文化交流部・多文化交流プロジェクト 灘区まちづくり課 灘区社会福祉協議会  
 灘区民ホール いたみ杉の子室 三田市社会福祉協議会 あかしこども財団  
 神戸松蔭女子学院大学 教員・学生 大阪樟蔭女子大学 教員・学生 関西福祉科学大学 教員 鳴門教育大学 院生  
 一橋大学 院生 神戸大学附属特別支援学校 教員 神戸大学附属中等教育学校 生徒  
 他，企業・NPO・個人等多数

### ③2019年度「あーち」利用者数とその内訳（2月末現在）

今年度の「あーち」の年間利用者数は、子ども 12,092 人・おとな 12,747 人であり、合計 24,839 人（延べ数）である。この人数を今年度の開館日数である 223 日で割ると、一日平均約 111 人が利用していることになる。

表 1 月別年間利用者数

| 2019年度 |      |      |      | ふらっと |      |       |       |       |
|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|-------|
| 月      | 開館日数 | 子ども  | おとな  | 子ども  | おとな  | 子ども   | おとな   | 合計    |
| 4      | 21   | 959  | 881  | 178  | 296  | 1137  | 1177  | 2314  |
| 5      | 21   | 833  | 809  | 182  | 297  | 1015  | 1106  | 2121  |
| 6      | 21   | 842  | 822  | 245  | 345  | 1087  | 1167  | 2254  |
| 7      | 22   | 995  | 956  | 194  | 325  | 1189  | 1281  | 2470  |
| 8      | 19   | 952  | 866  | 215  | 304  | 1167  | 1170  | 2337  |
| 9      | 20   | 805  | 782  | 182  | 260  | 987   | 1042  | 2029  |
| 10     | 21   | 864  | 805  | 212  | 324  | 1076  | 1129  | 2205  |
| 11     | 21   | 939  | 895  | 169  | 368  | 1108  | 1263  | 2371  |
| 12     | 19   | 881  | 789  | 196  | 309  | 1077  | 1098  | 2175  |
| 1      | 18   | 973  | 894  | 244  | 300  | 1217  | 1194  | 2411  |
| 2      | 20   | 868  | 833  | 164  | 287  | 1032  | 1120  | 2152  |
| 合計     | 223  | 9911 | 9332 | 2181 | 3415 | 12092 | 12747 | 24839 |

### ④2019年度「あーち」プログラム数およびボランティア数（2月末現在）

表 2 は、今年度に「あーち」で提供されたプログラム数およびそれにかかわったボランティア（リーダー，スタッフ，一般，学生・院生）の数である。

表2 プログラム数およびボランティア数（延べ数）

| 2019 |          | プログラム数               |   |                 |                    | スタッフ・ボランティア数          |     |      | 学生  |
|------|----------|----------------------|---|-----------------|--------------------|-----------------------|-----|------|-----|
| 月    | 開館<br>日数 | 一般<br>のプ<br>ログ<br>ラム | 大学の授<br>業および<br>正規教育<br>プログラ<br>ム（実<br>習） | プログ<br>ラム総<br>数 | プログラ<br>ム数一日<br>平均 | プログラムリーダー<br>およびスタッフ数 |     |      |     |
|      |          |                      |   |                 |                    | スタッフ                  | 一般  | 合計   | 学生  |
| 4    | 21       | 33                   | 2   | 35              | 1.67               | 93                    | 35  | 128  | 68  |
| 5    | 21       | 32                   | 3   | 35              | 1.67               | 97                    | 42  | 139  | 57  |
| 6    | 21       | 38                   | 3   | 41              | 1.95               | 114                   | 35  | 149  | 71  |
| 7    | 22       | 36                   | 3   | 39              | 1.77               | 105                   | 55  | 160  | 66  |
| 8    | 19       | 27                   | 2   | 29              | 1.52               | 78                    | 55  | 133  | 60  |
| 9    | 20       | 33                   | 4   | 37              | 1.85               | 103                   | 56  | 159  | 48  |
| 10   | 21       | 34                   | 4   | 38              | 1.81               | 113                   | 32  | 145  | 74  |
| 11   | 21       | 39                   | 4   | 43              | 2.05               | 104                   | 37  | 141  | 87  |
| 12   | 19       | 32                   | 4   | 36              | 1.90               | 97                    | 42  | 139  | 65  |
| 1    | 18       | 31                   | 2   | 33              | 1.83               | 100                   | 50  | 150  | 43  |
| 2    | 20       | 28                   | 2   | 30              | 1.50               | 93                    | 45  | 138  | 54  |
| 合計   | 223      | 363                  | 33  | 396             | 1.78               | 1097                  | 484 | 1581 | 693 |

\* 基盤プログラムである「ふらっと」は毎日開催しているが、プログラム数に入れていない

\* 「あーち」通信編集会議・連絡協議会・他の会議などは入れていない

\* 比較的ボランティア参加の多いプログラム（順不同）

よる・あーち、ぽっとらっく、アートセラピー、らくがきおばさん

⑤2019年度「よる・あーち」利用者・ボランティア数とその内訳（2月末現在）

表3は、今年度に「よる・あーち」に参加した利用者（子ども・おとな・保護者）、一般のボランティア、学生ボランティア、スタッフの数（月別年間数）である。

表3 「よる・あーち」利用数・ボランティア数（一般・学生等）・内訳（延べ数）

| 2019<br>年度 | 月          |     | 4   | 5   | 6   | 7   | 8   | 9   | 10  | 11  | 12  | 1   | 2    | 合計<br>(人) |
|------------|------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----------|
| 利用者        | 未就学        |     | 8   | 2   | 4   | 8   | 13  | 10  | 10  | 9   | 4   | 8   | 6    | 82        |
|            | 小学生        | 1年  | 8   | 12  | 11  | 9   | 19  | 13  | 16  | 18  | 12  | 14  | 12   | 144       |
|            |            | 2年  | 2   | 2   | 2   | 2   | 2   | 2   | 2   | 1   | 1   | 0   | 0    | 16        |
|            |            | 3年  | 14  | 14  | 14  | 11  | 13  | 7   | 10  | 9   | 7   | 9   | 10   | 118       |
|            |            | 4年  | 10  | 7   | 15  | 12  | 6   | 11  | 5   | 10  | 11  | 15  | 9    | 111       |
|            |            | 5年  | 11  | 7   | 9   | 8   | 13  | 10  | 10  | 10  | 10  | 10  | 8    | 106       |
|            |            | 6年  | 1   | 3   | 3   | 2   | 5   | 3   | 3   | 2   | 4   | 1   | 1    | 28        |
|            | 小計         |     | 46  | 45  | 54  | 44  | 58  | 46  | 46  | 50  | 45  | 49  | 40   | 523       |
|            | 中学生        | 1年  | 15  | 11  | 10  | 8   | 7   | 7   | 9   | 12  | 6   | 9   | 8    | 102       |
|            |            | 2年  | 2   | 4   | 5   | 5   | 4   | 6   | 8   | 8   | 7   | 8   | 6    | 63        |
|            |            | 3年  | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0    | 0         |
|            | 小計         |     | 17  | 15  | 15  | 13  | 11  | 13  | 17  | 20  | 13  | 17  | 14   | 165       |
|            | 高校生        | 1年  | 3   | 2   | 1   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0    | 6         |
|            |            | 2年  | 0   | 0   | 1   | 3   | 2   | 0   | 0   | 2   | 0   | 0   | 0    | 8         |
|            |            | 3年  | 4   | 3   | 3   | 5   | 6   | 6   | 6   | 5   | 7   | 5   | 5    | 55        |
|            | 小計         |     | 7   | 5   | 5   | 8   | 8   | 6   | 6   | 7   | 7   | 5   | 5    | 69        |
| 保護者        |            | 54  | 54  | 52  | 58  | 66  | 55  | 50  | 58  | 48  | 52  | 47  | 594  |           |
| おとな        |            | 57  | 61  | 63  | 65  | 84  | 64  | 56  | 71  | 62  | 57  | 87  | 727  |           |
| 小計         |            | 111 | 115 | 115 | 123 | 150 | 119 | 106 | 129 | 110 | 109 | 134 | 1321 |           |
| ボラン<br>ティア | 一般         |     | 30  | 32  | 27  | 30  | 43  | 32  | 28  | 32  | 28  | 34  | 33   | 349       |
|            | 学部生        |     | 40  | 41  | 34  | 39  | 36  | 20  | 45  | 56  | 42  | 35  | 41   | 429       |
|            | 院生/<br>研究生 |     | 21  | 16  | 20  | 13  | 22  | 19  | 12  | 16  | 7   | 3   | 10   | 159       |
|            | 小計         |     | 91  | 89  | 81  | 82  | 101 | 71  | 85  | 104 | 77  | 72  | 84   | 937       |
| スタッ<br>フ   | 教職員        |     | 16  | 16  | 16  | 16  | 20  | 15  | 16  | 19  | 16  | 16  | 16   | 182       |
|            | 灘区<br>婦人会  |     | 24  | 23  | 25  | 24  | 28  | 23  | 24  | 30  | 23  | 22  | 24   | 270       |
|            | 小計         |     | 40  | 39  | 41  | 40  | 48  | 38  | 40  | 49  | 39  | 38  | 40   | 452       |
|            | 合計<br>(人)  |     | 320 | 310 | 315 | 318 | 389 | 303 | 310 | 368 | 295 | 298 | 323  | 3549      |

⑥2019年度 連携・協力関係にある団体など

以下の表4は、今年度の「あーち」の運営にあたって、連携・協力を得た組織や団体名を整理したものである。

表4 連携・協力関係にある組織・団体など

| 団体名                      | 連携協力の内容                         |
|--------------------------|---------------------------------|
| 神戸市市民参画推進局               | 運営協力                            |
| 神戸市子ども家庭支援部こども青少年課       | 運営協力                            |
| 神戸市灘区保健福祉部こども家庭支援課こども保健係 | 0歳児のパパママセミナー&中・高校生の赤ちゃんふれあい体験学習 |
| 神戸市灘区まちづくり推進部            | なだ桜まつり/地域コーディネーター               |
| 灘消防署                     | 消防訓練                            |
| 神戸市地域子育て支援センター灘          | ふらっと相談員/おひさまひろばあーち              |
| 灘区民ホール                   | 運営協力/情報交換                       |
| 灘区公立保育所(7か所)             | ふらっと相談員/おひさまひろばあーち              |
| 灘区地域コーディネーター(元幼稚園教諭)     | ふらっと相談員                         |
| 灘区社会福祉協議会                | ボランティアコーディネート                   |
| 灘区内児童館(10か所)             | 情報交換                            |
| 六甲道児童館                   | 情報交換                            |
| 六甲道児童館ユースセンター            | 中学・高校生の赤ちゃんふれあい体験学習             |
| 灘区連合婦人会                  | よる・あーち(子ども食堂)                   |
| 社会福祉法人たんぼぼ               | 博物館実習/みんなで歌おう!                  |
| 学童保育つむぎ                  | 居場所づくり                          |
| カフェ「アゴラ」                 | 居場所づくり                          |
| 社会福祉法人かがやき神戸             | 居場所づくり                          |
| 神戸ユニバーサルツーリズムセンター        | 居場所づくり                          |
| NPO法人神戸子どもと教育ネットワーク      | めだか親子クラブ                        |
| チャレンジひがしなだ               | 筆をもとう                           |
| クエスト総合研究所                | アートセラピー                         |
| NPO法人マザーズサポーター協会         | おしゃべりほっとタイム                     |
| 亀田マタニティ・レディース・クリニック      | アウトリーチ・サービス                     |
| 灘区歯科医師会                  | ふらっと相談員                         |
| おもちゃ病院(地域の有志)            | おもちゃ病院                          |
| 園田学園女子大学                 | 育成連携支援実習/経験値統合実習の場として提供         |
| 神戸海星女子学院大学               | ボランティア論(授業)の場として提供              |
| 神戸大学医学部保健学科地域連携センター      | ぽっとらっく                          |

他に個人による協力も多数あり

(のびやかスペースあーち運営委員長 相澤直樹)

### 10.1.5. サイエンスショップ

#### 1. 概要と運営体制

サイエンスショップは、(a)地域社会における広義の科学教育や科学コミュニケーションを含む市民の科学に関わる諸活動への支援、および(b)神戸大学学生の主体的研究活動等への支援を行うことを目的とする。(a)については、科学者等の専門家と市民の対話と協働を通じて、環境問題など科学に関わる地域課題への市民の取組や、社会における科学技術の進展とそれに関する政策形成過程などへの市民の参画を促す仕組づくりと実践を目指しており、実践研究として行われている。

令和元年度は、研究科専任教員（室長，副室長，及びその他の室員若干名）と，学術研究員 2 名（非常勤職員），事務補佐員 3 名（非常勤職員）の体制で運営された（学術研究員および事務補佐員については，次項に記すグローバルサイエンスキャンパス事業に係る業務担当者を含む）。

#### 2. 令和元年度の主な取組

##### (1) グローバルサイエンスキャンパス ROOT プログラムの運営

サイエンスショップは，神戸大学を実施機関，兵庫県立大学，関西学院大学，甲南大学を共同機関として 4 大学の連携で実施する，高校生等を対象とした科学技術人材育成プログラム「根源を問い革新を生む国際的科学技術人材育成挑戦プログラム」（略称 ROOT プログラム： ROOT は，Research-Oriented On-site Training Program for innovative scientists in the future より）の事務局として事業運営の中核的役割を担っている。この教育プログラムは，国立研究開発法人 科学技術振興機構の次世代人材育成事業の一環である「グローバルサイエンスキャンパス (GSC)」の企画として同機構の支援を受けて展開されている。（企画の実施主担当者をサイエンスショップ室長が務めている）。

神戸大学では，本研究科，計算科学教育センターの他，大学教育推進機構等が主体となり，全学の理系部局の参画のもとで企画が進められている。その企画立案，実施等について審議するために，大学教育推進機構に「グローバルサイエンスキャンパス委員会」が設置されている。また，地域の幅広い連携のもとで人材育成を推進するために，兵庫県および周辺府県等の教育委員会や，兵庫県下の先端的研究機関（高輝度光科学研究センター，理化学研究所計算科学研究機構，同生命機能科学研究センター，兵庫県立人と自然の博物館，兵庫県立大学西はりま天文台）や，公益財団法人兵庫工業会などが連携機関として協力し，実施機関である神戸大学，共同機関を含めて GSC ひょうご神戸コンソーシアムが形成されている。

このプログラムでは，毎年，科学分野で優れた資質をもつ受講生を募集し，40 名程度を選抜する。大学教員による講義・実習，先端的研究機関の見学などを含む約半年間の「基礎ステージ」を経て，受講生が研究課題を提案し，評価を受けて選抜された約 8 名が大学等において研究を行う「実践ステージ」に取組む。科学的課題設定力・探究力を培うプログラムと並行して，科学英語，海外研修など国際性を高めるプログラムも展開される。3 年度目にあたる令和元年度には，平成 30 年度から継続して取組む第 2 期実践ステージ生 12 名が個

別課題研究を進め、8月にはそのうち8名が米国シアトルでの海外研修に参加、ワシントン大学の学部学生の研究発表会でポスター発表を行った。また、グローバルサイエンスキャンパス令和元年度全国受講生研究発表会において第2期実践ステージ生2名がそれぞれ文部科学大臣賞、優秀賞を受賞、さらに第72回日本細菌学会関西支部総会における若手研究者奨励賞受賞、第17回高校生科学技術チャレンジ(JSEC2019)における荏原製作所賞受賞など、研究成果発表も高い評価を受けた。一方、5月から6月に第3期生の募集を行い、約80名の応募者(所属学校所在地:兵庫県,大阪府,京都府,徳島県,奈良県,和歌山県,岡山県)から40名を選抜、それらの受講生が基礎ステージを受講した。令和2年1月から2月にかけて、その中から実践ステージ受講生12名を選抜され、実践ステージに進んだ。

なお、科学技術振興機構による支援は平成29年度から令和2年度の4年間で、支援終了後の取組の継続が求められている。

## (2) 地域社会における市民の科学活動および科学コミュニケーション支援

サイエンスショップのこれまでの取組を通じて、伊丹市(「サイエンスカフェ伊丹」)、姫路市を中心とした播磨地域(「サイエンスカフェはりま」)、南あわじ市など兵庫県内の各地域で、サイエンスカフェ等の科学に関わる活動を主体的に進める市民グループが立ち上がって着実な活動を展開しており、サイエンスショップがこれを継続的に支援している。令和元年度年度神戸大学地域連携事業(課題名:持続可能な社会づくりをめざす市民活動への支援事業)、事業主体:発達支援インスティテュート)の一環として学内支援も受けて取組を進めた。

以下に本年度の主な取組等をまとめる。なお、サイエンスカフェの開催リストについては年次報告書資料編に掲載する。

### (a) 千種川流域における環境モニタリング活動への協力・支援

千種川流域圏で活動するグループ「千種川圏域清流づくり委員会」による河川環境モニタリング「千種川一斉水温調査」(8月)への、総合地球環境学研究所および神戸大学人間発達環境学研究科の研究者および学生の参加・協力をコーディネートした。この調査は、同委員会が18年間にわたり継続してきた、河川において多様な生物種の重要な生息要件の一つとなる夏季水温等の市民による多地点同時調査であるが、専門家との新たな協働により、同位体分析等、より多くの項目の測定・分析を行う形に展開されている。

### (b) サイエンスカフェ神戸

人間発達環境学研究科大学院生の琵琶湖の生物に関する研究成果を地域に還元する「琵琶湖に住むスジエビのくらしを探る」を、令和元年6月、滋賀県大津市において開催、公益財団法人ひょうご科学技術協会との連携により、サイエンスカフェ「熱帯の海辺と地球の気候」を、令和2年2月、神戸大学において開催した。

### (c) サイエンスカフェ伊丹

伊丹市を中心にサイエンスカフェの開催に取り組む市民グループ「サイエンスカフェ

伊丹」によるサイエンスカフェ等の開催（9回）を支援した。

(d) サイエンスカフェはりま

姫路市を中心とした播磨地域において、サイエンスカフェ等を開催する市民グループ「サイエンスカフェはりま」による科学コミュニケーションイベントの開催を支援した（5回）。

上記の他、公益財団法人ひょうご科学技術協会が主催する「サイエンスカフェひょうご」の企画・運営を支援し、神戸大学人間発達環境学研究科の研究者をゲストとして、「日本人の睡眠を考える」のテーマで南あわじ市において開催した。なお、このイベントは、NPO法人 ソーシャルデザインセンター淡路（SODA）との共同開催として実施された。

平成19年以降実施している、市民が科学者とともに IPCC（Intergovernmental Panel on Climate Change :気候変動に関する政府間パネル）の報告書を読み解く会「市民のための、IPCC レポートを根掘り葉掘り読む会」を14回開催した（第2期、第81回から第94回）。

(3) 地域科学教育への支援と科学技術系人材育成の取組

グローバルサイエンスキャンパス ROOT プログラムについては、項目(1)に記したが、それ以外の取組について記載する。

令和元年11月には、兵庫県生物学会と共同で「高校生私の科学研究発表会2019」を開催した。兵庫県、京都府、岡山県、愛知県等から高校生110名、高等学校教員23名を含む162名の参加者があり、活発な発表、交流が行われた。優れた研究に対して、サイエンスショップより優秀賞を授与した。

令和2年1月には、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業成果の地域への普及と兵庫県下の理数教育の発展を目的として活動する兵庫「咲いテク（Science & Technology）」事業推進委員会主催の「第12回 サイエンスフェア in 兵庫」の開催に協力した（神戸大学が共催）。また、同委員会による取組として令和元年7月神戸大学百年記念館六甲ホールにおいて開催された、「高校生による英語での科学研究発表会」第5回 Science Conference in Hyogo “の開催に協力した（神戸大学が共催）。

鶴甲小学校PTAの要請を受けて、平成19年度以降毎年開催している「理科実験教室」を令和元年7月に実施した。また、令和2年2月に、サイエンスショップ研究員による市民を対象とした「つるかぶと科学教室」1回を開催した（今年度は4回のシリーズを企画したが、令和2年3月に予定していた3回については、コロナウイルスの感染拡大への対応として開催を見合わせた）。

(4) 学部・大学院教育

この他、学部学生を中心とした正課外の活動として、地域の小学校等で天体観望会の開催に取組む「天文ボランティアグループ アストロノミア」が行われ、学部、学科の壁を越えて学生が参加している。令和元年7月には、鶴甲小学校の児童を対象とした「理科実験教

室」での実験1テーマの企画・実施を行った。令和2年1月に計画した鶴甲小学校での観望会が気象警報により延期，あらためて3月に計画した観望会がコロナウイルスの影響による中止となり，学外での観望会は実施できなかったが，学生は年間を通じて定例会合を開催し，チームとして望遠鏡の操作練習や，観望会の準備を行った。

また，国際人間科学部のグローバルスタディーズプログラム（GSP）の国内フィールドとして学生（前期4名，後期5名）を受け入れた。学生は，市民グループによる千種川流域圏の河川環境調査，市民グループ等によるサイエンスカフェ等の科学コミュニケーションイベント，小学生を対象とした理科実験教室，高校生の科学研究発表会等，サイエンスショップが関わる諸活動に参加し，フィールドワークとして運営の支援に取り組んだ。

このように，サイエンスショップは，大学・大学院におけるアクティブ・ラーニング／サービス・ラーニングの場やそれを促す仕組みとしても機能している。

表 神戸大学サイエンスショップ 令和元年度の主な取組

|   |
|---|
| 市民科学活動・科学コミュニケーション支援  |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・千種川流域における環境モニタリング活動への協力・支援</li> <li>・サイエンスカフェの開催・開催支援（サイエンスカフェ神戸（2回），サイエンスカフェひょうごほか 県下各地のサイエンスカフェ開催等支援（総計17件））</li> <li>・市民と研究者が協力して気候変動に関する IPCC レポートを精読する会「市民のための，IPCC レポートを根掘り葉掘り読む会」の定期開催（14回）</li> <li>・つるかぶと科学教室開催（1回：サイエンスショップ研究員による企画） 他</li> </ul> |
| 地域の科学教育支援   |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・神戸市立鶴甲小学校 PTA からの依頼を受けた児童と保護者を対象とした理科実験教室の開催</li> <li>・第5回 Science Conference in Hyogo 開催協力（神戸大学が共催）</li> <li>・第12回 サイエンスフェア in 兵庫 開催協力（神戸大学が共催）</li> </ul>   |
| 大学教育・学生の活動  |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・天文ボランティアグループ「アストロノミア」による活動（神戸市立鶴甲小学校理科実験教室）</li> <li>・国際人間科学部グローバルスタディーズプログラム国内フィールド「『市民の科学』プログラム：サイエンスショップ」提供</li> </ul>   |
| 研究会等の主催・共催  |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・「高校生・私の科学研究発表会 2019／兵庫県生物学会 2019 研究発表会」開催（主催：兵庫県生物学会，神戸大学サイエンスショップ） 神戸大学</li> </ul>   |

|  |
|--|
| イベント等開催協力  |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・サイエンスカフェひょうご（主催：（公財）ひょうご科学技術協会） 南あわじ市，神戸市</li> <li>・サイエンスカフェはりま（主催：サイエンスカフェはりま） 姫路市</li> <li>・サイエンスカフェ伊丹（主催：サイエンスカフェ伊丹） 伊丹市</li> <li>・サイエンスカフェ*SODA（主催：ソーシャルデザインセンター淡路）南あわじ市</li> </ul>  |
| 研究・開発等   |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・「メタ科学技術研究プロジェクト：方法・倫理・政策の総合的研究」（神戸大学先端融合研究環 人文・社会科学系融合研究領域：人文学研究科等との共同）</li> <li>・日本学術振興会「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業」（領域開拓プログラム）」（人文学研究科等との共同：分担）</li> <li>・環境研究における同位体を用いた環境トレーサビリティー手法の提案と有効性の検証（総合地球環境学研究所との共同）</li> </ul> <p style="text-align: center;">他</p> |

（サイエンスショップ室長 伊藤真之）

#### 10.1.6. 教育連携推進室

教育連携推進室では、教育連携部門、研究開発部門、拠点形成部門において、それぞれ以下の活動を行った。

教育連携部門では、神戸市教育委員会と共同して、神戸市立幼稚園、保育園、小学校及び私立の保育園等の教員・保育士を対象に、幼小接続期教育をテーマにして年間全9回の「つばめセミナー」（研修講座）を開催した。本研究科からは教育連携推進室の教員を中心に本学附属小学校・幼稚園とも連携しながら、北野幸子（幼小接続期教育の理念と制度）、赤木和重（特別支援教育）、山口悦司・俣野源晃・田中達也（科学・理解教育）、岡部恭幸（算数）、渡邊隆信・田中孝尚（道徳教育）が5回のセミナーを企画・実施した。

研究開発部門では、高度教員養成プログラムを実施するとともに、7回のセミナーと神戸大学附属学校園や地域の学校及び教育施設等をフィールドとした教育実践のアクション・リサーチを含む理論的・実践的研究の推進に寄与した。本年度の認定証発行は4名であった。

拠点形成部門では、国内外の拠点形成を目指して、調査活動に従事すると同時に、2019年10月1日から12月23日までの3ヶ月間、ドイツのドレスデン工科大学教師教育研究センターに、人間発達環境学研究科人間発達専攻の大学院生を派遣し、ドイツの教師教育と教育制度に関して調査する機会を作った。この間に指導教員の渡邊隆信が同大学を訪問して、派遣学生と面談・指導するとともに、教師教育研究センター長のアクセル・ゲールマン教授と今後の共同研究と学生の交換留学について協議を行った。また、ラオス国立大学なら

びにネパールのトリブバン大学と共同して実施している子供保健クラブのシンポジウムを12月21-22日にタイ国バンコク市で開催した。なお、3月に大学間協定の締結に向け、ラオス国立大学を訪問予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大のため、中止となった。今後、国際的な研究拠点としての本室の活動が期待されるところである。

その他、各室員がそれぞれの所属学会におけるシンポジウムなどに登壇するとともに、各種連携先との積極的な研究活動を行った。また、高度教員養成プログラム参加院生の海外派遣（長期）として、2019年11月より、院生1名をフランスのマノスクにあるPACA国際学校（Ecole Internationale Provence-Alpes-Cote d'Azur）にて、約半年間、教員インターンシップとして派遣している。

次年度から附属学校と連携したプロジェクト研究を開始する予定である。その研究を推進するため、附属学校教員と神戸大学教員のマッチアップ会議を令和2年1月-3月にかけて、4回実施し、双方の研究の課題のすりあわせを行った。

財務的には、現在多くの科研等（JSPS科研等代表8件、JSPS科研等分担11件、その他代表3件）の採択を獲得してきているが、今後もさらに継続して大型競争的資金の獲得に向けた申請（基盤Aの応募中）及び申請の準備をする予定である。

令和元年度における教育連携推進室関係の連携を基礎とする主要な研究活動実績は以下の通りである。

### 1 国際シンポジウム共同企画・運営

年月日：令和元年12月12日～22日

名称：Promotion of child health club, participation of children in school health activities

主催者：国土将平

場所：Prasarnmit Campus, Srinakharinwirot University, Bangkok, Thailand

内容：タイ国バンコク市、シーナカリンビロート大学において、開催された国際シンポジウムの企画運営を行った。日本、タイ、ラオス、ネパール、ミャンマー、スリランカの学校保健の実態を共有し、子供たちが学校において主体的に学校保健活動に参加する事例、成果、課題を共有した。

### 2 研修セミナーの企画・運営

年月日：平成30年度5月から1月

名称：次世代型研修プログラム開発事業「つばめセミナー」

内容：神戸市総合教育センターと連携して、保幼小連携の理論と実践を解説するセミナーを企画運営した。実質的に全9回中6回を担当した。

### 3 高度教員養成プログラムの企画・運営

年月日：令和元年4月から12月

名称：高度教員養成プログラム

内容：参加院生（博士課程前期課程4名と博士課程後期課程4名）向けに計6回セミナーを開催するとともに、連携先とのアクション・リサーチを主体とする研究活動を行った。

年月日：令和元年11月-令和2年4月

名称：海外教員インターンシップ派遣

内容：院生1名をフランスのマノスクにあるPACA国際学校（Ecole Internationale Provence-Alpes-Cote d'Azur）にて、約半年間、教員インターンシップとして派遣している。

#### 4 国際共著論文（Web of Science収録誌未掲載論文）

Hokayem, H., Jin, H., & Yamaguchi, E. (2020). Feedback loop reasoning and knowledge sources for elementary students in three countries. *Eurasia Journal of Mathematics, Science and Technology Education*, 16(2), em1819. doi.0.29333/ejmste/112582

#### 5 主要な研究業績（WOS以外の学術論文）

佐野孝，国土将平，近藤亮介，上田恵子，川勝佐希（2019）小学生における開脚跳び動作の熟達度の評価とそれに合わせた指導観点の検討，*発育発達研究*，84，11-22（査読あり）

萩原大河，金山千広，国土将平（2019）インクルーシブ体育における指導体制と授業実践に対する教師の評価：A県における小学校の通常学級担任および特別支援学級担任の意識をもとに，*アダプテッド・スポーツ科学* 17(1)，3-13，2019（査読あり）

中橋葵，岡部恭幸（2019）幼児期の豊かな数感覚につながる経験と保育者の援助を考える：—5歳児の概念的サビタイジングの実態分析を通して—，*保育学研究* 57(1)，6-16，2019（査読あり）

森夢芽子・山口悦司・坂本美紀・田中達也・俣野源晃・神山真一・山本智一（2019），証拠-主張-理由付けを含むアーギュメント構成能力の育成を目指した授業実践の評価：小学校第3学年理科「磁石の性質」の事例，*日本科学教育学会研究会研究報告*，第33巻，第7号，5-8。（査読なし）

神山真一・山本智一・稲垣成哲（2019）教員志望の大学生対象にアーギュメントを小学校理科授業に導入する指導能力育成プログラムのデザイン，*日本科学教育学会年会論文集*，第43巻，630-631。（査読なし）

神山真一・栗川尚暉・山本智一・稲垣成哲（2019），教員志望の大学生対象にアーギュメントを小学校理科授業に導入する指導能力育成プログラムの評価，日本科学教育学会研究会研究報告，第34巻，第3号，175-180。（査読なし）

青木良太，新階幸也，稲垣成哲，溝口博，武田義明，楠房子，山口悦司，舟生日出男，杉本雅則，俣野源晃（2019）里山環境保全教育コンテンツ「里山管理ゲーム」，日本科学教育学会研究会研究報告，34(3)，135-138（査読なし）

新階幸也，溝口博，武田義明，楠房子，青木良太，山口悦司，稲垣成哲，舟生日出男，杉本雅則（2019）里山環境保全教育コンテンツ「里山管理ゲーム」の発展過程と今後の展望，日本科学教育学会研究会研究報告，34(3)，131-134（査読なし）

新階幸也，溝口博，武田義明，楠房子，青木良太，山口悦司，稲垣成哲，舟生日出男，杉本雅則（2020）里山環境保全教育コンテンツ「里山管理ゲーム」-複数の里山への対応，情報処理学会研究報告ヒューマンコンピュータインタラクション，2020-HCI-186(32) 1-8，2020（査読なし）

## 6 招待講演

「アメリカ・ワシントン州における保育の質の維持・向上システム」講演会・トークセッション・情報交換会

講演者：DeEtta Simmons 先生（ワシントン大学）

埋橋玲子先生（同志社女子大学）

麓浩子先生（元ローハンプトン大学）

平林祥先生（ひかり幼稚園主事）

コーディネーター：北野幸子（人間発達環境学研究科）

日時：2019年9月4日（水）14:00～17:00

場所：鶴甲第2キャンパス大会議室（A棟2階）

## Education in Lao. PDR

講師：Vanthala Souvanxay（ラオス国立大学講師）

日時：2019年10月18日（金）17:00～18:30

場所：鶴甲第2キャンパス F255（高度教員養成プログラム室）

## ノルウェーの乳幼児教育

講演者：Irene Trønnes Strøm先生（Inland Norway University of Applied Sciences）

企画者：北野幸子（人間発達環境学研究科）

日時：2019年11月21日（木）15:10～16:40

場所：鶴甲第2キャンパス大会議室（A棟2階）

#### イギリスの初等教育と子ども・家族支援

講演者：Junko Grant Hotsuki（Dwight School London 教諭, The Meadows Children Family Wing 運営委員）

日時： 2019年12月24日（火）17:00～18:30

場所：鶴甲第2キャンパスF257（F棟2階）

#### 7 科学研究費助成事業等（令和元年度代表分）

- ① 基盤研究（A）（一般）「科学系博物館におけるユニバーサルデザイン手法の開発と実践モデルの提案」（課題番号18H03660）代表：稲垣成哲
- ② 基盤研究（B）（海外学術）「アジアの後発開発途上国における学校保健モデル事業のインパクト評価」（課題番号：16H05654）代表：國土将平
- ③ 基盤研究（C）（一般）「運動観察法による思春期不器用時に生じる走動作変容の解明」（課題番号：16K01596）代表：國土将平
- ④ 基盤研究（C）（一般）「新教育運動における「国際化」の進展と「郷土」形成論の相克に関する比較史的研究」（課題番号：17K04550）代表：渡邊隆信
- ⑤ 挑戦的研究（萌芽）「幼小接続期の 数理認識の発達に着目した評価スケールの開発」（課題番号18K18648）代表：岡部恭幸
- ⑥ 挑戦的研究（萌芽）「幼保連携型認定こども園2・3 歳児クラス接続期教育における保育者の専門性」（課題番号：16K13526）代表：北野幸子
- ⑦ 挑戦的研究（萌芽）「大量退職時代における熟練教師から初任者教師への理科授業実践知識・技能の伝承モデル」（課題番号16K12759）代表：山口悦司
- ⑧ 文部科学省、令和元年度幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究、ICT や先端技術の活用などを通じた幼児教育の充実の在り方に関する調査研究、遊びと生活場面における個々の子ども理解と援助の充実につながるICTの活用方法に関する調査研究、「就学前教育の質的充実に向けた調査研究」代表：北野幸子

#### 8 科学研究費助成事業等（令和元年度分担分）

- ① 基盤研究（A）（一般）「幼年期における科学的素養醸成のための科学コミュニケーションに関する学際的研究」（課題番号16H01814）代表：野上智行
- ② 基盤研究（B）（一般）「生物多様性の実感的学習を可能とするSDGsを志向した里山環境保全教育プログラム」（課題番号19H01734）代表：武田義明
- ③ 基盤研究（B）（一般）「トランス・サイエンス問題の解決に資する知識共創型アーギュメンテーションの教師教育」（課題番号17H01979）代表：坂本美紀
- ④ 基盤研究（B）（一般）「ユニバーサルデザインに基づいたデジタル人形劇の開発と実践」（課題番号17H02002）代表：楠房子

- ⑤ 基盤研究(B) (一般) 「実世界センシングデータからの行動・学習モデルの構築と学習支援環境の設計」(課題番号19H04222) 代表: 杉本雅則
- ⑥ 挑戦的研究(萌芽) 「市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシー教育モデル開発」(課題番号: 18K18646) 代表: 坂本美紀
- ⑦ 基盤研究(B) (一般) 「政治的抑圧からの回復期におけるアジアの子どもの身体・文化・生活の相互変容研究」(課題番号: 17H02192) 代表: 佐川 哲
- ⑧ 基盤研究(B) (一般) 「全国大規模調査による思春期小児の身体活動・生活習慣と睡眠の検討」(課題番号: 18H01000) 代表: 石井 好二郎
- ⑨ 基盤研究(C) (一般) 「音楽科固有の資質・能力の基礎となる音楽的感受及び音楽能力育成カリキュラムと指導法」(課題番号: 18K02577) 代表: 三村真弓
- ⑩ 基盤研究(C) (一般) 「「音と声」に注目した保育者研修プログラムーECERS 及び音環境調査に基づいてー」(課題番号: 18K02467) 代表: 埋橋玲子
- ⑪ 厚生労働省 日本保育協会保育科学研究所「指定研究」 「人的環境としての保育者の語彙力と子どもの育ちの関係性についての研究～言葉のやり取りを通して見えてくるもの～」代表: 岩橋道世

#### 9 その他の外部資金(平成元年度代表分)

- ① 神戸市共同研究「乳幼児教育実践の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性に関する研究」代表: 北野幸子
- ② 大阪府私立幼稚園連盟共同研究「0歳児から6歳児までの保育・教育を考えるー非認知的能力はどのようにして育まれるのかー」代表: 北野幸子
- ③ 福井県私立幼稚園・認定こども園協会共同研究「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の視点から子どもの育ちをとらえる」代表: 北野幸子

#### 10 受賞

山口悦司: 一般社団法人日本理科教育学会 日本理科教育学会賞 2019年9月22日

#### 11 主要な連携先

海外: ドレスデン工科大学教師教育センター, マノスク国際学校, トリブバン大学教育学部, ラオス国立大学教育学部

国内: 神戸大学附属小学校, 神戸大学附属幼稚園, 神戸市教育委員会, 兵庫県教育委員会, 明石市, 舞鶴市, 兵庫県, 大阪市, 尼崎市, 神戸市立王子動物園, 国立科学博物館, 兵庫県立人と自然の博物館

(教育連携推進室長 國土将平)

#### 10.1.7. アクティブエイジング研究センター

##### 1. 運営体制

(1) 運営委員

1) 教員：片桐恵子，増本康平，近藤徳彦，岡田修一，長ヶ原誠，平山洋介，井上真理，田畑智博，近江戸伸子，齊藤誠一，木村哲也，岡崎香奈，原田和弘，

2) 研究員・教育研究補佐員：藺田大地，八木倫子

3) 学外研究員

①福沢愛（東京大学高齢社会研究機構）

②Richie Goulding JPSP外国人特別研究員・神戸芸術工科大学

2. 研究プロジェクトの推進

(1) プロジェクト内容：メンバーと内容

令和元年度は前年度までの17のプロジェクトに1つのプロジェクトが加わり18研究プロの各研究活動を行った。

1) 鶴甲いきいきまちづくり-アクティブエイジングを目指して

メンバー：岡田修一，近藤徳彦，長ヶ原誠，片桐恵子，増本康平，原田和弘，学外研究者  
期間：2010年度～2020年度

内容：オールドニュータウンである鶴甲地区を対象に，多世代が心身ともに健やかで将来の希望に満ちた，安全に暮らせるまちづくりを支援するものである。アカデミック・サロン（大学内で行うイベント）を鶴甲地区の住民の学びと活動の場の基礎とし，大学をコミュニティの中心に位置付け，このサロンを通して，住民同士のネットワークを形成するとともに，サロンの継続に必要なファシリテーターを養成し，住民が企画・運営するコミュニティ活動を支援する。

2) 住民ネットワーク形成の客観的検証方法の確立

メンバー：増本康平，岡田修一，近藤徳彦，長ヶ原誠，片桐恵子，木村哲也，古谷真樹，研究科共同研究者4名

期間：2015年度～2017年度

内容：ウェアラブルセンサデバイスによって対面コミュニケーション行動データを自動収集し，ネットワーク解析を行うことで住民交流の現状や変化，キーパーソンを把握し，支え合い・助け合いの基盤となる住民ネットワークの活性化につなげる。

3) 男女の違いや個人差を考慮した健康増進支援プロジェクト

メンバー：近藤徳彦，岡田修一，中村晴信，古谷真樹，井上真理，齊藤誠一，木村哲也，佐藤幸治  
期間：2015年度～2019年度

内容：健康行動（食・睡眠・運動）を支援するため，これらに関する環境を工夫することにより健康を支援する方法を提案する。その際，これまで十分な情報が得られていない男女の違いや個人差からアプローチする。

4) 高齢者の身体システム機能維持・向上への学際的プロジェクト

メンバー：木村哲也，佐藤幸治，学外研究者

期間：2015年度～2020年度

内容：高齢者の身体システム機能の維持・向上に対して、基礎研究及びその成果に基づいた社会実装を、応用生理学、運動生理・生化学、バイオメカニクス、生体工学の各観点を統合して学際的に実施する。現在取り組み中の具体的課題は、立位バランス神経制御則の解明や高齢者の筋機能の向上である。

5) 都市住居高齢者の日常活動の国際比較

メンバー：片桐恵子，原田和弘，福沢愛，学外研究者1名，海外研究者2名

期間：2015年度～2018年度

内容：都市に居住する高齢者がどのような日常活動を行っているのか，その活動量はどの程度か，活動がどのように気分や健康に関連しているか，などの実態の解明とそれらの関連を，日本（神戸）と韓国（ソウル）との国際比較から検討する。

6) 超高齢社会を見据えた持続可能なごみ処理施策の提案

メンバー：田畑智博，片桐恵子

期間：2015年度～2018年度

内容：高齢者世帯の増加が将来の自治体のごみ処理施策に及ぼす環境的・経済的影響を，シミュレーション分析により明らかにする。ごみ分別等の住民負担の限界と対策の検討を通じて，超高齢化社会に相応しい持続可能な自治体のごみ処理施策を提案する。

7) 関西ワールドマスターズゲームズ2021レガシー創造支援研究

メンバー：長ヶ原誠，岡田修一，近藤徳彦，片桐恵子，増本康平，学外研究者3名

期間：2015年度～2022年度

内容：2021年に関西広域で開催が決定した生涯スポーツの国際大会がもたらすレガシー（遺産）創造に向けた振興事業アクションリサーチの展開と効果検証のモニタリング評価を実施し，成人・中高年者を対象とした参加型のスポーツメガイイベント開催が個人と地域の活性化に及ぼす影響過程を検証する。

8) 高齢期の意思決定バイアスの解明と自律に向けた生涯学習プログラムの開発

メンバー：増本康平，学外研究者2名

期間：2015年度～2017年度

内容：高齢者の意思決定バイアスの特徴を明らかにし，高齢者に適した意思決定の支援方法を明確にする。最終的には，高齢期の自律を目標とした「選び方を選ぶ」生涯学習プログラムを開発する。

9) マスターズ甲子園による「アクティブエイジング活性化の検証

メンバー：長ヶ原誠，学外研究者3名

期間：2015年度～2017年度

内容：高校野球部OBクラブの拡大を目指して始動したマスターズ甲子園の各地方予選・全国大会の開催が及ぼすアクティブエイジングに関わる諸効果を検証し，スポーツ同窓会結成支援による活動的な加齢文化の推進に着目した生涯スポーツプロモーション事業の可能性と課題を提示する。

10) サードエイジのサクセスフル・エイジング・モデル構築プロジェクト

メンバー：片桐恵子，学外研究者 2 名

期間：2015 年度～2020 年度

内容：これまでの高齢者とは異なる新しいシニア層である，団塊世代以降の人のライフスタイルや志向を把握し，サードエイジ期（定年後から元気な時期）のサクセスフル・エイジング・モデルを構築する。

#### 11) 生涯学習・多世代交流プロジェクト

メンバー：片桐恵子，学外研究者 2 名，海外研究者 1 名，大学院生 1 名

期間：2018 年度～2020 年度

内容：生涯学習を行うシニアの現状を明らかにし，学習を促進疎外する要因とそのもたらす効果をライフコース的な視点から明らかにする。さらに生涯学習を異世代交流の機会をとらえて，その効果も検討する。アイルランドとの国際比較研究を実施しながら検索する。

#### 12) 超高齢社会における複数住宅所有の実態と役割

メンバー：平山洋介，学外研究員 1 名

期間：2017 年度～2019 年度

内容：高齢化が進む社会のなかで，複数の住宅を所有する世帯が増えている。付加的な住宅はレントアウト収入をもたらす，高齢者の経済セキュリティを形成するケースがある。ここでは，高齢社会の安定の維持における複数住宅所有の可能性と限界を明らかにする。

#### 13) 活動的な生活習慣と健康増進プロジェクト

メンバー：原田和弘，近藤徳彦，学内・学外研究員

期間：2017 年度～2020 年度

内容：高齢者において，活動的な生活習慣が形成・維持されるプロセスには，どのような要因が関わっているのかを学際的な観点から明らかにする。また，その知見に基づき，活動的な生活習慣の効果的な支援方法を開発する。

#### 14) アクティブライフ評価と健康寿命の延伸・認知症予防対策

メンバー：近藤徳彦，増本康平，木村哲也，佐藤幸治，原田和弘，学内研究員

期間：2017 年度～2022 年度

内容：中年期までの活動的な生活習慣（＝アクティブライフ）が，健康寿命の延伸や認知症発症を防ぐ効果があるかどうか注目が集まっている。本研究では幅広い年代のアクティブライフを，経年的に，かつ，正確に測定し，アクティブライフと健康・認知症に関するデータの構築を目指す。これにより健康寿命の延伸や認知症予防に効果的な生活習慣対策を検討する。

#### 15) 更年期女性の身体的変化と心理的適応

メンバー：齊藤誠一，田中美帆，学外研究員

期間：2017 年度～2020 年度

内容：40 歳代後半から閉経に向けて生じる女性の身体的変化の時期である更年期において，どのような身体的変化が生じ，その変化にどのように適応していくか，あるいは同時期の配偶者や子の発達の状況とどのように相互作用しているのかについて検討を行い，その後の

中年期後期への望ましい発達のあるあり方を提案していく。

16) 高齢者の住まい方とエネルギー消費との関係性に関する調査

メンバー：田畑智博，学外研究者

期間：2017年度～2019年度

内容：高齢者世帯におけるエネルギー消費と、居住形態，家電所有，生活時間などとの関係性を調査する。また，エネルギー消費が，環境だけでなく，高齢者世帯の家計や貧困などに与える影響を分析する。

17) 超高齢・持ち家社会における住宅相続の増大と階層化

メンバー：平山洋介，学外研究員1名

期間：2018年度～2020年度

内容：超高齢・持ち家社会としての日本では，遺産相続による住宅資産の世代間移転が増え，社会を階層化する新たな要因になる。相続住宅は，一方では，自己居住用，家賃収入源として役立ち，さらに資産形成を促進すると同時に，他方では，使い途がなく，空き家のままで放置され，管理負担ばかりをもたらす場合がある。ここでは，住宅相続の階層化の実態を解明するところから，住宅ストック利用に関する政策課題を検討する。

18) エンド・オブ・ライフにおける感情調整の機序と役割

メンバー：増本康平，佐藤幸治，原田和弘，学外研究者

期間：2019年度～2021年度

内容：身体，認知機能が低下し自立した生活が困難となっても，社会的つながりを維持し，幸せな生活をおくるために重要な機能として，近年，感情調整が注目されている。本研究では，感情調整機能の加齢による変化について遺伝的，心理的，文化的側面から検討する。

## (2) 外部資金

科研科学挑戦的研究(開拓)，基礎研究(B)2件，若手研究(A)，国際共同研究加速基金(国際共同研究強化)，挑戦的研究(萌芽)2件，ロッテ財団，三井住友海上福祉財団:2018年度研究助成を獲得し，上記研究プロジェクトを推進している。

## (3) アクションリサーチの実施

前述の2.(1)1)研究プロジェクト「鶴甲いきいきまちづくり-アクティブエイジングを目指して」は，鶴甲地域住民の地域の絆を構築するための，アクションリサーチである。神戸市灘区の「大学と連携したまちづくりチャレンジ事業」の助成を受け，本年後は主催するアカデミックサロン，防災避難訓練，連続講座に延べ650名の住民の参加があった。

(なお，3月に企画されていたアカデミックサロンは新型コロナウイルスの影響で中止となった)。これまでの延べ参加者は4600名を超えた。

また，本プロジェクトの実施は域住民のシニアサポーターや地域自治体の協力を得て行われている。本年度は長年の協力に感謝し，プロジェクトの現状や課題，さらなる地域の

問題について話し合いをする懇親会を2月に実施した。

本プロジェクトによるアクションリサーチの結果は、国際学術雑誌に採択されており、現在も投稿中である。住民のネットワークの拡充やwell-beingの向上に役立っていることを科学的エビデンスに基づき示したものとして評価されている。

|           |      |                   |           |                             |
|-----------|------|-------------------|-----------|-----------------------------|
| アカデミックサロン | 第29回 | 神戸大学大学院生企画        | ウキウキつるかぶと | 2019/6/23                   |
| 避難訓練      | 第9回  | 防災避難訓練「生存確率」      |           | 2019/9/23                   |
| 連続講座      | 第20弾 | いきいきウォーキング（全4回）   |           | 2019 5/18、5/25、6/1、6/15     |
| 連続講座      | 第19弾 | 園芸教室（全3回）         |           | 2019 5/11、6/8、7/6           |
| 連続講座      | 第22弾 | 秋のいきいきウォーキング（全4回） |           | 2019 10/26、11/16、11/30、12/7 |
| 連続講座      | 第21弾 | 秋の園芸教室（全4回）       |           | 2019 9/14、10/12、11/9、12/14  |

### 3. セミナー

以下のセミナーをセンター主催・後援した。

(1) 日時：2019年12月6日（金）13:20～14:50

場所：鶴甲第二キャンパスF棟263

講演者：小俣 貴宣（ソニー株式会社）

第1回 ABCDE (Aging, Brain, Cognition, Decision-making, & Emotion) セミナー「心理学は製品開発の実践においてどう役立つのか」

(2) 日時：2020年2月26日（水） 10:00～12:00

場所：鶴甲第二キャンパス中会議室B

講演者：Dr Rosie Gibson, Research Officer, Sleep/Wake Research Centre, College of Health, Massey University, New Zealand

講演タイトル：Sleep health with ageing, dementia and family care: a New Zealand perspective

なお、このほかに2020年3月に、日本心理学会の研究集会の助成を得て、シンポジウム「高齢者の消費行動」を企画していたが、新型コロナウイルスの影響で延期となった。

### 4. 連携活動

#### (1) 連携活動

以下の学内プロジェクトと連携活動を実施した。

1) スマートシティプロジェクト（神戸市・神戸大学）

2) アクティブエイジングをIT 人工知能により支援強化するプロジェクト（科学技術イノベーション研究科）

3) 認知症予防プロジェクト（神戸大学）

（アクティブエイジング研究センター長 片桐恵子）

## 10.2. 実習観察園の運営利用状況

### ○実習観察園施設および概略図

実習観察園の概略は図1の通りで、前年と変わりはない。灰色で示した部分は、自然環境論コースの教員が研究のために設置したビニルハウスである。

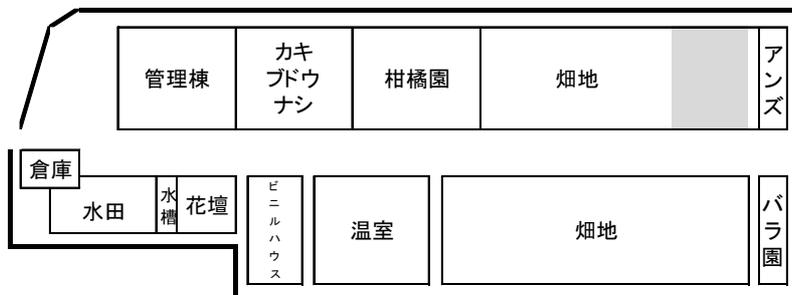


図1 施設・作付概要

### ○作付面積および作付植物

作付面積および作付作物はそれぞれ表1および表2に示した通りである。

表1 作付面積 (m<sup>2</sup>)

| 種別  | 面積  | 備考       |
|-----|-----|----------|
| 畑地  | 352 | 教材・実習用   |
| 果樹園 | 255 | 教材・実習用   |
| 水田  | 70  | 実習・研究用   |
| バラ園 | 35  | 園内美化・実習用 |
| 花壇  | 25  | 園内美化・実習用 |
| 計   | 735 | 全体       |

表2 作付植物

| 種類    | 植物  |
|-------|---|
| 野菜    | コマツナ、ホウレンソウ、キャベツ、キュウリ<br>カボチャ、スイカ、トマト、オクラ、ピーマン<br>イチゴ、ナス、ダイコン、カブ、タマネギ、ニンジン                              |
|       | ダイズ、ラッカセイ、ソラマメ、インゲンマメ<br>ジャガイモ、サツマイモ、トウモロコシ、イネ  |
| マメ・穀類 |   |
| 果樹    | なつみかん、ハッサク、温州みかん、スダチ<br>ユズ、キンカン、カキ(富有、サエフジ)、ブドウ<br>スモモ、キウイ、ウメ   |
|       |   |
| 花卉    | ベゴニア、マリーゴールド、ペチュニア、サルビア<br>キンセンカ、バーベナ、トレニア、デモルフォセカ<br>マツバボタン、スベリヒユ、ヒマワリ、アサガオ<br>ハボタン、チューリップ、ナデシコ、バラ その他 |
|       |   |

表3 授業と研修の利用数

| 授業名        | 利用数  |      |      |      |      |
|------------|------|------|------|------|------|
|            | 2015 | 2016 | 2017 | 2018 | 2019 |
| 幼児環境指導法    | 20   | 24   | 26   | 18   | 0    |
| 保育内容研究(環境) |      |      |      | 23   | 23   |
| 植物環境学実験実習  | 16   | 24   | 17   | 0    | 0    |
| 園芸教室       | 54   | 54   | 54   | 54   | 54   |
| 鶴甲幼稚園      |      |      | 80   | 81   | 66   |
| 神戸大学附属住吉学校 |      |      | 18   | 14   | 15   |
| 計          | 90   | 102  | 177  | 176  | 143  |



## ○教育（実習）活動

「保育内容研究(環境)」(履修生 23 名)において、植物栽培に関すること、すなわち、畝立て、土作り、草花や野菜の種まき、育苗、鉢上げ、定植、誘引、かき、収穫、挿し芽繁殖、花壇・緑化設計と制作などである。これらの他に、プランターや鉢植え栽培による校内美化の指導も行っている。履修者が実践的に“植物と子供の遊び”というテーマで、幼稚園児の指導を行うことを想定し、草もちの作製を行った。タケ、ササの来歴、違い、利用法について、講義を行った。能動的に学修するアクティブ・ラーニングとして、五感を活用した実習を行った。

## ○研究のための利用

人間発達環境学研究科および発達科学部の教員ならびに学生が研究と論文作成のため、本園を活用している。

### 1) 浸水状態によるヨシ (*Phragmites australis*) 地下茎のシュート発生実験

良好な水辺環境を創出するために、大型抽水植物であるヨシの再生実験を行った。琵琶湖内湖における人工的な水位操作とヨシ再生の実験はすでに終えているが、より詳細な水位条件とヨシ地下茎の発生との関係を明らかにするため、人間発達環境学研究科の実習観察園ガラス室において実証実験を行った(4月～7月)。実験は教員他、外部協力者1名を含む2名で行い、2019年環境科学会(名古屋大学東山キャンパス9月13-14日)に「浸水状態によるヨシ (*Phragmites australis*) 地下茎のシュート発生に及ぼす影響」でポスター発表した。

利用者：大野朋子，学外共同研究者1名

### 2) ツユクサの栽培実験

人間発達研究科のM2の「修士論文研究」(担当教員：丑丸敦史)として、人間発達環境学研究科の施設である実習観察園に設置した温室内で栽培したツユクサを対象にした研究を行った。里山および都市部の水田に生育するツユクサ集団から実生を採取し、温室内のポットに実生を植え付け(4-5月)、結実期(10月中旬)まで温室内での生長および開花の調査を行った。この研究では研究補助として、発達科学部・国際人間科学部の学生数名の協力があった。本研究成果は、2019年日本生態学会(名古屋名城大学3月7日)に「都市-里山環境傾度で植物の機能形質の種内変異を起こす要因」で発表した。

利用者：大学院生1名，協力学部学生約5名

### 3) ハマヒルガオの栽培実験

受託している植物研究助成による研究として、伊豆諸島および千葉県・茨城県・静岡県の海岸において採取した地下茎から発芽したハマヒルガオ植物体の栽培を観察園ガラス温室内で行い、DNAを抽出するための葉標本を採取した。本研究では研究補助として、当発達科学部生1名の協力があった。

利用者：丑丸敦史，協力学部学生約 1 名

○他機関の利用

### 1) 田植え体験・稲刈り体験

神戸市灘区の鶴甲幼稚園の園児 66 名と教諭が，人間発達環境学研究科の施設である実習観察園でサツマイモ苗植え，田植えを实践し，実際に体を動かして五感を活用した体験を行った。授業科目「保育内容環境」(担当教員：近江戸伸子教授，大野朋子准教授)において，履修者 25 名が実践的に幼稚園児の指導を行った。

苗植え：2019 年 5 月 8 日

田植え：2019 年 5 月 22 日

参加者：鶴甲幼稚園 5 歳児 66 名，同園教諭等 6 名，学部学生 23 名

稲刈り：2019 年 10 月 16 日

参加者：鶴甲幼稚園 5 歳児 66 名，同園教諭等 6 名，人間発達環境学学生 4 名



図 3 大学生と幼稚園児の田植え実践学習

幼稚園児の稲刈り

### 2) 鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト 連続講座 2019「園芸教室」の開催

高齢化が進行している地域コミュニティにおいて，多世代が心身ともに健やかで希望に満ちた，安全な暮らしができるまちづくりは急務であり，住民が主体的に，多世代の交流を促進し，その中で課題を見つけ，学び，活動していく生涯学習の実践の場づくりが大事である。地域社会のこのような現状に対し，本研究科がもつ人的・物的・空間的リソースを活用して，どのような支援が可能か検討する，「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト」が行われている。実習観察園を活用した園芸教室はその一環の活動である。

春，秋ともに 10 歳代から 80 歳代までの多世代が参加し，参加者（春・秋，各 30 名）がグループに分かれ，それぞれのグループ毎に野菜や花の栽培を楽しんだ(図 4)。



春の園芸教室 5月11日(土), 6月8日(土),  
7月6日(土)

秋の園芸教室 9月14日(土), 10月12日(土),  
11月9日(土), 12月12日(土)

図4 「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト」園芸教室

### 3) 野菜探求プロジェクト～植と食の融合～ 神戸大学附属中等教育学校

テーマを「野菜探求プロジェクト～植と食の融合～」とし、ESD Food プロジェクトの活動の一環として行った。野菜の栽培、観察、収穫などを体験することを通して、作物・園芸植物について探究し理解を深める。以下の知識や栽培スキル等の獲得を目的としておこなった。

- (1) 生産から消費まで食の循環を理解する。
- (2) 植物(野菜)を多面的に捉え、多様性を理解する。
- (3) 持続可能な社会において植物(野菜)が果たす役割と可能性を考える。
- (4) 植物(野菜)とのかかわりを通して、持続可能な社会に向けて自分ができることを実践する。

参加者 中等教育学校生12名, 同校教員3名

利用期間: 9月14日(土), 10月12日(土), 11月9日(土), 12月12日(土)

今後も地域や学校等の要請等も積極的に受け入れ, 授業ならびに研究で, 利活用を図る予定である。

(実習観察園運営委員長 近江戸伸子)